序

21世紀を迎えた現在、我が国の社会は情報科学の高度化や経済のグローバル化などにより目まぐるしく変化をしております。このような社会の変化に対応するため、学校教育の現場では新しい教育のあり方が問われています。

埼玉県では、将来の日本をリードする人材を育成するとともに多様化する教育ニーズに応えるため、「21世紀いきいきハイスクール推進計画」を策定し、彩り豊かな県立高校づくりをめざしております。その一環として行田地区では市内３つの県立高校を統合し、新たに地域に根ざした単位制総合高校として埼玉県立進修館高等学校が誕生しました。それに伴い、隣接する旧行田進修館高等学校と旧行田工業高等学校の校舎間に連絡通路が建設されることとなりました。

両校の敷地内には、縄文時代から平安時代までの生活跡である馬場裏遺跡が存在することが以前から知られており、これまでも校舎建設などに伴いたびたび発掘調査を行ってまいりましました。今回の連絡通路建設に際しても、埋蔵文化財の取り扱いについて埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局管理部高校改革推進室（当時）の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代前期前半を中心とする集落跡が発見されました。集落は、限られた範囲の中に予想を上回る密度で分布しており、それらの住居跡からは大量の土器がまとまって出土いたしました。この時期の遺跡は県内でも希少であり、当時の生活を解明する上でも大変貴重な資料であります。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました埼玉県教育局教育総務部高校改革推進室、埼玉県立進修館高等学校、行田市教育委員会並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　福田陽充

例　言

1．本書は埼玉県行田市に所在する馬場裏遺跡第25次調査についての発掘調査報告書である。

馬場裏遺跡については、以前の遺跡名であった長野中学校校内遺跡を含め、行田市教育委員会や当事業団により、すでにいくつかの報告書が刊行されている（斉藤1980、中島1990・1993・1994、大谷1999、黒坂2001ほか）。当事業団では下記に続き３冊目の刊行である。

『馬場裏遺跡』　事業団報告書第230集　1999（第22次）

『馬場裏遺跡Ⅱ』事業団報告書第270集　2001（第23次）

2．遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は以下の通りである。

馬場裏遺跡（ＢＢＵＲ25）

埼玉県行田市長野1320番地他

平成16年６月28日付け教文第２－23号

3．発掘調査は、県立進修館高等学校連絡通路設置工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課（当時）が調整し、埼玉県教育局管理部高校改革推進室（当時）の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、Ⅰ－３に示した組織により実施した。

本事業のうち、発掘調査については西井幸雄、吉田稔が担当し、平成16年５月17日から平成16年８月13日まで実施した。

また、整理報告書作成作業は松本美佐子が担当し、平成18年４月10日から平成19年３月23日まで実施した。

5．発掘調査時の遺跡基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。

6．発掘調査時の遺構等写真撮影は西井、吉田が行った。

また、整理報告書作成作業時の遺物写真撮影は、大屋道則が行った。

7．出土品の整理および図版の作成は、土製品を小野美代子、その他を松本が行い、土器については鈴木理恵、石器については矢田美知子の補助を受けた。

報告書本文の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、その他を松本が行った。

8．本書の編集は松本があたった。

9．本書にかかる資料は平成19年４月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

10．発掘調査から整理・報告書刊行までのあいだ、下記の機関・方々より、ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

（敬称略）

行田市教育委員会

青木秀雄・小倉　均・笹森紀己子・鈴木徳雄

鈴木正博・大工原豊・中島　宏・中島洋一

原田昌幸・早坂廣人

凡　例

1．遺跡全体図におけるX・Yの数値は、日本測地系、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。

J－9グリッド北西杭日本測地系

X＝16480.0000m　Y＝－32640.0000m

北緯　36°08′52.80975″

東経　139°28′14.04227″

J－9グリッド北西杭世界測地系換算値

X＝16835.4718m　Y＝－32933.0216m

北緯　36°09′04.25140″

東経　139°28′02.42253″

2．馬場裏遺跡第25次調査におけるグリッドは、国土標準平面直角第Ⅸ系の座標値X＝16500m、Y＝－32710mを原点とし、10m×10mで設定した。呼称は、方眼の北西隅の杭名称を用い、南方向数値、東方向アルファベットで指数が増加する方法をとった。

これは、第22・23次調査（大谷1999、黒坂2001）と共通している。

3．測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構　住居跡・土壙・井戸跡

火葬跡・性格不明遺構……1/60

遺物　縄文時代　土器……1/3・1/4（拓影図）

1/4（実測図）

石器……2/3・1/3

平安時代　須恵器……1/4

その他、遺跡位置図、周辺地形図、調査区全体図等は、その都度、縮尺率を示した。

4．膨大な縄文土器を効率的に扱うため、とくに前期前半の土器については、さいたま市深作東部遺跡群での分類（黒坂1984）を踏襲し、若干の分類項を加えた。また、その一覧は第Ⅴ章に示した。

5．遺構測量図、遺物実測図中の網掛指示は以下のとおりである。

…土塊による地山

…焼土

…撹乱

その他、個別の分割・強調については、その都度指示を記している。

6．遺構測量図中の土層番号は、ローマ数字が遺跡全体に通じる基本土層、算用数字が遺構個別の観察結果をあらわす。

7．遺構測量図中の遺構略称は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡

SK…土壙

SE…井戸跡

SX…性格不明遺構

P……柱穴類

8．本文中の度量衡は以下の基準で統一してある。

標高・遺構計測値…m単位

遺物計測値……cm／g単位

9．遺物観察表中の色彩表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』1998年版に準拠した。また、法量の（　）付き数値は残存値を表す。

10．文中の引用文献は、（著者　発行年）の順で表現し、参考文献とともに巻末にその一覧を掲載した。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1．調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 ……2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 ……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……4
　1．地理的環境 ……4
　2．歴史的環境 ……5
Ⅲ　遺跡の概要 ……8
　1．既往調査の概要 ……8
　2．第25次調査の概要 ……9
Ⅳ　発見された遺構と遺物 ……17
　1．縄文時代 ……17
　　(1)　竪穴住居跡 ……17
　　(2)　土壙 ……177
　　(3)　性格不明遺構 ……184
　　(4)　遺構に伴わない遺物 ……185
　2．平安時代以降 ……186
　　(1)　土壙 ……186
　　(2)　井戸跡 ……198
　　(3)　火葬跡 ……198
　　(4)　ピット ……199
Ⅴ　調査のまとめ ……204

写真図版

挿 図 目 次

第1図　埼玉県の地形図 …… 4
第2図　周辺の遺跡 …… 6
第3図　馬場裏遺跡の各調査区 ……10
第4図　第25次調査区周辺拡大図 ……11
第5図　縄文時代の遺構位置図 ……12
第6図　発掘調査区グリッド配置図 ……13
第7図　発掘調査区全体図（1） ……14
第8図　発掘調査区全体図（2） ……15
第9図　基本層序 ……16
第10図　第1号住居跡 ……18
第11図　第1号住居跡遺物出土状況（1） ……20
第12図　第1号住居跡遺物出土状況（2） ……21
第13図　第1号住居跡出土遺物（1） ……26
第14図　第1号住居跡出土遺物（2） ……27
第15図　第1号住居跡出土遺物（3） ……28
第16図　第1号住居跡出土遺物（4） ……29
第17図　第1号住居跡出土遺物（5） ……30
第18図　第1号住居跡出土遺物（6） ……31
第19図　第1号住居跡出土遺物（7） ……32
第20図　第1号住居跡出土遺物（8） ……33
第21図　第1号住居跡出土遺物（9） ……34
第22図　第1号住居跡出土遺物（10） ……35
第23図　第1号住居跡出土遺物（11） ……36
第24図　第1号住居跡出土遺物（12） ……37
第25図　第1号住居跡出土遺物（13） ……38
第26図　第1号住居跡出土遺物（14） ……39
第27図　第1号住居跡出土遺物（15） ……40
第28図　第1号住居跡出土遺物（16） ……41
第29図　第1号住居跡出土遺物（17） ……42
第30図　第1号住居跡出土遺物（18） ……43
第31図　第1号住居跡出土遺物（19） ……44
第32図　第1号住居跡出土遺物（20） ……45
第33図　第1号住居跡出土遺物（21） ……46
第34図　第1号住居跡出土遺物（22） ……47
第35図　第1号住居跡出土遺物（23） ……48
第36図　第1号住居跡出土遺物（24） ……49
第37図　第2号住居跡 ……51
第38図　第2号住居跡遺物出土状況 ……52
第39図　第2号住居跡出土遺物 ……53
第40図　第3号住居跡 ……54
第41図　第3号住居跡遺物出土状況 ……56
第42図　第3号住居跡出土遺物（1） ……58
第43図　第3号住居跡出土遺物（2） ……59
第44図　第3号住居跡出土遺物（3） ……60
第45図　第3号住居跡出土遺物（4） ……61
第46図　第3号住居跡出土遺物（5） ……62
第47図　第3号住居跡出土遺物（6） ……63
第48図　第3号住居跡出土遺物（7） ……64
第49図　第3号住居跡出土遺物（8） ……65
第50図　第3号住居跡出土遺物（9） ……66
第51図　第3号住居跡出土遺物（10） ……67
第52図　第3号住居跡出土遺物（11） ……68
第53図　第3号住居跡出土遺物（12） ……69
第54図　第3号住居跡出土遺物（13） ……70
第55図　第4号住居跡（1） ……73
第56図　第4号住居跡（2） ……74
第57図　第4号住居跡遺物出土状況（1） ……76
第58図　第4号住居跡遺物出土状況（2） ……77
第59図　第4号住居跡遺物出土状況（3） ……78
第60図　第4号住居跡遺物出土状況（4） ……79
第61図　第4号住居跡遺物出土状況（5） ……80
第62図　第4号住居跡遺物出土状況（6） ……81
第63図　第4号住居跡遺物出土状況（7） ……82
第64図　第4号住居跡遺物出土状況（8） ……83
第65図　第4号住居跡遺物出土状況（9） ……84
第66図　第4号住居跡遺物出土状況（10） ……85
第67図　第4号住居跡出土遺物（1） ……90
第68図　第4号住居跡出土遺物（2） ……91
第69図　第4号住居跡出土遺物（3） ……92
第70図　第4号住居跡出土遺物（4） ……93

第71図　第４号住居跡出土遺物（5）……94
第72図　第４号住居跡出土遺物（6）……95
第73図　第４号住居跡出土遺物（7）……96
第74図　第４号住居跡出土遺物（8）……97
第75図　第４号住居跡出土遺物（9）……98
第76図　第４号住居跡出土遺物（10）……99
第77図　第４号住居跡出土遺物（11）……100
第78図　第４号住居跡出土遺物（12）……101
第79図　第４号住居跡出土遺物（13）……102
第80図　第４号住居跡出土遺物（14）……103
第81図　第４号住居跡出土遺物（15）……104
第82図　第４号住居跡出土遺物（16）……105
第83図　第４号住居跡出土遺物（17）……106
第84図　第４号住居跡出土遺物（18）……107
第85図　第４号住居跡出土遺物（19）……108
第86図　第４号住居跡出土遺物（20）……109
第87図　第４号住居跡出土遺物（21）……110
第88図　第４号住居跡出土遺物（22）……111
第89図　第４号住居跡出土遺物（23）……112
第90図　第４号住居跡出土遺物（24）……113
第91図　第４号住居跡出土遺物（25）……118
第92図　第４号住居跡出土遺物（26）……119
第93図　第４号住居跡出土遺物（27）……120
第94図　第４号住居跡出土遺物（28）……121
第95図　第４号住居跡出土遺物（29）……122
第96図　第４号住居跡出土遺物（30）……123
第97図　第４号住居跡出土遺物（31）……124
第98図　第４号住居跡出土遺物（32）……125
第99図　第４号住居跡出土遺物（33）……126
第100図　第４号住居跡出土遺物（34）……127
第101図　第４号住居跡出土遺物（35）……128
第102図　第４号住居跡出土遺物（36）……129
第103図　第４号住居跡出土遺物（37）……130
第104図　第４号住居跡出土遺物（38）……131
第105図　第４号住居跡出土遺物（39）……132
第106図　第４号住居跡出土遺物（40）……133
第107図　第４号住居跡出土遺物（41）……134
第108図　第５号住居跡……137
第109図　第５号住居跡遺物出土状況……138
第110図　第５号住居跡出土遺物（1）……139
第111図　第５号住居跡出土遺物（2）……140
第112図　第５号住居跡出土遺物（3）……143
第113図　第５号住居跡出土遺物（4）……144
第114図　第９号住居跡出土遺物（5）……145
第115図　第５号住居跡出土遺物（6）……146
第116図　第５号住居跡出土遺物（7）……147
第117図　第５号住居跡出土遺物（8）……148
第118図　第５号住居跡出土遺物（9）……149
第119図　第６号住居跡……150
第120図　第６号住居跡出土遺物……151
第121図　第７号住居跡……152
第122図　第７号住居跡遺物出土状況……153
第123図　第７号住居跡出土遺物（1）……154
第124図　第７号住居跡出土遺物（2）……155
第125図　第８号住居跡……156
第126図　第８号住居跡出土遺物（1）……157
第127図　第８号住居跡出土遺物（2）……158
第128図　第９号住居跡……159
第129図　第９号住居跡遺物出土状況……160
第130図　第９号住居跡出土遺物（1）……164
第131図　第９号住居跡出土遺物（2）……165
第132図　第９号住居跡出土遺物（3）……166
第133図　第９号住居跡出土遺物（4）……167
第134図　第９号住居跡出土遺物（5）……168
第135図　第９号住居跡出土遺物（6）……169
第136図　第９号住居跡出土遺物（7）……170
第137図　第９号住居跡出土遺物（8）……171
第138図　第10号住居跡・遺物出土状況……173
第139図　第10号住居跡出土遺物（1）……174
第140図　第10号住居跡出土遺物（2）……175
第141図　第11号住居跡……176
第142図　第11号住居跡出土遺物……176
第143図　縄文時代の土壙位置図（1）……178
第144図　縄文時代の土壙位置図（2）……179

第145図　縄文時代の土壙（1）……180
第146図　縄文時代の土壙（2）……181
第147図　縄文時代の土壙出土遺物……182
第148図　第１号・第２号性格不明遺構……184
第149図　第３号性格不明遺構……184
第150図　遺構に伴わない遺物……185
第151図　中世の土壙位置図（1）……190
第152図　中世の土壙位置図（2）……191
第153図　時期不明の土壙位置図（1）……192
第154図　時期不明の土壙位置図（2）……193
第155図　中世・時期不明の土壙（1）……194
第156図　中世・時期不明の土壙（2）……195
第157図　中世・時期不明の土壙（3）……196
第158図　第１号・第２号井戸跡……198
第159図　第１号火葬跡……198
第160図　第１号火葬跡出土遺物……198
第161図　ピット全体図（1）……201
第162図　ピット全体図（2）……202
第163図　ピット全体図（3）……203
第164図　縄文時代前期の遺構位置図……205

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……7
第２表　第１号住居跡柱穴計測表 ……19
第３表　第１号住居跡出土石器観察表 ……50
第４表　第２号住居跡柱穴計測表 ……51
第５表　第２号住居跡出土石器観察表 ……52
第６表　第３号住居跡柱穴計測表 ……55
第７表　第３号住居跡出土石器観察表 ……70
第８表　第４号住居跡柱穴計測表 ……75
第９表　第４号住居跡出土石器観察表 ……134
第10表　第５号住居跡柱穴計測表 ……136
第11表　第５号住居跡出土石器観察表 ……149
第12表　第７号住居跡柱穴計測表 ……152
第13表　第７号住居跡出土石器観察表 ……155
第14表　第８号住居跡柱穴計測表 ……156
第15表　第９号住居跡柱穴計測表 ……158
第16表　第９号住居跡出土石器観察表 ……172
第17表　第10号住居跡柱穴計測表 ……172
第18表　第10号住居跡出土石器観察表 ……175
第19表　縄文時代の土壙計測表 ……180
第20表　縄文時代の土壙出土石器観察表 ……183
第21表　第３号性格不明遺構柱穴計測表 ……185
第22表　遺構に伴わない遺物観察表 ……185
第23表　中世・時期不明の土壙計測表 ……197
第24表　ピット計測表（１） ……199
第25表　ピット計測表（２） ……200
第26表　前期住居跡出土土器類別破片数
（接合済） ……210
第27表　前期住居跡出土土器類別比（%） ……210
第28表　口縁部・特殊文様帯細種別破片数
（接合済） ……211
第29表　口縁部・特殊文様帯細種別比（%） …211
第30表　５類種別破片数（接合済） ……212
第31表　５類種別比（%） ……212
第32表　５類２種細種別破片数
（接合済一他類種帰属を含む） ……212
第33表　５類２種細種別比（%） ……212
第34表　７類細種別破片数
（接合済一他類種帰属を含む） ……212
第35表　７類細種別比（%） ……212
第36表　口縁部所形態別破片数（接合済） ……212
第37表　口縁部所形態別比（%） ……212
第38表　突起形態別破片数（接合済）・片口
注口土器個体数 ……212
第39表　突起形態別比・片口注口土器比
（%） ……212
第40表　タガ状文（コンパス文等）分類別
破片数（接合済） ……213
第41表　タガ状文（コンパス文等）分類別比
（%） ……213
第42表　主な分類項における出土率の順位 ……214
第43表　馬場窯遺跡他　類別破片数
（接合済） ……215
第44表　馬場窯遺跡他　類別比（%） ……215
第45表　馬場窯遺跡他　口縁部・特殊文様帯
細種別比（%） ……216
第46表　馬場窯遺跡他　５類種別比（%） ……217
第47表　馬場窯遺跡他　５類２種細種別比
（%） ……217
第48表　馬場窯遺跡他　７類細種別比（%） …217
第49表　馬場窯遺跡他　口縁部所形態別比
（%） ……217
第50表　馬場窯遺跡他　突起形態別比（%）
・片口注口土器個体数 ……217
第51表　馬場窯遺跡他　タガ状文（コンパス
文等）分類別比（%） ……218
第52表　黒曜石一覧（挿図掲載） ……222
第53表　黒曜石一覧（挿図非掲載） ……222

写 真 図 版 目 次

巻頭図版1　1　第1号住居跡遺物出土状況
　　2　第1号住居跡出土遺物
巻頭図版2　1　第3号住居跡遺物出土状況
　　2　第3号住居跡出土遺物
巻頭図版3　1　第4号住居跡遺物出土状況
　　2　第4号住居跡出土遺物①
巻頭図版4　1　第4号住居跡出土遺物②
　　2　第4号住居跡出土遺物③
巻頭図版5　1　第9号住居跡遺物出土状況
　　2　第9号住居跡出土遺物
巻頭図版6　1　第1号住居跡出土遺物（13図1）
　　2　第1号住居跡出土遺物（19図17）
　　3　第4号住居跡出土遺物（71図12）
　　4　第4号住居跡出土遺物（76図21）
巻頭図版7　1　第4号住居跡出土遺物（77図23）
　　2　第4号住居跡出土遺物（74図17）
　　3　第9号住居跡出土遺物（131図3）
　　4　第9号住居跡出土遺物（130図1）
巻頭図版8　1　第1号住居跡出土遺物（15図7）
　　2　第3号住居跡出土遺物（43図3）
　　3　第4号住居跡出土遺物（67図1）
　　4　第4号住居跡出土遺物（67図2）
　　5　第4号住居跡出土遺物（75図18）
　　6　第4号住居跡出土遺物（84図55）

図版1　1　工業高校調査区全景①（南から）
　　2　工業高校調査区全景②（南から）
図版2　1　第1号住居跡
　　2　第1号住居跡遺物出土状況①
図版3　1　第1号住居跡遺物出土状況②
　　2　第1号住居跡遺物出土状況③
　　3　第1号住居跡遺物出土状況④
　　4　第1号住居跡遺物出土状況⑤
　　5　第2号住居跡
図版4　1　第2号住居跡遺物出土状況①
　　2　第2号住居跡遺物出土状況②
　　3　第3号住居跡遺物出土状況①
　　4　第3号住居跡遺物出土状況②
　　5　第3号住居跡
図版5　1　第3号住居跡遺物出土状況③
　　2　第3号住居跡遺物出土状況④
図版6　1　第4号住居跡
　　2　第4号住居跡遺物出土状況①
図版7　1　第4号住居跡遺物出土状況②
　　2　第4号住居跡遺物出土状況③
図版8　1　第4号住居跡遺物出土状況④
　　2　第4号住居跡遺物出土状況⑤
図版9　1　第5号住居跡
　　2　第5号住居跡遺物出土状況①
図版10　1　第5号住居跡遺物出土状況②
　　2　第5号住居跡遺物出土状況③
　　3　第5号住居跡遺物出土状況④
　　4　第5号住居跡遺物出土状況⑤
　　5　第6号住居跡
図版11　1　進修館高校調査区全景①（北から）
　　2　進修館高校調査区全景②（北から）
図版12　1　第7号住居跡
　　2　第8号住居跡
図版13　1　第9号住居跡
　　2　第9号住居跡遺物出土状況①
図版14　1　第9号住居跡遺物出土状況②
　　2　第9号住居跡遺物出土状況③
図版15　1　第10号住居跡
　　2　第10号住居跡炉確認状況
図版16　1　第10号住居跡炉
　　2　第10号住居跡炉内体土器出土状況
図版17　1　第11号住居跡
　　2　第1号火葬跡・第1号井戸跡
図版18　1　第1号住居跡出土遺物（1）
　　2　第1号住居跡出土遺物（4）

	3	第1号住居跡出土遺物 (11)
	4	第1号住居跡出土遺物 (17)
図版19	1	第1号住居跡出土遺物 (21)
	2	第1号住居跡出土遺物 (37)
	3	第2号住居跡出土遺物 (1)
	4	第3号住居跡出土遺物 (5)
図版20	1	第3号住居跡出土遺物 (8)
	2	第4号住居跡出土遺物 (5)
	3	第4号住居跡出土遺物 (8)
	4	第4号住居跡出土遺物 (13)
図版21	1	第4号住居跡出土遺物 (14)
	2	第4号住居跡出土遺物 (15)
	3	第4号住居跡出土遺物 (17)
	4	第4号住居跡出土遺物 (18)
図版22	1	第4号住居跡出土遺物 (19)
	2	第4号住居跡出土遺物 (24)
	3	第4号住居跡出土遺物 (28)
	4	第4号住居跡出土遺物 (31)
図版23	1	第4号住居跡出土遺物 (55)
	2	第4号住居跡出土遺物 (56)
	3	第4号住居跡出土遺物 (66)
	4	第5号住居跡出土遺物 (3)
図版24	1	第5号住居跡出土遺物 (5)
	2	第9号住居跡出土遺物 (10)
	3	第1号住居跡出土遺物 (19)
	4	第1号住居跡出土遺物 (22)
図版25	1	第4号住居跡出土遺物 (9)
	2	第4号住居跡出土遺物 (12)
	3	第4号住居跡出土遺物 (21)
	4	第4号住居跡出土遺物 (23)
図版26	1	第4号住居跡出土遺物 (27)
	2	第4号住居跡出土遺物 (84)
	3	第9号住居跡出土遺物 (1)
	4	第9号住居跡出土遺物 (3)
図版27	1	第1号住居跡出土遺物 (2)
	2	第1号住居跡出土遺物 (3)
	3	第1号住居跡出土遺物 (5)
	4	第1号住居跡出土遺物 (6)
	5	第1号住居跡出土遺物 (7)
	6	第1号住居跡出土遺物 (8)
図版28	1	第1号住居跡出土遺物 (9)
	2	第1号住居跡出土遺物 (10)
	3	第1号住居跡出土遺物 (12)
	4	第1号住居跡出土遺物 (13)
	5	第1号住居跡出土遺物 (14)
	6	第1号住居跡出土遺物 (15)
図版29	1	第1号住居跡出土遺物 (16)
	2	第1号住居跡出土遺物 (18)
	3	第1号住居跡出土遺物 (20)
	4	第1号住居跡出土遺物 (23)
	5	第1号住居跡出土遺物 (24)
	6	第1号住居跡出土遺物 (25)
図版30	1	第1号住居跡出土遺物 (26)
	2	第1号住居跡出土遺物 (27)
	3	第1号住居跡出土遺物 (28)
	4	第1号住居跡出土遺物 (29)
	5	第1号住居跡出土遺物 (33)
	6	第1号住居跡出土遺物 (36)
図版31	1	第1号住居跡出土遺物 (39)
	2	第1号住居跡出土遺物 (40)
	3	第1号住居跡出土遺物 (41)
	4	第1号住居跡出土遺物 (43)
	5	第1号住居跡出土遺物 (44)
	6	第1号住居跡出土遺物 (45)
図版32	1	第1号住居跡出土遺物 (46)
	2	第1号住居跡出土遺物 (47)
	3	第1号住居跡出土遺物 (48)
	4	第1号住居跡出土遺物 (49)
	5	第3号住居跡出土遺物 (1)
	6	第3号住居跡出土遺物 (2)
図版33	1	第3号住居跡出土遺物 (3)
	2	第3号住居跡出土遺物 (4)
	3	第3号住居跡出土遺物 (10)
	4	第3号住居跡出土遺物 (12)

	5	第4号住居跡出土遺物（1）
	6	第4号住居跡出土遺物（2）
図版34	1	第4号住居跡出土遺物（3）
	2	第4号住居跡出土遺物（4）
	3	第4号住居跡出土遺物（6）
	4	第4号住居跡出土遺物（7）
	5	第4号住居跡出土遺物（10）
	6	第4号住居跡出土遺物（11）
図版35	1	第4号住居跡出土遺物（16）
	2	第4号住居跡出土遺物（20）
	3	第4号住居跡出土遺物（22）
	4	第4号住居跡出土遺物（25）
	5	第4号住居跡出土遺物（26）
	6	第4号住居跡出土遺物（29）
図版36	1	第4号住居跡出土遺物（30）
	2	第4号住居跡出土遺物（32）
	3	第4号住居跡出土遺物（37）
	4	第4号住居跡出土遺物（38）
	5	第4号住居跡出土遺物（45）
	6	第4号住居跡出土遺物（46）
図版37	1	第4号住居跡出土遺物（48）
	2	第4号住居跡出土遺物（49）
	3	第4号住居跡出土遺物（52）
	4	第4号住居跡出土遺物（54）
	5	第4号住居跡出土遺物（58）
	6	第4号住居跡出土遺物（68）
図版38	1	第4号住居跡出土遺物（70）
	2	第4号住居跡出土遺物（73）
	3	第4号住居跡出土遺物（74）
	4	第4号住居跡出土遺物（75）
	5	第4号住居跡出土遺物（76）
	6	第4号住居跡出土遺物（77）
図版39	1	第4号住居跡出土遺物（87）
	2	第4号住居跡出土遺物（88）
	3	第5号住居跡出土遺物（1）
	4	第5号住居跡出土遺物（2）
	5	第5号住居跡出土遺物（4）
	6	第5号住居跡出土遺物（6）
図版40	1	第5号住居跡出土遺物（7）
	2	第5号住居跡出土遺物（8）
	3	第5号住居跡出土遺物（12）
	4	第6号住居跡出土遺物（1）
	5	第7号住居跡出土遺物（1）
	6	第7号住居跡出土遺物（2）
図版41	1	第8号住居跡出土遺物（1）
	2	第9号住居跡出土遺物（2）
	3	第9号住居跡出土遺物（4）
	4	第9号住居跡出土遺物（5）
	5	第9号住居跡出土遺物（7）
	6	第10号土壙出土遺物（1）
図版42	1	第1号住居跡出土遺物（30）
	2	第1号住居跡出土遺物（31）
	3	第1号住居跡出土遺物（32）
	4	第1号住居跡出土遺物（34）
	5	第1号住居跡出土遺物（35）
	6	第1号住居跡出土遺物（38）
	7	第1号住居跡出土遺物（42）
	8	第3号住居跡出土遺物（6）
図版43	1	第3号住居跡出土遺物（7）
	2	第3号住居跡出土遺物（9）
	3	第3号住居跡出土遺物（11）
	4	第3号住居跡出土遺物（13）
	5	第3号住居跡出土遺物（14）
	6	第3号住居跡出土遺物（15）
	7	第3号住居跡出土遺物（16）
	8	第4号住居跡出土遺物（33）
図版44	1	第4号住居跡出土遺物（34）
	2	第4号住居跡出土遺物（35）
	3	第4号住居跡出土遺物（36）
	4	第4号住居跡出土遺物（39）
	5	第4号住居跡出土遺物（40）
	6	第4号住居跡出土遺物（41）
	7	第4号住居跡出土遺物（42）
	8	第4号住居跡出土遺物（43）

図版45　1　第4号住居跡出土遺物（44）
2　第4号住居跡出土遺物（47）
3　第4号住居跡出土遺物（50）
4　第4号住居跡出土遺物（51）
5　第4号住居跡出土遺物（53）
6　第4号住居跡出土遺物（57）
7　第4号住居跡出土遺物（59）
8　第4号住居跡出土遺物（60）
図版46　1　第4号住居跡出土遺物（61）
2　第4号住居跡出土遺物（62）
3　第4号住居跡出土遺物（63）
4　第4号住居跡出土遺物（64）
5　第4号住居跡出土遺物（65）
6　第4号住居跡出土遺物（67）
7　第4号住居跡出土遺物（69）
8　第4号住居跡出土遺物（71）
図版47　1　第4号住居跡出土遺物（72）
2　第4号住居跡出土遺物（78）
3　第4号住居跡出土遺物（79）
4　第4号住居跡出土遺物（80）
5　第4号住居跡出土遺物（81）
6　第4号住居跡出土遺物（82）
7　第4号住居跡出土遺物（83）
8　第4号住居跡出土遺物（85）
図版48　1　第4号住居跡出土遺物（86）
2　第4号住居跡出土遺物（89）
3　第4号住居跡出土遺物（90）
4　第4号住居跡出土遺物（91）
5　第4号住居跡出土遺物（92）
6　第4号住居跡出土遺物（93）
7　第4号住居跡出土遺物（94）
8　第4号住居跡出土遺物（95）
図版49　1　第4号住居跡出土遺物（96）
2　第4号住居跡出土遺物（97）
3　第5号住居跡出土遺物（9）
4　第5号住居跡出土遺物（10）
5　第5号住居跡出土遺物（11）
6　第9号住居跡出土遺物（6）
7　第9号住居跡出土遺物（8）
8　第9号住居跡出土遺物（9）
図版50　1　第1号住居跡出土遺物（50～64）
2　第1号住居跡出土遺物（65～81）
図版51　1　第1号住居跡出土遺物（82～99）
2　第1号住居跡出土遺物（100～115）
図版52　1　第1号住居跡出土遺物（116～125）
2　第1号住居跡出土遺物（126～139）
図版53　1　第1号住居跡出土遺物（140～151）
2　第1号住居跡出土遺物（152～161）
図版54　1　第1号住居跡出土遺物（162～168）
2　第1号住居跡出土遺物（169～178）
図版55　1　第1号住居跡出土遺物（179～194）
2　第1号住居跡出土遺物（195～207）
図版56　1　第1号住居跡出土遺物（208～217）
2　第1号住居跡出土遺物（218～233）
図版57　1　第1号住居跡出土遺物（234～247）
2　第1号住居跡出土遺物（248～257）
図版58　1　第1号住居跡出土遺物（258～268）
2　第1号住居跡出土遺物（269～278）
図版59　1　第1号住居跡出土遺物（279～284）
2　第1号住居跡出土遺物（285～297）
図版60　1　第1号住居跡出土遺物（298～307）
2　第2号住居跡出土遺物（2～23）
図版61　1　第3号住居跡出土遺物（17～30）
2　第3号住居跡出土遺物（31～39）
図版62　1　第3号住居跡出土遺物（40～54）
2　第3号住居跡出土遺物（55～68）
図版63　1　第3号住居跡出土遺物（69～76）
2　第3号住居跡出土遺物（77～84）
図版64　1　第3号住居跡出土遺物（85～99）
2　第3号住居跡出土遺物（100～113）
図版65　1　第3号住居跡出土遺物（114～128）
2　第3号住居跡出土遺物（129～134）
図版66　1　第3号住居跡出土遺物（135～145）
2　第3号住居跡出土遺物（146～159）

図版67　1　第3号住居跡出土遺物（160～170）
　　2　第3号住居跡出土遺物（171～182）
図版68　1　第3号住居跡出土遺物（183～193）
　　2　第3号住居跡出土遺物（194～206）
図版69　1　第3号住居跡出土遺物（207～222）
　　2　第3号住居跡出土遺物（223～234）
図版70　1　第3号住居跡出土遺物（235～249）
　　2　第3号住居跡出土遺物（250～267）
図版71　1　第3号住居跡出土遺物（268～285）
　　2　第4号住居跡出土遺物（98～117）
図版72　1　第4号住居跡出土遺物（118～136）
　　2　第4号住居跡出土遺物（137～151）
図版73　1　第4号住居跡出土遺物（152～164）
　　2　第4号住居跡出土遺物（165～181）
図版74　1　第4号住居跡出土遺物（182～196）
　　2　第4号住居跡出土遺物（197～214）
図版75　1　第4号住居跡出土遺物（215～228）
　　2　第4号住居跡出土遺物（229～243）
図版76　1　第4号住居跡出土遺物（244～262）
　　2　第4号住居跡出土遺物（263～280）
図版77　1　第4号住居跡出土遺物（281～296）
　　2　第4号住居跡出土遺物（297～311）
図版78　1　第4号住居跡出土遺物（312～327）
　　2　第4号住居跡出土遺物（328～336）
図版79　1　第4号住居跡出土遺物（337～350）
　　2　第4号住居跡出土遺物（351～366）
図版80　1　第4号住居跡出土遺物（367～377）
　　2　第4号住居跡出土遺物（378～391）
図版81　1　第4号住居跡出土遺物（392～405）
　　2　第4号住居跡出土遺物（406～417）
図版82　1　第4号住居跡出土遺物（418～428）
　　2　第4号住居跡出土遺物（429～445）
図版83　1　第4号住居跡出土遺物（446～454）
　　2　第4号住居跡出土遺物（455～468）
図版84　1　第4号住居跡出土遺物（469～474）
　　2　第4号住居跡出土遺物（475～478）
図版85　1　第4号住居跡出土遺物（479～487）
　　2　第4号住居跡出土遺物（488～499）
図版86　1　第4号住居跡出土遺物（500～513）
　　2　第4号住居跡出土遺物（514～525）
図版87　1　第4号住居跡出土遺物（526～536）
　　2　第4号住居跡出土遺物（537～549）
図版88　1　第4号住居跡出土遺物（550～558）
　　2　第4号住居跡出土遺物（559～567）
図版89　1　第4号住居跡出土遺物（568～579）
　　2　第4号住居跡出土遺物（580～589）
図版90　1　第4号住居跡出土遺物
　　（590～598・613）
　　2　第5号住居跡出土遺物（13～25）
図版91　1　第5号住居跡出土遺物（26～41）
　　2　第5号住居跡出土遺物（42～55）
図版92　1　第5号住居跡出土遺物（56～69）
　　2　第5号住居跡出土遺物（70～82）
図版93　1　第5号住居跡出土遺物（83～97）
　　2　第5号住居跡出土遺物（98～109）
図版94　1　第5号住居跡出土遺物（110～123）
　　2　第5号住居跡出土遺物（124～133）
図版95　1　第5号住居跡出土遺物（134～145）
　　2　第5号住居跡出土遺物（146～155）
図版96　1　第5号住居跡出土遺物（156～168）
　　2　第5号住居跡出土遺物（169～187）
図版97　1　第6・11号住居跡出土遺物
　　（2～8・1～8）
　　2　第7号住居跡出土遺物（3～15）
図版98　1　第7号住居跡出土遺物（16～27）
　　2　第8号住居跡出土遺物（2～22）
図版99　1　第8号住居跡出土遺物（23～33）
　　2　第8号住居跡出土遺物（34～46）
図版100　1　第9号住居跡出土遺物（11～20）
　　2　第9号住居跡出土遺物（21～32）
図版101　1　第9号住居跡出土遺物（33～47）
　　2　第9号住居跡出土遺物（48～62）
図版102　1　第9号住居跡出土遺物（63～74）
　　2　第9号住居跡出土遺物（75～87）

図版103　1　第９号住居跡出土遺物（88～101）
　　2　第９号住居跡出土遺物（102～112）
図版104　1　第９号住居跡出土遺物（113～126）
　　2　第９号住居跡出土遺物（127～135）
図版105　1　第９号住居跡出土遺物（136～146）
　　2　第10号住居跡出土遺物（２～13）
図版106　1　第10号住居跡出土遺物（14～15）
　　2　第10号住居跡出土遺物（16～17）
図版107　1　第１号住居跡出土遺物（308）
　　2　第１号住居跡出土遺物（309）
　　3　第１号住居跡出土遺物（310）
　　4　第１号住居跡出土遺物（311）
　　5　第１号住居跡出土遺物（312）
　　6　第１号住居跡出土遺物（313）
図版108　1　第１号住居跡出土遺物（315）
　　2　第１号住居跡出土遺物（316）
　　3　第１号住居跡出土遺物（317）
　　4　第１号住居跡出土遺物（318）
　　5　第１号住居跡出土遺物（319）
　　6　第１号住居跡出土遺物（320）
図版109　1　第３号住居跡出土遺物（286）
　　2　第３号住居跡出土遺物（287）
　　3　第３号住居跡出土遺物（288）
　　4　第３号住居跡出土遺物（289）
　　5　第３号住居跡出土遺物（290）
　　6　第３号住居跡出土遺物（291）
図版110　1　第３号住居跡出土遺物（292）
　　2　第３号住居跡出土遺物（293）
　　3　第３号住居跡出土遺物（294）
　　4　第３号住居跡出土遺物（295）
　　5　第４号住居跡出土遺物（599）
　　6　第４号住居跡出土遺物（600）
図版111　1　第４号住居跡出土遺物（601）
　　2　第４号住居跡出土遺物（602）
　　3　第４号住居跡出土遺物（603）
　　4　第４号住居跡出土遺物（604）
　　5　第４号住居跡出土遺物（605）
　　6　第４号住居跡出土遺物（606）
図版112　1　第４号住居跡出土遺物（607）
　　2　第４号住居跡出土遺物（608）
　　3　第４号住居跡出土遺物（609）
　　4　第４号住居跡出土遺物（610）
　　5　第４号住居跡出土遺物（611）
　　6　第４号住居跡出土遺物（612）
図版113　1　第５号住居跡出土遺物（188）
　　2　第５号住居跡出土遺物（189）
　　3　第５号住居跡出土遺物（190）
　　4　第５号住居跡出土遺物（191）
　　5　第５号住居跡出土遺物（192）
　　6　第５号住居跡出土遺物（193）
図版114　1　第５号住居跡出土遺物（194）
　　2　第５号住居跡出土遺物（195）
　　3　第５号住居跡出土遺物（196）
　　4　第９号住居跡出土遺物（147）
　　5　第９号住居跡出土遺物（149）
　　6　第９号住居跡出土遺物（150）
図版115　1　第９号住居跡出土遺物（151）
　　2　第９号住居跡出土遺物（153）
　　3　第９号住居跡出土遺物（154）
　　4　第10号住居跡出土遺物（１）
　　5　第４号住居跡出土遺物（629・表）
　　6　第４号住居跡出土遺物（629・裏）
図版116　1　第８号住居跡出土遺物、アップ（30）
　　2　第１号住居跡出土遺物、アップ（220）
　　3　第１号住居跡出土遺物、アップ（208）
　　4　第１号住居跡出土遺物、アップ（300）
　　5　第９号住居跡出土遺物、アップ（127）
　　6　第４号住居跡出土遺物、アップ（501）
　　7　第１号住居跡出土遺物、アップ（242）
　　8　第５号住居跡出土遺物、アップ（109）
図版117　1　第32・34号土壙・第１号火葬跡出土遺物　（３～５・６～11・１）
　　2　第１号住居跡出土遺物（321～329）
図版118　1　第１号住居跡出土遺物（330～335）

2　第３号住居跡出土遺物（296～304）

図版119　1　第４号住居跡出土遺物
（614～621・626～627）

2　第４号住居跡出土遺物
（622～625・628）

図版120　1　第５号住居跡出土遺物（197～208）

2　第９号住居跡出土遺物（155～161）

図版121　1　第２・７・10号住居跡出土遺物
（24～25・28・18～22）

2　第17・35号土壙・遺構に伴わない遺物　（２・12・１～２）

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県教育委員会は、「21世紀いきいきハイスクール推進計画」により、取りまく環境の変化や生徒数の減少を踏まえ、県立高校の教育内容の充実を図るとともに、県立高校の再編整備を進めながら、彩り豊かな高校づくりを推進することとした。

行田進修館高校、行田工業高校、行田女子高校を統合し、平成17年度から新たな単位制総合高校とすることもその一環として位置付けられる。

県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

行田進修館高校及び行田工業高校に係る連絡通路設置工事地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成16年２月４日付け教総第32036号で県教育局管理部（当時）高校改革推進室長から照会があった。

当該地は、馬場裏遺跡（遺跡コード№68－029）に該当していたため、県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）では平成16年３月15日に確認調査を実施した上で、同年３月18日付け教文第3607号で次の内容を回答した。

１　埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、馬場裏遺跡（遺跡コード№68－029）が所在すること

２　法手続き

工事着手に先立ち、文化財保護法第57条の３（当時）の規定による発掘通知の提出が必要であること

３　取扱い

工事計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要であること

埋蔵文化財の保護措置については、高校改革推進室長と文化財保護課で協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの結果により、発掘調査を実施することになった。また、発掘調査は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

文化財保護法第57条の３第１項の規定による発掘通知が埼玉県知事から提出され、また、同法第57条第１項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出されて、平成16年５月から発掘調査が開始された。

埼玉県教育委員会教育長から、文化財保護法第57条の３第１項の発掘通知に対しては平成16年４月15日付け教文第３－７号で、同法第57条第１項の発掘調査届に対しては平成16年６月28日付け教文第２－23号で、それぞれ勧告、指示を行った。

なお、同校の再編統合に伴う図書館棟新築工事予定地については、平成16年７月に確認調査を実施したが、埋蔵文化財の分布は認められなかった。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

馬場裏遺跡第25次の発掘調査は平成16年５月17日から平成16年８月13日まで実施した。

調査区は市道を挟んだ旧行田進修館高等学校と旧行田工業高等学校の両校地内に位置し、それぞれ進修館高校調査区、工業高校調査区と便宜的に呼称した。調査面積は826㎡である。

５月下旬、器材搬入などの事前準備を行った上で、工業高校調査区から重機による表土除去作業を開始した。排土置き場確保のため、調査は工業高校調査区終了後に進修館高校調査区へ移行する方法をとった。６月上旬、工業高校調査区の表土除去後、基準点測量を実施した。その後、調査補助員を導入し遺構確認作業を行った。６月中旬、竪穴住居跡、土壙、井戸、火葬跡、ピット等の遺構が密に分布している状況が確認され、それらの遺構の精査に着手した。竪穴住居跡の精査では大量の縄文土器が折り重なるように検出されるとともに湧水がひどく、作業は困難を極めた。遺物を検出した竪穴住居跡では遺物出土状況の図面を作成した後、遺物の取り上げを行い、遺構の土層断面図作成、写真撮影、平面図作成を順次進めた。

６月下旬から７月上旬にかけて、進修館高校調査区の表土除去作業を重機にて着手し、調査の終了した工業高校調査区の埋戻し作業を併行して行った。７月中旬には、進修館高校調査区に移行し、基準点測量後、工業高校調査区同様に遺構確認作業に入った。竪穴住居跡、土壙、井戸、ピット等が検出され、遺物の出土状況図作成、遺構の土層断面図作成、写真撮影、平面図作成作業を順調に行った。また、調査中には両校の高校生と近隣の中学生を対象としたミニ遺跡説明会も催した。

７月下旬から８月上旬に重機にて進修館高校調査区の埋戻し作業を行い、その後器材等の撤収をもって発掘調査の全工程を終了した。

（2）整理・報告書の作成

馬場裏遺跡の整理・報告書作成は、平成18年４月10日から平成19年３月23日まで実施した。

４月上旬から遺物の水洗・注記を行い、順次土器の接合・復元作業へと移行した。遺物の復元作業と併行して遺構の第二原図作成作業を行った。第二原図作成が終了したものから、スキャナでパソコンに取り込み、イラストレーターでデジタルトレースを開始した。また、周辺の遺跡地図、遺跡全体図なども同様に作成するとともに、遺構の土層注記の入力も行った。５月からは、復元が終了した土器の分類を行い、実測を開始した。

６月には掲載する石器を選び、実測・トレースに入った。７月下旬からは、実測の終了した土器のトレースに入った。

８月中旬までに遺物の接合・復元作業を終了し、土器破片の採拓作業にとりかかった。破片の採拓終了後は引続き、実測土器の採拓作業に着手した。

９月いっぱいで実測を終了し、10月からは破片土器の断面実測に移り、順次トレースを進めた。終了後は拓本の貼りこみに移った。

10月下旬からは、竪穴住居跡の遺物出土状況図作成を遺構図同様にパソコンで行い、完成させた。

11月中旬から、実測の終了した遺物の石膏部分の着色を行い、12月中旬に写真撮影を行った。11月下旬からは、遺構ごとに遺物の仮版組に着手し、修正を加えた後、12月中旬から遺物版下の作成に入った。合わせて写真図版の作成に着手するとともに原稿執筆を開始した。

１月中旬までに原稿執筆を終了させ、印刷業者の入札後、３回の校正を経て３月末に報告書を印刷、刊行した。また、作業の終了した図面、写真、遺物等を整理、分類しその収納作業を行い、全ての作業を終了した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成16年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員（調査第二担当）	劒持和夫
主席	田中由夫	統括調査員	西井幸雄
		統括調査員	吉田稔

平成18年度（整理報告書刊行）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長兼資料活用部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	整理第二課長	富田和夫
総務課長	高橋義和	主事	松本美佐子

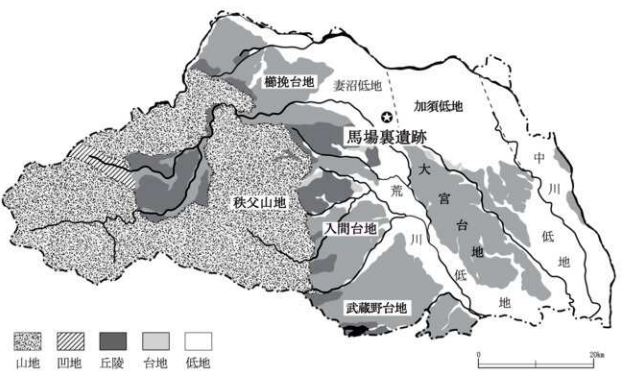
Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

馬場裏遺跡は埼玉県行田市長野に所在し、秩父鉄道東行田駅周辺から県立進修館高校付近までの東西約400m、南北約800mの範囲に展開している。今回報告する第25次調査地点は、遺跡の中央やや北寄り、県立進修館高校校地内の南端に位置する。

埼玉県の北東部に位置する行田市は、利根川によって形成された妻沼低地上に立地しているとともに、熊谷市三ヶ尻付近を扇頂とする荒川の低位扇状地の東方扇端部にもあたる。この低地はさらに東方の加須低地へと続く。本遺跡の所在する長野地区は行田市南部に位置し、周辺は標高16～20mの平坦な沖積平野で現在は水田地帯となっている。しかし、その下にはさいたま市域から続く大宮台地のローム台地が入りこんでいる。これは加須低地一帯が関東造盆地運動により地盤沈降したことに起因しており、この埋没低台地は、本遺跡周辺を北端として、酒巻導水路(玉野用水)や忍川、さらに元荒川の東側をたどりつつ、鴻巣市安養寺地区にかけての約10kmにわたり南東方向へ弧を描くようにのびている。

この低台地上には、埼玉古墳群をはじめ、さまざまな時代の遺跡が数多く分布している。本遺跡の周辺も密度は高く、北に柳平遺跡(中島1993)(8)、南には林遺跡(2)や中斉遺跡(3)、長野神明遺跡(塩野1970)(6)などが埋没台地上に沿って連なっている。その歴史は途絶えることなく、中近世期には、沖積平野を縦横に行きかう水流と低台地をたくみに利用した忍城が馬場裏遺跡南西に整備され、武蔵国北西部の有力都市として成長した。当遺跡の東側には日光警護の八王子千人同心が往来した日光脇往還が南北に走り、沿道に久伊豆神社と長久寺が所在している。両寺社は、文明年間に成田下総守顕泰が忍城を築城した際、遷座・創建されたと伝えられている。



第１図　埼玉県の地形図

2．歴史的環境

旧石器時代の遺跡は調査例が少なく、行田市域では、後に馬場裏遺跡(1)に包括される長野中学校校内遺跡から削器・細石核が採集されている(栗原1963)にすぎない。大宮台地北端に目を向けても、鴻巣市新屋敷遺跡(西井1996)や中三谷遺跡(西井1989)などでナイフ形石器を主体とする石器群が発見されているのみである。

同様に縄文時代の遺跡の調査例もさほど多くはない。近年、小針遺跡(29)で早期の集石遺構が１基発見され(浅見2006)、行田市域の縄文時代が早期まで遡ることが確認された。馬場裏遺跡(1)では前期から後期の遺構が発見されており、特に前期黒ノ土式期の竪穴住居跡が今回の調査を含め、13軒発見され、当該期の大集落であることが確認された。また、前期末葉から中期初頭の竪穴住居跡２軒、中期加曽利E式期２軒、後期称明寺式期２軒、土壙なども検出されており近隣最大の縄文遺跡であることがわかった。船原・内郷遺跡(中島1991)(24)では後期称名寺・堀の内式期の竪穴状遺構が検出されている。瓦塚古墳西側隣接地(中島1988)、原遺跡(栗原1978)(16)、下埼玉通遺跡(中島1988)、築道下遺跡(吉田1997)(33)などでも中期から後期の遺物が発見されているが、遺構の検出には至っていない。

弥生時代になると、埋没台地のみならず、荒川扇状地の扇端部周辺の沖積地にも遺跡が進出する。なかでも中期前半須和田期の環濠集落と方形周溝墓が調査された池上遺跡(中島1984)(26)と小敷田遺跡(吉田1991)(25)が著名である。そして、さらに西方の北島遺跡(40)では、中期後半の竪穴住居跡78軒が検出され、集落跡とともに、水田跡、分水嶺をまたぐ大水路跡、築堤跡などが発見された。

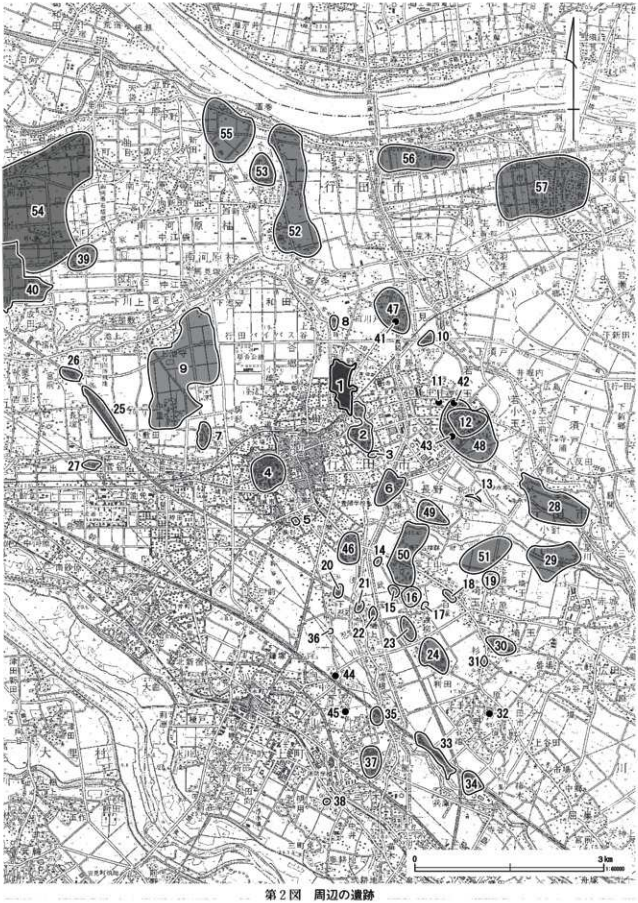
北島弥生集落は、上層を古墳時代から古代に至る洪水層で封鎖されており、しかもにわかには識別しがたい土壌のなかに遺構が構築されていた。この例から、これまでわずかに袋・台遺跡(高橋1982)(35)や船原・内郷遺跡(24)などで住居跡が検出されたにすぎない周辺の弥生遺跡も、今後発見例が増すと考えられる。

古墳時代に入ると遺跡数は増加し、周辺では高畑遺跡(20)、武良内遺跡(21)、鴻池遺跡(田部井1977)(22)、渡柳神場遺跡(栗原・駒宮1990)(15)、長野神明遺跡(6)、柳坪遺跡(8)、白鳥田遺跡(木戸1985)(10)、北大竹遺跡(12)、小敷田遺跡(25)などで前期から中期の集落跡や方形周溝墓などが調査されている。こうした遺跡数の急激な増加は、新たな灌漑技術の導入や木製農具、鉄製農工具の普及により、広大な低地の水田開発が飛躍的に進行したことを物語っており、埼玉古墳群成立の経済基盤が確立したことをうかがわせる。

古墳時代後期になると大規模集落の成立とともに、さらなる遺跡数の増加が認められる。小針遺跡(斉藤1980)(29)、築道下遺跡(栗岡1998)(33)、袋・台遺跡(35)、馬場裏遺跡(1)、池守遺跡(斉藤1981)(9)などが代表的な遺跡で、特に築道下遺跡(33)では稲荷山古墳の築造と併行する５世紀後半に集落が開始され、継続的に大規模集落が営まれている。

古墳群の様相については、埼玉古墳群(50)では金錯銘鉄剣の出土で知られている稲荷山古墳の築造が５世紀後半から開始され、それを契機に二子山古墳、鉄砲山古墳、将軍山古墳などの100m を超える大型前方後円墳や、大型円墳である丸墓山古墳が継続的に築造される。この他白山(49)、若王子(51)、佐間(46)、若小玉(48)、小見(47)、新郷(57)、大稲荷(56)、斎条(52)、酒巻(55)、中条(54)などの各古墳群が６世紀前半から７世紀前半を中心に築造されている。

奈良・平安時代の遺跡は、池上遺跡(26)、小敷田遺跡(25)、柳坪遺跡(8)、北大竹遺跡(12)、原遺跡(斉藤1984)(16)、愛宕通遺跡(瀧瀬1985)、下埼玉通遺跡(堀田1988)、馬場裏遺跡(1)、白鳥田遺跡(10)、野合遺跡(斉藤1979)(14)、八ッ島遺跡(山本1998)(34)などが調査されている。このうち小敷田遺跡(25)からは藤原宮期の出挙を記した木簡が出土しており、郡衙


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
3km

第２図　周辺の遺跡

またはそれに付属する施設との関連性が指摘されている。また、元荒川に沿った築道下遺跡(33)では7世紀後半以降、大規模な掘立柱建物群が継続的に営まれており、水上交通の要衝に位置する埼玉郡内の中核的な集落の一つと考えられている(山本2000)。

この他に寺院跡として旧盛徳寺跡(栗原1975)(19)がある。寺伝では大同年間の創建とされ、8世紀末の重廊文軒平瓦や、9世紀後半の単弁4葉軒丸瓦などが出土し、境内には円形の柱座を造りだす礎石が現存している。また、旧盛徳寺跡の北方の水田から「矢作私印」と印された大和古印が出土している。

平安時代末から中世になると、武蔵七党や在地武士団の館跡が多数知られているが、調査例が少なく、実態はよくわからない。行田市付近には久下、忍、河原、長野、行田、麻績、渡柳、広田、野、津之戸、笠原、真名板、多賀谷などの数多くの氏が勃興していたことが知られ、現在もその本貫地と考えられる地名や館の伝承などが残されている。

中世の遺跡では、築道下遺跡(33)で13世紀から14世紀にかけての区画溝を設ける墓跡群が検出され、板石塔婆22基、蔵骨器6個、埋納焼骨23基などが出土している(鈴木1998)。また、長野神明遺跡(6)では二重の堀を構える館跡が発見され、外堀から500枚を超える多量の柿経が出土している(行田市教育委員会1995)。

第1表　周辺遺跡一覧表

1	馬場裏遺跡	20	高畑遺跡	39	東沢遺跡
2	林遺跡	21	武良内遺跡	40	北島遺跡
3	中斉遺跡	22	鴻池遺跡	41	小見真観寺古墳
4	忍城跡	23	内郷遺跡	42	地蔵塚古墳
5	忍三郎館跡	24	船原・内郷通遺跡	43	八幡山古墳
6	長野神明遺跡	25	小敷田遺跡	44	下忍愛宕神社古墳
7	皿尾遺跡	26	池上遺跡	45	下忍宝養寺古墳
8	柳坪遺跡	27	持田薩の宮遺跡	46	佐間古墳群
9	池守遺跡	28	小針北遺跡	47	小見古墳群
10	白鳥田遺跡	29	小針遺跡	48	若小玉古墳群
11	中村遺跡	30	稲荷通遺跡	49	白山古墳群
12	北大竹遺跡	31	行田市No.140遺跡	50	埼玉古墳群
13	行田市No.171遺跡	32	行田市No.166遺跡	51	若王子古墳群
14	野合遺跡	33	築道下遺跡	52	斎条古墳群
15	渡柳陣場遺跡	34	八ッ島遺跡	53	犬塚古墳群
16	原遺跡	35	袋・台遺跡	54	中条古墳群
17	原東遺跡	36	西谷遺跡	55	酒巻古墳群
18	百塚通遺跡	37	袋遺跡	56	大稲荷古墳群
19	旧盛徳寺跡	38	吹上町No.5遺跡	57	新郷古墳群

Ⅲ　遺跡の概要

馬場裏遺跡は、これまでに行田市教育委員会で22回、当事業団で２回の計24回にわたる発掘調査が実施されている。それらの調査では旧石器時代から中・近世にわたる数多くの遺構や遺物が発見され、大きな成果が挙げられている。遺跡内では校舎建設や下水道工事を原因とする調査が各所で行われており、比較的広範囲の様相が把握されつつある。今回の調査は25次調査にあたり、縄文時代前期前半の住居跡が10軒検出され、当該期の集落がまとまった範囲内で展開していることが確認できた。まず既往調査の概要を紹介した後、25次調査の概要を述べることとする。

１．既往調査の概要

馬場裏遺跡は、第二次世界大戦中に行われた長野中学校の建設工事の際に偶然発見された。それ以後、校庭から縄文土器や石器が採集されることが知られるようになり、昭和38年には栗原文蔵が採集品のうち、黒曜石製細石核、硅岩製削器等の旧石器や縄文土器、石器などを紹介している(栗原1963)。

本格的な発掘調査の端緒は昭和54年のことで、長野中学校の校舎増築にともない行田市教育委員会が最初の発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期加曽利ＥⅡ式期の住居跡１軒と古墳時代から平安時代の住居跡９軒などが検出された(斉藤1980)。また、昭和59年には中島宏により長野中学校校庭で採集された縄文土器が報告され、当時、県北部から上毛地域に数少ない縄文時代前期の代表的な遺跡として注目されるようになった(中島1984)。

昭和60年には長野中学校の貯水槽設置にともない長野中学校校内遺跡第２次調査が実施され、土壙２基と須恵器が発見された。

この頃まで、「長野中学校校内遺跡」は長野中学校と周辺の比較的狭い範囲と考えられていた。だが、昭和63年度以降、行田市教育委員会が下水道工事や個人住宅建設にともなう発掘調査を継続的に実施した結果、それまで別個の遺跡と考えられていた馬場裏遺跡と長野中学校校内遺跡の内容と範囲が、分かちがたいことが明らかとなり、以後、馬場裏遺跡に遺跡名が統一され、調査が継続されている。

調査が本格化した昭和63年度には、下水道敷設工事にともなう第３・５～７次調査、および個人住宅建設に先立つ第４次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡(第３・５～７次調査)、大溝(第５次調査)、近世の溝(第６次調査)などが検出された。このうち、第４次調査では奈良・平安時代の住居跡２軒、土壙１基、溝２条が調査され、住居跡から９世紀後半の良好な一括資料が出土している(中島1990)。

平成元年度には下水道の敷設にともなう第８～13次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡(第10～13次調査)、近世の溝(第９次調査)などが発見された。また、平成２年度には下水道敷設工事にともなう第14・15次調査、長野中学校の体育館建設に先立つ第16次調査が行われ、平安時代から中世の溝・土壙(第14～16次調査)、旧石器時代の剥片、縄文土器(第16次調査)などが検出された。そして、平成３年度には長久寺の南側に隣接する第17次調査区で同寺に関わりをもつと想定される土壙群が発見され、本遺跡における中・近世期の一端が明らかにされた(中島1993)。

さらに、平成４年度には個人住宅の建設にともなう第18次調査、長野中学校のプール建設のための第19次調査が実施された。第18次調査では古墳時代末から奈良時代にわたる住居跡４軒、溝３条、土壙13基、ピット49基が検出され、大溝では６世紀末から７世紀前半を中心とする黒色処理された土師器がまとまって出土し、注目された(中島1994)。これに対し、第19次調査では古墳時代後半から平安時代の住

居跡16軒・土壙３基、時期不明の溝２条・土壙４基などが調査され、土師器、須恵器、耳環、埴輪、土錘、編物石など、多彩な遺物が出土している。

平成５年度には長野中学校の校庭整備にともなう第20次調査が実施され、市内では稀少な縄文時代前期の住居跡３軒・土壙１基、縄文時代後期の住居跡１軒、古墳時代後期の住居跡4軒・土壙１基、平安時代の住居跡１軒、時期不明の溝２条・土壙７基・ピット多数が検出されている。また、平成６年度には下水道敷設工事に際し第21次調査が実施され、平安時代の住居跡３軒、溝30条、土壙46基、ピット多数が発見された。この調査地点は東行田駅の南側にあたり、遺跡の南側への広がりが確認され、隣接する林遺跡と本来は一連の遺跡である可能性が指摘されている(中島1994)。

平成９・10年度には、行田進修館高校校地内で第22次・23次調査が当事業団により実施された。平成９年度の第22次調査は、行田進修館高等学校が大地震時における地域の避難拠点校に指定され、防災機能を備えた体育館の建設に際して行われた。発掘調査では、奈良・平安時代の住居跡５軒、中・近世の火葬跡２基、溝14条、井戸６基、土壙12基、ピット249基などを検出した。奈良・平安時代の遺物として土師質に焼成された瓦堂の屋蓋部の破片が溝から出土しており、仏教信仰の浸透と、瓦堂所持の背景となる馬場裏古代集落の規模と勢力が推測される。また、火葬跡や井戸から出土した大型の板石塔婆や巴文軒丸瓦など、中世以降の当地を解明する上で貴重な資料を得ることができた。また、遺構こそ検出されなかったが、縄文時代前期から後期にかけての縄文土器・石器も出土している(大谷1999)。

平成10年度の第23次調査は、第22次調査のすぐ南側に位置し、行田進修館高校の総合学科棟建設に先立ち実施された。縄文時代前期末から中期初頭の住居跡２軒、中期加曽利E式期の住居跡２軒、後期称名寺期の住居跡２軒、平安時代の住居跡２軒、縄文時代の土壙６基、中世の井戸跡１基、詳細不明の中近世溝１条と、縄文時代および中世のピット多数を検出した。

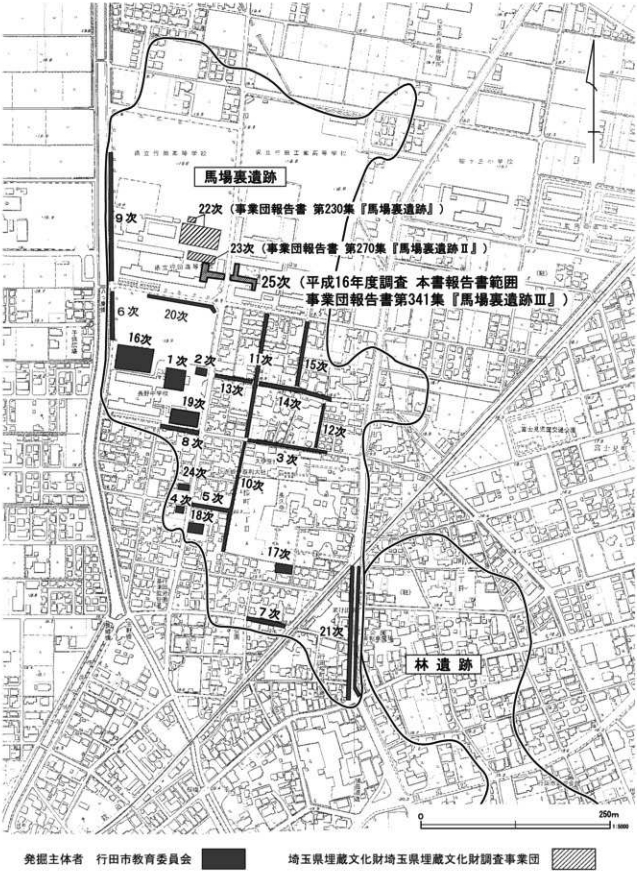
以上、これまでに行われた調査の成果から、馬場裏遺跡は、縄文時代前期から後期にわたり人々の生活が繰り返され、さらに古墳時代後期から奈良・平安時代にかけても、耳環や瓦堂を所持するほどの充実かつ大規模な集落が雛形的に営まれていたことが明らかにされつつある。また、中世以降の様相は今もって不明な点が多いが、遺跡の南に残る長久寺や久伊豆神社と密接な関連をもちながら、人々の生活の場、宗教の場として展開した様相がうかがえる。

２．第25次調査の概要

第25次調査は、旧行田進修館高等学校と旧行田工業高等学校の校舎間をつなぐ連絡通路建設にともない、平成16年５月17日から平成16年８月13日まで実施された。発掘調査の結果、縄文時代前期前半関山Ⅱ式期の竪穴住居跡10軒、中期加曽利EⅡ式期の竪穴住居跡１軒、縄文時代の土壙16基、性格不明遺構３基、平安時代から中世の土壙45基、井戸跡２基、火葬跡１基、ピット205基が検出された。

今回の調査では、わずか826㎡という限られた調査区の中で、縄文時代前期前半の竪穴住居跡がまとまって検出されたことが特筆される。

縄文時代前期前半の住居跡は、東側の工業高校調査区で６軒、西側の進修館高校調査区で４軒検出された。50m程南に位置する第20次調査区においても同時期の竪穴住居跡が３軒検出されており、今回の調査区を中心に集落が密集して展開していたと考えられる。すぐ北側に隣接する第23次調査区では同時期の遺物は出土したものの遺構は検出されず、今回の第25次調査区が集落の北限を示すことが確認できた。また、工業高校調査区の、調査区が南に折れる地点から東側は地形が傾斜しており遺構もほとんど検出されていないことから、同じく東限と考えられ



発掘主体者　行田市教育委員会　　埼玉県埋蔵文化財埼玉県埋蔵文化財調査事業団

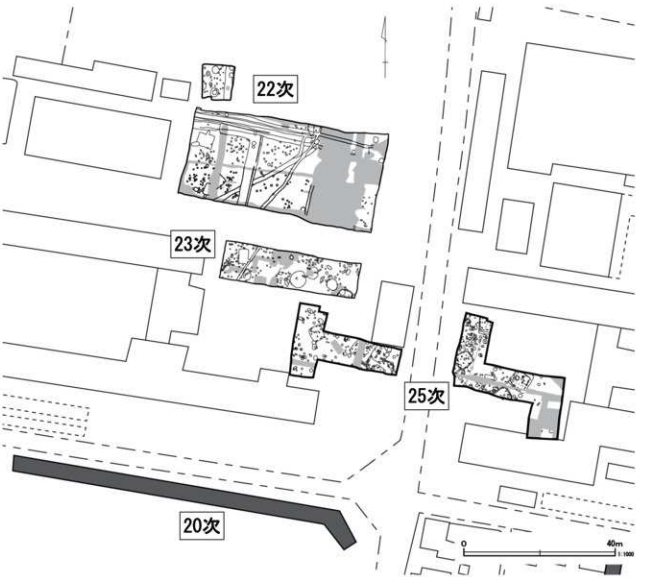
第3図　馬場裏遺跡の各調査区

る。西限は未調査のため断定はできないが、進修館高校調査区の遺構分布から推測するとこの調査区から集落が大きく西へ膨らむ可能性は低いと考えられる。南限は不明であるが、第20次調査区まで延びることは確実である。以上のように集落は極く限られた範囲に展開し、その中心は第25次調査区であることが第５図から理解できる。

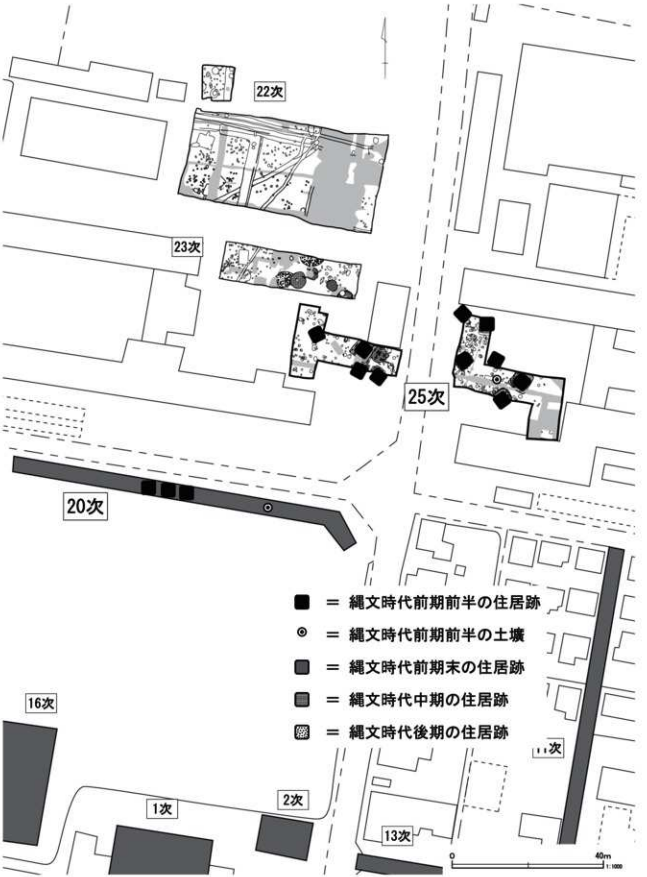
縄文時代前期の住居跡は埋設管、攪乱等により全容を把握することは難しかったが、いずれも平面形態は台形を呈し、中には確認面から0.6m以上の深い掘込みを持つ住居跡もみられた。また遺物は覆土中層からの出土が多く、特に第１・４号住居跡からは深鉢や片口注口の土器片が大量に出土したとともにその接合率は極めて高かった。

縄文時代中期の第10号住居跡は工業高校調査区で検出され、埋甕炉から小型の深鉢形土器が完全な形で出土した。

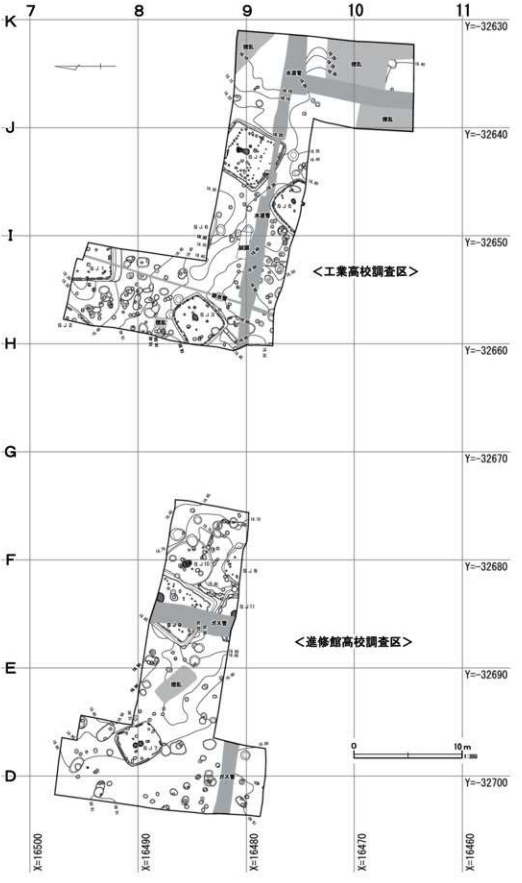
平安時代以降は出土遺物が少なく、時期を特定できた遺構はわずかである。工業高校調査区で検出された第１号井戸跡と第１号火葬跡は平安時代の所産であり、中世は土壙が５基確認されたのみである。そのうち、工業高校調査区の第２・３号土壙からは常滑産の甕の破片が出土している。



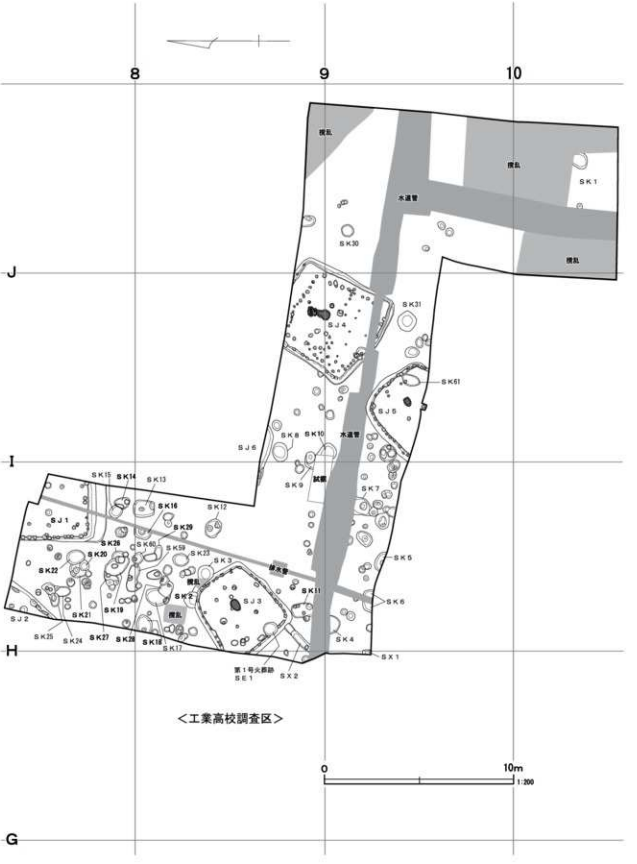
第４図　第25次調査区周辺拡大図



第5図　縄文時代の遺構位置図

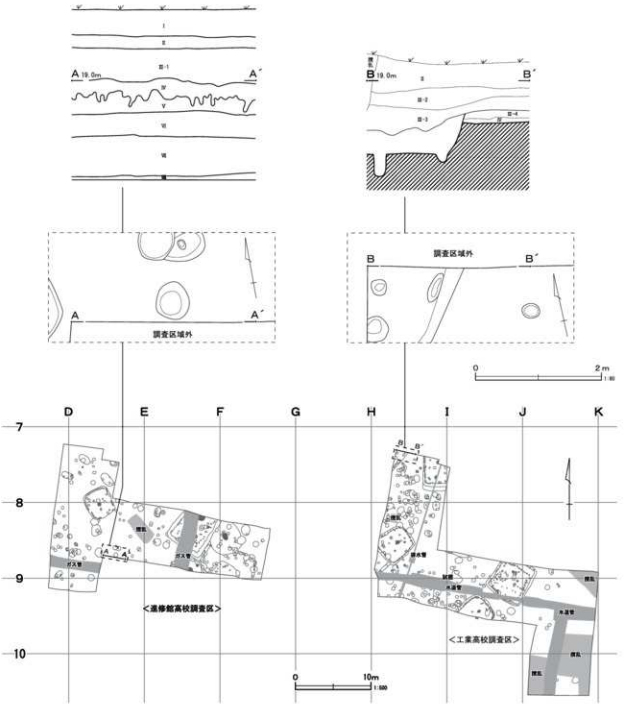


第6図　発掘調査区グリッド配置図



第７図　発掘調査区全体図（1）

第８図　発掘調査区全体図（2）



標準土層

Ⅰ		砂利層
Ⅱ	黄褐色土	ロームブロックを多量に含む。しまり良好。粘性あり。
Ⅲ-1	黒色土	ローム粒子を少量含む。（層は縄文時代の遺物包含層）
Ⅲ-2	暗褐色土	焼土粒子、炭化物粒子、白色微粒子を少量含む。粘性あり。
Ⅲ-3	暗褐色土	焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
Ⅲ-4	暗褐色土	ローム（縄文時代遺物包含層）
Ⅳ	暗黄褐色土	ソフトローム層。ローム粒子を少量、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。縄文時代の遺物を少量含む。
Ⅴ	黄色土	ハードローム層。白色粒子を多量に含み、しまりがあり非常に硬い。
Ⅵ	暗褐色土	第1黒色帯。白色粒子を多量に含む。粘性強い。
Ⅶ	黒褐色土	第2黒色帯。粘性は強いが、水分のためしまりが弱く柔らかい。
Ⅷ	黄褐色土	ハードローム層

第9図　基本層序

Ⅳ　発見された遺構と遺物

１．縄文時代

（１）　竪穴住居跡

第１号住居跡（第10～12図）

工業高校調査区北端のＨ－７グリッドに位置する。住居跡の中央南北に排水管が埋設されているとともに、北辺と東辺が調査区域外へ続いているため全容を把握することはできなったが、2／3程が調査できた。正確な平面形態は不明であるが長方形と思われる。また他の住居跡から推測すると、台形を呈する可能性も考えられる。残存する長軸は4.06m、残存する短軸は3.61m、遺構確認面からの深さは0.73～0.81mと非常に深い掘込みをもつ。今回検出された住居跡の中で最も深い。主軸方向はＮ－0°を指す。

住居跡の壁に沿って壁溝が巡っており、その深さは床面から0.2～0.3mとかなり深い。床面は多少、緩やかな凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。

柱穴は27本確認された。その位置と規模からＰ1、4、27が主柱穴と考えられる。６本の主柱穴を持つ住居跡と推定されるが、北側の２本の柱穴は調査区域外に存在し、南側西の柱穴は排水管によって壊されてしまった可能性が高い。また、Ｐ4の西側0.7mに、住居跡の長軸ラインに沿ってＰ6、Ｐ8が存在する。これらも主柱穴に匹敵する深さを有していることから住居の拡張が行われたと考えられる。壁に沿って壁柱穴が巡る。個別の柱穴の規模は第２表に示した。

住居跡床面に径約0.5mの焼土化した部分が２ヶ所検出された。明確な掘込みが検出されていないため、炉として認定しなかったが、炉に準じた施設であると考えられる。ここでも住居の拡張が行われたことが示唆されよう。

住居跡南西部分では埋没過程で掘込まれた土壙状の層を断面Ａ、Ｂで確認したが、大量の遺物が出土したため、その平面範囲を明確に捉えることができなかった。

この住居跡は、掘込みが深かったことも幸いして覆土中から大量の土器片が出土した。深鉢や片口注口土器、台付鉢などが多く、覆土中層以上からの出土が顕著であった。住居が廃絶して多少の時間が経過した後に一括して土器が投棄された様相がうかがえる。また、土器が多く出土する層からは多量の炭化物が、その下層からは焼土が検出されており、土器投棄との関係がうかがえる。

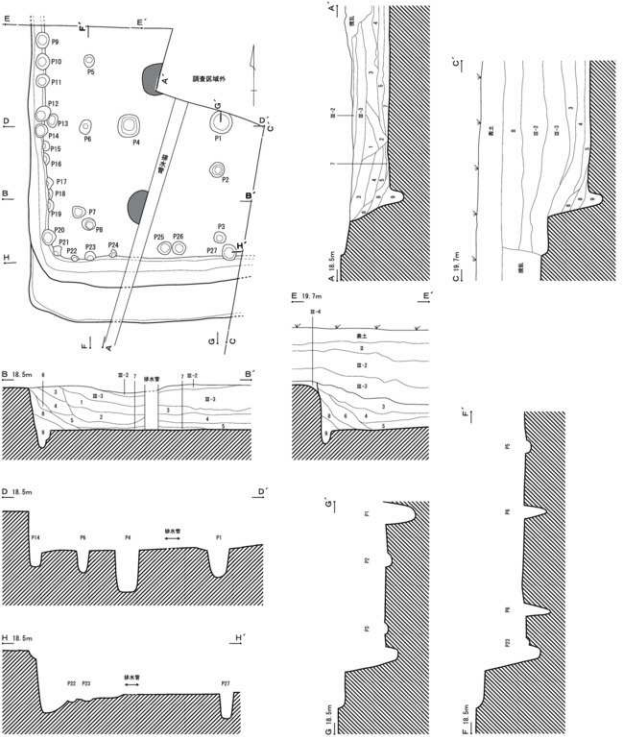
出土した土器は縄文時代前期の関山Ⅱ式後半期のもので、本住居跡もこの時期に帰属する。

第１号住居跡出土遺物（第13～36図）

本住居跡からは接合後、1,601点もの大量の土器片が出土し、そのうち320点を図示した。器形を復元できる個体が多く含まれているのが特徴で49点にのぼる。土器に比して石器の出土は極端に少なく39点であった。そのうち15点を図示した。

器形復元できた土器の１～４・24～28は、１類で口縁部文様帯を有する。上記以外は全て５類である。５は５類１種で無節、６は５類２種Daで多段ループの水平構成、７、８、29は５類２種Dbで多段ループ文の鎖状構成である。10は５類２種Ｅで輪方等間隔ループ文、９、11、12、30は５類２種Ｆで車節である。13～16・31～33は５類５種で正反の合、34・36・37は５類６種で組縄、17は５類９種で附加条、18～23・35・38～49は５類10種で組紐である。

１は口縁部下部に最大径をもち底部にかけて急にすぼまる器形の深鉢である。焼成は良好で内面は丁寧になでられていた。１類２種Ｃで重施文平行沈線によって区画された文様帯はわらび手文を意識した構成となっている。胴部中位には、４本櫛を用いた上下移動のコンパス文を施す。全面に地文としてLLRRの組紐縄文を施すが、３種類の原体を用いて施文している。口縁部文様帯部分とコンパス文下部



第１号住居跡

1 暗褐色土　ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量、暗褐色土ブロックを中量含む。粘質土。
2 暗褐色土　ローム粒子を微量、炭化物粒子を少量、暗褐色土ブロックを少量含む。粘質土。
3 暗褐色土　焼土粒子を少量、炭化物粒子を多量、暗褐色土ブロックを少量含む。シルト質土。遺物を多く含む。
4 暗褐色土　ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量、暗褐色土ブロックを多量に含む。粘質土。遺物を多く含む。
5 暗赤褐色土　焼土ブロック、焼土粒子を多く含む。下部に灰層有り。シルト質土。
6 暗褐色土　ロームブロックを少量・ローム粒子を中量、炭化物粒子を微量、暗褐色土ブロックを多量に含む。粘質土。
7 暗黄褐色土　ロームブロックを多量、炭化物粒子を微量含む。
8 暗褐色土　ローム粒子を少量、焼土粒子を中量、炭化物粒子を少量含む。遺物を多く含む。
9 暗黄褐色土　ローム粒子を多量、炭化物を少量含む。しまりなし。
※Ⅱ～Ⅲ層は、第９図参照

0　2m
1:40

第10図　第１号住居跡

第２表　第１号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	0.33	0.33	0.48	P－15	0.15	(0.10)	－
P－2	0.24	0.22	0.12	P－16	(0.19)	(0.10)	0.13
P－3	0.19	0.17	0.06	P－17	(0.20)	(0.11)	0.11
P－4	0.34	0.34	0.67	P－18	(0.14)	(0.07)	0.11
P－5	0.20	0.16	0.08	P－19	0.20	(0.09)	0.09
P－6	0.22	0.16	0.37	P－20	0.22	0.19	0.29
P－7	0.22	0.19	0.25	P－21	0.16	(0.10)	0.08
P－8	0.21	0.19	0.40	P－22	0.12	(0.09)	0.09
P－9	0.27	0.21	0.23	P－23	0.17	(0.14)	0.05
P－10	0.26	0.21	0.27	P－24	(0.13)	0.11	0.08
P－11	0.22	0.19	0.25	P－25	0.22	0.20	0.33
P－12	0.27	0.21	0.27	P－26	0.21	0.20	0.34
P－13	0.22	0.16	0.09	P－27	0.25	0.23	0.37
P－14	0.22	0.19	0.26				

から底部は同一原体で、コンパス文上部は２種類の異なる原体を用いており上下よりも節が細い。口縁部には台形状突起が３ヶ所残存しており、本来は６単位であったと考えられる。底部は無文の脚付底で底径7.2cmである。

２は片口注口土器の口縁部である。１類２種Cで二重平行沈線による山形文と横位区画線を施す。地文は、単節RLの末端にループをつくり多段ループとして反時計回りに施文。注口部には、半円状突起のなごりと思われる突起がつくが台形状となる。

３は深鉢の口縁部から胴部である。２と同様の文様帯構成を持つ。地文は単節RLを最上段のみ多段ループ、以下幅広等間隔の単段ループとして反時計回りに施文する。

４は小型の片口注口土器である。器面全体に半截竹管で菱形文を描出する。１類３種の特殊文様である。地文はLLLLの組紐縄文を施文する。底部は無文の脚付底である。底径は5.4cmである。

５は口縁部下部でくびれ、中位に最大径をもつ深鉢である。４単位の波頂波状口縁で波頂部は丸みをおびている。くびれ部に４本櫛を用いた上下移動のコンパス文を時計回りに施文。Lの無節斜縄文を地文としており、胴部下半は単節RL・LRを羽状に施す。

６は口縁部直下で緩やかにくびれ、胴部に最大径をもつ深鉢である。文様は上半に単節RLのループ文を水平に８段施文し、下半には、RRLLの組紐縄文を施文する。それぞれ反時計回りでの施文である。

７は片口注口土器である。注口部には三角形状の突起がつく。半円状突起の変形であろう。上半の文様は単節RLの多段ループ文で鋸歯構成をとる。鋸歯部の施文は注口下を起点に反時計回りで行う。下半はRRLLの組紐縄文を施文する。

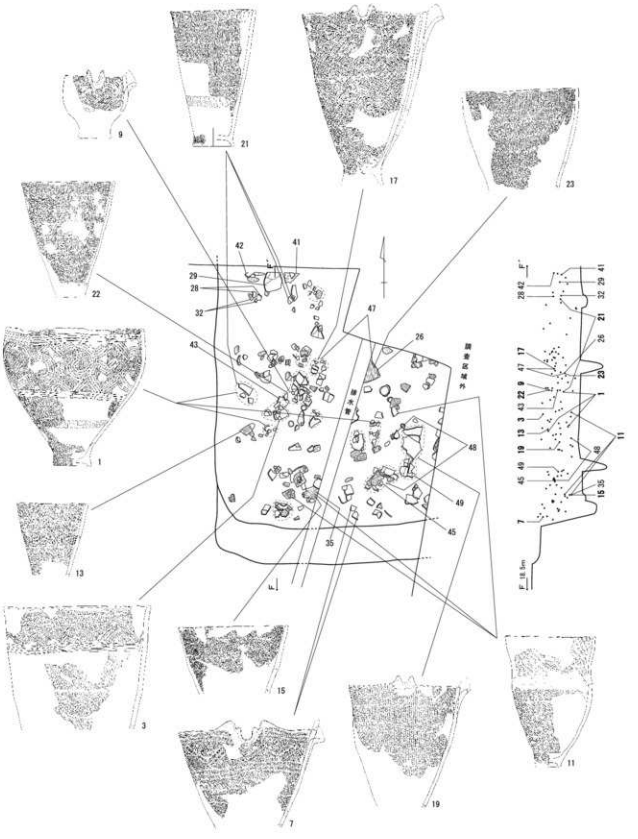
８は鉢と考えられる。金魚鉢形をした稀有な形である。文様は単節RLの多段ループ文で鋸歯構成をとる。鋸歯部は２段構成で上部は反時計回り、下部はその逆回りで施文を行う。

９は片口注口のついた小型鉢と考えられる。文様はRLとLRの単節縄文を羽状に施文する。

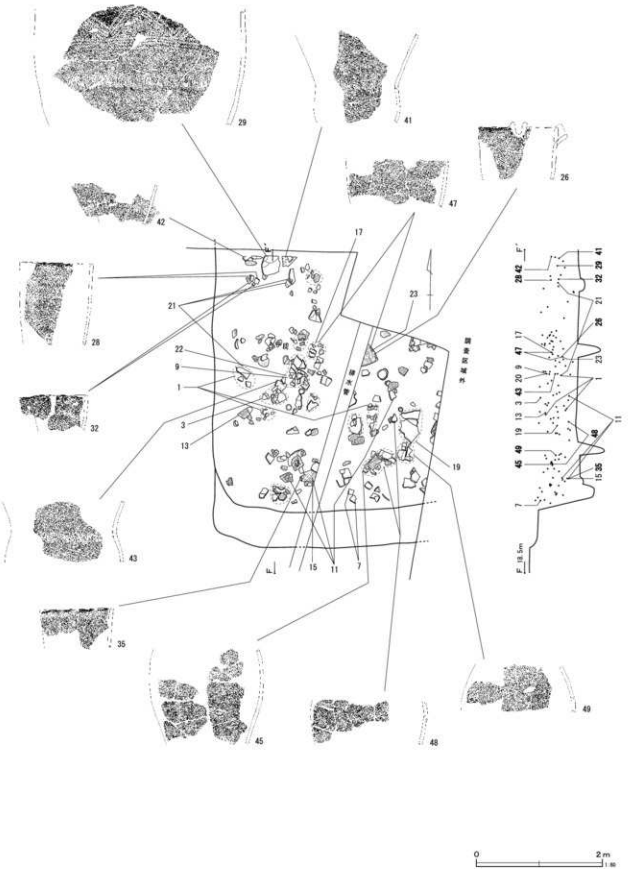
10はくびれずに開く深鉢の口縁部から胴部である。文様は単節LRループ文を上下幅等間隔幅広に施文する。原体の開放末端は他の繊維で縛られており、その痕跡が圧痕として一部器面に残る。口縁部には半截竹管で刺切文を施す。

11は口縁部下部で緩やかにくびれる深鉢である。文様は、０段２条の単節RLを全面に施文するが、上下で異なる原体を用いる。上半は原体の撚りが弱いためか、圧痕が一本おきにしか確認できない。下半は同一原体で縦横位施文し、羽状縄文を描出する。底部は側面と同様の文様を有す脚付底で、底径は5.2cmである。成形痕の処理を行っておらず粗雑な土器である。大宮台地での黒浜式的要素がみられる。

12は小型片口注口土器である。異なる１段の縄２本を用いてRLとし、器面全体に不規則に施文する。



第11図　第１号住居跡遺物出土状況（1）



第12図　第１号住居跡遺物出土状況（2）

粗雑な作りで黒浜式的要素が強い。

13・14は深鉢の口縁部から胴部である。文様は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。13の胴部中央部、成形痕上には半截竹管で刺切文を施す。

15は深鉢で、文様は正反の合A種Rを施文する。焼成不良のためか非常に脆い。

16は胴部にふくらみをもつ深鉢である。文様は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。胴部中央の成形痕上には半截竹管で刺切文を施す。

17は片口注口をもつ大型深鉢である。焼成良好で内面は丁寧になでている。注口のつく土器前面部分は底部からふくらみを持たせて作られる。文様は附加条である。軸縄の単節RLに１段の縄2本をS方向に附加したものと、軸縄LRに2本をZ方向に附加した原体を用い、羽状に施文する。附加縄は逆方向附加である。施文は正面より反時計回りで行う。第31図234も同個体の破片であるが、接合面をもたない。底部は無文の胴付底で、底径は9.8cmである。

18は小型片口注口土器である。焼成は良好で、文様は器面全体に組紐LLLLを施す。施文後、口縁部直下に横なでを施している。

19は片口注口土器であるが、注口部を欠損する。文様は器面全体にRRLLの組紐縄文を施文する。胴部に２ヶ所、成形痕が確認できる。

20は深鉢である。文様は、口縁部直下に単節RLのループ文を反時計回りに３段施し、その下部にはRRLLの組紐縄文を時計回りに施文する。口縁部には台形状突起をもつ。

21は円筒形にちかい深鉢である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施す。口縁部直下と胴部成形痕上に半截竹管で上下移動のコンパス文を描く。底部は無文の胴付底で、底径は8.6cmである。

22はくびれずに開く深鉢である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施す。当初の観察では組紐と組縄を用いて交互施文しているようにみえたが拓影彩によるとやはり組紐での施文と考えられる。

23はくびれをもたない深鉢であり、底部近くでややすぼまる。文様はRRLLの組紐縄文を反時計回りに施す。

24は４単位の双頭状口縁をもつ深鉢である。１類２種Cで、地文は擬異節RL(RL)と思われる。二重平行沈線で口縁部文様帯を描出する。残存部最下端にコンパス文を施文しているが、形態などは不明である。

25は深鉢の口縁部で、１類２種Bである。地文は０段３条の附加条で、軸縄とした１段の縄Lに０段のrを１本S方向に附加したものを原体とする。附加縄は順方向附加である。文様帯は単独平行沈線で構成されるが、下位横区画線は二重平行沈線である。

26は片口注口土器の口縁部である。文様は単節RLの多段ループによる鋸歯構成であるが、その中に半截竹管でV字・逆V字状文を描き、鋸歯をより効果的に表現する。１類３種とした。

27は１類３種で、口縁部には26同様、単節RL多段ループ鋸歯構成中にV字状文を施す。下半はLLRRの組紐縄文を施文する。胴部の成形痕上には２本櫛による上下移動のコンパス文を施す。

28は１類３種で、胴部上位に横位区画線を二重沈線で施し、その下部に三重沈線で菱形を描出する。地文は上半が単節RLの多段ループ文を５段、下半はLLRRの組紐縄文を施文する。

29は大型深鉢の胴部である。上位は単節RL多段ループによる鋸歯構成をとり、下位は原体不明組紐縄文を施す。その上に４本櫛を用いた上下移動のコンパス文を時計回りに施文する。

30～32は、小型深鉢の口縁部であり、30は５類２種Fで、０段２条の単節RLを施文する。31・32は５類５種で、正反の合A種R・Lを羽状施文する。

33は胴部にふくらみをもつ深鉢で、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。原体は末端を他の繊維で縛った痕跡がみられる。

34は小型深鉢の口縁部で、組縄のRL(RL)擬異節斜縄文を全面に施文する。口縁部には４単位の丸みのある台形状突起がつく。

35は小型の深鉢でRRLLの組紐縄文を施文し、口縁部直下には、半截竹管を用いた波状コンパス文を施す。

36は口縁部直下でくびれ、胴部中位に最大径をもつ深鉢である。文様は全面に組縄の擬異節斜縄文RL(RL)を施文するが、組紐LLRRの可能性もある。

37は深鉢底部で文様は組縄のRL(RL)擬異節斜縄文と思われる。底径は5.8cmで無文の脚付底である。

38は小型深鉢の口縁部である。口縁部直下には半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。地文はLLRRの組紐縄文である。

39は深鉢口縁部でLLRR組紐縄文を全面に施す。

40は深鉢胴部で、LLRRの組紐縄文を施文した上に、胴部２ヶ所の成形痕上には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

41は胴部に屈曲したくびれをもつ深鉢で、LLRRの組紐縄文を全面に施文する。くびれ部の成形痕上には６本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

42は深鉢胴部で、文様はLLLLの組紐縄文を施文し、胴部の成形痕上には４本櫛を用いた上下移動のコンパス文を時計回りに施す。

43は胴部にくびれを持つ大型の深鉢である。地文はRRLLの組紐縄文で、くびれ部の成形痕上には３本櫛で上下移動のコンパス文を時計回りに施す。

44・45は、胴部にふくらみをもつ深鉢で、44は原体不明の組紐縄文、45はRRLLの組紐縄文をそれぞれ全面に施文する。

46は胴部がくびれる深鉢である。異なる組紐原体を用いており、上部はLLRR、下部はRRLLの組紐縄文が観察される。使い分けの方法は不明である。

47～49は深鉢胴部で、47はRRLLの組紐縄文を、48・49は原体不明の組紐縄文を全面に施文する。

50は１類２種Aで、平行沈線内に刻みを有する。地文は単節のようだが小破片のため詳細不明である。

51～64は１類２種Cで、重施文平行沈線で文様帯を構成する。51・52は波状口縁であるが、波頂部形態は不明である。51は組紐RRLLを地文として施文する。52は器面の風化が著しく地文の断定は難しいが、上半は組紐かと思われ、下半は単節RLの多段ループ文を水平に施す。53は注口部をもち、地文は組紐RRLLである。54の地文は組縄でRL(RL)擬異節斜縄文を施文する。55は上位区画線のみの表出で、地文は組縄、擬異節RL(RL)である。56は正反の合A種Rを、57は組紐LLRRを地文とする。58はLLRRの組紐縄文を施文した上に、半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。59は単節RLを施文する。左上の平行沈線下端にはC字状の爪形文が添えられる。60は単節RLで多段ループ鋸歯構成を地文とし、その中に文様を描く。１類３種とすべきであったかもしれない。61は単節LRで水平多段ループを、62・63は原体不明組紐を地文とする。64は組紐RRLLに、櫛で上下移動のコンパス文を施す。

65～71は１類３種である。65は注口部の破片で、RRLLの組紐縄文を施文した上に、細い棒状工具で器面全体に格子状文を施す。66・68～71は平行沈線で山形のタガ状文を巡らす。コンパス文と同様の文様効果をもつものであろう。地文は、66が単節RL多段ループ、68が正反の合A種R・Lの羽状、69・71が原体不明組紐、70が組縄の擬単節RL(LL)である。67は半截竹管で単独横位区画線を、地文の境目に配する。文様帯の区画線とは考えられないので、同様にコンパス文の代替かもしれない。地文は、上半に単節RLの水平多段ループ、下半は原体不明組紐である。

72は４類種で、貝殻押圧文を施文する。貝殻の腹縁部を押し付けたものであるが、施文の規則性は不明である。

73・74は５類１種で、73は無節Lを74は無節Rをそれぞれ施文する。

75～92は５類２種Daで、多段ループ水平構成である。75は、口縁部直下と上端に刻みを有する。胎土は、長石などの砂粒が多く含まれ繊維は僅かである。信州の土器との関連が考えられるが、文様は単節RL・LRで多段ループを構成する。原体の使い分

けは不規則である。79・86・87は、同一個体で単独平行沈線により山形文を施す。80は、口縁部に単節RLで多段ループを３段施し、中段以下はRL・LRの単節斜縄文を施文する。下端には竹管で刺切文を施す。81は、左上部に補修孔を穿つ。91は成形痕以上に単節RLで多段ループ文を、下端には原体不明の組紐縄文を施文する。種類の異なる原体を用いて成形単位ごとに施文を行う。ループ文の使用原体は、75が単節RL・LRを、82・83が単節LRを用いた以外は全て単節RLである。

93～104は５類２種Dbで、多段ループ銅鐸構成である。93は、注口下部の破片で上端にはふくらみが確認できる。94は、１段Lを環部のみ単節RLに撚り、以下を反撚LLにしている。本来は５類４種に分類すべきであった。環部直下に他縛処理して、環部がほつれるのを防いでいる。下端右に平行沈線による竹管文がみられるが、文様の全容は不明である。注口部には反撚部分を施す。103・104は同一個体である。ループ文の使用原体は、93・95・99が単節LRで、それ以外の全ては単節RLである。

105～109は５類２種Eで、上下幅等間隔編広のループ文を施す。105は、単節RL・LRで羽状構成とする。下端にコンパス文を施すが弧状などは不明である。使用する原体は、108が単節RLで、それ以外の106・107・109は単節LRを用いる。

110～142は５類２種Fで、単節斜縄文を施す。110は、波状口縁の波頂部である。波頂部弧状は単頭と思われる。112は、単節RL・LRを羽状施文する。RL原体の末端には原体自身で縛った自縛痕が確認できる。115・120・121は、同一個体であり、単節RLを全面施文し、半截竹管によって刺切文を施す。118は、単節RL・LRを羽状に施文する。上半のLRには末端に自縛痕が、下半のRLにはループ化した末端がそれぞれ確認できる。最下端には竹管で刺切文を施す。124は、成形痕以下に単節LRを、上半には組紐のRL(RL)撚異節斜縄文を施文する。125は、単節RLを全面に施文するが、中段の圧痕にはループ化した末端が確認できる。129の上段RLの末端には他の繊維で縛った他縛痕が一部確認できる。130・133は、それぞれ単節RL、LRを施文する。０段２条で撚った原体を使用しているため、節が大きく丸みを帯びている。139・140は、底部直上の破片で、139は単節RLを縦横位施文し羽状を表出するのに対し、140は単節RL・LRを用いる。141・142は、底部の破片である。両方とも底面を欠損するため７類とせずに側面文様での分類を行った。141は緩やかな上げ底、142は脚付底を呈すると思われる。また、142は下半に単節RLを施文し、竹管での刺切文を挟んで上半には、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。使用原体は、112・118・122・132・136～138・140が単節RL・LRを用い羽状縄文とする。114・119・124・133～135・142は単節LRを、それ以外の全ては単節RLを使用する。114～122・141はコンパス文を有しており、その全てが半截竹管での刺切文である。

143～194は５類５種で、異条斜縄文を施す。183以外の全てが、直前段合撚の一般的な正反の合A種である。183は、反縄が前々段反撚の正反の合C種である。143～147は波状口縁で、143・146の波頂部弧状は単頭である。143は丸みを帯びた波頂部をもつ。144・149は正縄の節圧痕を観察するとその数が多い部分もあり、附加条技法によるものかもしれない。148は、左端に補修孔をもつ。158・161は、コンパス文以下に単節LRを施す。また161の右上端Lの圧痕には他縛痕が確認できる。169・170は同一個体である。使用原体は146・156・160・164・172・173・179・181・194がR方向のみ、166・170・191の３点がL方向のみの使用で、それ以外の全てがR・L両原体を用いて羽状構成をとる。

コンパス文が施されたものは、143～146・148・157～173の22点である。157が半截竹管による上下移動、143～145・158～166が竹管の刺切文、146・148・167が櫛による上下移動、168～170が櫛の波状、171～173が櫛の刺切文である。

195・218・220〜228は５類６種で、組紐縄文を施す。195は、単頭波状口縁であり、波頂部は丸みを帯びる。196・197は、口縁部に半円状突起をもつ。それぞれ196は右側に、197は左側に注口部が存在すると思われる。201は、一部に組紐の圧痕が確認できることから、組紐の組み違えによって組縄が作られたことがうかがえる。組縄は擬単節RL(LL)である。206は、擬異節RL(RL)と思われるが、１本おきに深い圧痕の条が表れており、原体によるものか施文時の加減かは判断できない。210は、擬異節RL(RL)と組紐LLRRの上下交互施文と考えられる。218は、擬異節LR(RL)と擬単節RL(LL)の上下交互施文で、羽状を意識した施文である。225は、擬単節LR(RR)と思われるが、直前段反撚LLRの可能性も考えられる。確認できた組縄原体は、4種類で、擬単節RL(LL)・LR(RR)、擬異節RL(RL)・LR(RL)である。擬単節RL(LL)は、201・203・218・220の４点で、擬単節LR(RR)は225の１点のみである。擬異節LR(RL)は、213・218の２点であるが、213は断定できない。それ以外の全てが擬異節RL(RL)であるが、196・211・221は断定できない。コンパス文を施すものは、195・198・199・205〜208の７点で、198・199が櫛による上下移動で、それ以外の７点は櫛の真正である。

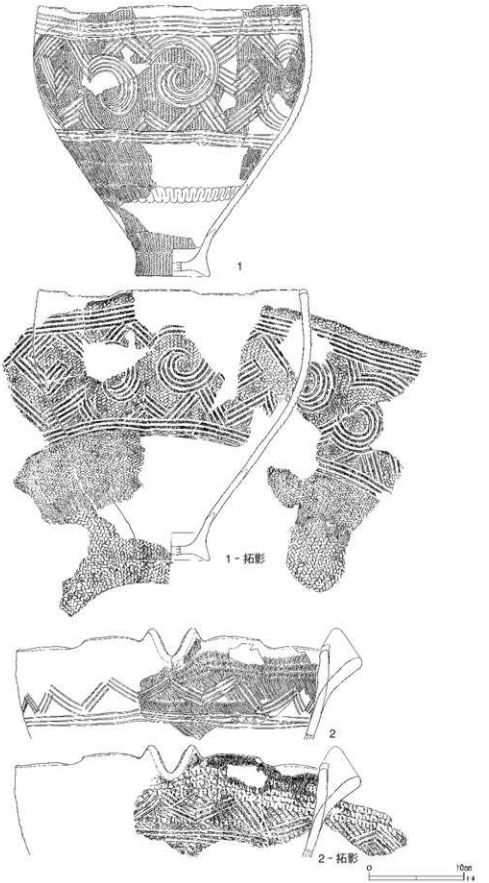
229〜234は５類９種で、附加条縄文を施す。229は、口縁部の多段ループ施文は恐らく単節RLに０段のlを１本結束しlを返して附加した末端を回転させたものであろう。斜縄文部分は、単節RLを軸縄にし０段のl、１本をZ方向に絡げたものである。附加縄は順方向附加である。230は、単節LRを軸縄にし無節の縄Rを１本S方向に絡げたものである。附加縄は順方向附加である。231は、反縄LLを軸縄にLLを附加しながらZに撚るような加減で原体が作られていると考えられる。附加縄は逆方向附加である。232・233は、単節RLを軸縄に無節の縄R2本をS方向に絡げたものと、LRにL2本をZ方向に絡げたものを羽状に施文する。附加縄は逆方向附加である。附加縄の圧痕が深いことから附加条と判断したが、正縄の節数から考えると正反の合の可能性も指摘できる。232は下端に櫛による刺切文が施される。234は、第19図17と同一個体である。

219・235〜306は５類10種で、組紐縄文を施す。235は、波状口縁で、波頂部形態は双頭と思われる。236は、注口部である。253は、下右に貝殻背圧痕文を施す。確認できた組紐原体は、RRLL、LLRR、LLLLの３種類である。RRRRとRLRLの２種類は確認できなかった。RRLLは、238・243・247・249・254・256・266・273・274・279〜281・283・291・298〜301・305の19点である。LLRRは、219・235・237・239・244〜246・250〜252・255・258・260・262〜264・267〜270・272・276・284・289・290・292・295・296の28点である。LLLLは、240・242・253・257・259・261・265・285・288・293・294・297の12点である。上記以外は原体不明である。コンパス文を施すものは、236〜243・254〜276の31点である。254は半截竹管による真正、236・237は竹管の上下移動、238・255・256は竹管の波状、239・257〜259は竹管の刺切文、240・260は櫛による真正、241〜243・261〜273は櫛の上下移動、274は櫛の波状、275・276は櫛の刺切文をそれぞれ施す。

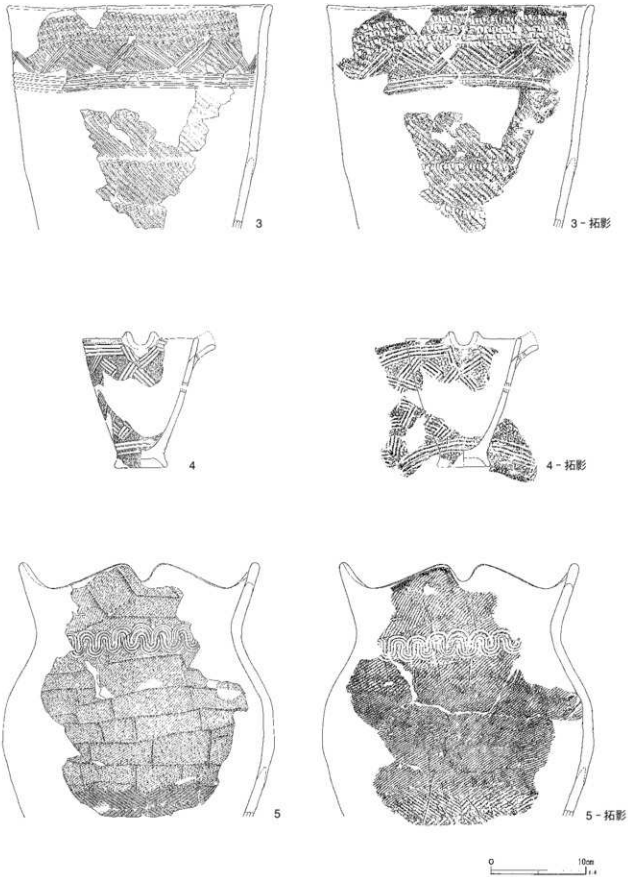
307は５類11種で、縄文施文であるが種別特定不能破片である。口縁部直下に竹管による刺切文のみを施す。口縁は緩やかな波状を呈すると思われる。

308〜320は７類底部である。308〜310は、底面に文様を有する脚付底の７類１種Bである。308は、側面・底面ともに単節RLを施文する。309は、側面上半はRRLLの組紐縄文を、下半と底面は原体不明の組紐縄文をそれぞれ施文する。310は、側面・底面ともに原体不明の組紐縄文を施文する。

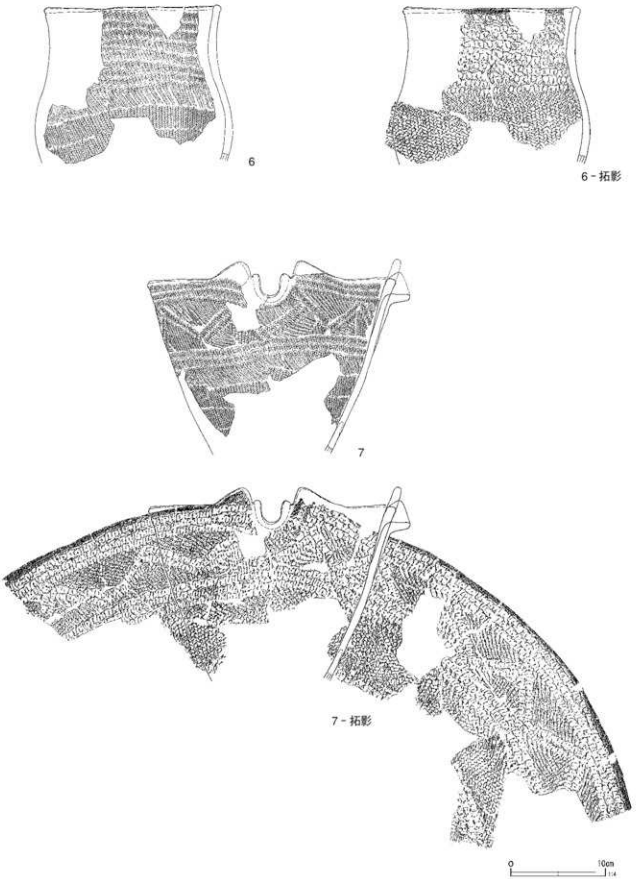
311〜313は、底面無文で緩やかな上げ底を呈する７類２種Aである。311は、器面の風化が著しくうっすらと単節らしき圧痕が観察できるが断定はできない。312は、原体不明の組紐縄文を施文するが、



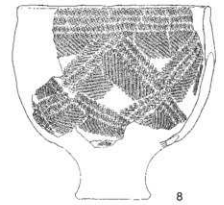
第13図　第１号住居跡出土遺物（1）

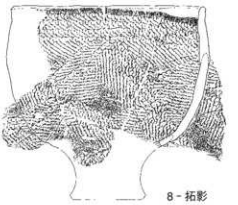


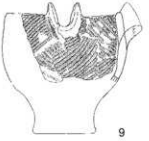
第14図　第１号住居跡出土遺物（2）

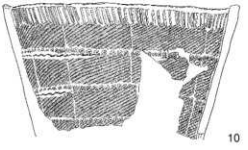


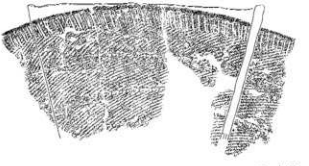
第15図　第１号住居跡出土遺物（3）



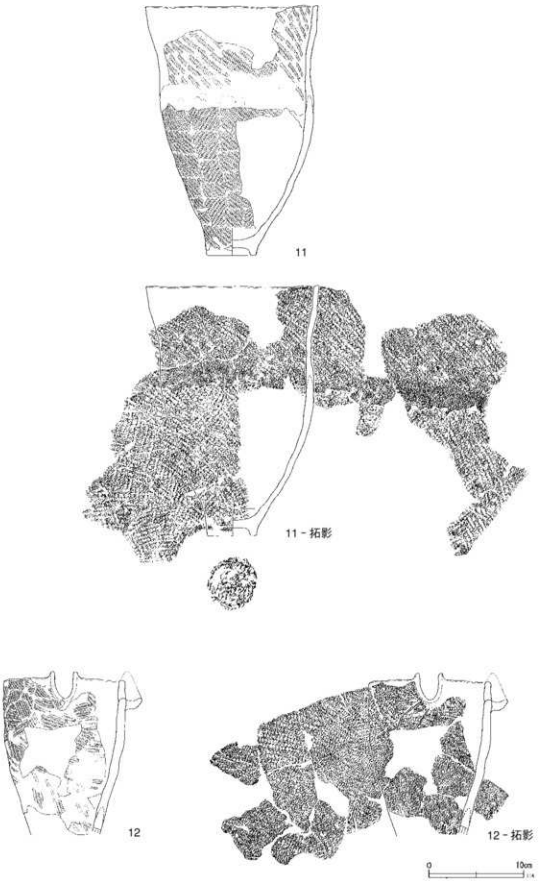




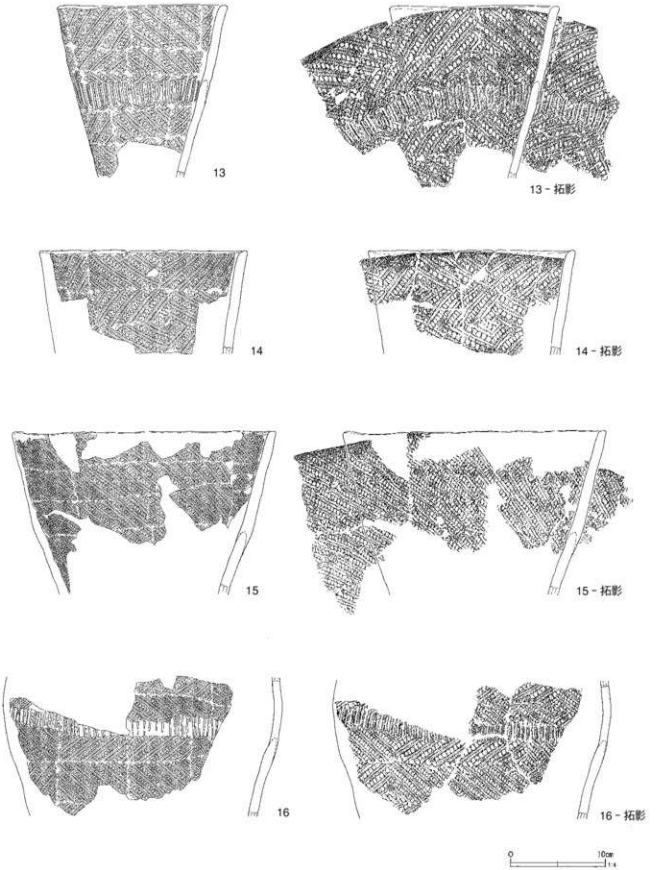




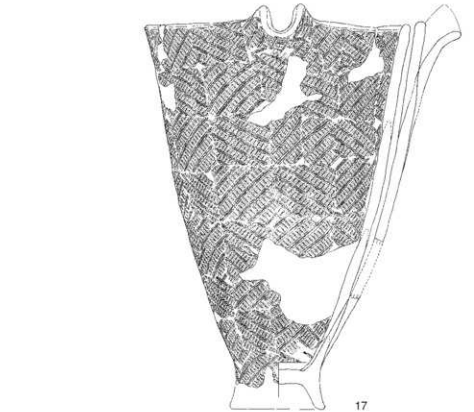
第16図　第１号住居跡出土遺物（4）



第17図　第１号住居跡出土遺物（5）



第18図　第１号住居跡出土遺物（6）



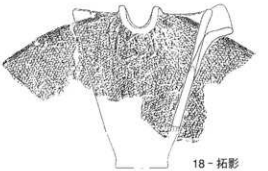
17

17－拓影

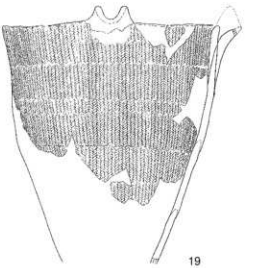
0　10cm
1/4

第19図　第１号住居跡出土遺物（7）

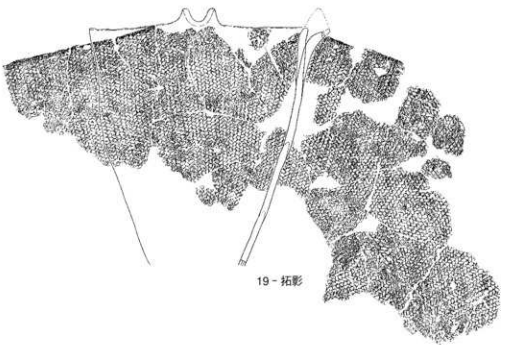
18



18－拓影



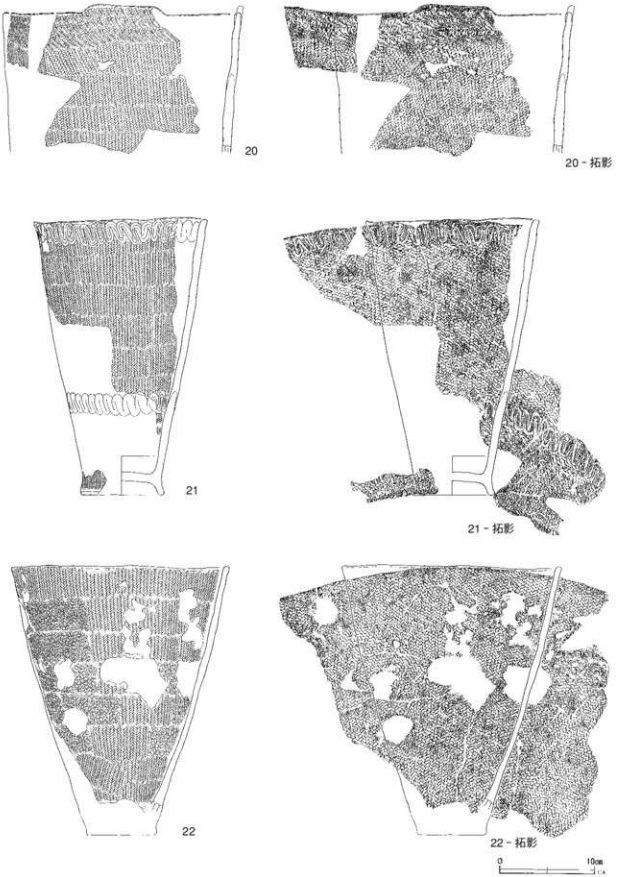
19



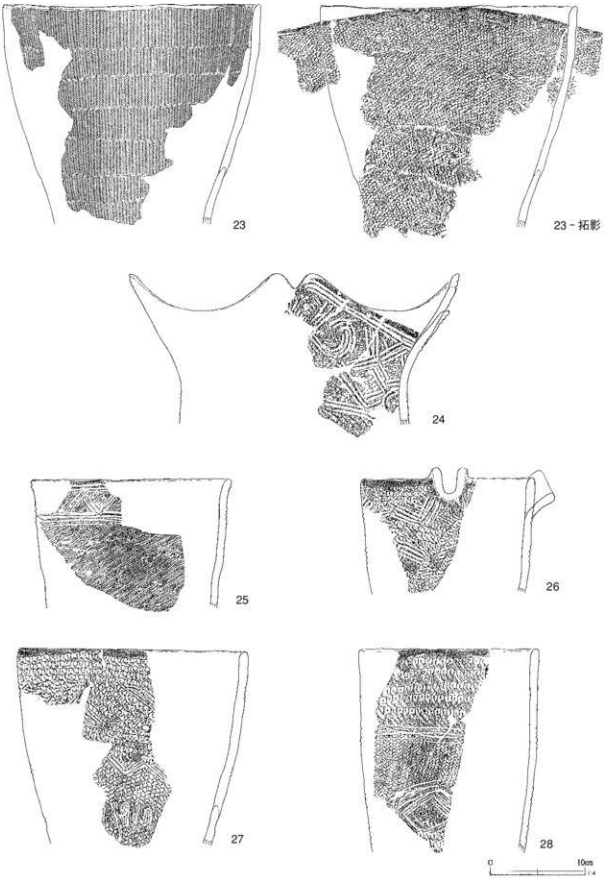
19－拓影

0 10cm 1:4

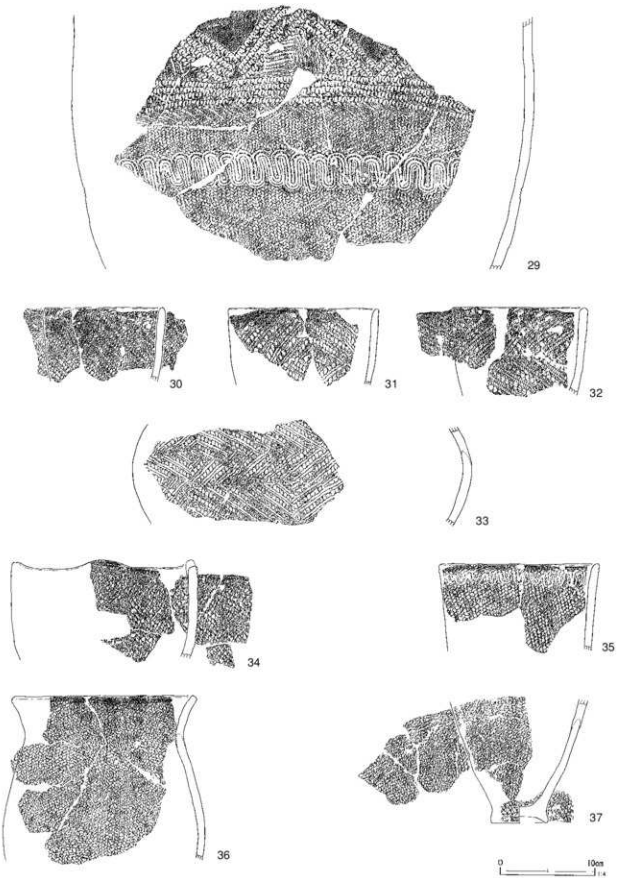
第20図　第１号住居跡出土遺物（8）



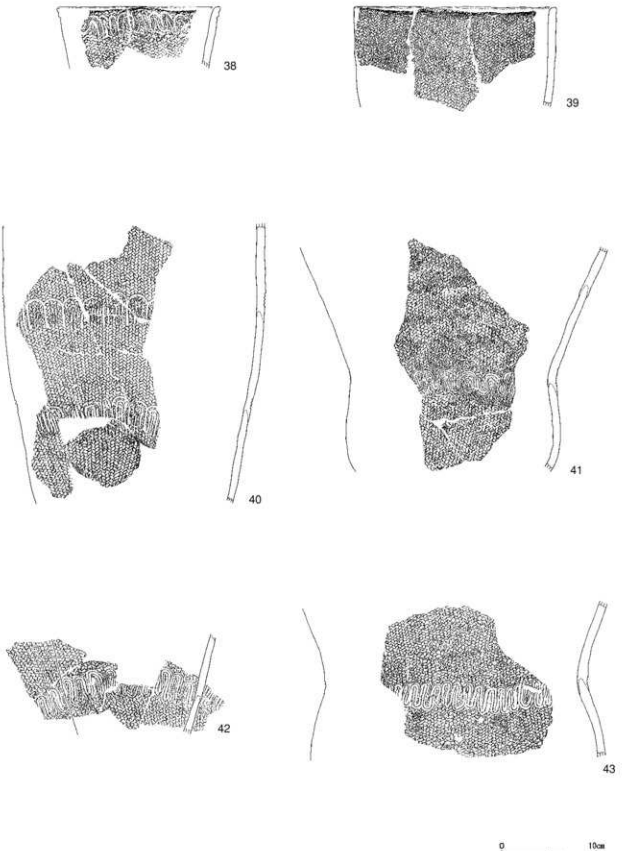
第21図　第１号住居跡出土遺物（9）



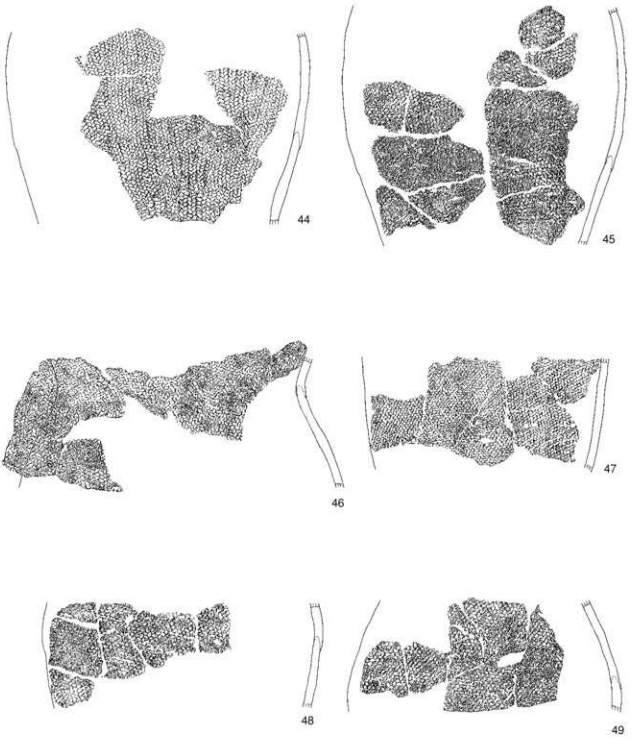
第22図　第１号住居跡出土遺物（10）



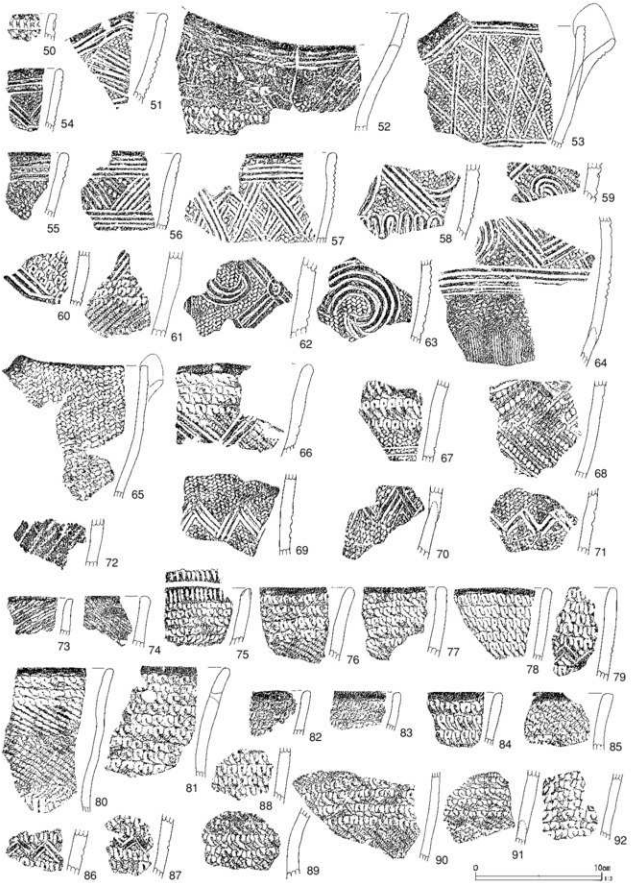
第23図　第１号住居跡出土遺物（11）



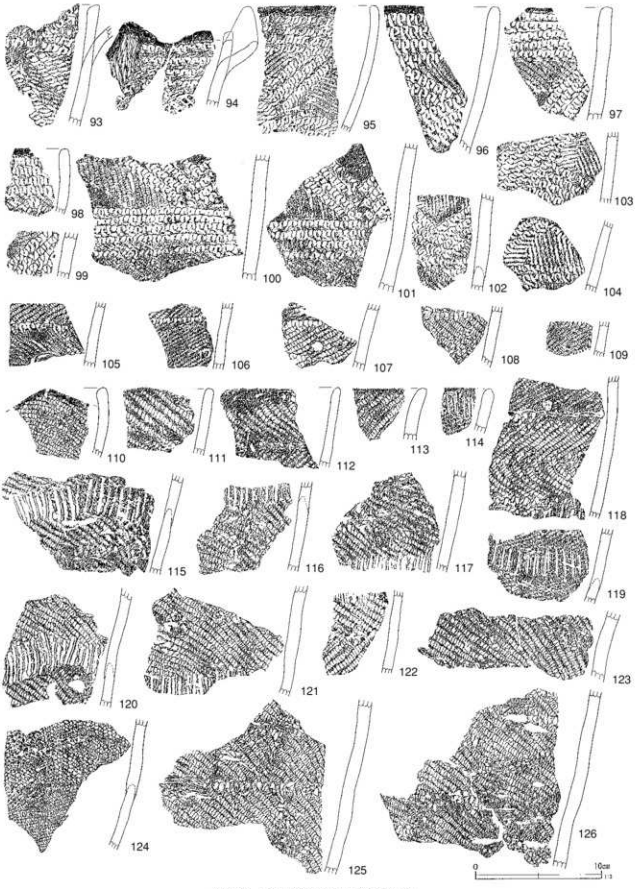
第24図　第１号住居跡出土遺物（12）



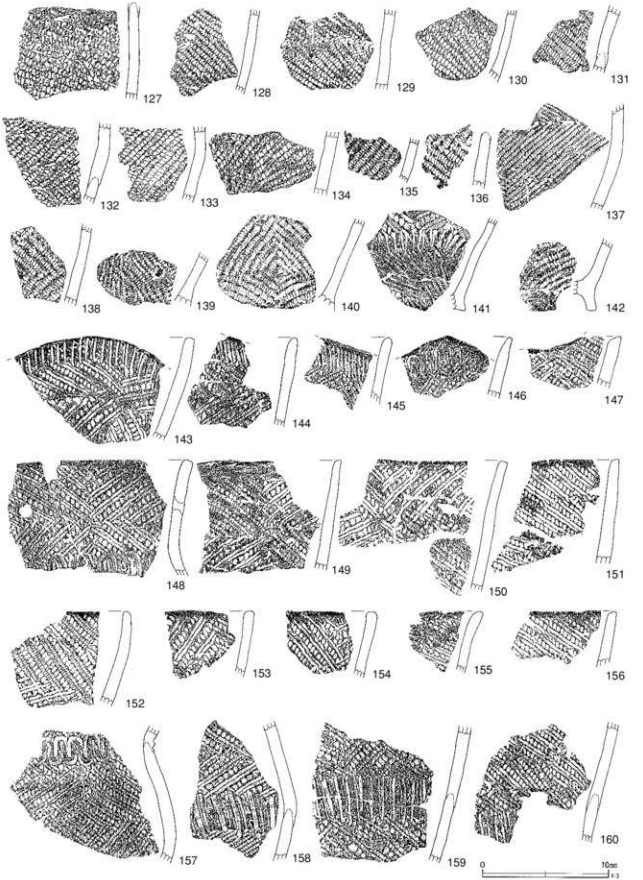
第25図　第１号住居跡出土遺物（13）



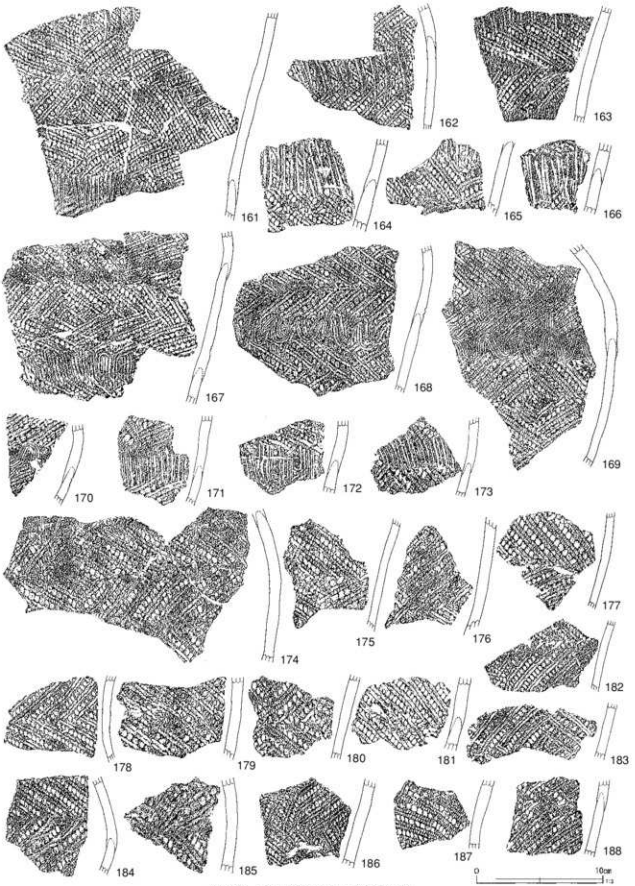
第26図　第１号住居跡出土遺物（14）



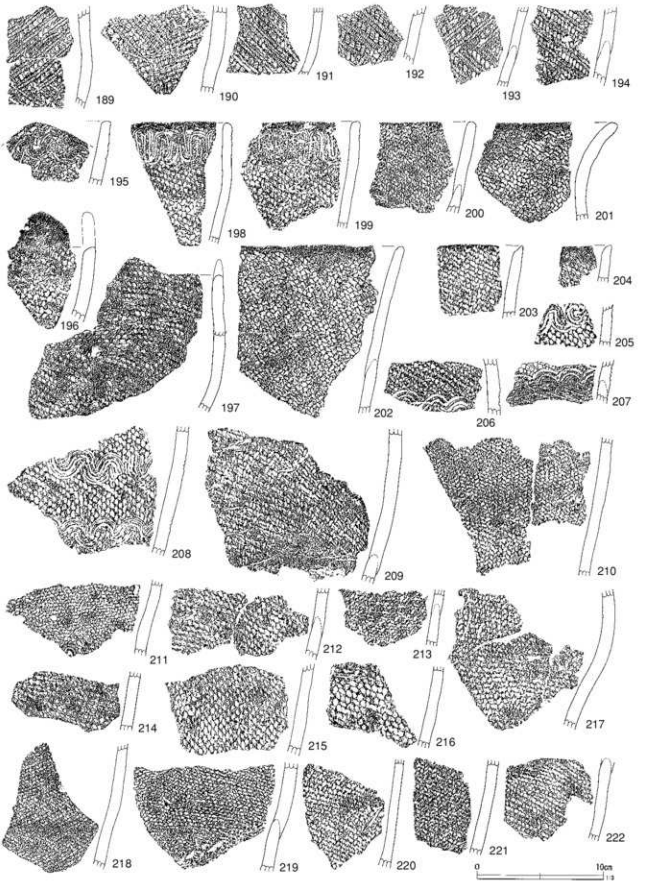
第27図　第１号住居跡出土遺物（15）



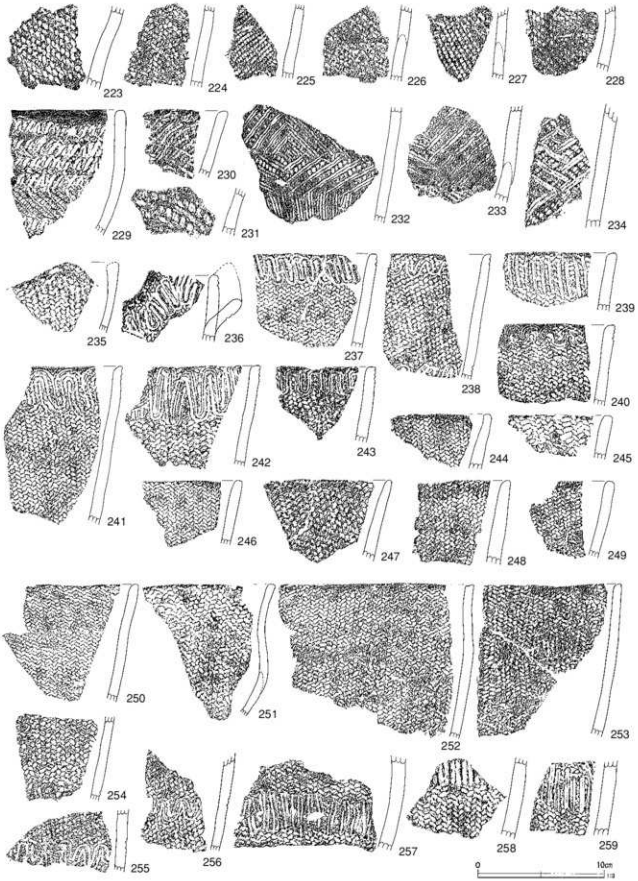
第28図　第１号住居跡出土遺物（16）



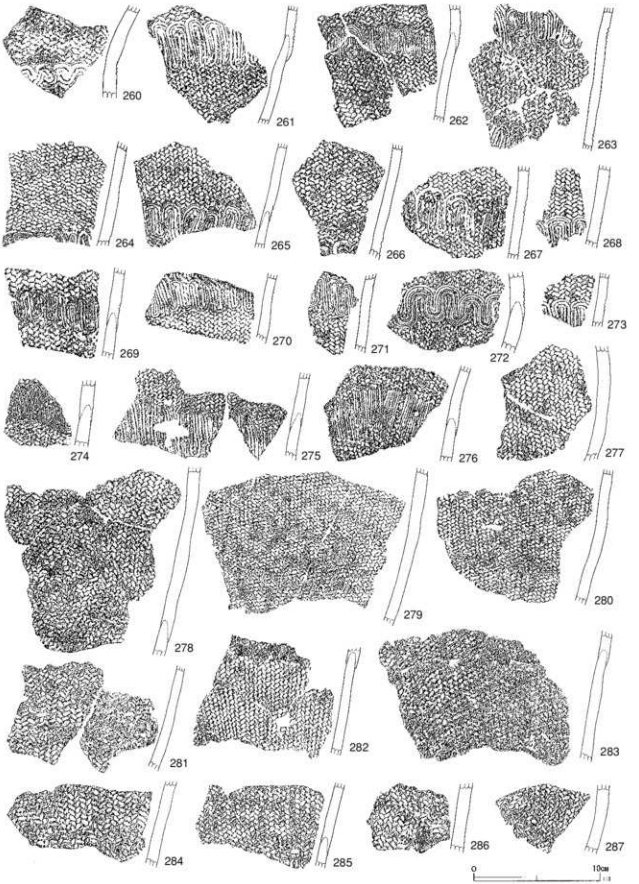
第29図　第1号住居跡出土遺物（17）



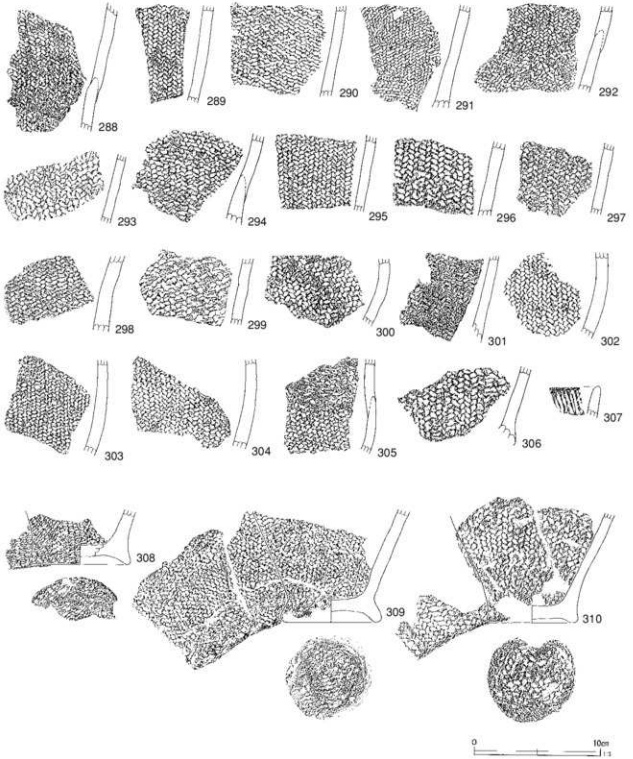
第30図　第１号住居跡出土遺物（18）



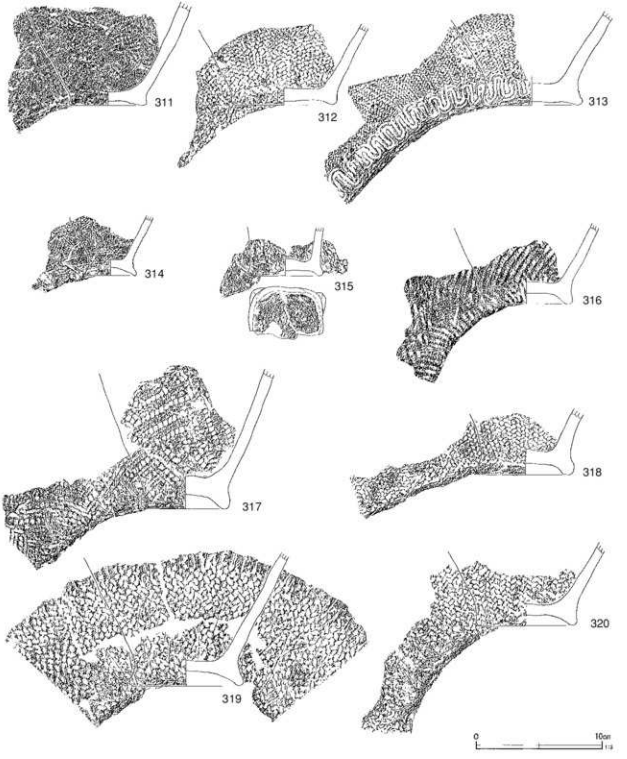
第31図　第１号住居跡出土遺物（19）



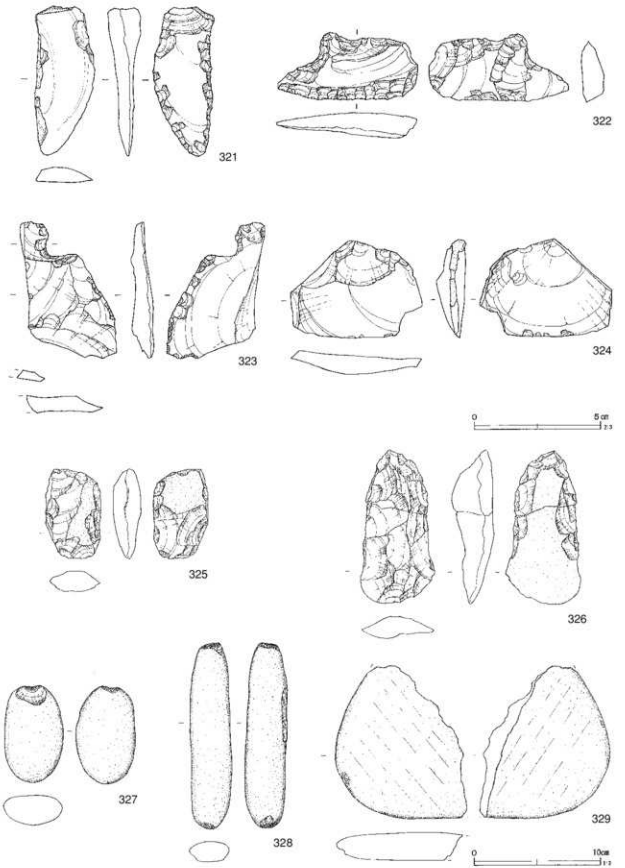
第32図　第１号住居跡出土遺物（20）



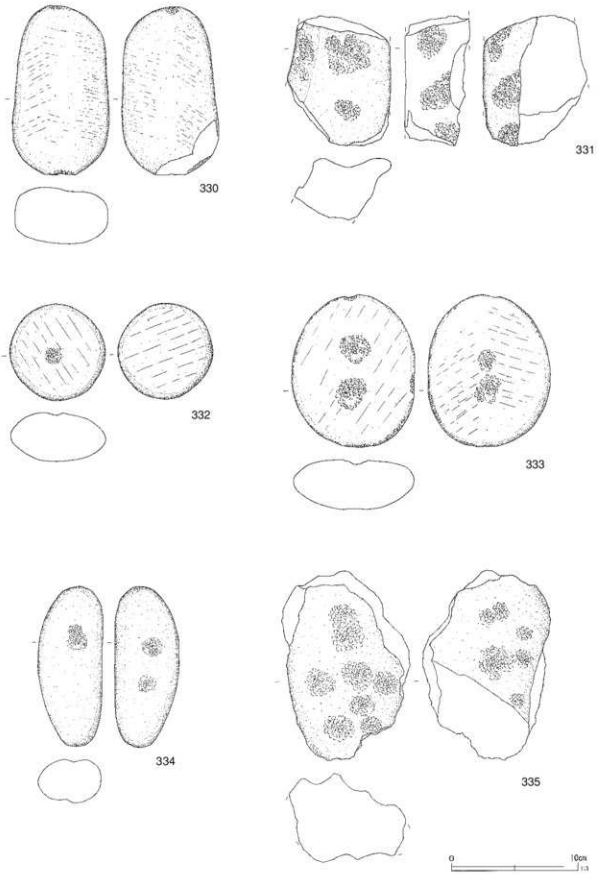
第33図　第１号住居跡出土遺物（21）



第34図　第１号住居跡出土遺物（22）



第35図　第１号住居跡出土遺物（23）



第36図　第１号住居跡出土遺物（24）

上端には正反の合と思われる圧痕がわずかに観察できる。313は原体不明組紐縄文を全面に施文し、底部最下端には3本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

314～320は、底面無文、脚付底の7類2種Bである。314は、小型底部で地文は認められない。半截竹管にて器面全体に文様を描く。315は、完全に方形を意識してつくられた方形底である。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施文する。316は、単節LRを施文する。底部最下端は、条が縦位になるよう斜位施文を行う。317は、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。318・319は、RRLLの組紐縄文を全体に施文する。319は、原体の開放末端を他縛した圧痕が一部観察できるとともに、上端には半截竹管による刺切文を施す。320は、原体不明の組紐縄文を施文する。

321～323は石匙である。321は縦長剥片を利用した縦形石匙である。刃部加工は片面のみに浅く認められ、摘み部は明瞭に形成されていない。石材は黒色頁岩を用いる。322は縦長剥片を横位に利用した横形石匙である。押圧剥離による刃部加工を行い、摘み部の先端を尖らせる。石材は黒色頁岩を用いる。323は剥片を横位に用いた大形の横形石匙である。刃部は鋭い縁辺を利用し、摘み部は幅広に成形される。縦位に欠損する。石材はチャートを用いる。

324はスクレイパーである。黒色頁岩を用いており、剥片の末端に微細な剥離痕が認められる。

325・326は打製石斧である。325は小型撥円礫に周辺加工を施している。石材はホルンフェルスを用いる。326は剥片の主要剥離面側に加工を施し、撥形を呈する。緩い曲線で片側凸刃の刃部をもつ、いわゆる「カメノコ石斧」（高橋1985）である。石材にはホルンフェルスを用いる。

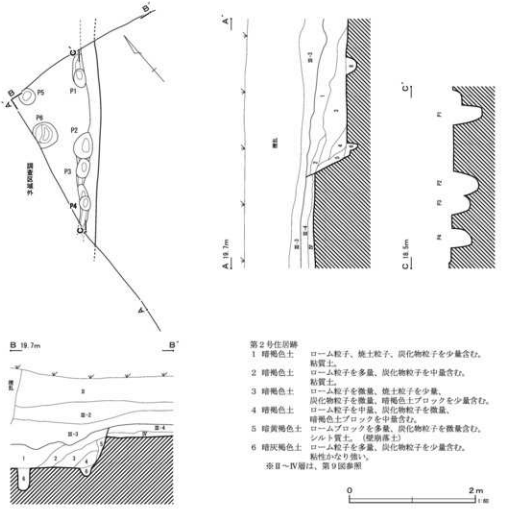
327・328は敲石である。327はやや扁平な楕円礫の上端に、328は棒状礫の両端と片側縁部に敲打による剥離が認められる。双方とも石材は安山岩を用いる。

329・330は磨石である。329は扁平礫、330は長楕円礫の両面に磨痕が認められる。また329の側面には敲打による面取りも施される。石材は、329が閃緑岩を、330が安山岩を用いる。

331～335は凹石である。全て石材には安山岩を用いる。331は一部分の残存であり、礫面全面に多数の凹みが観察できる。332・333は円礫に凹みと磨痕が認められることから、磨石の機能も併せ持つと考えられる。333は側面に敲打による面取りも施されている。334は棒状礫の両面に凹みが観察できる。335は両面に多数の凹みが認められる「多孔石」である。欠損しており、一部分のみの残存である。

第3表　第1号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
321	石匙	(5.88)	2.29	0.64	13.5	黒色頁岩	
322	石匙	2.72	5.51	0.98	13.9	黒色頁岩	
323	石匙	(5.35)	4.50	0.84	12.1	チャート	
324	スクレイパー	3.88	5.19	0.84	17.4	黒色頁岩	
325	打製石斧	6.87	4.27	2.38	86.5	ホルンフェルス	
326	打製石斧	11.98	5.86	3.23	188.4	ホルンフェルス	
327	敲石	7.46	4.52	2.36	108.5	安山岩	
328	敲石	14.42	3.20	1.61	121.0	安山岩	
329	磨石	(12.10)	(10.43)	2.28	416.4	閃緑岩	
330	磨石	13.19	7.56	4.37	681.7	安山岩	
331	凹石	(10.23)	(8.20)	5.28	483.8	安山岩	
332	凹石	7.50	7.22	3.78	275.0	安山岩	
333	凹石	11.82	9.60	3.84	552.5	安山岩	
334	凹石	12.50	5.01	3.23	343.5	安山岩	
335	凹石	(14.60)	(9.08)	6.48	532.7	安山岩	



第37図　第２号住居跡

第４表　第２号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	(0.54)	0.20	0.44	P－4	0.42	0.16	0.31
P－2	0.42	0.29	0.45	P－5	(0.25)	0.24	0.38
P－3	0.31	0.20	0.27	P－6	(0.40)	(0.34)	0.28

第２号住居跡（第37・38図）

工業高校調査区北端のH－７グリッドに位置し、第１号住居跡の西側で住居跡のごく一部が検出された。その大部分が調査区域外のため平面形態、規模は不明である。

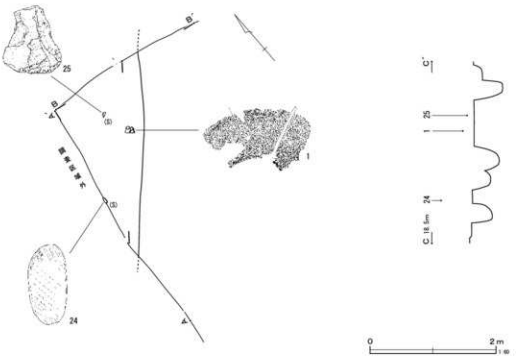
確認面からの深さは0.31～0.48mを測る。床面は多少の凹凸はあるが概ね平坦であり、住居跡の壁はやや開き気味に立ち上がる。主軸方向はN－42°－Eを指す。

柱穴は６本検出された。P1～4は壁柱穴である。個別の柱穴の規模は第４表に示した。壁際からは検出された柱穴をつなぐように壁溝が巡る。床面からの深さは0.13～0.18mである。P1とP2の間は調査できなかったため壁溝の存在は否定できない。

本住居跡からはわずかであったが、縄文時代前期の関山Ⅱ式後半期の土器が検出された。したがって本住居跡は当該期に構築されたと考えられる。

第２号住居跡出土遺物（第39図）

一部分の調査であったため、本住居跡から検出さ



第38図　第２号住居跡遺物出土状況

第５表　第２号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
24	磨製石斧	10.66	5.01	1.92	171.6	砂岩	
25	打製石斧	(8.14)	6.95	2.13	122.6	頁岩	

れた遺物は少なく、図示できた土器は器形の復元できるものも含めて23点、石器は２点のみである。

１は唯一器形復元可能な土器であり、竪穴の覆土中から出土した。口縁部に向かってくびれずに開く深鉢底部で、５類６種の組縄の擬異節RL(RL)と思われる文様を全面に施す。底部は無文の緩やかな上げ底を呈し、底径は7.0cmである。

２～４は、１類２種Cの重平行沈線で口縁部文様帯を描く。２はLLRRの組紐縄文を、３・４は組縄の擬異節RL(RL)と思われる縄文を地文として施す。

５～７は、１類３種の特殊文様である。５は組紐縄文施文後、細い棒状工具で器面全体に格子状文を描く。７は多段ループ鎖状構成中にV字状文を施す。

８は、５類２種Daで、単節LRの多段ループ水平構成で、口縁部に刻みを有する。９は、５類２種Dbで、単節LRの多段ループ鎖状構成である。

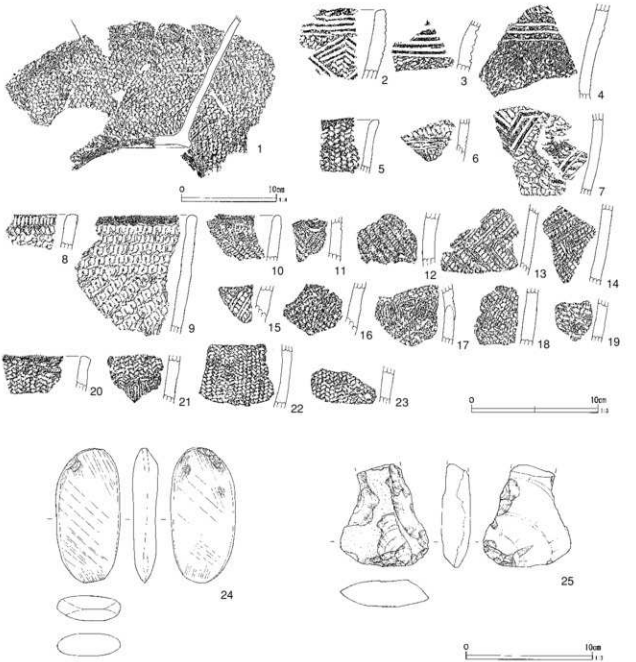
10は、５類２種Eで、単節RLの上下幅等間隔幅広ループ文を施文する。11・12は、５類２種Fで、11は単節RL・LRを非対に、12は単節RLを施文する。

13～16は、５類５種正反の合で、全てA種である。16は注口部の下のふくらみをもつ部分である。

17～19は、５類６種で組縄縄文を施す。17はコンパス文を挟んでRL(RL)、LR(RL)の擬異節斜縄文を施文する。コンパス文は櫛の上下移動である。

20～23は、５類10種で組紐縄文を施文する。21は、５本櫛で上下移動のコンパス文を描く。

24・25は磨製石斧である。24は扁平な長楕円礫を利用し、全面に研磨を施す。緩い曲線の両凸刃をもつ。石材は砂岩である。25は大型剥片を利用し、片面にのみ加工を施し、刃部は緩い曲線の両凸刃をもつ。いわゆる「カメノコ石斧」である。基部を欠損しており、撥形を呈する。石材には頁岩を用いる。



第39図　第２号住居跡出土遺物

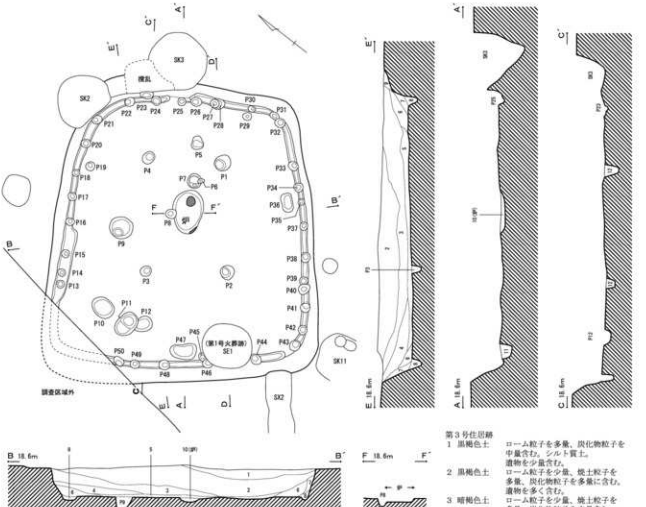
第３号住居跡（第40・41図）

工業高校調査区の西端部、Ｈ・Ｇ－８グリッドで検出された。住居跡西隅が調査区域外となり、北隅では第２・３号土壙に壁の一部分を壊され、また南西辺南寄りでは第１号火葬跡・第１号井戸跡との重複が認められた。

平面形態は台形を呈し、規模は長軸4.68m、短軸4.17mである。確認面からの深さは0.41～0.45mを測る。主軸方向はＮ－55°－Ｅを指す。

住居跡床面は緩やかな起伏が認められたが概ね平坦である。壁際からは壁溝が検出された。途切れる部分もあるがほぼ全周し床面からの深さは0.05～0.15mを測る。壁溝上には0.3～0.5m間隔で壁柱穴が穿たれる。住居の壁はやや開き気味に立ち上がる。

柱穴は50本検出された。多くは壁に沿って巡る壁柱穴である。主柱穴はその位置からＰ1～4と考えら



第3号住居跡

1 黒褐色土　ローム粒子を多量、炭化物粒子を中量含む。シルト質土。遺物を少量含む。
2 黒褐色土　ローム粒子を少量、焼土粒子を多量、炭化物粒子を多量に含む。遺物を多く含む。
3 暗褐色土　ローム粒子を少量、焼土粒子を多量、炭化物粒子を中量含む。粘質土。遺物を少量含む。
4 暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、暗褐色土ブロックを少量含む。
5 暗褐色土　ロームブロックを少量、ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量含む。シルト質土。
6 暗黄褐色土　ロームブロックを少量、炭化物粒子を少量含む。粘質土。
7 暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。
8 暗灰色土　暗灰色粘土を多量に含む。
9 暗褐色土　ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量含む。
10 暗赤褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む。しまりなし。(P7覆土)
11 暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子を少量含む。しまりなし。(P47覆土)
12 暗褐色土　炭化物粒子を少量含む。しまりなし。(P1.2.3.4覆土)

第40図　第3号住居跡

れる。個別の柱穴の規模は第6表に提示した。

床面中央部から炉跡が1基検出された。長軸0.7m、短軸0.45mの楕形をした浅い地床炉で、炉底面がわずかに焼けている程度であった。

遺物は床面から浮いた状態で、住居跡中央部西寄りからまとまって出土した。遺物を包含する覆土中層は黒褐色で炭化物、焼土を多量に含んでおり、その出土状況は第1・4・5・9号住居跡と酷似する。同様の廃棄過程が想定される。

検出された土器はほとんどが前期鬼山Ⅱ式後半期のものであることから、本住居跡もこの時期に比定されよう。

第6表　第3号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	0.27	0.24	0.24	P－26	0.17	0.13	0.08
P－2	0.22	0.22	0.39	P－27	0.13	0.13	0.13
P－3	0.17	0.16	0.13	P－28	0.17	(0.09)	0.06
P－4	0.21	0.17	0.23	P－29	0.13	0.13	0.13
P－5	0.22	0.18	0.17	P－30	0.12	0.10	0.04
P－6	0.11	0.07	0.14	P－31	0.16	0.10	0.07
P－7	0.23	0.22	0.22	P－32	0.16	0.15	0.22
P－8	0.17	0.15	0.13	P－33	0.16	0.13	0.09
P－9	0.37	0.34	0.16	P－34	0.15	0.14	0.12
P－10	0.31	0.23	0.12	P－35	0.11	0.11	0.06
P－11	0.41	0.29	0.15	P－36	0.30	0.17	0.13
P－12	0.36	0.29	0.10	P－37	0.12	0.14	0.09
P－13	0.13	0.12	0.06	P－38	0.15	0.14	0.16
P－14	0.12	0.11	0.07	P－39	0.14	(0.11)	0.10
P－15	0.13	0.12	0.11	P－40	0.19	0.15	0.09
P－16	0.14	0.11	0.14	P－41	0.15	0.15	0.35
P－17	0.14	0.13	0.11	P－42	0.15	0.14	0.12
P－18	0.11	0.11	0.17	P－43	0.18	0.16	0.18
P－19	0.15	0.14	0.10	P－44	0.18	0.15	0.06
P－20	0.15	0.13	0.19	P－45	(0.12)	(0.09)	0.05
P－21	0.16	0.13	0.13	P－46	0.16	(0.11)	0.12
P－22	0.16	0.14	0.10	P－47	0.42	0.24	0.20
P－23	0.21	0.12	0.07	P－48	0.17	0.16	0.18
P－24	0.16	0.14	0.10	P－49	0.14	0.14	0.18
P－25	0.12	0.12	0.10	P－50	0.18	0.12	0.16

第3号住居跡出土遺物（第42～54図）

本住居跡からは接合後、1400点を越える多量の土器が出土した。第1号住居跡に次ぐ量である。図示した土器は、器形復元可能個体16点を含む295点である。石器の出土はわずかで40点のみであった。うち9点を示した。

器形の復元できた土器の分類は、1・6・7が1類2種Cで重施文平行沈線によって口縁部文様帯を構成する。8は1類3種で特殊文様をもつ。上記以外は全て5類である。2は5類1種の無節、3・9は5類2種Dbで多段ループ鋸歯構成、10は5類2種Fの単節、11・12は5類5種の正反の合、13～15は5類6種の組縄、4・5・16は5類10種の組紐である。

1は口縁部にふくらみをもつ深鉢である。文様帯は二重平行沈線で描く。上下区画線は横位線と山形文を組み合わせ、内部は半円文をモチーフとする。斜沈線で半円文を連結させ、その間には山形文を配する。地文は原体不明の組紐縄文を全面に施文する。

2はくびれずに開く深鉢であり、全面にLの無節斜縄文を時計回りに施文する。

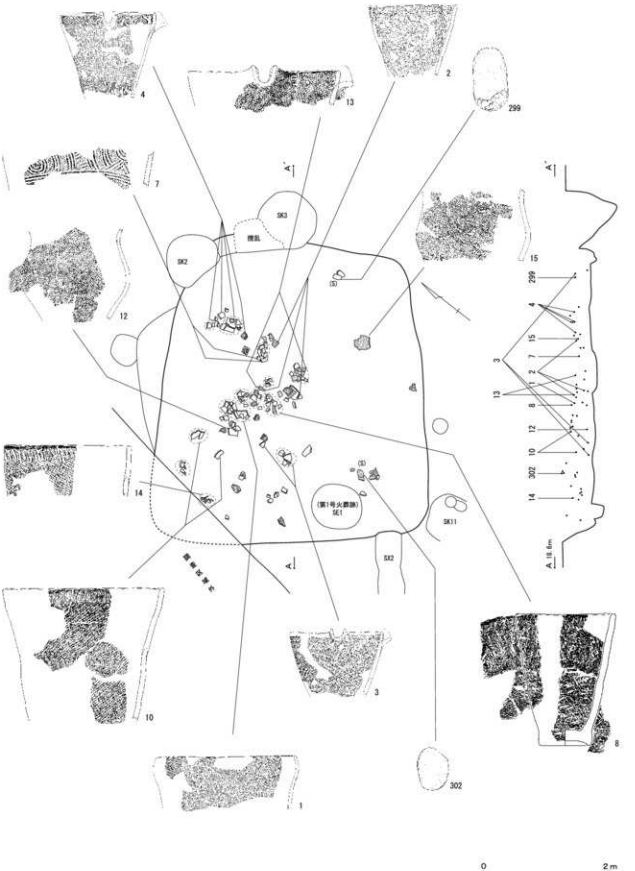
3は片口注口土器である。口縁部上端、内面には横方向のなでが観察される。文様は単節RLの多段ループを鋸歯状に配し、反時計回りで施文を行う。ループ部分の圧痕が縦長を呈しているのが特徴で、強い撚りをかけたと思われる。

4も片口注口土器である。注口部には突起へ移行するわずかな高まりが確認できた。その高さから台形を呈すると思われる。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下と胴部の成形痕上には櫛で刺切文が施される。

5は小型の片口注口付き鉢である。口縁部は幅広の無文帯で、文様は成形痕以下に施される。原体不明の組紐縄文である。底部は無文の緩やかな上げ底を呈し、底径は4.9cmである。

6は小型の注口土器である。口縁部文様帯は二重平行沈線で横位区画線を上下に配し、その内部に山形文を描く。地文は原体不明の組紐縄文を全面に施文する。

7は口縁部文様帯の一部分である。三重平行沈線



第41図　第３号住居跡遺物出土状況

で円形文や山形文を表現している。地文はRRLLの組紐縄文を施文する。内面は丁寧に磨く。

8は小型深鉢で、器面全体に刺切状の単沈線を棒状工具で施す。胴部上半には、半截竹管による山形文が施される。底部は無文の緩やかな上げ底で底径は6.0㎝である。

9は口縁部が大きく外反しその直下でくびれる深鉢である。文様は多段ループで鋸歯を描出している。原体はループ部のみ正撚りの単節RLだが、以下は反撚りLLで、ほつれたような圧痕が観察できる。

10は胴部にゆるいくびれを持つ深鉢で、文様は単節LRを全面に施す。口縁部直下と胴くびれ部に3本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

11は正反の合A種R・Lを羽状に施文する深鉢である。それぞれの原体は末端を他縛処理している。口縁部直下には、半截竹管による刺切文が施される。

12は胴部上半でくびれ、下半に最大径をもつ大型深鉢である。くびれ部直上に半截竹管で山形文を施文しており、文様帯を有すると思われるがその様相は不明なので地文での分類を行い5類5種とした。くびれ部には、竹管で上下移動のコンパス文を施す。地文は正反の合A種、最終撚りLの単一原体での施文である。

13は片口注口土器の口縁部で、地文は組縄の擬異節斜縄文RL(RL)を全面に施文する。

14・15は全面に組縄の擬異節斜縄文RL(RL)を施文する。14は、口縁部直下に半截竹管で刺切文を施す。15は、胴部上半がゆるやかにくびれ、下半に最大径をもつ深鉢である。

16は深鉢の底部に近い部分であり、器面にはLLRRの組紐縄文が全面に施文される。

17は1類1種Dで、管内痕の残らない平行沈線で文様帯を描く。平行沈線内には刻みを有する。地文は施文されていない。

18・19は1類2種Aで、刻みを有する平行沈線で文様帯を描く。18は、単節RLの水平多段ループ文を地文とする。19は、小破片のため地文は確認できない。

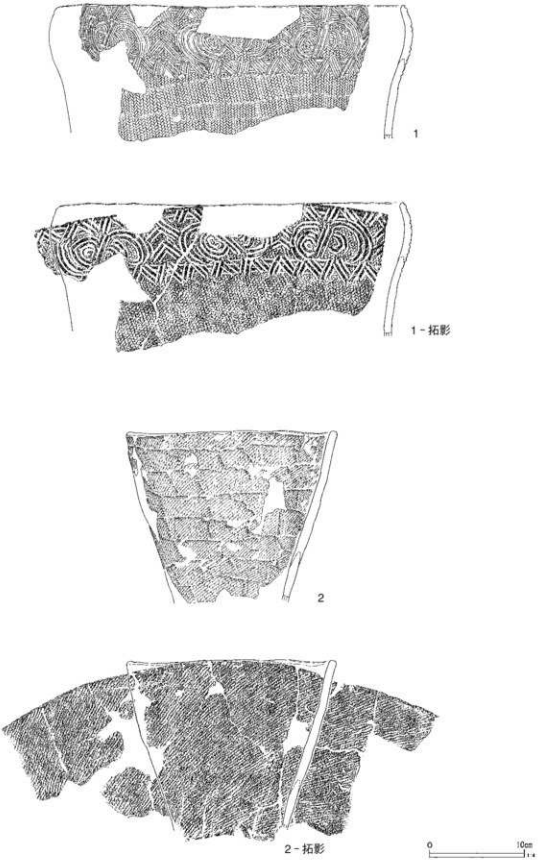
20～22は1類2種Bで、単独平行沈線によって文様帯を描く。地文は、20が組紐RRLL、21が原体不明組紐、22が単節RLである。

23～35は1類2種Cで、重施文平行沈線によって文様帯を描く。23～29は、波状口縁で、25・26は単頂波状口縁、23・27は双頂波状口縁と考えられる。それ以外は波状形態不明である。23は、波頂部からやや下がった口縁部に角状突起をもつ。地文は不明である。24は、文様帯部分の地文は不明であるが、下位は単節LRの水平多段ループ文である。25・26は、同一個体で、地文はRRLLの組紐縄文を施文する。27・28は、同一個体で、地文は組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文を施文する。29は単節LRを、30は正反の合A種Lを地文とする。31は、成形痕以上にRRLLの組紐縄文を、以下には単節RLの水平多段ループ文を地文として施文する。32・33は、同一個体で組紐RRLLを地文とする。34は、単節RLを地文とし、平行沈線での主幹文に沿って爪形文を施す。35は原体不明組紐を地文とする。

36～54は1類3種で、特殊文様を描く。36は波頂部形態不明の波状口縁、37は口縁部に台形状突起をもつ。36～50は多段ループの鋸歯構成中に竹管文を配する。51・52は平行沈線で山形のタガ状文を巡らせる。成形痕上に施されており、コンパス文と同様の意味をもつものであろう。53・54は、櫛で器面全体に文様を描く。36・39～41・43・45～50は、地文に単節RL多段ループで鋸歯文を施す。40・41は同一個体である。37・38・42・44は、1段LLを環部のみ単節RLに撚り、以下を反撚LLにしている。したがって環部以下がほつれた圧痕となる。37・42は同一個体であり、環部直下を他縛し環部がほつれるのを防いでいる。51～54は、地文に組紐縄文を施文する。51・52は原体不明組紐、53は組紐LLLL、54は組紐RRLLである。

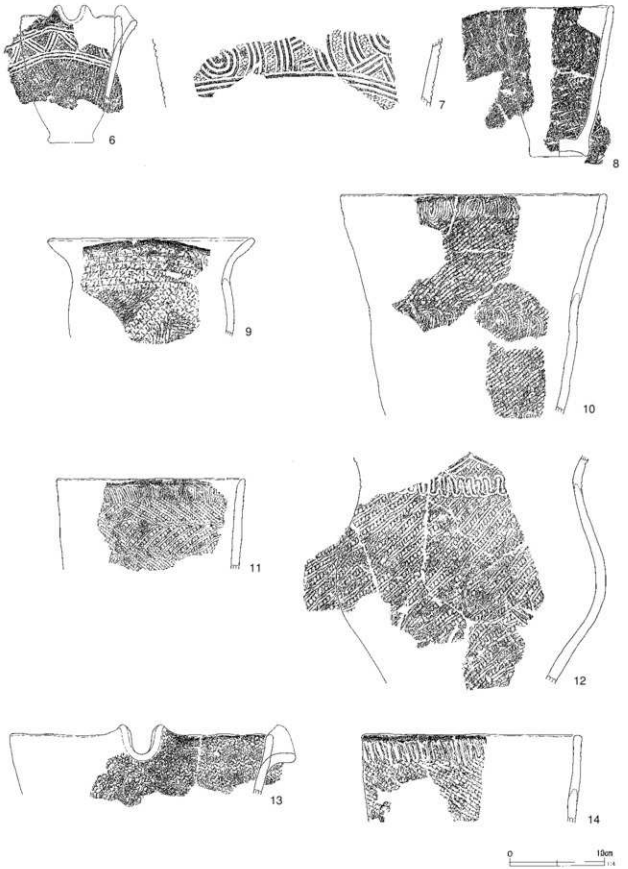
55・56は5類1種で、Lの無節斜縄文を施す。

57～70は5類2種Daで、多段ループ水平構成を

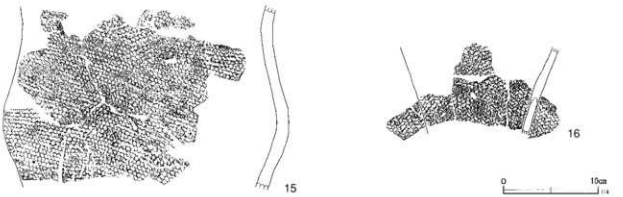


第42図　第３号住居跡出土遺物（1）

第43図　第３号住居跡出土遺物（2）



第44図　第３号住居跡出土遺物（3）



第45図　第３号住居跡出土遺物（4）

とる。57は、波頂部形態不明の波状口縁である。58は、半円状突起をもつので、左右どちらかの口縁部には注口がつくものと思われる。66は、単節RLを用いての多段ループ施文である。節が大きいことから原体は０段２条と考えられる。67・68は、下端にそれぞれ正反の合A種R・Lを施文する。69は、くの字状に屈曲するくびれ部をもつ破片である。内面の成形痕部分には稜線をもつ。隠山Ⅱ式ではほとんどみられない珍しい器形である。ループ文の使用原体は、58が単節LRで、それ以外の全ては単節RLである。コンパス文を施すものは63～66で、63・64は半截竹管による上下移動、65・66は竹管の刺切文である。

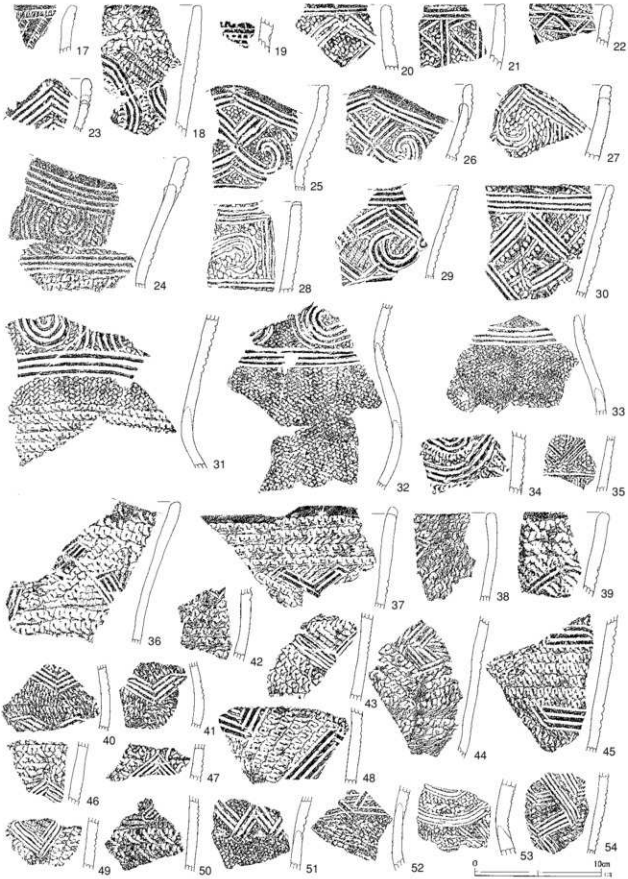
71～90は５類２種Dbで、多段ループ鋸歯構成をとる。71～73は波状口縁で、波頂部形態は71が双頂で、72・73は不明である。74～76は注口部をもつ。76は、注口部は欠損しているが右上端に注口部へ移行するふくらみをもつ。75・77・78・79は、同一個体である。82の成形痕以上は単節RLでの鋸歯ループ文で、下半は組縄、RL(RL)の振異節斜縄文を施す。84は、胎土に繊維をほとんど含まず、砂粒が多く認められる。ループ文の使用原体は、80が単節LRを用いる以外は全て、単節RLである。

91～94は５類２種Eで、上下幅等間隔拡広のループ文を施す。92が単節RL・LRで羽状に施文する以外は全て単節RLのみでの施文である。

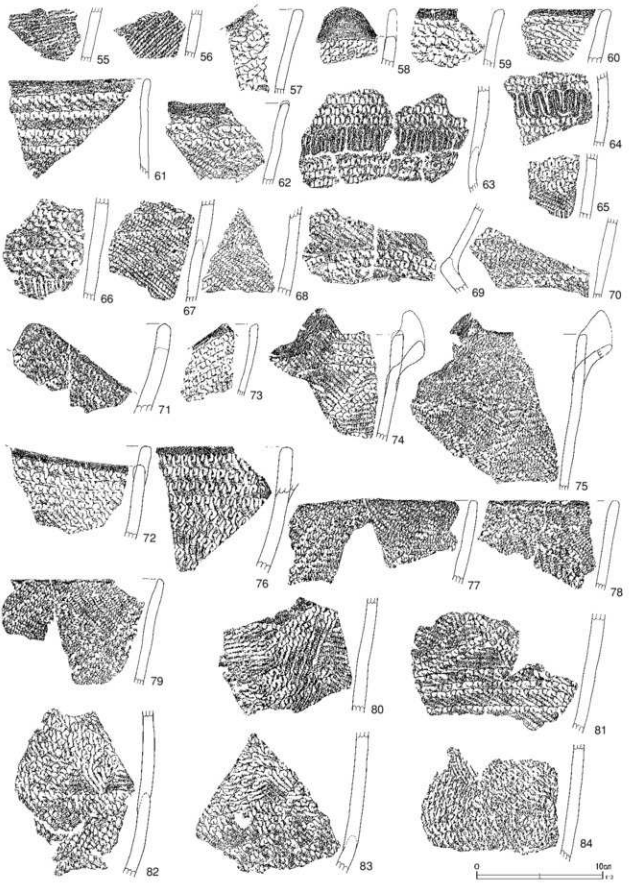
95～121は５類２種Fで、単節斜縄文を施す。使用する原体は、96・98・113・116～121が単節RL・LRを羽状構成に、97・114が単節LRを用いる。それ以外の全ては単節RLを使用する。108は、０段２条の単節RLのため、節が大きい。コンパス文を施すものは、95・99～101でその全てが半截竹管での刺切文である。

122・123は５類４種で、反の縄文を施す。１段Lを環部のみ単節RLに撚り、以下を強引に反撚Lとしている。

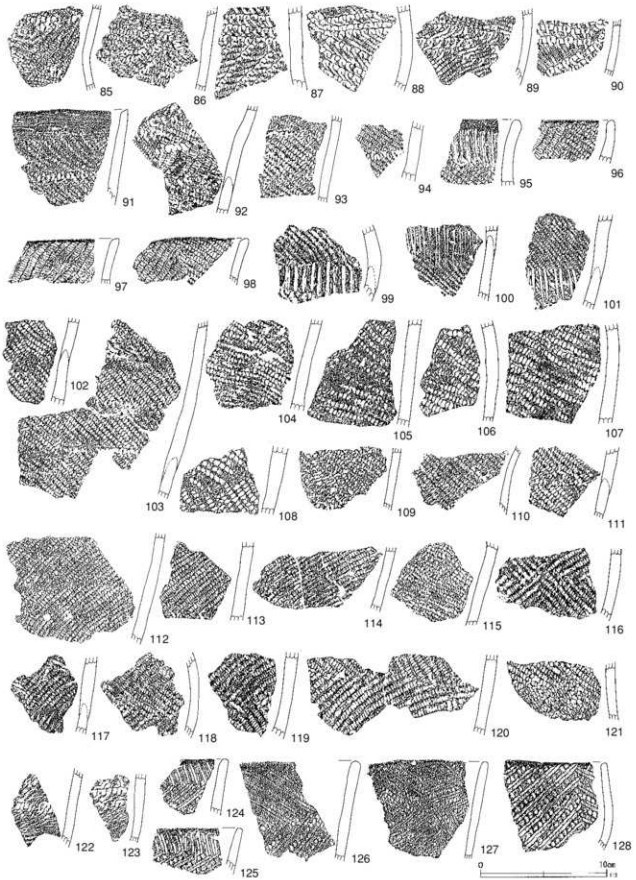
124～176は５類５種で、異条斜縄文を施す。124・125は、同一個体であり正反の合A種Lを施文する。竹管による刺切文を口縁部直下に施す。129・130・146は、同一個体である。129・130の口縁部には台形状突起がつき、129の左上端には補修孔を穿つ。文様は、口縁部に単節RLでの水平多段ループ文を５段施し、その下段には正反の合A種R・Lを羽状に施文する。以下上下方向にこの施文を繰り返す。131・132も129・130・146と別個体ではあるが、同様の文様構成をとる。132は、中央やや左器面に補修孔をもつ。136～140は、同一個体で正反の合A種Lと正反の合D種Rを羽状に施文する。正反の合D種は、正縄が前々段反撚のもので、圧痕が撚り戻しの単節となって表出する。137～140には竹管で刺切文を施す。141は、正反の合D種Rを全面施文し、下端には竹管による刺切文を施す。147は、成形痕上に単節RLの水平多段ループ文を６段施し、その上下には正反の合A種R・Lを羽状に施文



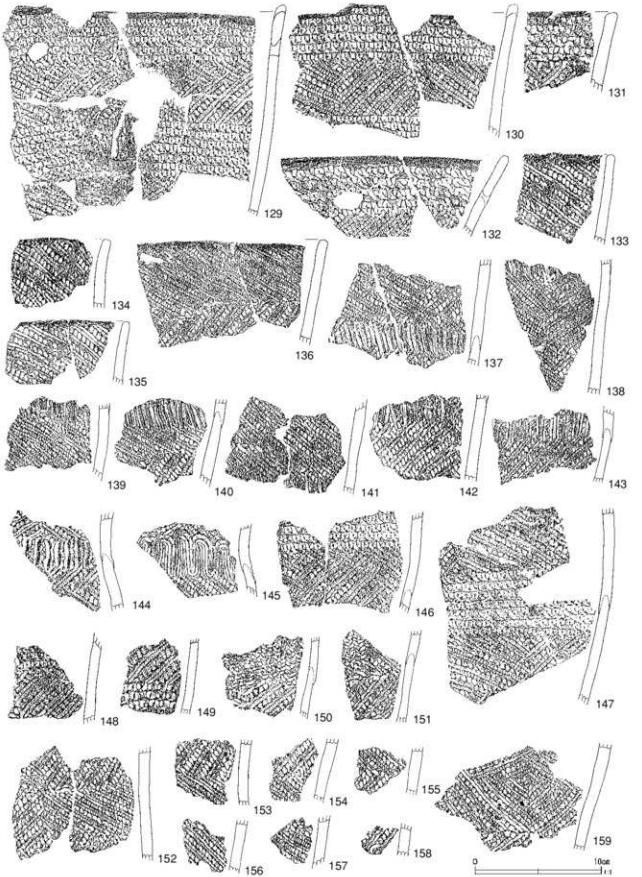
第46図　第３号住居跡出土遺物（5）



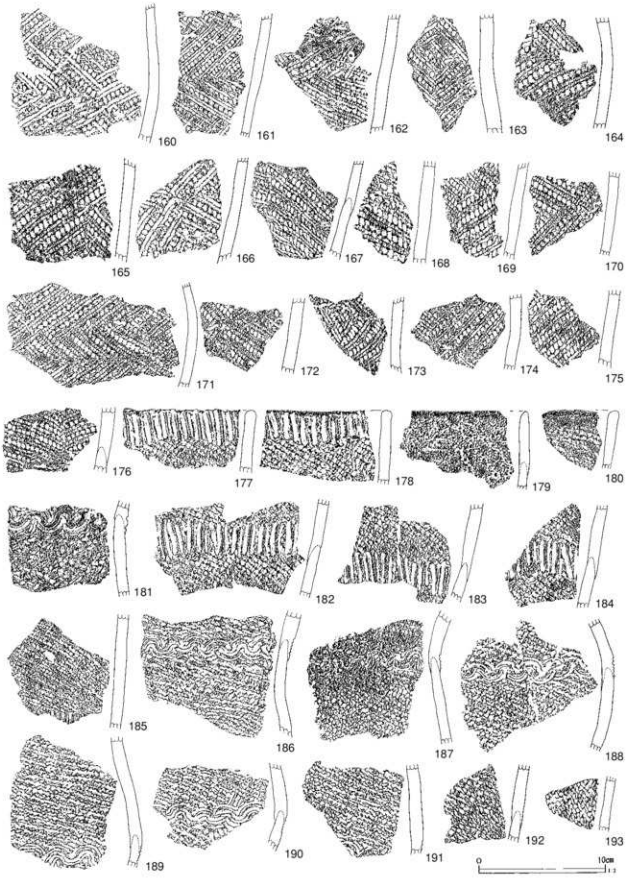
第47図　第３号住居跡出土遺物（6）



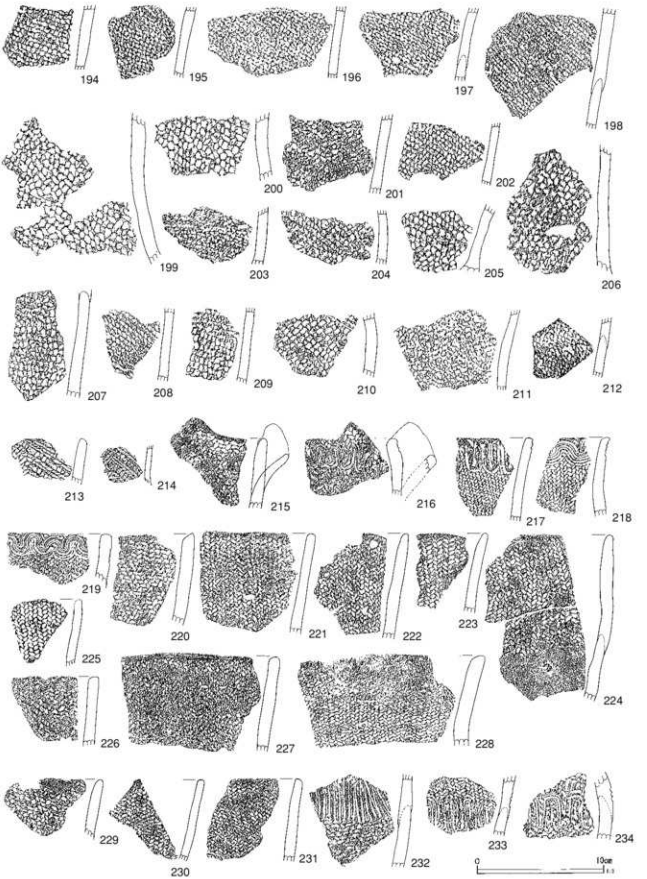
第48図　第３号住居跡出土遺物（7）



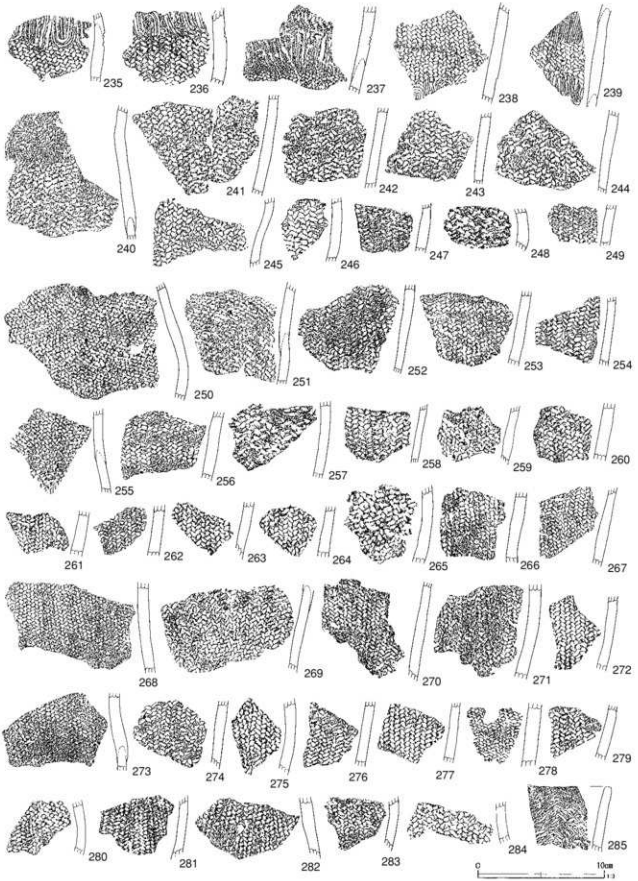
第49図　第３号住居跡出土遺物（8）



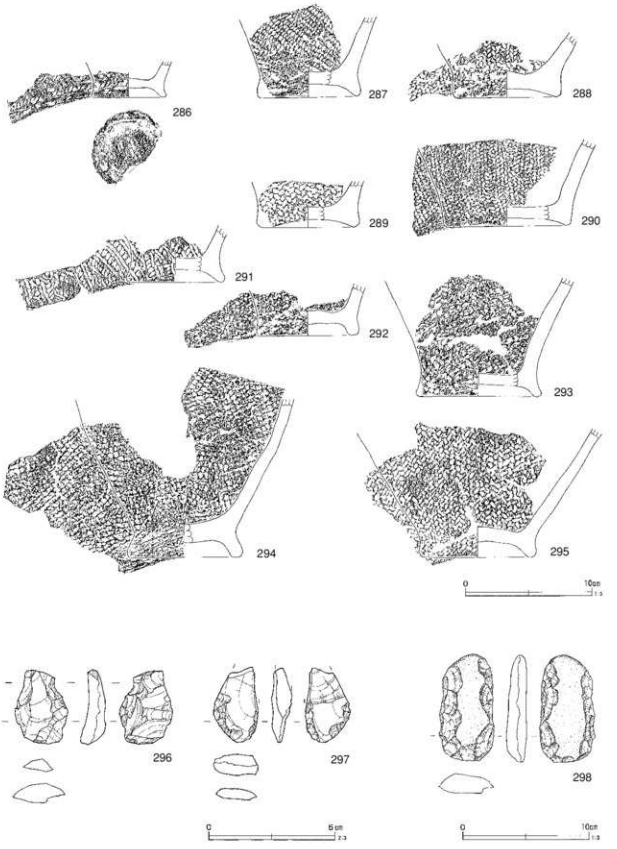
第50図　第３号住居跡出土遺物（9）



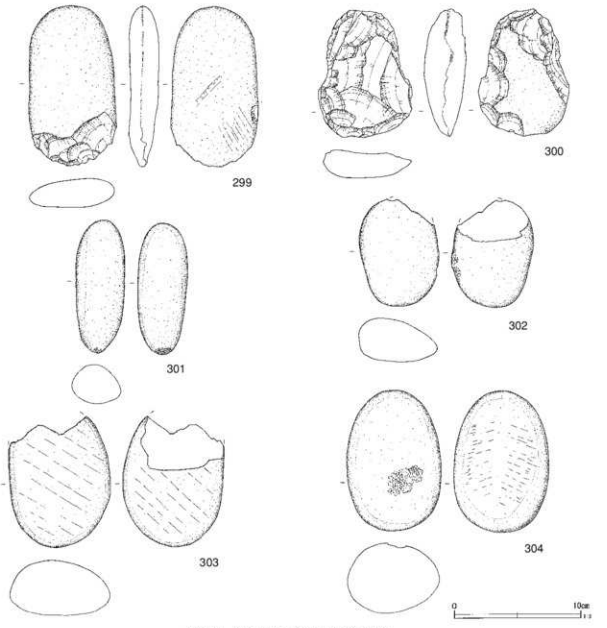
第51図　第３号住居跡出土遺物（10）



第52図　第３号住居跡出土遺物（11）



第53図　第３号住居跡出土遺物（12）



第54図　第３号住居跡出土遺物（13）

第７表　第３号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　　考
296	スクレイパー	(2.82)	2.09	0.67	4.9	チャート	
297	スクレイパー	(2.93)	1.75	0.73	4.0	チャート	
298	打製石斧	8.36	4.24	1.53	81.4	砂岩	
299	打製石斧	12.62	6.84	2.21	306.5	ホルンフェルス	
300	打製石斧	9.96	7.32	3.22	175.2	ホルンフェルス	
301	敲石	10.30	3.84	3.02	286.4	砂岩	
302	磨石	(8.28)	6.27	3.71	228.3	安山岩	
303	磨石	(9.86)	7.80	4.36	458.4	安山岩	
304	凹石	11.02	7.38	5.80	673.3	安山岩	

する。148・149も、水平多段ループ文との組み合わせで、正反の合A種Lに、148は上端に単節RLを、149は下端に単節LRを配する。150・151は、正反の合A種R・Lと組紐RRLLの組み合わせで、成形痕以上

に組紐を配する。152～157は、正反の合A種Lと正反の合D種Rを羽状に施文する。158は、正反の合B種Rで、直前段・前々段合撚の最も複雑な正反の合である。この遺跡ではこの１点のみの出土である。

確認できた正反の合原体は、A種、B種、D種の３種類であるが、その多くはA種である。施文方法は、133～135・141・158・167・168の７点がR方向、124・125・142・143・148・149・175の７点がL方向で、それ以外の39点全てはR・L方向を用いた羽状施文である。コンパス文を施すものは、124・125・137～145である。145が櫛による上下移動の他は全て、半截竹管による刺切文である。

177～212は５類６種で、組縄縄文を施す。177・178・182～184は、同一個体でRL(RL)の擬異節斜縄文を施文する。口縁部直下および成形痕上には半截竹管で刺切文を施す。189・191は、RL(LL)の擬単節斜縄文を施文し、櫛による真正コンパス文を施す。195・196は、同一個体でRL(RL)擬異節斜縄文を施す。胎土には繊維をほとんど含まず砂粒が多い。199・200は、同一個体でRL(RL)擬異節斜縄文を施す。212は、LR(RR)と思われる擬単節斜縄文を施文する。胎土は砂粒を主体とし、繊維はほとんど含まれない。

確認できた組縄原体は、擬単節RL(LL)、LR(RR)、擬異節RL(RL)、LR(RL)の４種類である。擬単節RL(LL)は、186～191・207～210の10点であるが、208は断定できない。擬単節LR(RR)は、211・212の２点であるが、212は定かではない。擬異節RL(RL)は、177～185・192～205の23点であるが、201は定かではない。206は、擬異節LR(RL)と思われるが断定はできない。コンパス文を施すものは、177・178・181～191の13点である。181が半截竹管による真正コンパス文で、177・178・182～185の６点が竹管の刺切文である。186～191の６点は櫛による真正コンパス文である。

213・214は５類９種で、附加条縄文を施す。単節RLを軸縄に無節の縄L2本をS方向に附加したものと、LRにR2本をZ方向に附加したものを羽状施文する。両方とも附加縄の節が流れる圧痕となる。附加縄は逆方向附加である。附加縄の圧痕が深いため、附加条としたがあるいは正反の合C種かもしれない。

215～284は５類10種で、組紐縄文を施す。215・216は、注口部であり、215は組紐RRLL、216は組紐原体不明であり、口縁部直下に櫛で上下移動のコンパス文を施す。226は、RRLLの組紐縄文と組縄RL(RL)の擬異節斜縄文を横帯内に施文する。横方向交互施文の可能性が考えられる。242・243は、同一個体でLLRRの組紐縄文を施文する。251・255は、成形痕以上にRRLL組紐縄文を、下半には組縄RL(LL)擬単節斜縄文を施文する。255の下半は組縄を施文していると考えられるがその原体の特定には至らなかった。成形単位で種類の異なる原体を使用し、施文する。265は、組紐縄文を施文するが、上下で異なる原体を使用し、上半はRLRLと思われるが断定はできない。下半はRRLLである。

確認できた組紐原体は４種類で、RRLL、LLRR、LLLL、RLRLである。

RRLLは、215・218・224・226・228～230・234・238・247～262・265の26点である。LLRRは、219・222・227・235・240～246の11点である。LLLLは、263・264の２点のみである。265の上半をRLRLとしたが、断定はできない。上記以外は、組紐原体不明である。コンパス文を施すものは、216～219・232～239の12点である。217が半截竹管による上下移動で、232が竹管の刺切文である。218・219が櫛による真正で、216・233～238の７点が櫛の上下移動、239が櫛の刺切文である。

285は５類11種で、縄文施文であるが種別特定不能破片である。節の細長い組紐状の圧痕のようにみえるが、無節の施文が重なり合った部分の可能性も考えられる。

286～295は７類底部である。286は、底面に文様を有する脚付底の７類１種Bである。側面には単節RLで単段ループ文を施文するが、底部方向に環部

を配置する逆ループとなる。底面には単節RLをわずかに施文する。

287～290は底面無文で緩やかな上げ底を呈する７類２種Aである。

側面文様は、287が単節RL、288・290が組紐原体不明、289が組紐LLRRである。

291～295は、底面無文、脚付底の７類２種Bである。

側面文様は、291が正反の合A種R、293が組紐LLLL、294は組紐の擬異節RL(RL)を斜位施文し条を横走させる。295が原体不明組紐である。292は、組紐かと思われるが器面風化のため断定できない。290・293・294・295は、大型土器の底部である。

296・297は石材に赤色チャートを用いたスクレイパーである。

双方とも剥片の鋭い縁辺部を利用しており、ほとんど刃部加工を行わない。296は上部に摘み部と思われる加工が認められるため、縦形石匙の可能性も考えられる。297は上部が欠損する。

298～300は打製石斧である。

298は扁平な楕円礫を用い、刃部は水平回転技法（大工原2002）により、片側ずつ成形し、両刃とする「カメノコ石斧」である。石材には砂岩を用いる。299は扁平な楕円礫の片側にのみ刃部加工を施す。いわゆる「礫斧」である。石材にはホルンフェルスを用いる。300は分割した礫を利用し、片側にのみ刃部加工を施す。石材はホルンフェルスである。

301は敲石で、棒状礫の下端に敲打痕が認められる。石材には砂岩を用いる。

302・303は磨石であり、双方とも楕円礫の両面に磨痕が観察される。一部欠損する。石材には安山岩を用いる。

304は凹石である。楕円礫の両面に凹みと磨痕が認められ、凹石と磨石の両方の機能を併せ持つと考えられる。石材には安山岩を用いる。

第４号住居跡（第55～66図）

工業高校調査区中央部北寄りの、Ｉ・Ｊ－８・９グリッドで検出された。今回の両調査区の中で最も東に位置する住居跡である。住居跡北西隅が調査区域外にあり、南辺は水道管埋設のため壊されているがそれ以外の部分は調査できた。

平面形態は正方形にちかい長方形を呈する。規模は長軸5.72m、短軸5.00mで、確認面からの深さは0.40～0.65mである。深い掘込みを有する。主軸方向はN－33°－Eを指す。

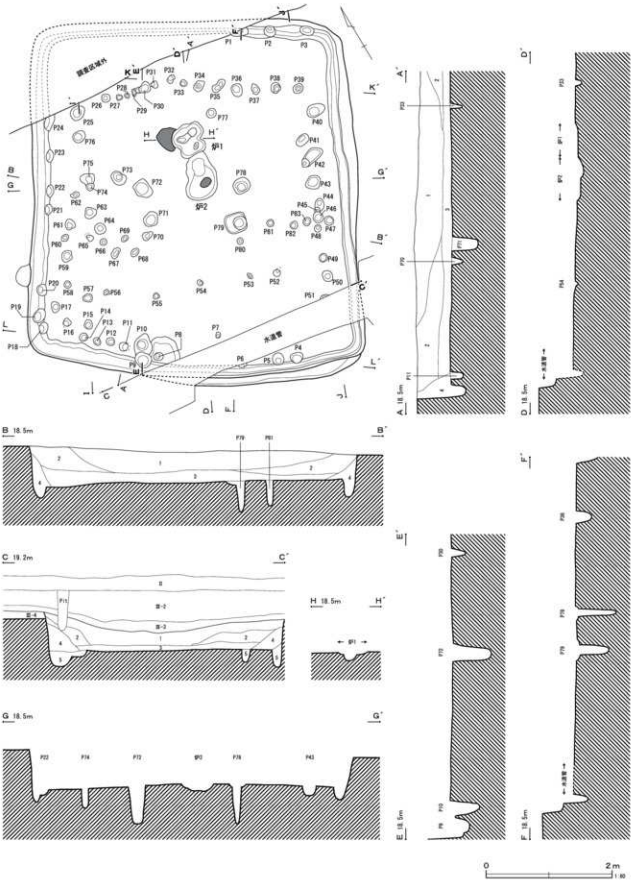
住居跡床面は緩やかな起伏があるものの概ね平らである。壁際には壁溝が巡っており、幅0.15～0.3m、床面からの深さは0.2～0.3mと非常に深い。住居跡の壁はほぼ直立する。

柱穴は83本検出された。柱穴の配置から住居の拡張が行われたと考えられる。床面に一回り小さい台形状をした柱穴列（P4から時計回りにP16～P25～P51を結ぶ範囲）が拡張前の住居範囲であろう。主柱穴はP1、78、72、10である。６本柱の住居跡と推定されるが、南北隅の柱穴は撹乱と調査区域外のため確認できなかった。また、拡張前の住居跡の主柱穴としてはP36、79、30、71、10が想定できるが、やはり南隅の柱穴は確認できなかった。個別の柱穴の規模は第８表に提示した。

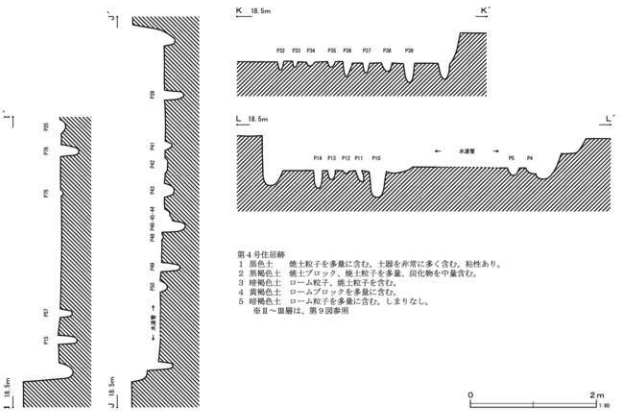
拡張は住居跡の全辺で行われているが、北東辺が1.0m以上なのに対して南西辺は0.4mとわずかである。これは拡張に際して南西辺に何らかの制約が存在したためと考えられる。

中央部北寄りから炉跡が２基検出された。北側の炉１は長軸0.55m、短軸0.5mの不整形で、南側の炉２は長軸0.76m、短軸0.47mの楕円形を呈する。２基とも床面を掘りくぼめただけの地床炉で、焼けた痕跡はほとんど認められない。炉１の北西床面と炉２中央部でわずかに焼土が検出された。

本住居跡は覆土中からおびただしい量の土器が検出された。出土状況は第１・３号住居跡と同様に、黒色土を主体とした覆土中層からで、多量の炭化



第55図　第４号住居跡（1）



第56図　第４号住居跡（2）

物・焼土を伴うものであった。したがって遺物廃棄も同様の過程で行われたと推測できる。

出土遺物は前期関山Ⅱ式後半期のものであることから、本住居跡の帰属も同時期であると考えられる。

第４号住居跡出土遺物（第67～107図）

本住居跡からは、接合後3,263点ものおびただしい量の土器片が出土した。その数量は今回検出した住居跡の中でも群を抜いている。そのうち613点を図示した。第１号住居跡同様に器形を復元できる個体が多数ふくまれており、97点にも上る。石器は、土器に比してその出土が少なく82点で、うち15点を示した。

器形復元できた土器の分類は、33が１類１種Gで地文をもたず重施文平行沈線による文様帯をもつ。１・34は１類２種Bで単独平行沈線を用いて文様帯を構成し、２～４・35～39・42は１類２種Cで重施文平行沈線の文様帯を配する。40・41・43は１類２種Dで半截竹管以外の施文具を使用し文様帯を描く。５は１類３種で特殊文様をもつ。44は５類２種Daで多段ループの水平構成、６は５類２種Dbで多段ループの鋸歯構成である。７は５類２種Eで幅広等間隔ループ文、８・９・45・46は５類２種Fで単節である。10～16・47～52は５類５種で正反の合、17・53～65は５類６種で組縄、18～32・67・97は５類10種で組紐である。66は６類の無文である。

１は口縁部下でくびれ胴部にふくらみをもつ深鉢である。口縁部文様帯は単独平行沈線で山形文を表出する。地文は原体不明の組紐縄文を反時計回りに施文し、３ヶ所の成形痕上には半截竹管による上下移動のコンパス文を施す。焼成は良好で、文様の残存状態もよい。口縁部には４単位の丸みを帯びた台形状突起を持つ。

２は双頭突起口縁をもつ深鉢である。口縁部文様帯にはわらび手状文などを配す。地文は、組縄の擬単節RL(LL)か擬異節RL(RL)と思われるが、組節が観察できないため判然としない。時計回りでの施文である。

第８表　第４号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	(0.25)	(0.09)	0.15	P－43	0.21	0.21	0.17
P－2	0.19	0.17	0.16	P－44	0.20	0.15	0.10
P－3	0.22	0.15	－	P－45	0.08	(0.07)	0.16
P－4	0.21	0.16	0.10	P－46	0.17	0.16	0.36
P－5	0.14	0.13	0.12	P－47	0.15	0.14	0.30
P－6	0.13	(0.05)	－	P－48	0.12	0.11	0.05
P－7	0.10	0.07	0.06	P－49	0.14	0.13	0.29
P－8	(0.48)	(0.41)	0.16	P－50	0.19	0.16	0.11
P－9	0.26	0.23	0.28	P－51	(0.15)	(0.05)	0.21
P－10	(0.30)	0.28	0.46	P－52	0.11	0.11	0.24
P－11	0.14	0.14	0.19	P－53	0.11	0.06	0.09
P－12	0.13	0.12	0.13	P－54	0.10	0.08	0.10
P－13	0.13	0.10	0.15	P－55	0.10	0.09	0.12
P－14	0.13	0.13	0.29	P－56	0.10	0.08	0.08
P－15	0.15	0.14	0.30	P－57	0.16	0.13	0.19
P－16	0.12	0.11	0.22	P－58	0.12	0.11	0.23
P－17	0.17	0.13	0.29	P－59	0.17	0.16	0.30
P－18	0.19	0.14	0.24	P－60	0.11	0.10	0.26
P－19	0.24	0.17	0.26	P－61	0.16	0.16	0.18
P－20	0.18	0.15	0.27	P－62	0.11	0.09	0.17
P－21	(0.17)	(0.11)	0.10	P－63	0.19	0.18	0.26
P－22	(0.19)	(0.12)	0.07	P－64	0.18	0.17	0.26
P－23	(0.20)	(0.12)	0.04	P－65	0.11	0.08	0.11
P－24	(0.24)	(0.14)	0.13	P－66	0.11	0.10	0.05
P－25	0.26	0.21	0.09	P－67	0.19	0.11	0.19
P－26	0.14	0.13	0.05	P－68	0.15	0.11	0.26
P－27	0.10	0.09	0.11	P－69	0.12	0.09	0.16
P－28	0.09	0.08	0.07	P－70	0.17	0.12	0.21
P－29	0.12	0.07	0.08	P－71	0.25	0.22	0.38
P－30	0.18	0.16	0.23	P－72	0.30	0.23	0.62
P－31	0.11	0.10	0.11	P－73	0.24	0.19	0.21
P－32	0.14	0.09	0.20	P－74	0.13	0.12	0.31
P－33	0.11	0.11	0.19	P－75	0.23	0.17	0.09
P－34	0.19	0.14	0.14	P－76	0.21	0.17	0.30
P－35	0.24	0.12	0.10	P－77	0.16	0.14	0.32
P－36	0.20	0.16	0.25	P－78	0.27	0.24	0.65
P－37	0.18	0.11	0.19	P－79	0.34	0.31	0.53
P－38	0.17	0.16	0.14	P－80	0.11	0.10	－
P－39	0.17	0.14	0.32	P－81	0.11	0.11	0.32
P－40	0.30	0.20	0.30	P－82	0.13	0.12	0.21
P－41	0.23	0.14	0.24	P－83	0.14	0.11	0.25
P－42	0.41	0.19	0.09				

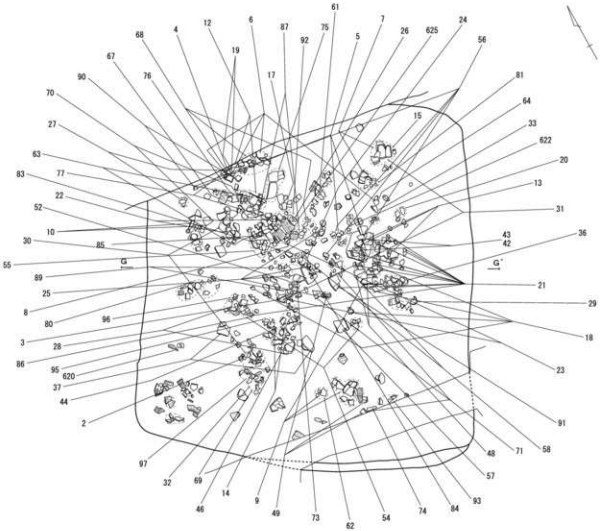
３は片口注口土器である。口縁部文様帯は、二重平行沈線により上下横位区画線の中に山形文を配する。地文は、RRLLの組紐縄文を施文し、胴部成形痕上には３本櫛による上下移動のコンパス文を施す。注口脇の口縁部にわずかな高まりが存在することから、半円状突起のなごりと考えられる。

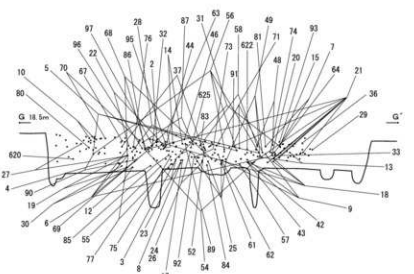
４は小型の深鉢である。口縁部文様帯には交互に組み合わせた山形文を二重平行沈線で描く。地文はRRLLの組紐縄文を時計回りに施文する。

５は小型深鉢で、半截竹管により器面全体に格子状文を施す。口縁部直下、胴部中位、底部直上にそれぞれ横沈線を配する。地文は組縄、RL(RL)擬異節斜縄文を反時計回りに施す。残存部左端に補修孔が認められる。底部は無文の脚付底で、底径は5.9cmを測る。

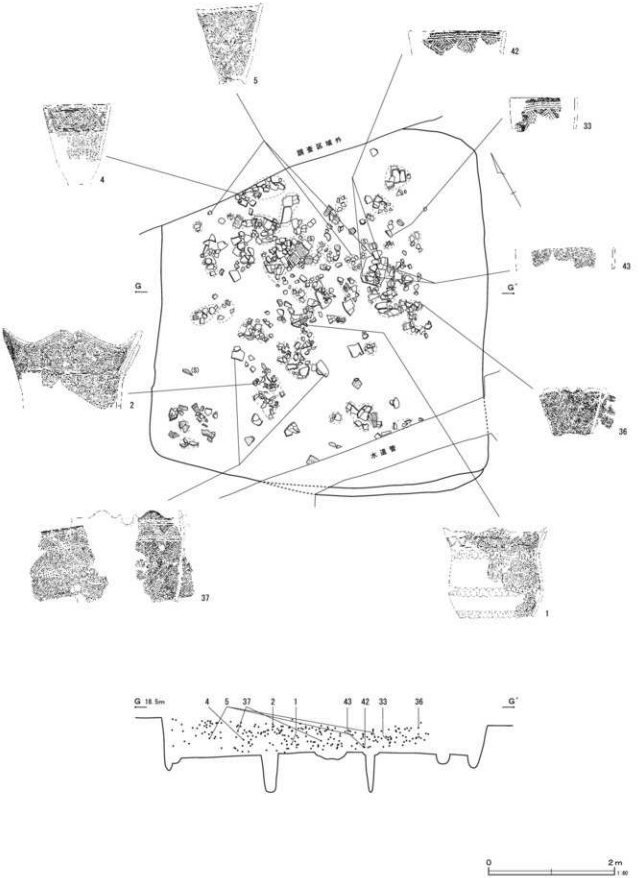
６は注口を有すると思われる深鉢である。注口部は欠損するが、注口に移行するふくらみを残存部上端にもつ。文様は単節RLを用いた多段ループの鋸歯構成で、反時計回りに施文する。

７は深鉢で、単節RL・LRを羽状に施文する。通常の単節斜縄文と末端のループ化した圧痕が認められることから別原体を用いたと考えられる。そのため５類５種Eとした。口縁部直下と成形痕上には、３本櫛による波状コンパス文を施す。成形痕上のコ



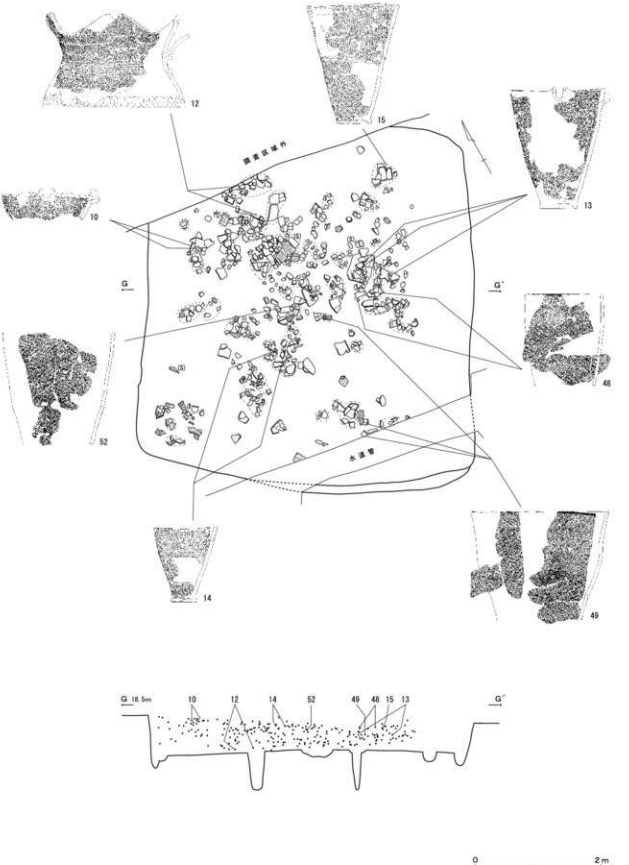


第57図　第４号住居跡遺物出土状況（1）



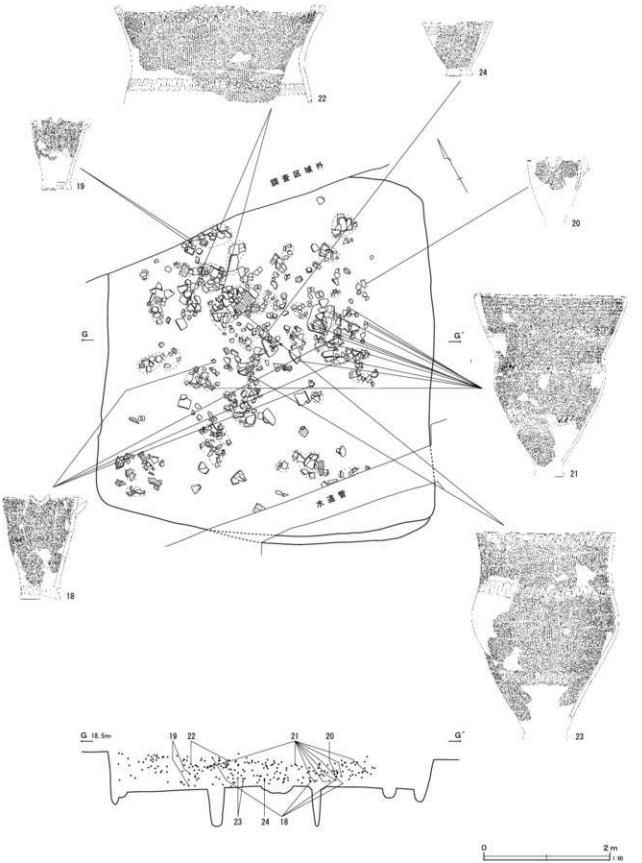
第58図　第４号住居跡遺物出土状況（2）

第59図　第４号住居跡遺物出土状況（3）

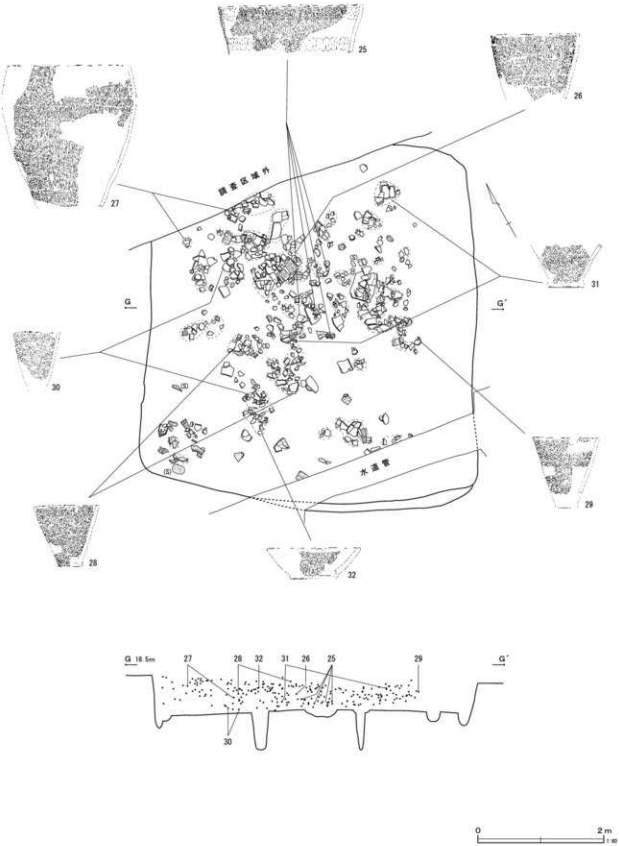


第60図　第４号住居跡遺物出土状況（4）

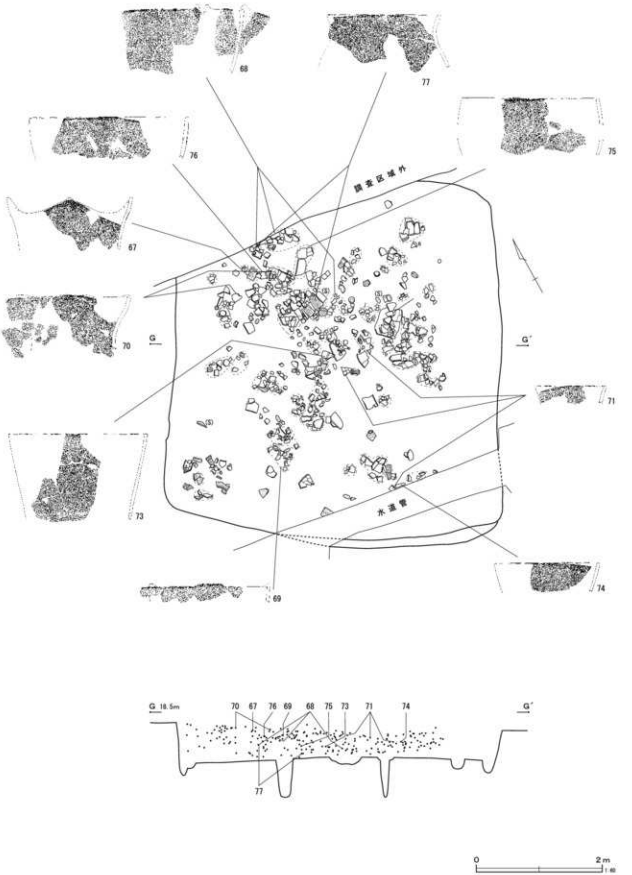
第61図　第４号住居跡遺物出土状況（5）



第62図　第４号住居跡遺物出土状況（6）



第63図　第４号住居跡遺物出土状況（7）



第64図　第４号住居跡遺物出土状況（8）

第65図　第４号住居跡遺物出土状況（9）

第66図　第４号住居跡遺物出土状況（10）

ンパス文は風化のため判然としない。地文、コンパス文ともに反時計回りでの施文である。成形時の粘土帯が処理されずに残存する。

8は深鉢で部分的であるが口縁部から底部まで残存する。単節RL・LRを羽状に施文する。底部は無文で緩やかな上げ底となる。底径は6.7cmである。

9はくびれずに開く深鉢である。文様は、器面全体に単節RL・LRを羽状に施文する。一部末端のループ化が観察できるが、明瞭なループ文ではないため5類5種Fとした。原体の開放端には他縛処理が行われていたと思われ、その圧痕が観察できる。

10は片口注口土器である。口縁部下にくびれをもつ可能性がある。文様は、口縁部直下に単節RLの多段ループ文を、その下部には正反の合A種R・Lを羽状に施文する。注口両脇には台形状突起がつく。ループ文は時計回り、正反の合は反時計回りで施文を行う。

11は片口注口である。文様は、正反の合A種R・Lを羽状に施文し、口縁部には半截竹管で山形文を施す。施文は、注口部分を正面とし反時計回りに行う。山形文は平行沈線がみられないので、半截竹管の背部分を用いたと考えられる。成形痕上に櫛を用いた上下移動と思われるコンパス文を施すが、風化のため判然としない。

12は双頭状口縁の深鉢で、口縁下でくびれ胴部にかけてふくらむ。波底部が外側へ大きく外反する。文様は、正反の合A種R・Lを羽状に、くびれ部には、単節RL・LRの多段ループ文を水平に施文する。それぞれ反時計回りで行う。最下端には5本櫛の上下移動と思われるコンパス文を施す。

13は注口を有すると思われる深鉢である。注口部は欠損するが、注口に移行するふくらみを残存部上端にもつ。正反の合A種R・Lを羽状に施文する。底部は無文の脚付底で、底径は8.7cmを測る。

14は小型深鉢である。文様は、全面に正反の合A種R・Lを羽状施文する。R方向の反縄の圧痕が深い。底部直上には末端が施文される。正面と対峙する位置に補修孔が認められる。内外面両方からの穿孔で先に内面から行われたことが観察できる。底部は無文の脚付底で、底径は5.8cmである。

15はくびれずに開く深鉢で、成形単位で文様を変える。上半は原体不明組紐を、下半には正反の合A種R・Lを羽状に施文する。口縁部直下と成形痕上には半截竹管による真正コンパス文を施す。成形時の粘土帯が顕著に残る。底部は、側面下半と同じ正反の合A種Rが施文されており、脚付を呈する。底径は7.6cmである。

16は口縁部下部で一端くびれ、胴部にふくらみをもつ深鉢である。文様は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。口縁部下部の中央部分は器面の剥離が認められる。

17は胴部下半で急にすぼまる深鉢である。上から見ると楕円形を呈する。下部の成形単位で文様を変える。上部は組縄の擬異節RL(RL)を、下部は組紐LLRRをそれぞれ反時計回りに施文する。胴部下半では成形時の粘土帯が顕著に残存し、器面には一部風化が認められる。底部は無文の上げ底で、底径は8.2cmである。

18は片口注口土器である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下と胴部2ヶ所、底部直上の4ヶ所に5本櫛による真正コンパス文を施す。注口基部には、組紐原体の先端部と思われる刺突痕をカーブに沿って施す。

19は小型の片口注口土器である。LLLLの組紐縄文を全面に施文し、口縁部直下と胴部成形痕上に6本櫛で真正コンパス文を施す。それぞれ反時計回りでの施文である。底部は無文で緩やかな上げ底を呈する。底径は6.5cmである。

20は小型片口注口土器であり、文様は原体不明の組紐縄文を全面に施す。器面の風化が著しく文様の残存状態も良好ではない。

21は胴部上半で一端くびれ、口縁部に向かって開く大型深鉢である。大型であるが器壁は非常に薄い。口縁部直下とくびれ部には単節RLを用いたループ

文を５段ずつ水平に施し、地文はRRLLの組紐縄文を施文する。３ヶ所の成形痕上には６本櫛で上下移動のコンパス文を施す。施文は全て反時計回りで行う。正面と対峙する位置に補修孔を１ヶ所穿つ。

22は口縁部下部にくびれをもつ大型深鉢である。口縁部には４単位の台形状突起をもつ。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下とくびれ部のやや下には４本櫛を用いた上下移動のコンパス文を施す。施文はそれぞれ反時計回りで行う。

23は胴部中位に最大径を有する深鉢である。器面にはRRLLの組紐縄文を施文する。口縁部直下と胴部２ヶ所の成形痕上には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。櫛は幅の異なるものを使用する。全て反時計回りでの施文である。

24は小型深鉢である。器面にはRRLLの組紐縄文を施文し、口縁部直下には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。それぞれ反時計回りでの施文である。底部は無文で緩やかな上げ底を呈する。底径は6.2㎝である。

25は深鉢の口縁部である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文し、口縁部直下と残存部下端に４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。施文はそれぞれ時計回りで行う。

26はくびれずに開く深鉢である。器面にはLLRRの組紐縄文を反時計回りに全面施文する。胴部に1ヶ所成形痕を確認する。

27は口縁下部に最大径をもち口縁部はやや内湾する深鉢である。文様は全面にLLRRの組紐縄文を反時計回りに施文する。胴部に３ヶ所の成形痕をもち、その部分では下段の文様施文後、上段の成形・文様施文となるため施文順序が逆転する。

28は小型の深鉢で、焼成は良好である。文様はLLRRの組紐縄文を時計回りに全面施文する。底部は無文の胴付底で、底径は5.7㎝である。

29は小型深鉢である。文様は全面に組紐縄文を施文するが、器面の風化が著しく組紐原体は不明である。拡大鏡を観察すると上半と下半で異なる種類の組紐原体を用いている可能性が考えられる。

30は小型の深鉢で、上から見ると楕円形を呈する。器面にはRRLLの組紐縄文を反時計回りに施文する。節の大きい組紐である。

31は深鉢の底部である。組紐縄文を反時計回りに施文するが、組紐原体は不明である。成形痕上に半截竹管を用いた上下移動のコンパス文を時計回りに施す。底部はわずかな上げ底であり、底面には側面と同じ組紐縄文を施文する。底径は9.0㎝である。

32は皿状を呈した浅鉢である。この遺跡からの浅鉢の出土は珍しくこの１点のみである。文様は組紐縄文を施文するが、組紐原体は特定できなかった。

33は小型深鉢で口縁部文様帯を有する。平行沈線を三重に施し、わらび手状と思われる文様や山形文を描出する。地文を施した形跡はみられない。

34は口縁部から胴部上半にかけて丸みをおびた深鉢で口縁部文様帯を有する。上下の区画線は二重平行沈線だが、区画内の山形文は単独平行沈線で描く。地文はLLLLの組紐縄文を全面に施文する。

35は４単位の波状口縁をもつ深鉢である。波頂部が残存していないので断定できないが、単頂波状口縁であろう。地文は原体不明の組紐縄文を全面に施し、口縁部文様帯は二重平行沈線で構成される。

36は小型の片口注口土器である。口縁部文様帯は上下に横位区画した中に二重平行沈線で山形文を配する。地文は組縄、RL(RL)の擬異節縄縄文を全面に施す。注口脇には台形状の突起を有する。半円状突起の変形であろう。

37は大型の片口注口土器である。注口部は欠損しているが、注口脇にみられる半円状突起の一方が残存しており、注口部へ続く高まりが観察できる。口縁部には、二重平行沈線で上下の横位区画と山形文を配した口縁部文様帯を有する。地文は正反の合A種最終撚りＬ方向の単一原体で施文する。胴部成形痕上と残存部最下端に、５本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

38は口縁部に４単位の台形状突起を有する深鉢で

ある。口縁部直下には二重平行沈線で横位区画線を持たない単独の山形文を配する。地文はLLRRの組組縄文を全面に施文する。胴部にある２ヶ所の成形痕上には４本櫛による波状コンパス文が施される。

39は小型深鉢の口縁部で三重平行沈線により口縁部文様帯を描出する。上下に横位区画線を配し、その中には山形文と円形文を組み合わせた文様を配する。地文は原体不明の組組縄文を全面に施す。

40はくびれずに開く深鉢であろう。櫛描による口縁部文様帯を有し、口縁部直下に山形文を配し、その下部に区画線を入れる。残存部下端の成形痕上には上下移動のコンパス文を施すが、これも文様帯描出と同じ４本櫛を用いる。地文は附加条で、単節RLを軸縄とし無節の縄R2本をＳ方向に附加したものと、その反対のLRにL2本をZ方向に附加したものを羽状施文する。附加縄は両原体とも逆方向附加である。圧痕は擬似正反の合A種となる。

41は小型深鉢である。細い棒状工具で口縁部文様帯を描出する。上下の横位区画内に山形文を配する。地文は原体不明の組組縄文を施す。

42は深鉢の口縁部で、二重平行沈線により口縁部文様帯を描く。わらび手文をモチーフとした構成と考えられる。地文は組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文と思われる。

43は深鉢胴部で櫛描きによる文様帯をもつ。口縁部文様帯の下位区画線であろう。地文はLLRRの組組縄文を全面に施す。

44は片口注口土器の口縁部である。文様は単節LRの多段ループ水平構成で、胴部には４本櫛で描いた真正コンパス文が２段施される。

45はくびれずに開く深鉢である。文様は成形痕より上部に１段２条のRL単節斜縄文を、以下は０段多条のRL単節斜縄文を施文する。

46もくびれずに開く深鉢である。０段２条RL単節斜縄文を全面に施文する。底部は無文の脚付底であるが、底面は幅狭工具のようなもので丁寧にみがかれた痕跡が残る。底径7.2cmである。胎土には繊維の混入が少なく、重量感のある土器である。

47は大型片口注口土器の注口部である。注口脇には三角状突起がつく。半円状突起の変形したものであろう。文様は正反の合A種R・Lを羽状に配する。R方向の末端には他縛痕が観察される。

48はくびれずに開く深鉢である。文様は、正反の合A種L方向と附加条R方向を羽状に施文する。附加条は単節RLを軸縄にし無節のR2本をＺ方向に附加したものである。附加縄は順方向附加である。口縁部直下と胴部成形痕上には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

49・50は器面全面に正反の合A種R・Lを羽状施文する深鉢である。49は大型で胴部にわずかな屈曲をもつ。50は小型深鉢の胴部である。

51は胴部にくびれをもつ深鉢である。器面には正反の合A種R・Lを羽状に施文し、菱形を創出する。くびれ部にある成形痕上には半截竹管による刺切文が施される。成形痕は施文前に丁寧になでた痕跡が観察できる。

52はくびれずに開くタイプの深鉢胴部である。文様は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。R方向の末端には他縛痕が確認できる。

53は深鉢の口縁部で、口縁部には４単位の台形状突起がつく。文様は、組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文を全面に施す。器面は一部風化がみられる。

54は小型の片口注口土器である。文様は組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文を器面全体に施文する。口縁部直下には６本櫛で真正のコンパス文を施す。

55はくびれにずに開く片口注口の深鉢である。注口部と底面、胴部の一部を欠損するのみで、ほぼ完形である。文様は、組縄のRL(RL)擬異節斜縄文を全面に施文する。底部は脚付底で、底面は無文と思われる。底径は7.8cmである。

56は組縄のRL(RL)擬異節斜縄文を全面に施文した深鉢である。口縁部から底部まで残存しており、文様の残存状態も良好である。底面にも側面と同じ文様を施す。脚付底で底径は6.2cmである。

57は口縁部直下で外側へ大きく外反する深鉢の口縁部である。大きな4連の角状突起をもち、その下部には突起を囲むように半円状区画線を幅広の3本櫛で描く。器形変換部には同じ櫛を用いて波状のコンパス文を施す。文様は、組縄のRL(RL)握異節斜縄文を全面に施文する。

58はくびれぎに開く深鉢で、組縄のRL(LL)握単節斜縄文を全面に施文する。口縁部直下と胴部成形痕上に半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。

59は小型深鉢の口縁部である。文様は組縄、LR(RL)の握異節斜縄文を施文し、口縁部直下には5本櫛で波状のコンパス文を描く。

60・63は組縄のRL(LL)握単節斜縄文を全面に施文した深鉢である。60の口縁部はやや内湾し丸みをおびている。63は深鉢胴部である。

61・62は組縄のRL(RL)握異節斜縄文を全面に施文する。61は胴部がふくらむ深鉢で、最もふくらんだ部分に5本櫛で波状のコンパス文を施す。62は胴部のくびれる深鉢で、くびれ部に成形痕を有する。

64・65は組縄のRL(RL)握異節斜縄文を全面に施文する深鉢の胴部である。65は小型である。

66は小型のコップ型をした土器である。器面に文様を施した形跡は認められない。整形もほとんど行われない粗製土器である。底部は無文の脚付底で、底径は5.9cmである。その器形と全面無文という形態は珍しく、この遺跡ではこの1点のみである。

67は4単位の単頂波状口縁である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。成形痕上には4本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

68は片口注口土器である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文し、口縁部直下と胴部成形痕上には半截竹管を用いた上下移動のコンパス文を施す。

69は4単位の台形状突起をもつ深鉢の口縁部である。LLRRの組紐縄文を施文した上に、4本櫛で上下移動のコンパス文を口縁部直下に施す。

70は胴部にくびれをもつ深鉢である。文様はRRLLの組紐縄文を器面全体に施文する。口縁部には4単位の台形状突起がつくが、なだらかで判然としない。

71は深鉢の口縁部で、口縁下端には半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。残存状態が悪く、文様は原体不明組紐かと思われるが断定できない。

72は口縁部下部でゆるやかにくびれる深鉢の口縁部である。文様は原体不明の組紐かと思われるが、組縄の可能性もある。4本櫛による上下移動のコンパス文を口縁部直下に施す。

73は大型深鉢で、文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下と胴部2ヶ所の成形痕上に4本櫛で上下移動のコンパス文を施文する。

74は深鉢の口縁部で器形の傾きから推測するとくびれを有する可能性も考えられる。文様は組紐縄文を施文するが、組紐原体は不明である。

75・76は口縁部が丸みをおびる大型の深鉢である。文様は原体不明の組紐縄文を全面に施文する。

77は口縁部直下でいったんくびれ、胴部に最大径をもつ深鉢である。口縁部は外反する。文様は原体不明の組紐縄文を器面全体に施文する。

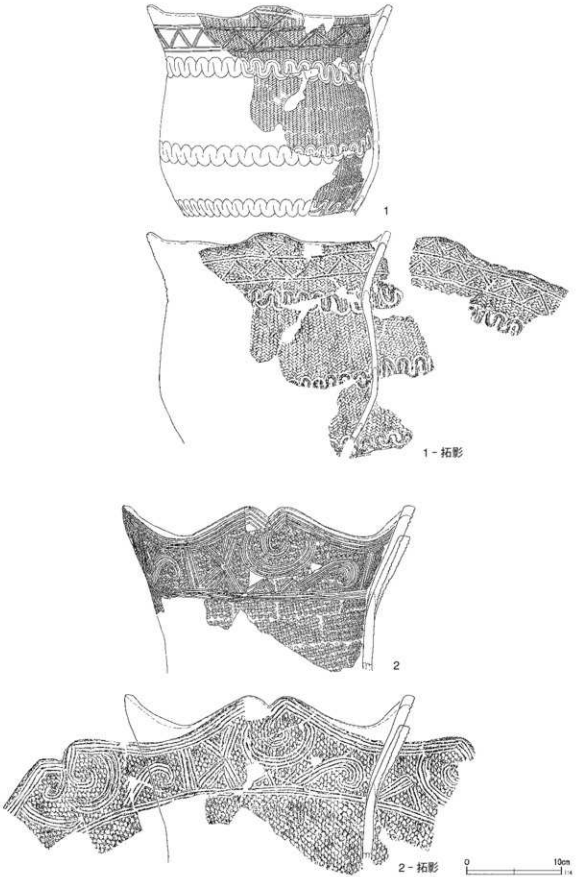
78・79は小型の深鉢で、原体不明の組紐縄文を全面に施文する。79は口縁部に幅広の無文帯をもつ。成形時の粘土帯が残存しており、器面調整は行っていない。

80は深鉢の胴部である。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施文するが、下位のコンパス文を境に上下で異なる原体を使用する。形成痕上に、半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。

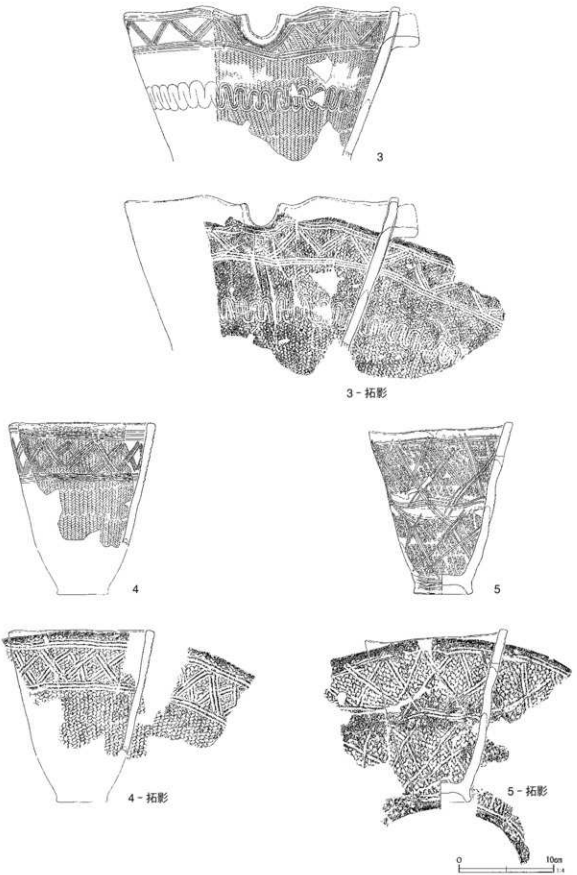
81は胴部に最大径を持つ深鉢である。文様はLLRRの組紐縄文を施し、成形痕上には、半截竹管で、上下移動のコンパス文を施す。残存部下端にもコンパス文が施文されるが、形態などは不明である。

82は深鉢胴部で、文様は組紐縄文を全面に施文するが、組紐原体は不明である。成形痕上には半截竹管で上下移動のコンパス文を施す。

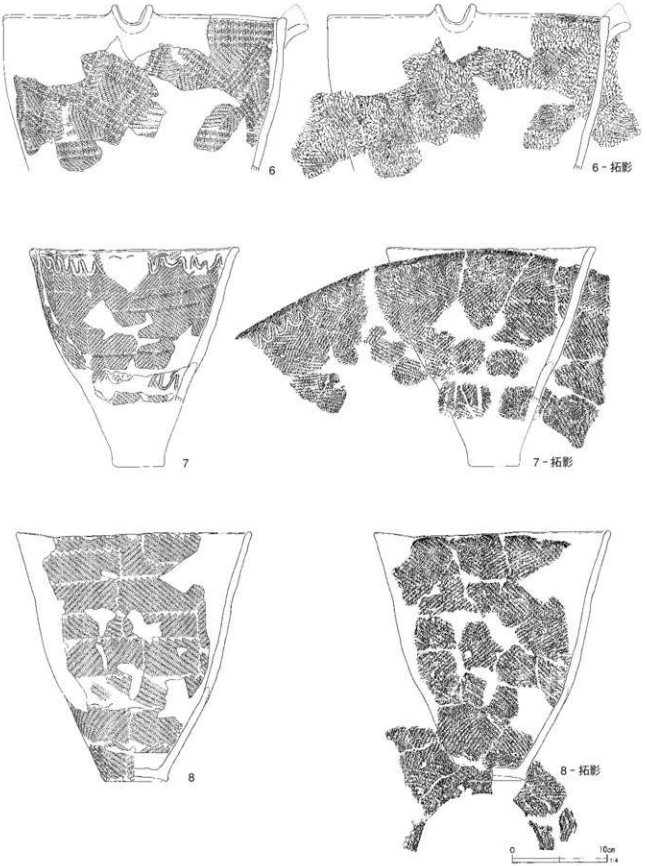
83はくびれをもつ深鉢の胴部である。文様は、原体不明の組紐縄文を器面全体に施文する。成形痕の



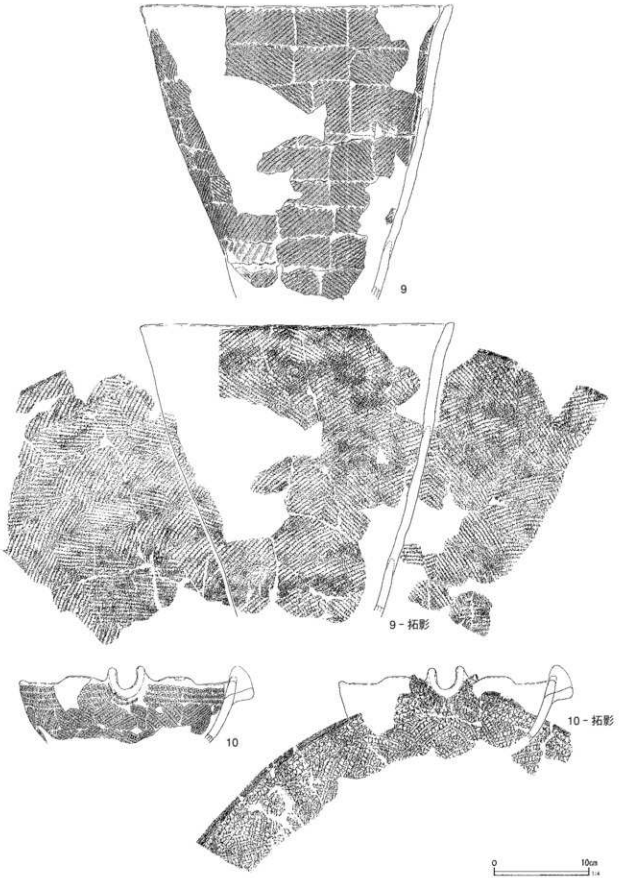
第67図　第４号住居跡出土遺物（1）



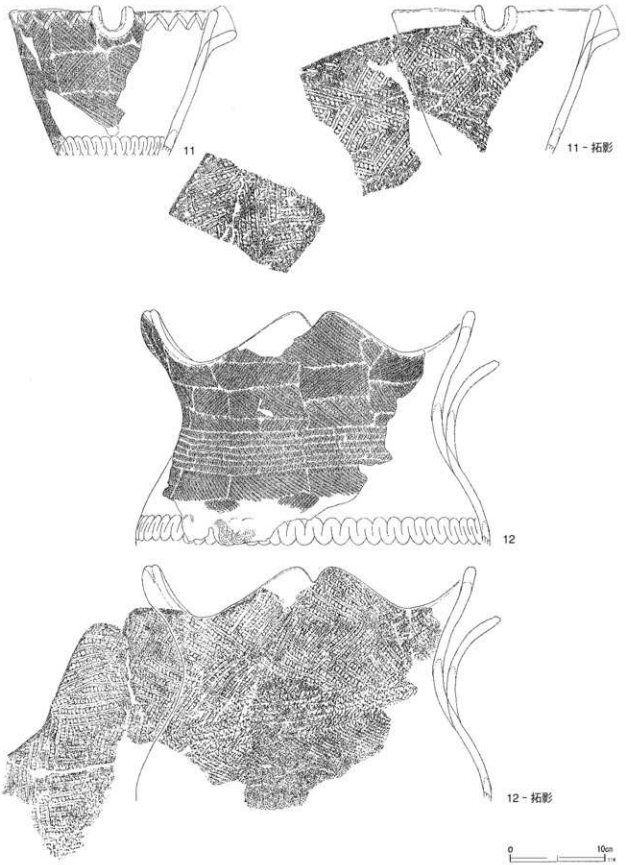
第68図　第４号住居跡出土遺物（2）



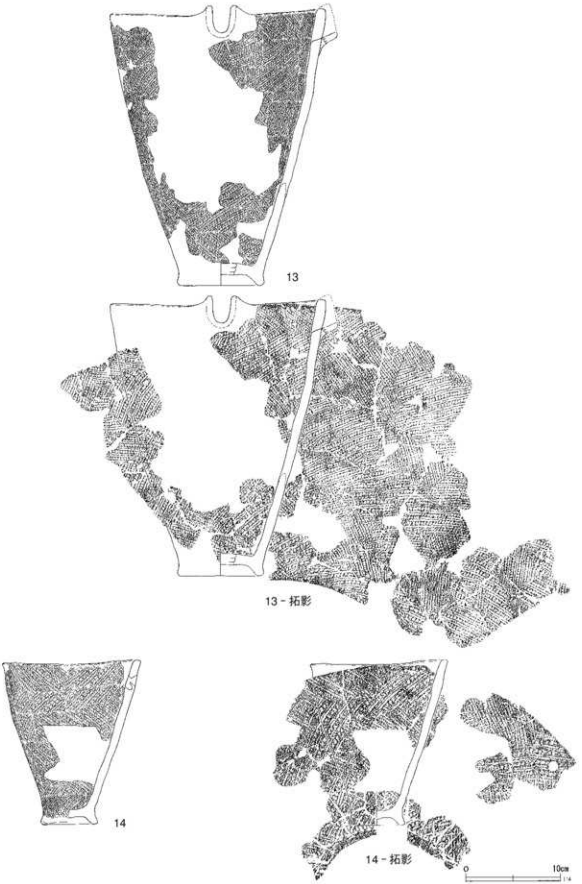
第69図　第４号住居跡出土遺物（3）



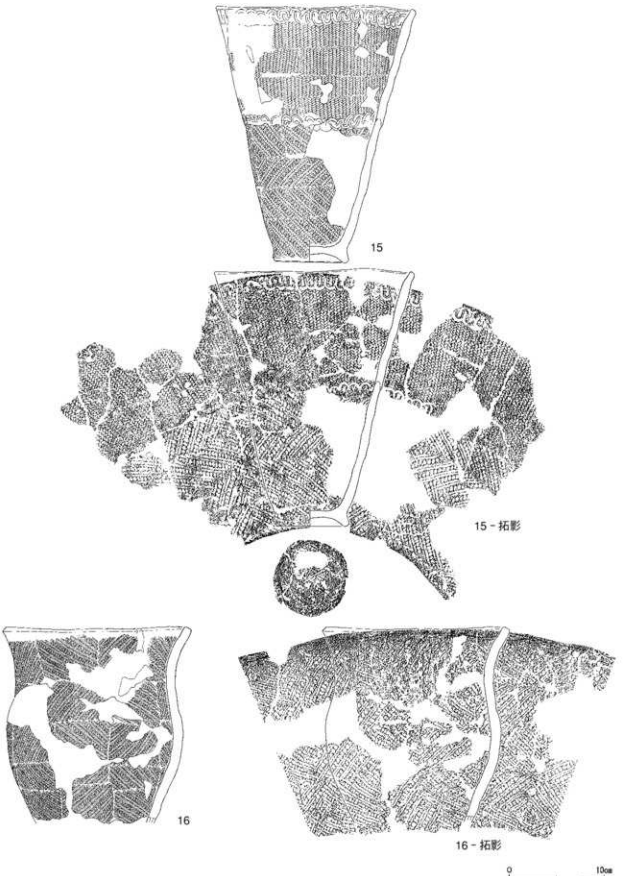
第70図　第４号住居跡出土遺物（4）



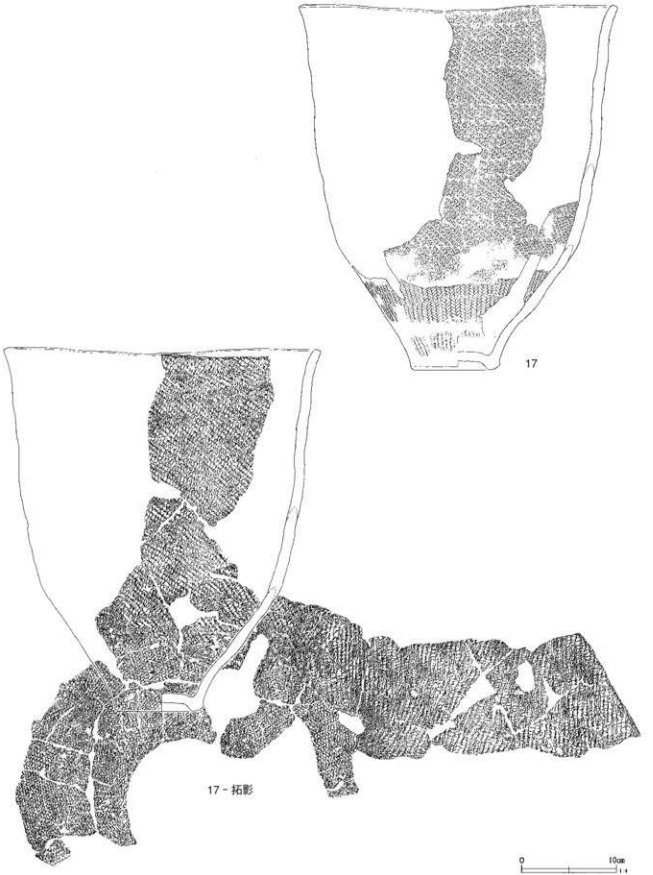
第71図　第４号住居跡出土遺物（5）



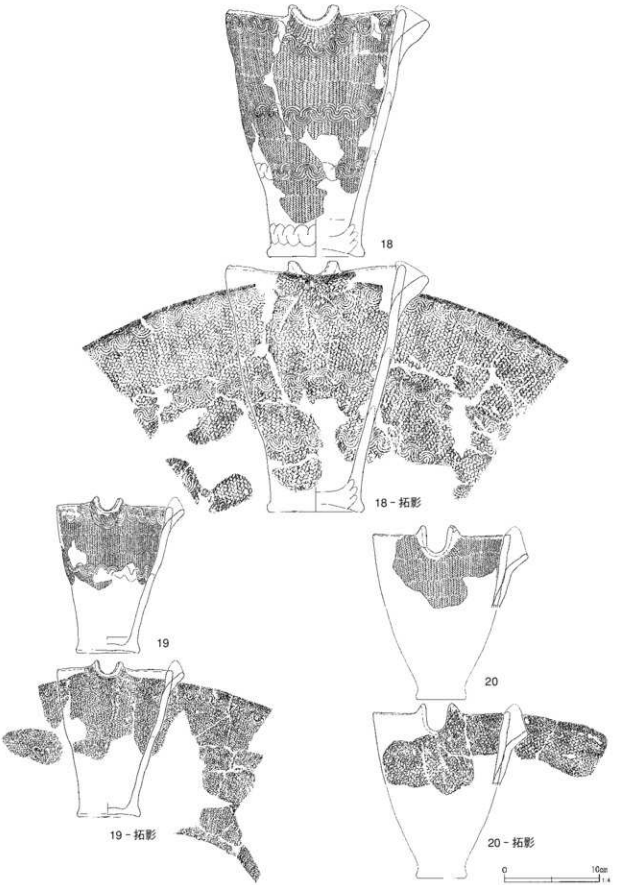
第72図　第４号住居跡出土遺物（6）



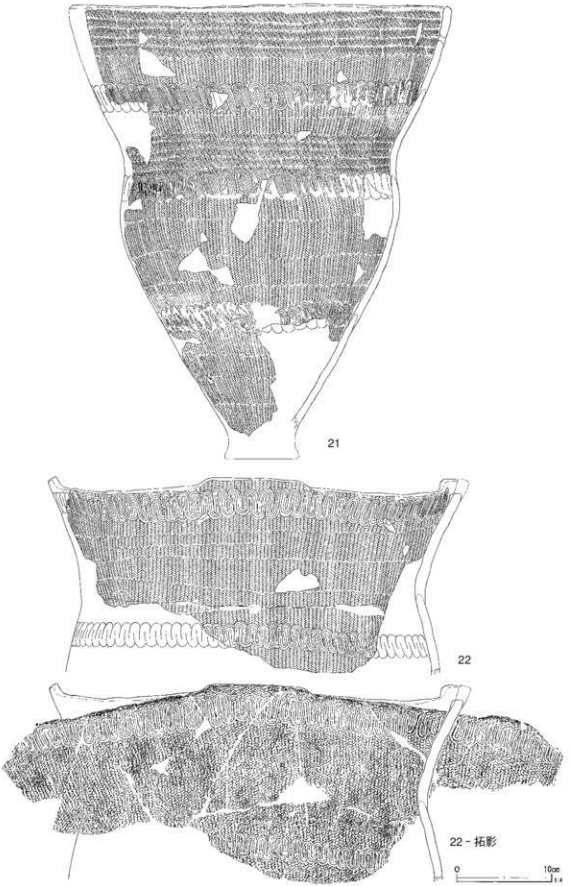
第73図　第４号住居跡出土遺物（7）



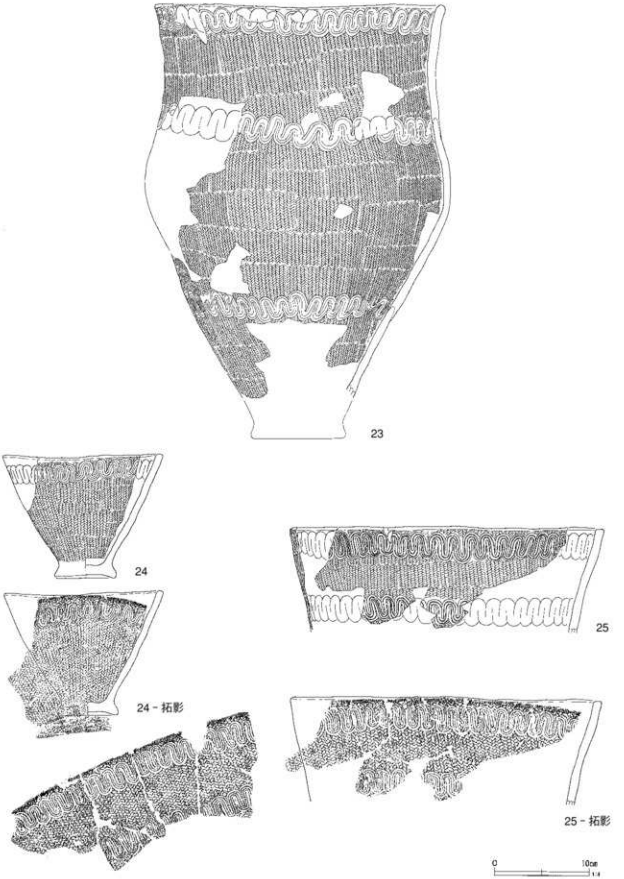
第74図　第４号住居跡出土遺物（8）



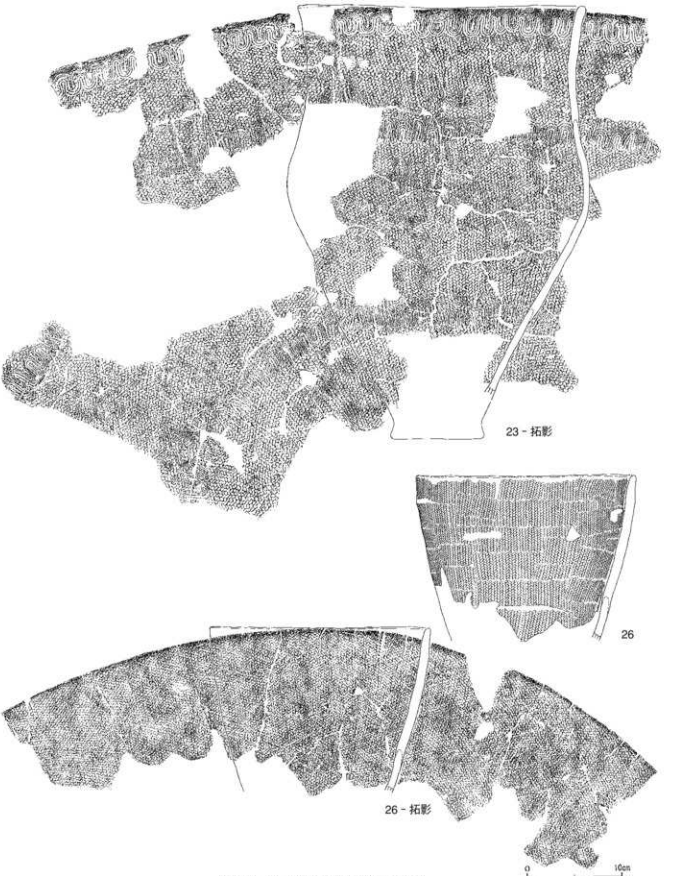
第75図　第４号住居跡出土遺物（9）



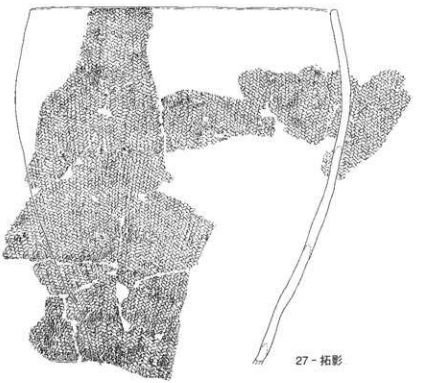
第76図　第４号住居跡出土遺物（10）



第77図　第４号住居跡出土遺物（11）

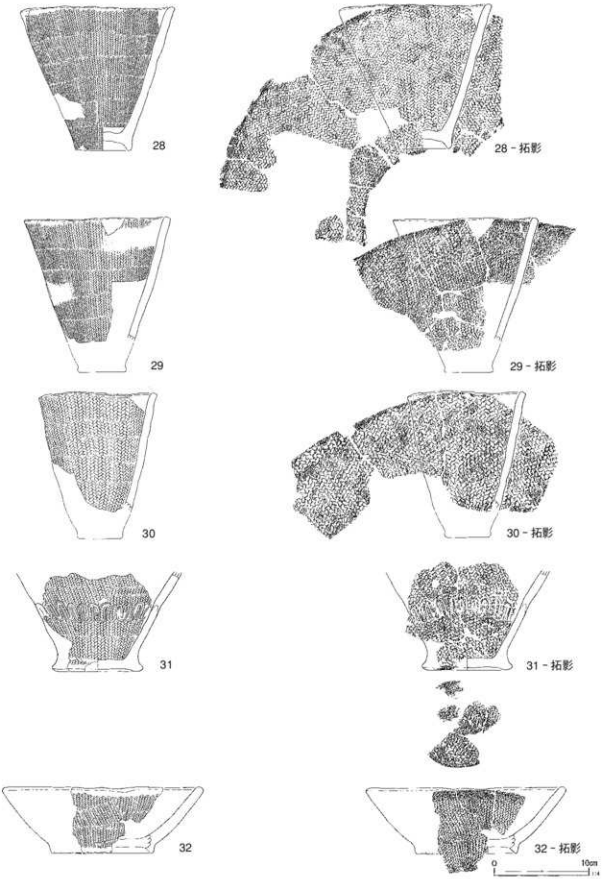


第78図　第４号住居跡出土遺物（12）

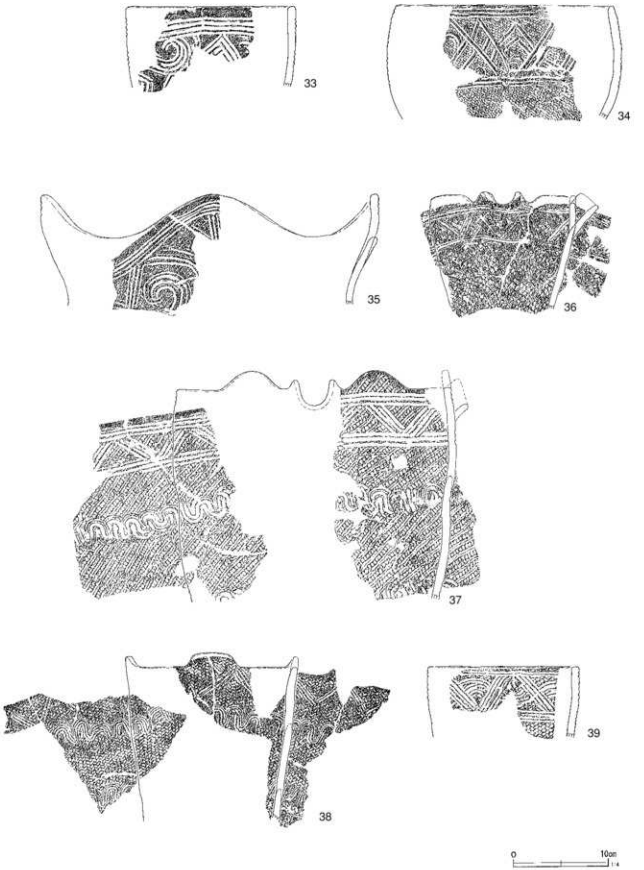


0　10cm
1/4

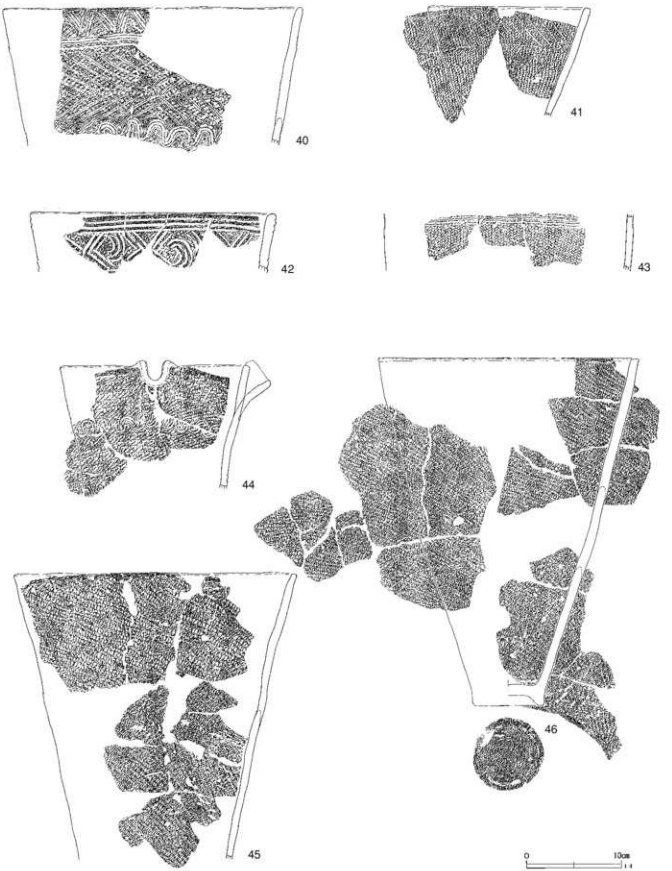
第79図　第４号住居跡出土遺物（13）



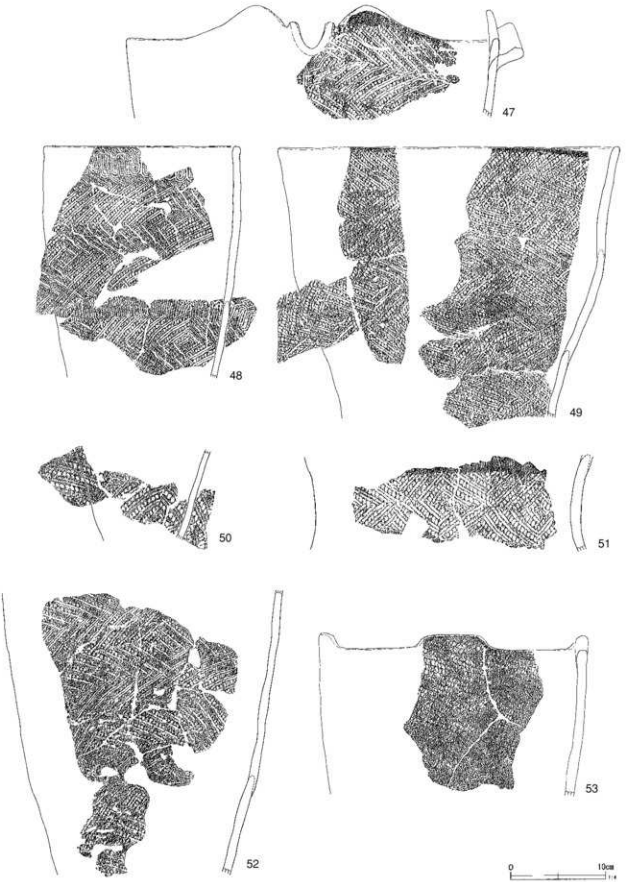
第80図　第４号住居跡出土遺物（14）



第81図　第４号住居跡出土遺物（15）

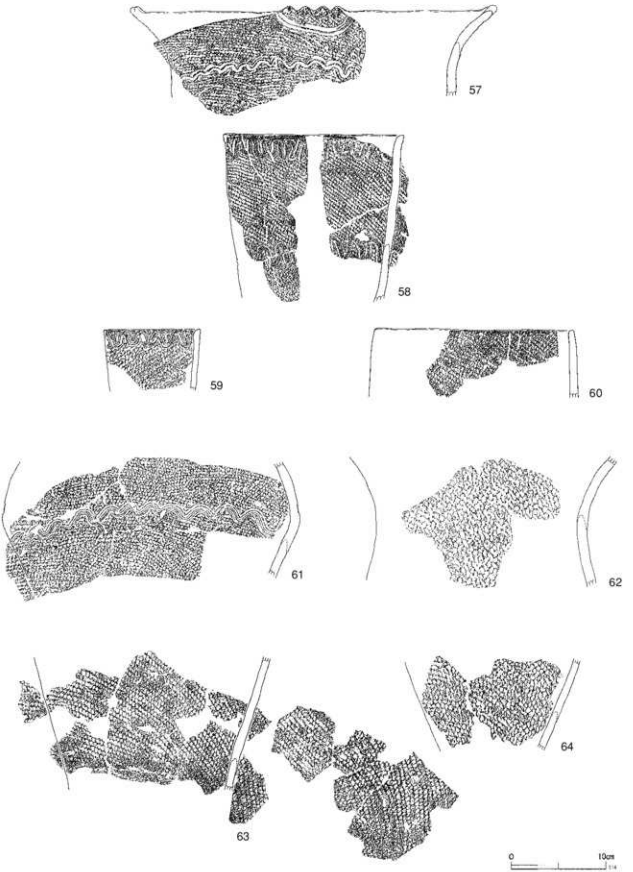


第82図　第４号住居跡出土遺物（16）

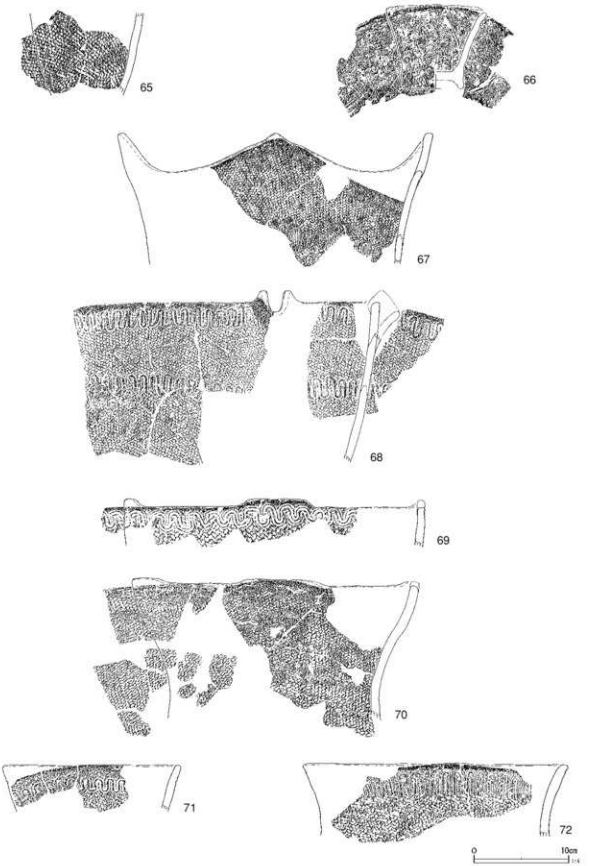


第83図　第４号住居跡出土遺物（17）

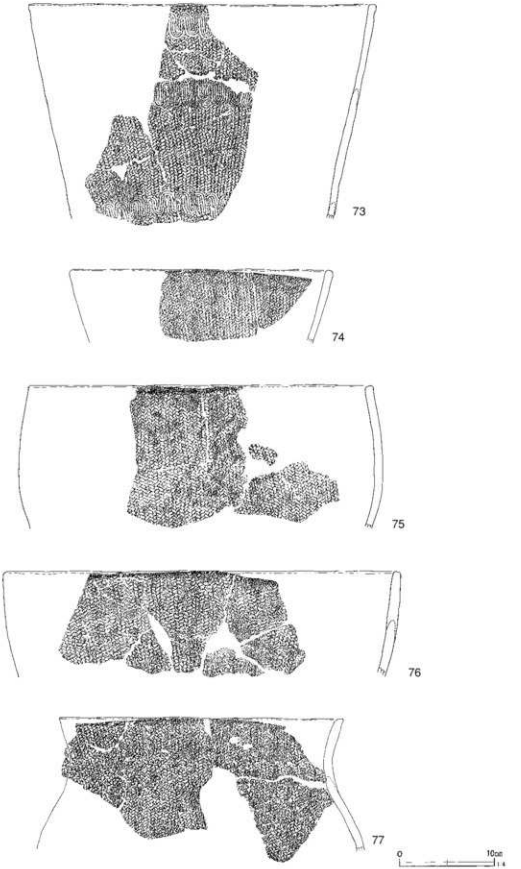
第84図　第４号住居跡出土遺物（18）



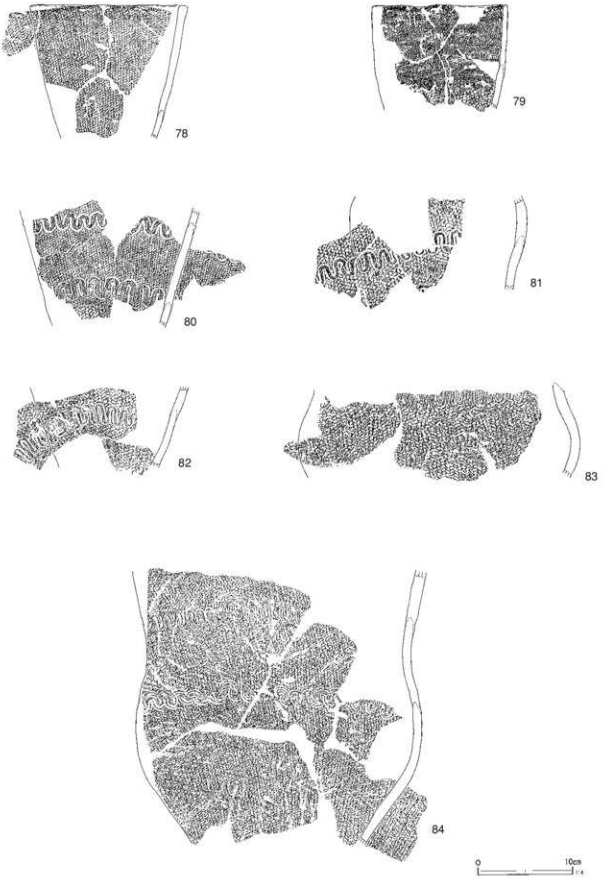
第85図　第４号住居跡出土遺物（19）



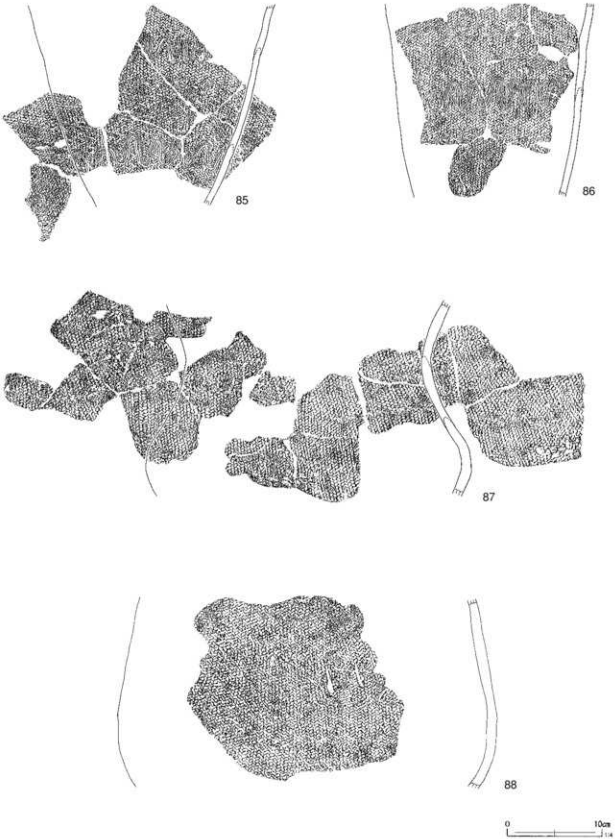
第86図　第４号住居跡出土遺物（20）



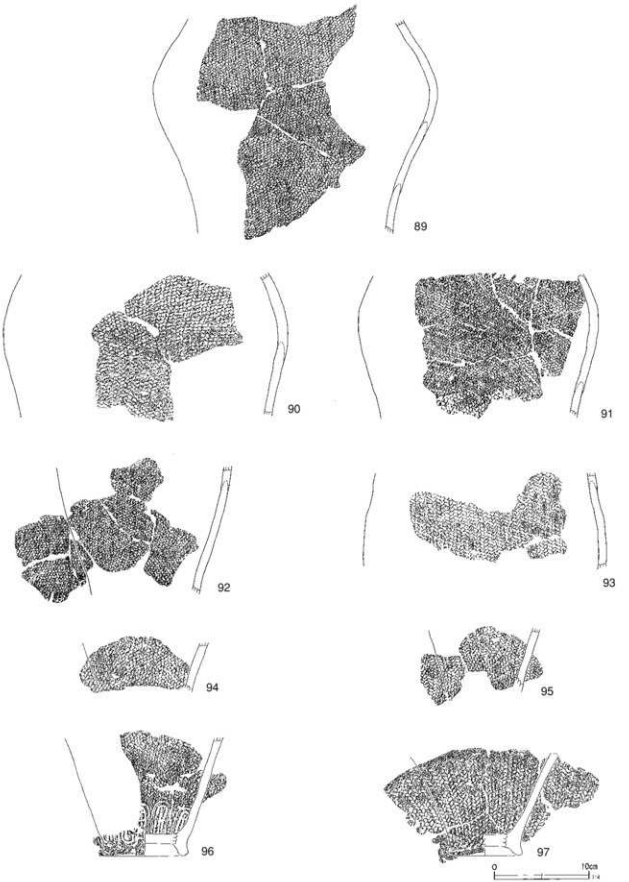
第87図　第４号住居跡出土遺物（21）



第88図　第４号住居跡出土遺物（22）



第89図　第４号住居跡出土遺物（23）



第90図　第４号住居跡出土遺物（24）

部分で破損しており、５本櫛で上下移動のコンパス文を施した痕跡がうかがえる。

84は胴部でくびれ、下半に最大径をもつ大型深鉢である。文様はLLLLの組紐縄文を全面に施文する。２ヶ所の形成痕上には５本櫛による上下移動のコンパス文が施される。下段のコンパス文は真正にちかい。

85・86はくびれずに開く深鉢の胴部である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。形成痕が85は２ヶ所、86は１ヶ所確認でき、その上には５本櫛で波状のコンパス文を描く。コンパス文は上下移動幅が大きい。

87は胴部で屈曲し、下半にふくらみをもつ大型深鉢である。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施す。

88はふくらみを持つ大型深鉢の胴部である。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施す。

89は胴部にふくらみをもつ大型深鉢である。文様は組紐RRLLとLLRRを用いて、上下交互施文する。成形痕は２ヶ所確認できる。

90は胴部にふくらみをもつ大型深鉢である。文様は成形痕を境に上下で異なり、上部は原体不明組紐縄文を、下部は、組縄のRL(RL)擬異節斜縄文をそれぞれ施文する。

91は胴部にふくらみをもつ大型土器で、文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。

92はくびれずに開く深鉢で、文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文すると思われるが、組縄のRL(RL)擬異節斜縄文の可能性もある。

93はくびれをもつ深鉢と考えられる。文様はLLRRの組紐縄文を全面に施文する。

94・95は小型深鉢の胴部で、94は原体不明の組紐縄文を、95はLLRRの組紐縄文をそれぞれ施文する。

96・97は深鉢底部である。底面は欠損しているため底径・文様の有無は不明であるが、脚付底であろう。96はLLRRの組紐縄文を施文し、底部直上に４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。底径は8.3cmである。97は原体不明の組紐縄文を施文する。残存部上端の形成痕上に櫛でコンパス文を施すが形態は不明である。底径は7.3cmである。

98・99は１類１種Gで、刻みのない平行沈線で文様帯を描き、地文は施さない。

100～102は１類２種Aで、刻みを有する平行沈線で文様帯を描く。地文は、101が０段２条の単節RLを施文する。100・102は、縄文が施されているが原体特定不能である。

103～108は１類２種Bで、単独平行沈線によって文様帯を描く。103・105は、縄文が施されているが小破片のため原体の特定には至らなかった。104・108は、地文に原体不明の組紐を施す。104は、器面の風化が著しく受熱痕が確認できる。度重なる使用の痕跡と考えられる。106・107は、同一個体で格子状の竹管文を全体に配する。地文は組紐LLRRで、下端には半截竹管による刺切文を施す。

109～164は１類２種Cで、重施文平行沈線によって文様帯を描く。109～116は、波状口縁である。波頂部形態は、109・111・113・115・116が双頭、110・114が単頭、112は不明である。117・118は注口であり、118は注口部を欠損するが左上端に注口へ移行するふくらみをもつ。119は、口縁部に角状突起を有する。120は、巨大な半円状突起である。口縁端部から突起のみが脱落した状態であり、器形に沿って渦巻上の竹管文を施す。121は、口縁部に高まりが確認できることから突起がついていたと思われる。134～136は、同一個体で、原体不明組紐を地文とする。137・138は、同一個体で地文にはRRLLの組紐縄文を施文し、口縁下部に山形竹管文を配する。142・143は、同一個体で組紐RRLLを地文とし、横位区画線の直下には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。159・160は、葉脈状の竹管文を施す。地文は、140・152が正反の合A種R・Lを、139・147・163が組縄の擬異節RL(RL)を用いる。116・157・158も組縄を使用すると思われるが断定はできない。117・126・129・130・137・138・142・143・145・149・150・155・164は組紐RRLL

で、110・123・146・154・156は組紐LLRR、124は組紐RLRLを施文する。109・111・113・118・121・122・125・131・133〜136・141・148・153・160・161は組紐原体不明である。162は組紐と思われるが定かではない。上記以外は、原体を特定できなかった。コンパス文を施すものは、141〜144・160の5点で、141・160が櫛による真正、142〜144が櫛の上下移動である。

165〜171は1類2種Dで、全て櫛によって文様帯を描く。165は、波頂部形態不明の波状口縁で、組紐LLRRを地文とする。166は注口である。口縁部に櫛で波状コンパス文を施す。地文は、縄文が施文されるがその種別は特定不能である。167は単節LRを、168・170・171は組紐LLRRを、169は、原体不明組紐をそれぞれ地文とする。

172〜195は1類3種で、特殊文様を描く。172〜179は、単節RLによる多段ループ鋸歯文中にV字状竹管文を配する。180〜184は、同一個体であり、無節Lを施文後、半截竹管で器面全体にわたり不規則に沈線を配する。黒浜的要素がうかがえる。185〜188は、山形やV字状の竹管文を器面に施す。地文は、185が組紐LLL、186が原体不明組紐、187が単節RL、188が組縄の擬異節RL(RL)を施文する。185〜187は櫛による上下移動のコンパス文を施す。189〜195は、平行沈線で山形のタガ状文を巡らす。成形痕上に施されていることからコンパス文と同義の文様と考えられる。189は、山形文を境に地文を変えており、上部は正反の合A種R・Lを羽状に、下部は原体不明組紐を施文する。190は組紐LLLL、191・194・195は組紐RRLL、192・193は組紐LLRRを地文とする。

196は4類種で、貝殻押圧文を施す。背面の腹縁部に近い部分を使用し、施文は横や斜め方向に規則的に施す。

197〜199は5類1種で、無節斜縄文を施す。197・198は、無節Lを、199は、成形痕以上に無節Lを下半には単節RLをそれぞれ施文する。

200〜224は5類2種Daで、多段ループ水平構成をとる。200は、口縁部に角状突起をもつ。文様は単節RL・LRで多段ループの羽状構成をとる。多段ループは同撚り原体で構成することが多く、撚り方向の異なる原体を用いることは珍しい。222・224も同様に単節RL・LRで多段ループ羽状構成をとる。211・212は、口縁部に単節RLの環部を3段水平施文し、その下部に正反の合A種を配する。211はL方向のみ確認でき、212はR・Lで羽状施文する。213・220は、上段にループ文の環部のみを水平に施し、下段は組紐縄文を施文する。213は単節RLに組紐LLRR、220は単節LRに原体不明組紐である。ループ文の使用原体は、200・222・224の3点が単節RL・LRの両方を、201・214・220の3点が単節LRを、その他の19点は単節RLを用いる。コンパス文を施すものは、201・215〜217の4点で、201が半截竹管による上下移動、215・216が櫛による上下移動、217は櫛を用いるが形態は不明である。

225〜235は5類2種Dbで、多段ループ鋸歯構成をとる。225は、単頭波状口縁で、226は注口である。229・230は、成形痕上に櫛による上下移動のコンパス文を施す。232は、単節RLを用いてループ文を描出するが、環部直下を他搏しているのが確認できる。下端にはRRLLの組紐縄文を施文する。ループ文の使用原体は、225・227・230の3点が単節LRで、それ以外の8点は単節RLを用いる。

236〜243は5類2種Eで、上下幅等間隔細広ループ文を施す。236は、波状口縁で波頂部は双頭形を呈すると思われる。単節RLのループ文を施文するが、接合単位で同種別原体を用いる。237は、注口で、単節RL単段ループ文を全面に施文する。ループ文の使用原体は、243が単節RL・LRを用い羽状構成とする以外は、全て単節RLを用いる。239の下端には櫛によるコンパス文が施されているが形態は不明である。

244〜283は5類2種Fで、単節斜縄文を施す。244は、波頂部形態不明の波状口縁である。245は、

左上端に注口部へ移行するふくらみをもつ。注口部は欠損する。０段２条の単節LRを用いての施文である。246は、口縁部に台形状突起を有する。248は、右端に補修孔をもつ。254・259は、成形単位で施文を変える。254は、櫛の真正コンパス文の上部には単節RL・LRを羽状に、下半にはRRLLの組紐縄文を施す。259は、上半に単節RLを、下半に正反の合A種Lをそれぞれ施文する。260・265・267は、同一個体で、RLの単節斜縄文を施文する。263は、単節RLを施文するが、節が丸く大きいため０段２条と考えられる。使用する原体は、248・249・252～254・272～282の16点が、単節RL・LRを羽状に、246・247・250・256・259～269の15点が単節RLを用いる。それ以外の244・235・251・255・257・258・270・271・283は、単節LRを使用する。コンパス文を施すものは、247・254～258の６点であり、247は半截竹管の上下移動、254・255は櫛の真正、256は櫛の上下移動、257・258は櫛であるが形態不明である。

284～287は５類４種で、反の縄文を施す。284～286は、同一個体で１段Lを環部のみRLに撚り、以下を強制的に反撚LLとした原体で多段ループ様に施文する。284は、口縁部に台形状突起を有し、下半には、組縄のRL(RL)擬異節斜縄文を施文する。287も同様に、１段Lを環部のみRLに撚り、以下を反撚LLとし、多段ループ様に施す。

288～340は５類５種で、異条斜縄文を施す。332のR方向以外は、全て一般的な正反の合であるA種となる。332のR方向は、正縄が前々段反撚のD種と思われるが断定はできない。288は、注口部をもつ。289は、口縁部右端にわずかな高まりが確認できることから突起がついていたと思われる。293は、正反の合A種Lと単節RLで羽状施文する。294は、右端に補修孔をもつ。孔はわずかに貫通する。299は、反縄の圧痕が深く附加条的様相がうかがえる。300は、表出する節が大きく丸みを帯びていることから、０段２条の原体と考えられる。305のR方向には、一部折り返し末端痕が確認できる。313は、成形痕を境に施文を変えており、上半は原体不明組紐、下半は正反の合A種Lを施文する。成形痕上には上下移動のコンパス文を櫛で施す。332は、正反の合A種Lと正反の合D種と思われるRとで羽状施文する。333は、正反の合A種R・Lを羽状に施文するが、反縄の圧痕が深いことから附加条技法を用いた可能性も考えられる。R方向の反縄は節の大きさから０段２条である。施文方法は、302・308の２点がR方向、290～293・297・313の６点がL方向で、それ以外の全てはR・L方向を用いた羽状施文である。コンパス文を施すものは、290・291・303～316の16点である。290・303・304は半截竹管による上下移動、305・306は竹管の刺切文である。307～309は櫛による真正、291・310～314の６点は櫛の上下移動、315は櫛の刺切文、316は櫛によるが形態不明である。

341～397は５類６種で、組縄縄文を施す。341・342は、同一個体で双頭波状口縁を呈する。組縄、RL(LL)の擬単節斜縄文を施文し、口縁部直下と342下端には櫛による上下移動のコンパス文を施す。343は、波状口縁であるが波頂部形態は不明である。組縄、RL(LL)の擬単節斜縄文を全面に施文する。344は、半円状突起であり、組縄のRL(LL)擬単節斜縄文を施文する。349は、組縄、RL(LL)の擬単節斜縄文を施文し、口縁部には３本櫛で上下移動のコンパス文を施す。器面左上方に補修孔をもつ。器壁が薄いことから小型土器の破片と思われる。356は組縄、RL(LL)の擬単節斜縄文を施文するが、整然とした条のため一見すると撚り戻しを行った３段の単節RLL、０段多条に見間違える。358・359は、同一個体でRL(RL)の擬異節斜縄文を施文し、竹管による上下移動のコンパス文を施す。383は、別種原体を用いて施文を行う。上半にはRL(LL)擬単節縄文を、下半にはLLRRの組紐縄文を施文する。385～389は、同一個体でRL(LL)の擬単節斜縄文を施文する。393は、擬単節RL(LL)と擬複節LR(LL)の組縄縄文を施文

すると考えられる。394は、右上端にわずかなふくらみが確認できることから注口部への移行部分と思われる。確認できた組紐原体は、擬複節LR(LL)、擬単節RL(LL)、擬異節RL(RL)、LR(RL)の４種類である。擬複節LR(LL)は393の右端に観察できるが、断定はできない。擬単節RL(LL)は、341～344・348・349・353・355・356・360・362・369・373・375・378～383・385～390・393の27点であるが、362・382は断定できない。擬異節RL(RL)は、345～347・351・352・354・357～359・361・363・365・368・370～372・374・376・377・384・391・392・394～397の26点であるが、345・351・361・371・376・392・394の７点は定かではない。擬異節LR(RL)は、350・364・366・367の４点であるが、366・367は器面が風化しており判然としない。

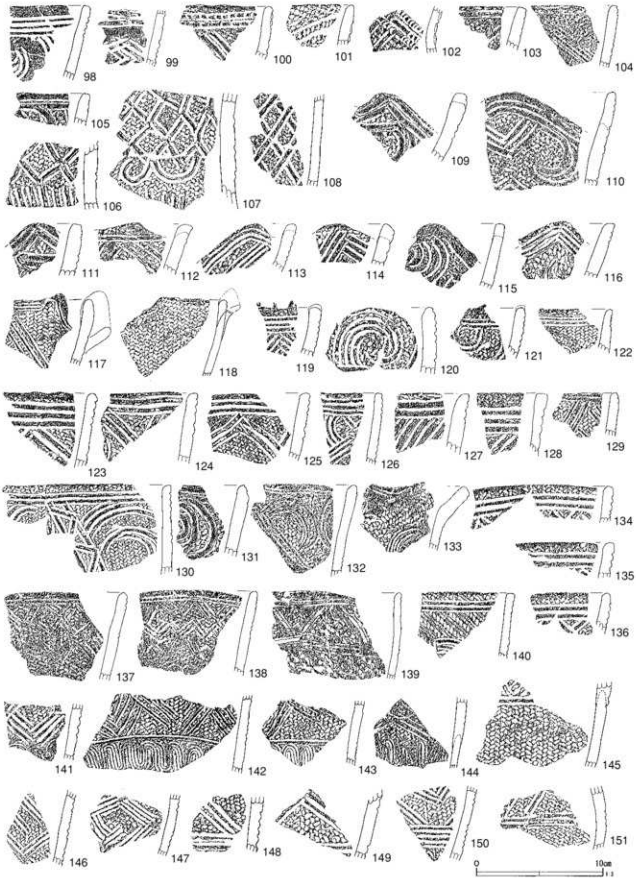
コンパス文を施すものは、341・342・345～353・357～369の24点である。その形態は、357が半截竹管による真正、358・359は竹管の上下移動、360は竹管の波状、361は竹管の刺切文である。櫛によるコンパス文は、345～347・362・363の５点が櫛の真正、341・342・248～350・364～366の８点が櫛の上下移動、351～353の３点が櫛の波状、367が櫛の刺切文、368・369は櫛であるが形態不明である。

398～404は５類９種で、附加条縄文を施す。398は、無節Rを軸縄とし、無節の縄L1本をS方向に附加したものを施文する。左上部はその反対撚り原体を用いる。附加縄は順方向附加で、圧痕は１段２条のようにみえる。399・400は、同一個体で、軸縄は見えないが、無節L2本をZ方向にに附加する。附加縄の圧痕のみ観察されることから正反の合に似せた附加条である。櫛による真正コンパス文を施す。401は、単節RLを軸縄とし、無節の縄R2本をS方向に附加したものを左半に、RLにL2本をZ方向に附加したものを右半にそれぞれ施文し、羽状構成をとる。前者は正反の合A種Lと似た圧痕となり、後者は結果として１段４条となる。402は、単節RLを軸縄とし０段の縄R2本をS方向に附加したものを右半に施文し、左半は無節の縄L1本をZ方向に附加したものだが軸縄は不明である。403は、単節RLを軸縄とし、無節の縄R2本をS方向に附加したものを上半に施文し、下半は判然としないがその反対撚りで附加縄１本の原体を使用すると思われる。404は、上半に単節RLを軸縄とし、無節の縄R2本をS方向に附加したものを、下半には単節RLに無節のR2本をZ方向に附加したものを施文する。上半は正反の合A種Lと似た圧痕となる。附加方向の違いで羽状を作出する。

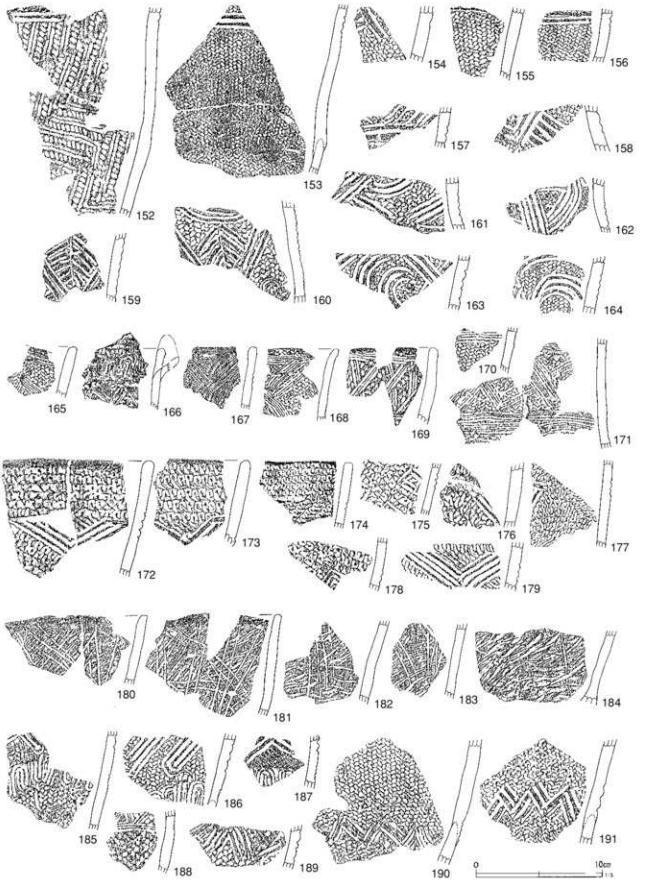
405～597は５類10種で、組紐縄文を施す。405・406は、波状口縁で405の波頂部は単頭形を呈する。407～412は注口を有する。414は、左端に補修孔を穿つ。口縁部右端にわずかな高まりと器面右上部にふくらみが確認できることから本来は注口がついていたと考えられる。441も口縁部右端にわずかな高まりが確認できたので突起がつくのであろう。453・480・551は、異なる種類の組紐原体を用いて施文を行う。453は、成形痕上に施されたコンパス文(竹管の真正)を境に上部は原体不明組紐、下部は組紐LLRRを用いる。480は、上段に原体不明組紐、中段以下は組紐RRLLを用い、境目には櫛による上下移動のコンパス文を施す。551は組紐RRLLと原体不明組紐を上下交互に配する。465は、異種原体を用いて施文しており、上半は組紐LLRRを、下半は組縄を用いるが組縄原体は不明である。下端に櫛による真正コンパス文を施す。474・476は、成形単位で異種原体を用い施文を行う。成形痕以上に単節RLの水平多段ループ文を、下半には原体不明の組紐縄文をそれぞれ施文する。成形痕上には櫛の上下移動コンパス文を施す。588・589は同一個体であり原体不明の組紐縄文を施す。

本住居跡では一応全ての組紐原体が確認できた。

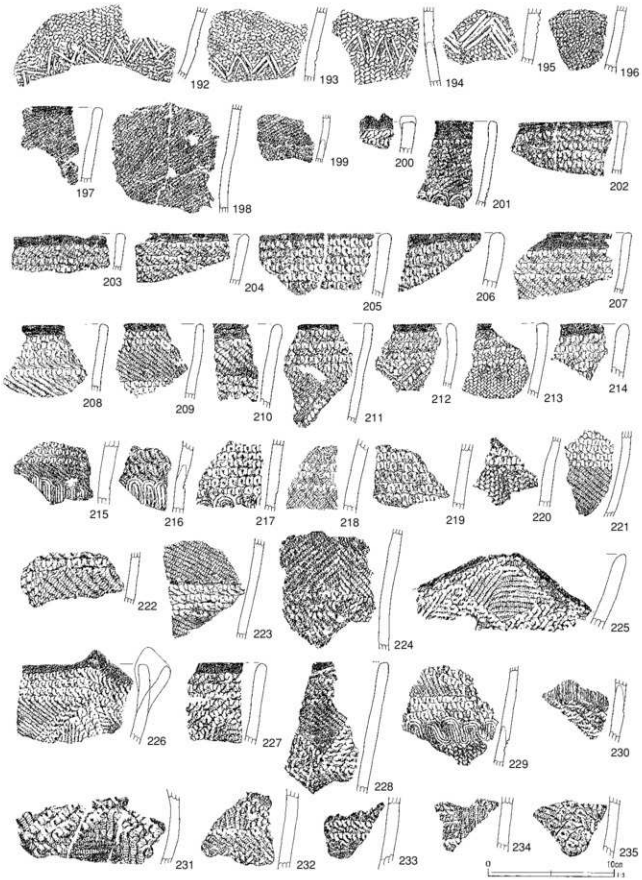
RRLLは、406・409・413・419・439～442・458・459・475・477・479～482・485・488・491・495・498・502・506・509～513・516・531～551の50点で最も多い。



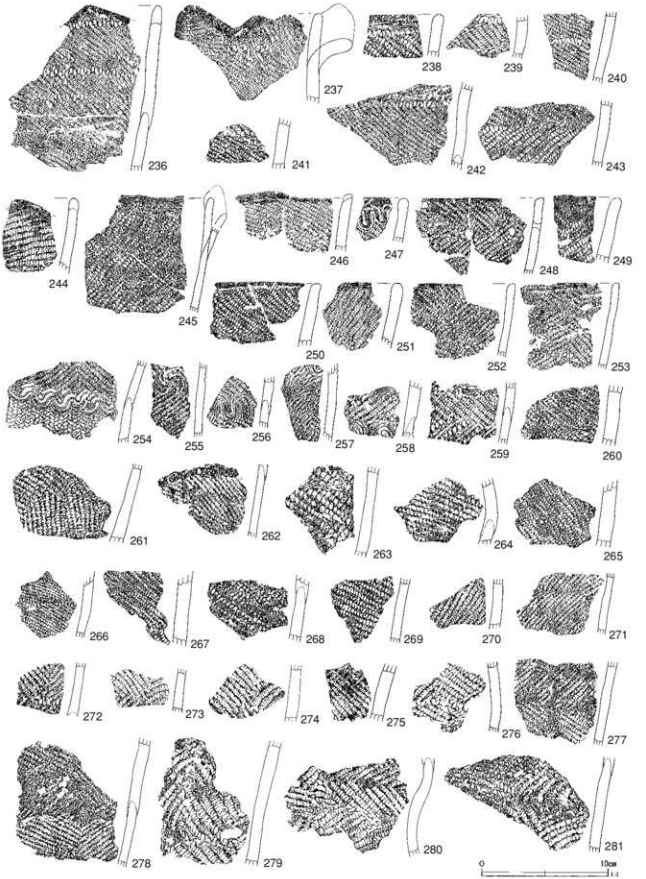
第91図　第４号住居跡出土遺物（25）



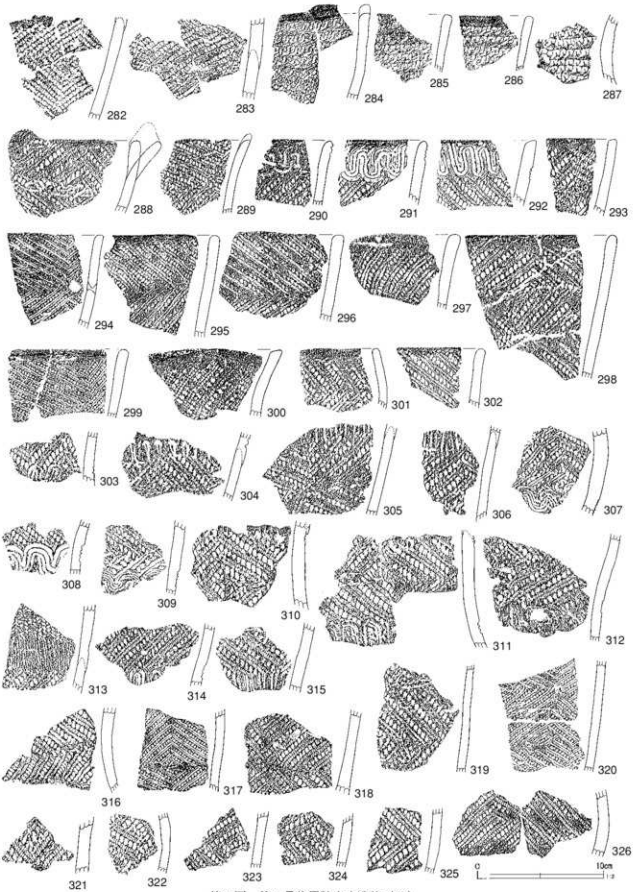
第92図　第４号住居跡出土遺物（26）



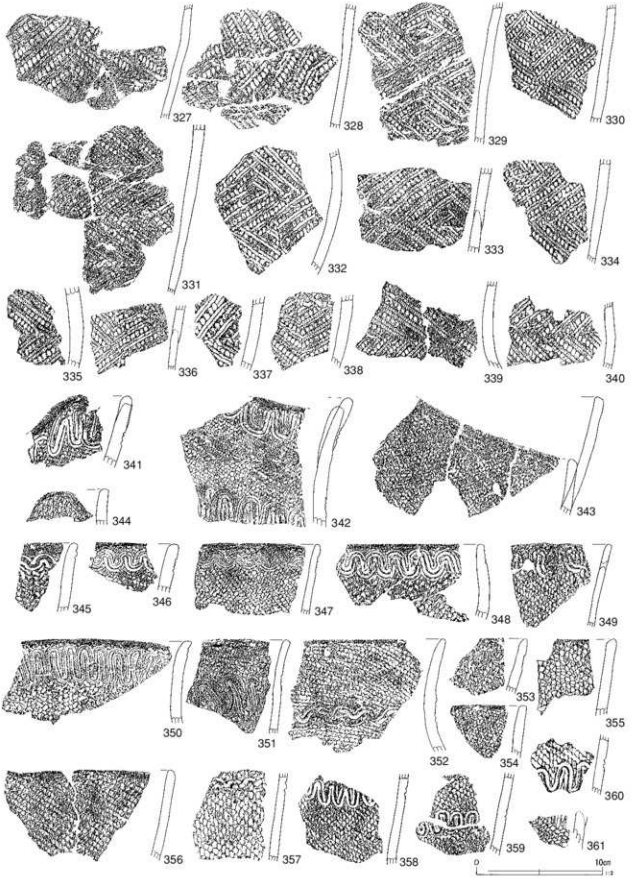
第93図　第４号住居跡出土遺物（27）



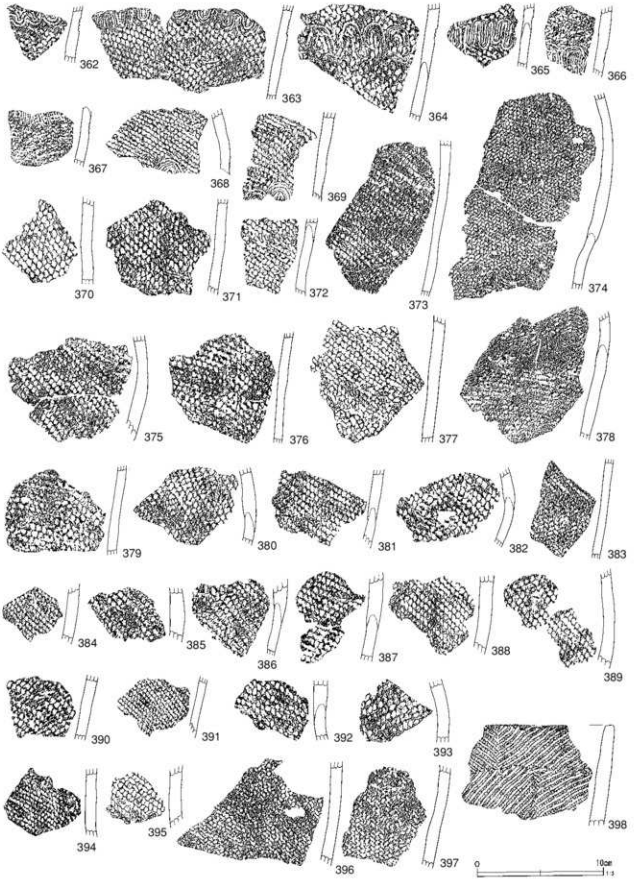
第94図　第４号住居跡出土遺物（28）



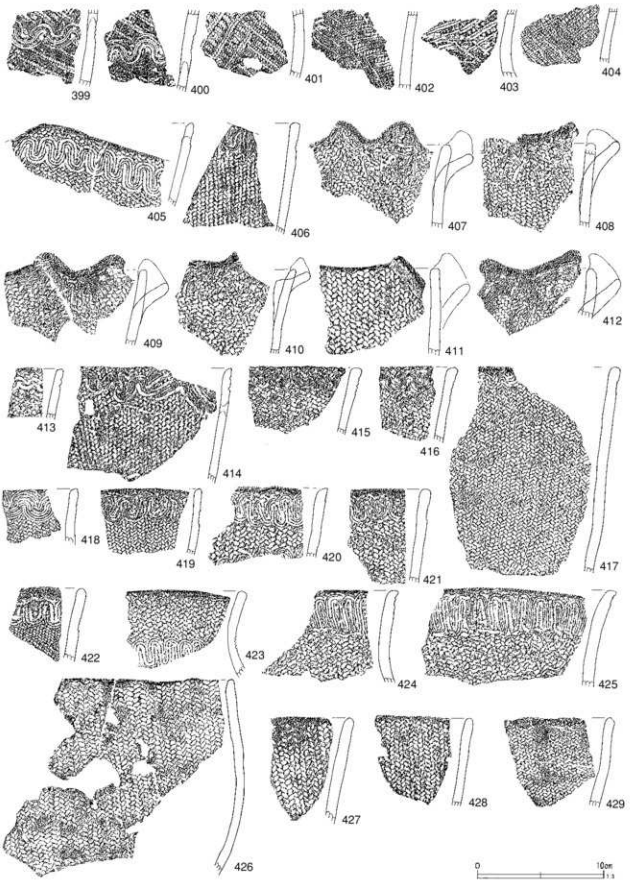
第95図　第４号住居跡出土遺物（29）



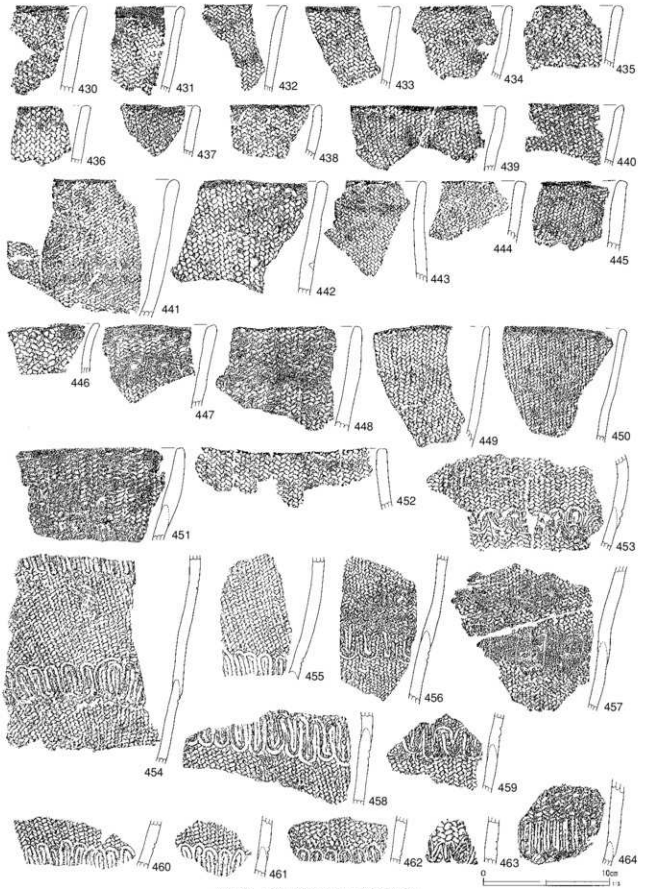
第96図　第４号住居跡出土遺物（30）



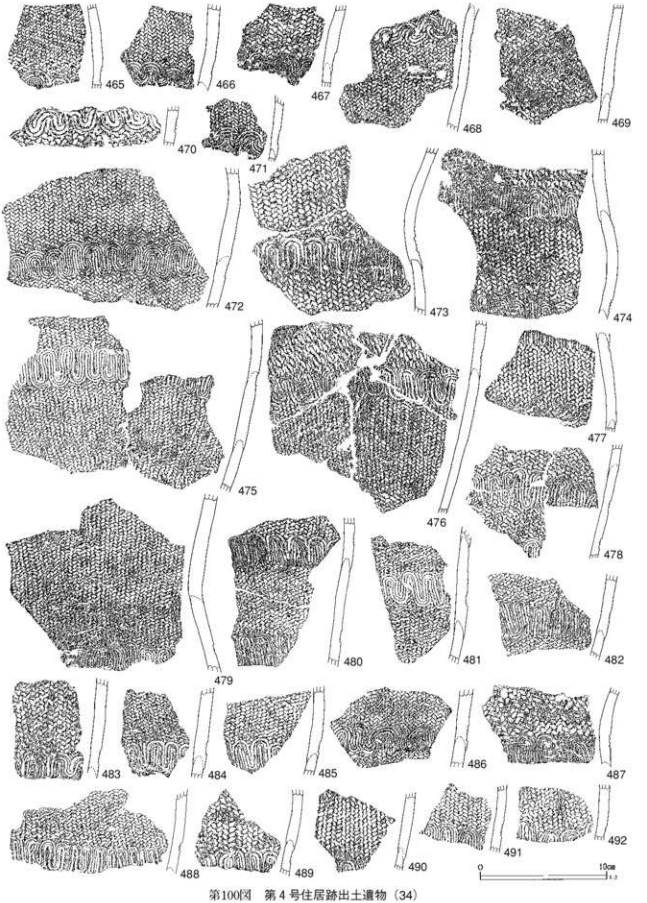
第97図　第４号住居跡出土遺物（31）



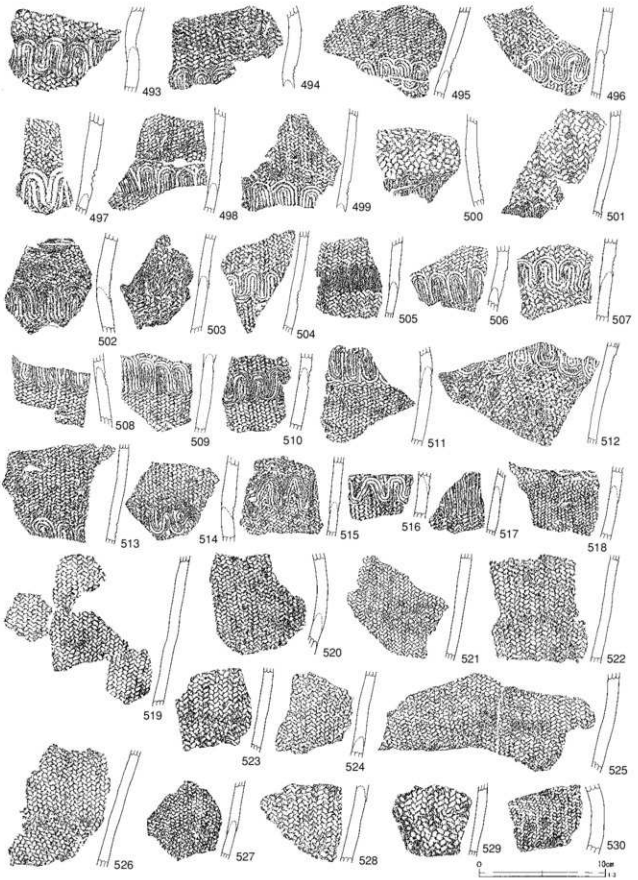
第98図　第４号住居跡出土遺物（32）



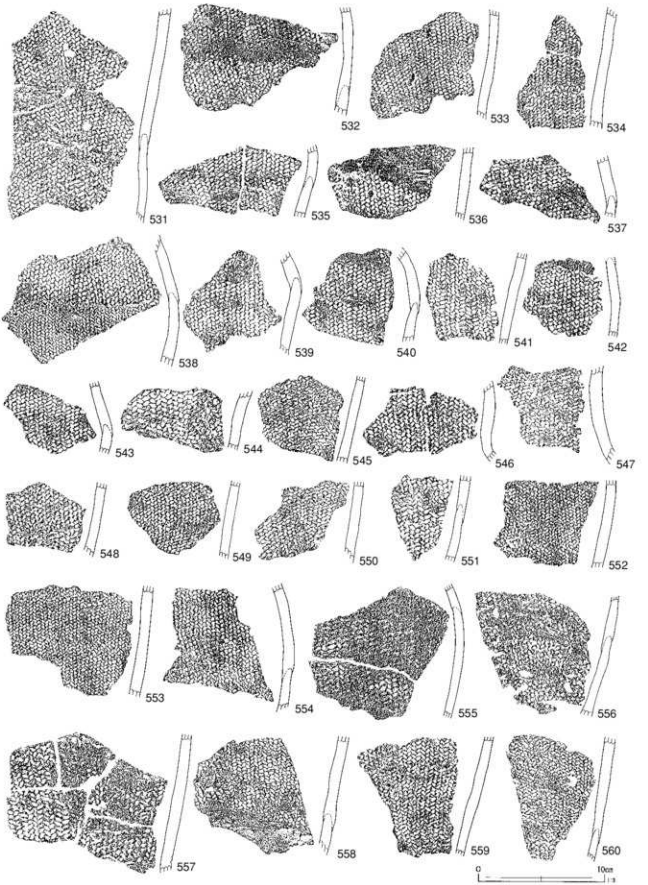
第99図　第４号住居跡出土遺物（33）



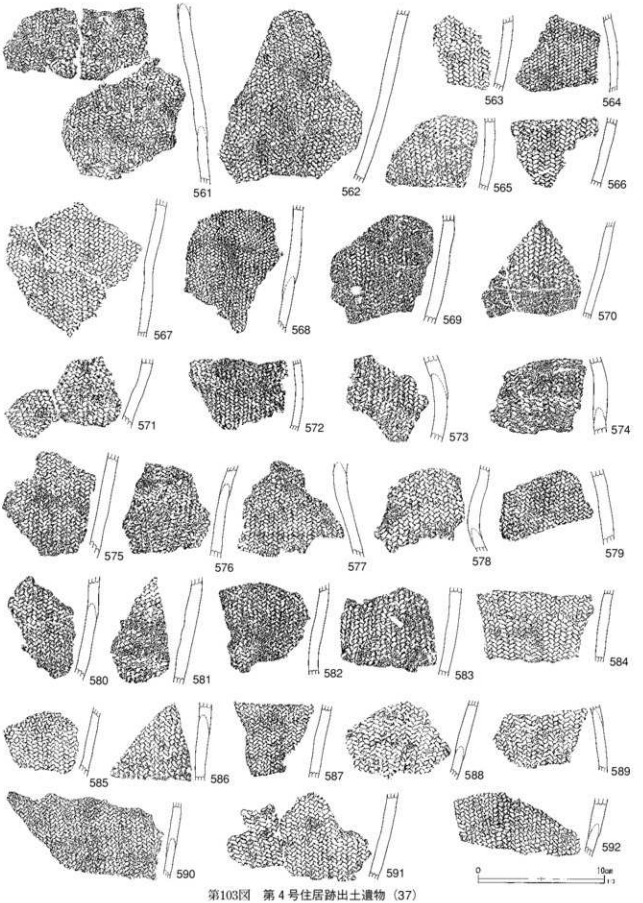
第100図　第４号住居跡出土遺物（34）



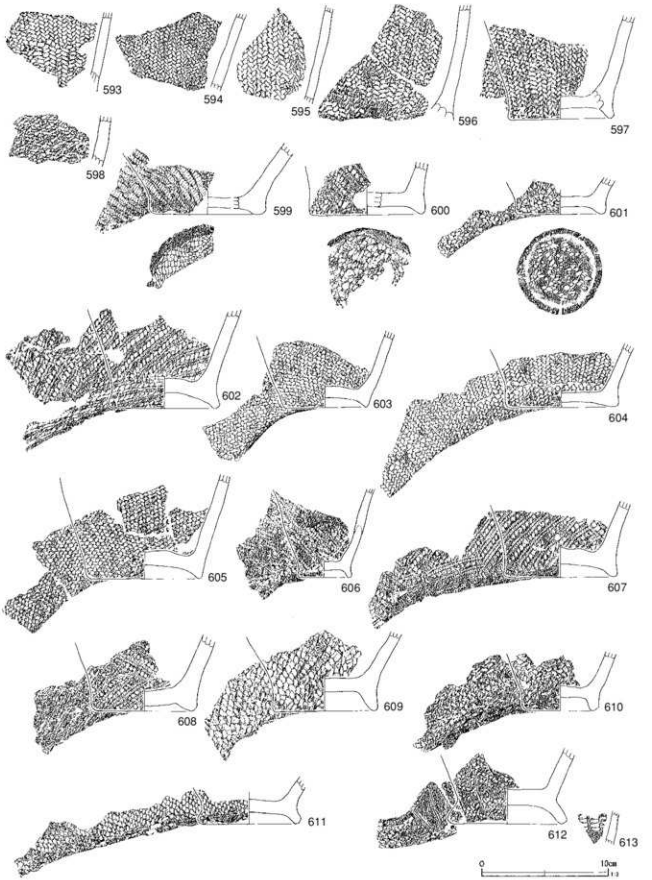
第101図　第４号住居跡出土遺物（35）



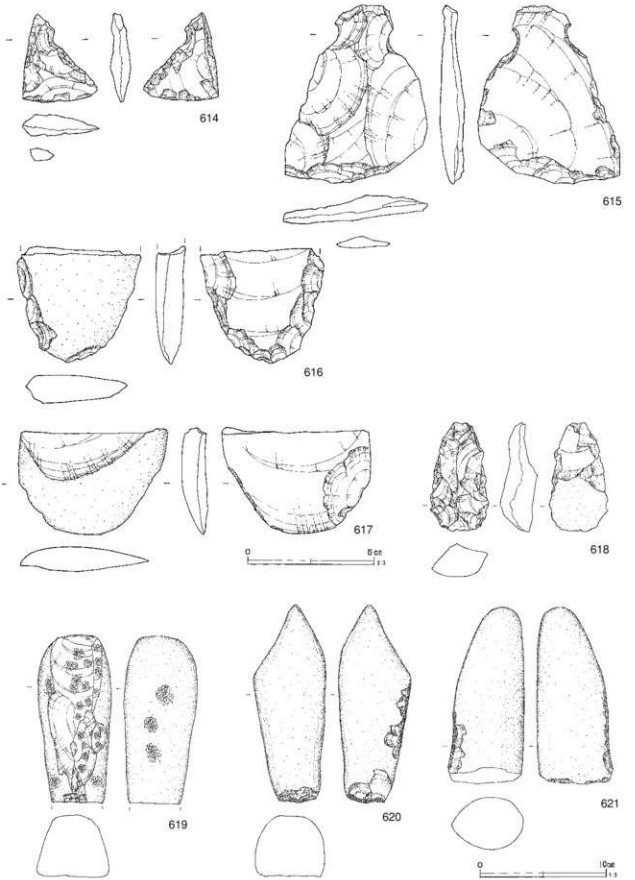
第102図　第４号住居跡出土遺物（36）



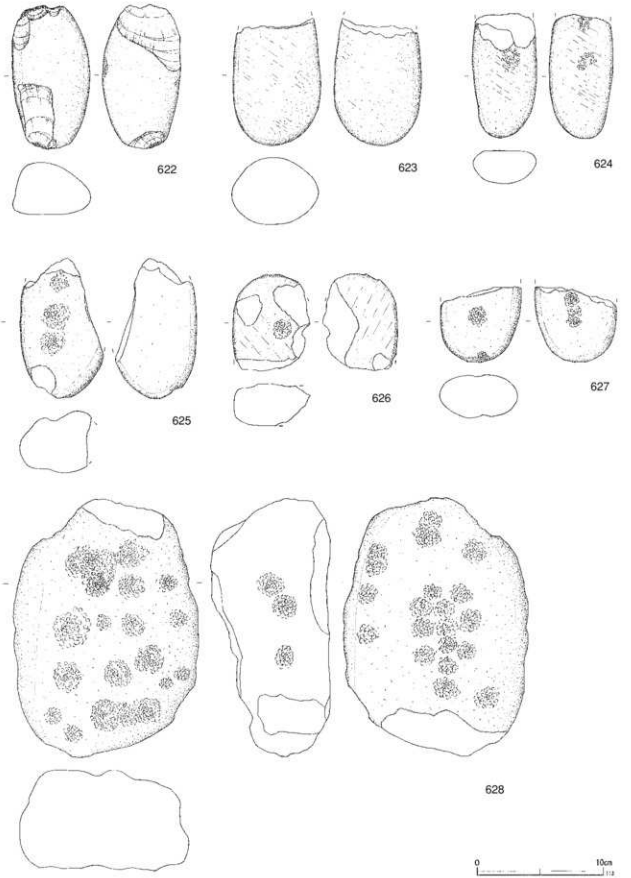
第103図　第４号住居跡出土遺物（37）



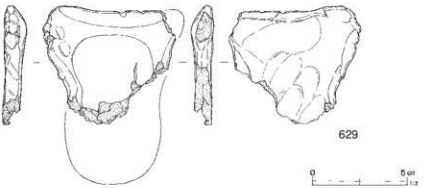
第104図　第４号住居跡出土遺物（38）



第105図　第４号住居跡出土遺物（39）



第106図　第４号住居跡出土遺物（40）



第107図　第４号住居跡出土遺物（41）

第９表　第４号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　　考
614	石匙	(3.44)	3.03	0.73	5.2	チャート	
615	石匙	6.95	5.72	0.82	28.3	ホルンフェルス	
616	スクレイパー	(4.48)	4.90	1.15	34.6	ホルンフェルス	
617	スクレイパー	4.22	5.92	1.10	29.9	ホルンフェルス	
618	打製石斧	8.50	4.58	2.70	121.2	頁岩	
619	敲石	(13.25)	5.70	4.94	568.4	頁岩	スタンプ形石器の可能性あり
620	敲石	15.72	5.62	4.62	496.6	安山岩	
621	敲石	(13.76)	5.60	4.03	451.8	砂岩	
622	敲石	11.14	6.08	4.08	371.8	砂岩	
623	磨石	(9.92)	6.68	5.32	532.5	安山岩	
624	磨石	(9.84)	4.96	2.60	196.6	砂岩	
625	凹石	(11.70)	(6.26)	4.74	333.7	安山岩	
626	凹石	(7.28)	(6.02)	3.43	200.5	安山岩	
627	凹石	(6.28)	(6.38)	3.37	150.5	安山岩	
628	凹石	(20.20)	(14.60)	8.00	1675.6	安山岩	

LLRRは、405・408・411・418・422・423・426～438・453・465・466・470・472・486・496・504・507・519～530・596の41点である。特に430は条が斜方向に観察できることから組縄の握異節RL(RL)であるかもしれない。RRRRは、446・501の２点のみであるが、501は断定できない。LLLLは、410・415・416・421・443～445・467・469・471・552・553・597の13点である。そのうち444は、組縄の握異節RL(RL)の可能性もある。RLRLは、508の１点のみであるが、断定できない。上記以外の89点は組紐原体を特定することが不可能であった。中でも、424・425・503・560は、多少節が乱れており組縄での施文の可能性も考えられるが断定はできない。

コンパス文を施すものは、405・406・413～425・453～518の81点である。半截竹管によるコンパス文は全部で14点であり、真正は、413・414・453の３点である。上下移動は、454～462の９点で、波状は、463の１点である。刺切文も、464の１点のみである。櫛によるコンパス文は、67点であり圧倒的数を占める。真正は、415～418・465～471の11点である。上下移動は、405・406・419～425・472～513の51点でコンパス文のうち半数以上を占める。波状は、514～516の３点、刺切文は517の１点のみである。518は櫛によるが所然不明である。

598は５類11種で、縄文施文であるが種別特定不能破片である。最終撚りLと思われるが施文が重なる上に、施文後押さえられているようで判別できない。

599～612は７類底部である。599は底面に文様を

施し、緩やかな上げ底となる７類１種Aである。側面・底面ともに、単節LRを施文する。

600・601は底面に文様を有し脚付底となる７類１種Bである。600は、側面に正反の合A種Lを、底面は同原体末端の刺突痕と考えられる。601は、側面に原体不明組紐を、底面は600同様に同原体末端痕の刺突であろう。

602～605は無文底面で上げ底の７類２種Aである。正反の合A種Lを施文する。底部直上は斜位施文し条方向を横位に揃える。603はLLRRの組紐縄文を、604・605はRRLLの組紐縄文を施文する。

606～612は無文底面で脚付底を呈する７類２種Bである。606は、正反の合A種Rを全面に施文する。小型粗製土器の底部である。607・608は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。609・611は組縄のLR(RL)擬異節斜縄文を施文する。609は太い原体を用いる。610はRRLLの組紐縄文を施文し、底部直上には組縄のRL(LL)擬単節斜縄文を施す。612は縄文を施すが原体の特定には至らなかった。脚部の開きが他の土器より大きい。

613は信州系の神ノ木式土器である。櫛による横位方向の連続刺突が確認できる。器壁は薄く、胎土には赤色粒子が含まれる。雲母は確認できなかった。

614・615は石匙である。614は、チャートを石材とし、刃部加工をほとんど行わない。615は、ホルンフェルスを用いた大型石匙で、剥片の鋭い縁辺部を利用するため、刃部加工がほとんど認められない。

616・617はホルンフェルスを用いたスクレイパーである。616は剥片の主要剥離面側からの加工を行う。上半部が欠損しており、打製石斧の可能性も考えられる。617は上半部を欠損する。剥片の鋭い縁辺部を利用している。

618は打製石斧である。剥片の主要剥離面側に加工を施し、全体的に楕円形を呈する。刃部は緩い曲線の片側凸刃で、「カメノコ石斧」の範疇にふくまれる。石材にはホルンフェルスを用いる。

619～622は敲石である。619は頁岩の棒状礫を用い、表面には稜に沿った敲打痕が、裏面には浅い凹みの敲打痕が３ヶ所認められる。一部欠損する。620は安山岩の棒状礫を用い、正面下端と裏面右側縁に敲打による剥離が認められる。621は砂岩の棒状礫を用い、両面の一側縁下端に敲打痕が観察できる。一部欠損する。622は砂岩の楕円礫の上下両端に敲打による剥離痕が確認できる。

623・624は磨石である。623は安山岩の楕円礫を用い、両面に磨痕が認められる。624は砂岩の棒状礫を用い、両面に凹みと磨痕が確認できることから、凹石としての機能も有していたと考えられる。双方とも欠損しており、１／２程度の残存であろう。

625～628は凹石である。625は安山岩の楕円礫を用い、片面にのみ凹みが残される。626は安山岩のやや扁平な楕円礫を用い、両面に凹みと磨痕が観察できる。磨石の機能も併せ持つと考えられる。側面には敲打による面取りが施されている。627は安山岩の楕円礫を用い、両面に凹みが認められる。625～627は一部欠損する。628は多数の凹みが両面に認められた「多孔石」である。石材は安山岩である。

629は三角形を呈した土製品である。下半は欠損しており、残存高6.3㎝、残存最大幅7.0㎝、最大厚1.2㎝を測る。正面上部は背面方向に傾斜がみられ、中央には緩やかな円形カーブの浅いくぼみが確認できる。裏面には指頭でなでたと思われる痕跡が全面に観察でき、上部には正面からの粘土の折り返しが認められる。胎土には繊維を多く含み、焼成不良のためか非常に脆い。確定的な要素はないが、正面左端の外形や正面中央部のくぼみから考えると土偶の可能性も指摘できる。

第５号住居跡（第108・109図）

工業高校調査区、中央部南寄りのＩ－９グリッドから検出された。住居跡北側１／３ほどが調査できたが南側は調査区域外へと続く。住居跡北隅で水道管と接するが壁の立ち上がり、住居跡の範囲は確認できた。住居内北東部で第61号土壙との重複が認められた。土壙は後世ものと考えられるが、その掘込みは床面まで達していた。

平面形態は長方形、あるいは台形を呈すると思われる。規模は短軸4.22ｍ、残存する長軸3.72ｍで、確認面からの深さは0.32～0.43ｍを測る。主軸方向はＮ－48°－Ｅを指す。

床面は緩やかな起伏を有する。壁際には0.1～0.2ｍ幅の壁溝が巡り、床面からの深さは0.05ｍ～深いところで0.2ｍを測る。住居跡の壁は、南東辺では直立気味であるが、北西辺では緩やかな角度をもって立ち上がる。

住居跡床面からは31本の柱穴が検出された。主柱穴はP1、2、3、4の４本である。住居跡が調査区域外へ続くことから本来は６本主柱穴をもつ住居と考えられる。南端の２本は調査区域外に存在すると思われる。また壁溝内には0.2～0.4ｍ間隔で壁柱穴が巡る。個別の柱穴の規模は第10表に提示した。

住居跡中央部北寄りで炉跡が１基検出された。長軸0.5ｍ、短軸0.37ｍの楕円形を呈した地床炉で、住居跡と軸を同じくする。炉底面は焼けた痕跡がほとんど認められない。

遺物は、平面的には住居跡中央部にまとまっており、壁際からはほとんど出土していない。床面から覆土中層にかけて満遍なくみられるが、他の住居跡同様に覆土中層にやや集中する傾向がうかがえる。

本住居跡から発見された遺物はほとんどが前期関山Ⅱ式後半期のものである。したがって住居跡の帰属時期も同時期と考えられる。

第５号住居跡出土遺物（第110～118図）

本住居跡からは接合後、1,361点もの土器が出土し、そのうち196点を図示した。器形が復元できたものは12点である。石器は他住居跡同様土器に比すると貧弱でわずか38点である。うち12点を示した。

器形復元できた土器の分類は、１・２が１類２種Ｃで、重施文平行沈線による口縁部文様帯をもつ。３・４は５類２種Ｆの単節、５・６は５類５種の正反の合、７・９は５類６種の組縄、８・10～12は５類10種の組紐となる。

１は双頭波状口縁の深鉢で口縁部は大きく開く。口縁部文様帯は、半截竹管による二重あるいは三重平行沈線で山形文などを描く。地文はⅠⅠⅠⅠの組紐縄文を時計回りに施文する。

２は４単位の台形状突起をもつ深鉢である。口縁部には三重平行沈線によって山形文を描く。その直下には４本櫛で上下移動のコンパス文を時計回りに

第10表　第５号住居跡　柱穴計測表

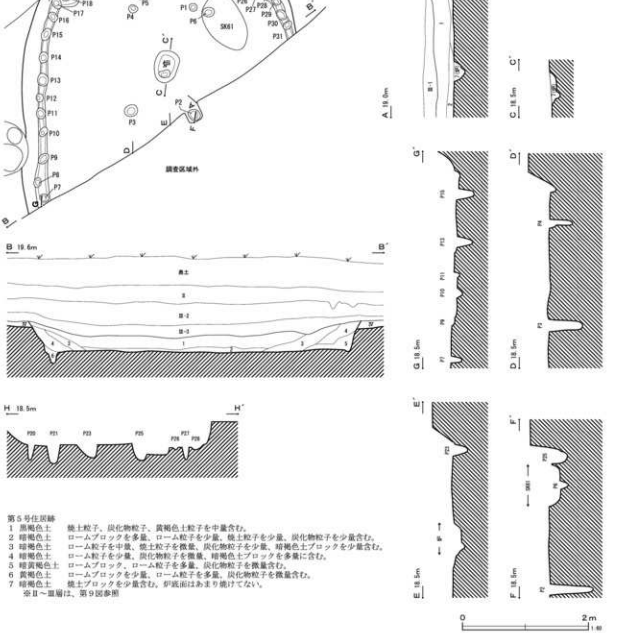
番　号	長軸（ｍ）	短軸（ｍ）	深さ（ｍ）	番　号	長軸（ｍ）	短軸（ｍ）	深さ（ｍ）
Ｐ－１	0.13	0.12	0.11	Ｐ－17	0.19	0.14	0.26
Ｐ－２	0.21	0.17	0.69	Ｐ－18	0.18	0.15	0.33
Ｐ－３	0.21	0.18	0.52	Ｐ－19	0.16	0.13	0.28
Ｐ－４	0.13	0.13	0.37	Ｐ－20	0.15	0.11	0.23
Ｐ－５	0.17	0.15	0.15	Ｐ－21	0.22	0.15	0.28
Ｐ－６	0.17	0.16	0.19	Ｐ－22	0.12	0.10	0.18
Ｐ－７	0.14	0.13	0.15	Ｐ－23	0.23	0.16	0.14
Ｐ－８	0.16	0.11	0.20	Ｐ－24	0.23	0.15	0.05
Ｐ－９	0.19	0.14	0.02	Ｐ－25	0.22	0.19	0.08
Ｐ－10	0.16	0.11	0.08	Ｐ－26	0.15	0.14	0.12
Ｐ－11	0.18	0.14	0.24	Ｐ－27	0.14	0.12	0.22
Ｐ－12	0.13	0.11	0.14	Ｐ－28	0.19	0.15	0.06
Ｐ－13	0.21	0.17	0.25	Ｐ－29	0.13	0.13	0.25
Ｐ－14	0.18	0.14	0.25	Ｐ－30	0.17	0.14	0.12
Ｐ－15	0.21	0.13	0.24	Ｐ－31	0.16	0.11	0.25
Ｐ－16	0.16	0.12	0.11				

施す。地文はRRLLの組紐縄文を全面に施文する。

3はくびれずに開く深鉢である。文様は単節RL・LRを羽状施文する。底部は脚付底で文様を有する。径0.5cmの角丸方形状の刺突痕であり、棒状工具を用いたと考えられる。底径は7.3cmである。

4は胴部上半に最大径をもち、底部にかけてすぼまる深鉢の胴部である。残存部上位には半截竹管による真正のコンパス文を施し、中位には成形時の粘土帯がはっきり残存する。RL単節斜縄文を全面に施す。

5は深鉢の底部で、側面に正反の合A種R・Lを羽状に施文する。残存部最上位には、単節RLの水平



第5号住居跡
1 黒褐色土　焼土粒子、炭化物粒子、黄褐色土粒子を中量含む。
2 暗褐色土　ロームブロックを多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を少量、炭化物粒子を少量含む。
3 暗褐色土　ローム粒子を中量、焼土粒子を微量、炭化物粒子を少量、暗褐色土ブロックを少量含む。
4 暗褐色土　ローム粒子を少量、炭化物粒子を微量、暗褐色土ブロックを多量に含む。
5 暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多量、炭化物粒子を微量含む。
6 黒褐色土　ロームブロックを少量、ローム粒子を多量、炭化物粒子を微量含む。
7 暗褐色土　焼土ブロックを少量含む。炉底面はあまり焼けてない。
※Ⅱ～Ⅲ層は、第9図参照

第108図　第5号住居跡

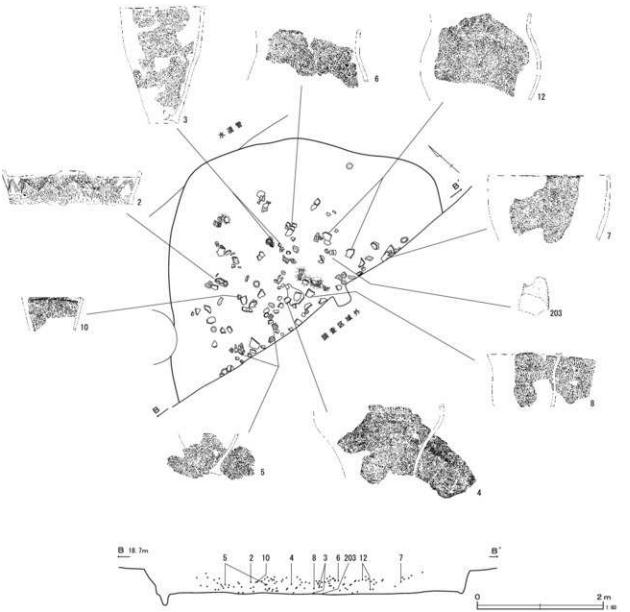
ループ文を2段以上施文する。また底部直上には正反の合Rを斜位に施文しており条方向を縦位に統一している。無文の上げ底で、底径は5.5cmである。

6は胴部がくびれる深鉢で、正反の合A種R・Lを羽状に施文し、菱形を描出する。くびれ部の上下に4本櫛を用いた上下移動のコンパス文を配する。

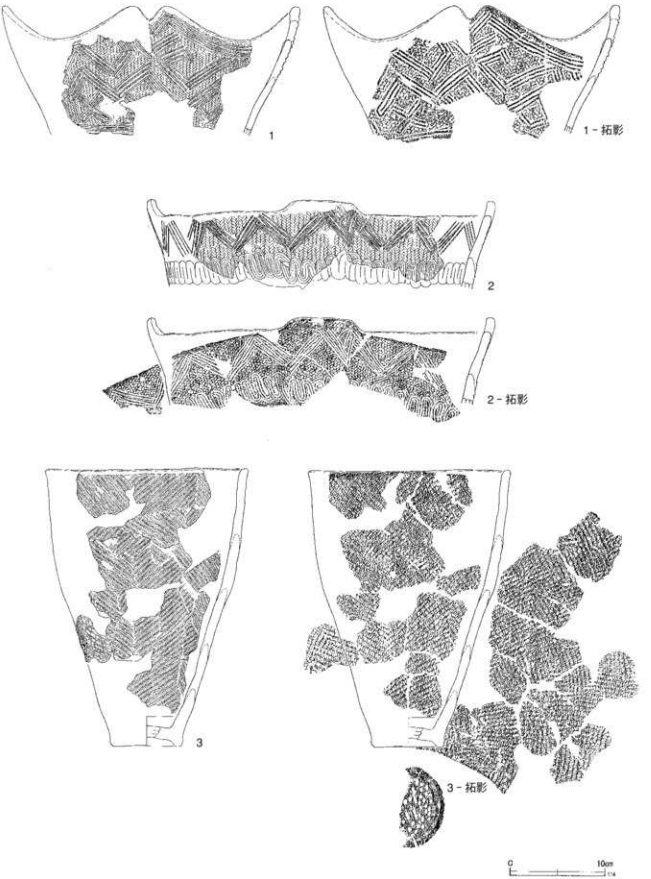
7は深鉢口縁部で、器面には組縄の擬異節斜縄文RL(RL)を施文する。

8は口縁部直下でわずかにくびれて外反する深鉢である。地文としてLLRRの組組縄文を全面に施す。口縁部直下から3段にわたり、半截竹管で上下移動のコンパス文を時計回りに施文する。その下部には山形文を施す。口縁部には台形状突起がつくが、4単位の配置ではないので恐らく注口両脇につく突起と考えられる。

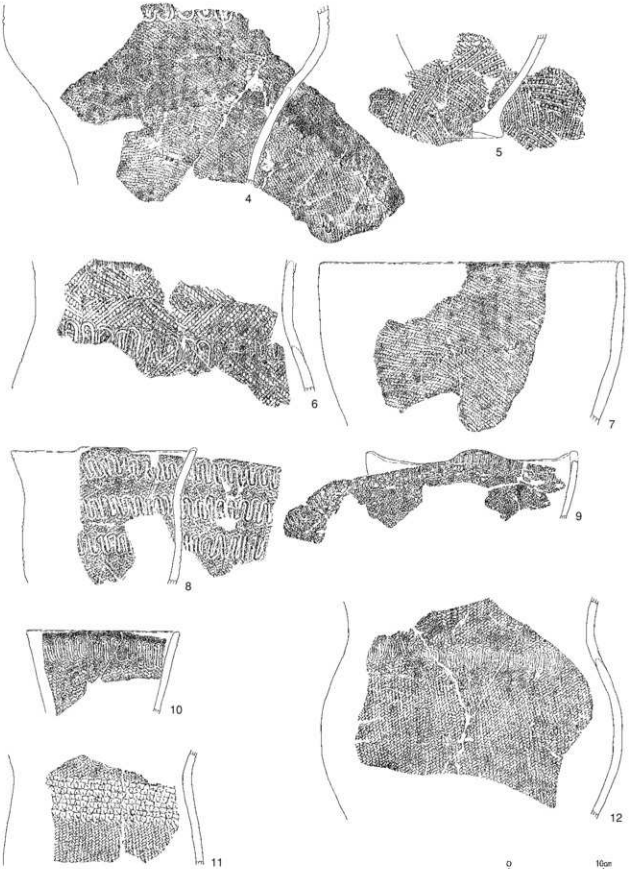
9は深鉢の口縁部で4単位の突起が付く。突起は全体的に丸みをおびている。器面にはRL(不明)の組縄縄文が施文され口縁部直下には櫛で刺切文が施さ



第109図　第5号住居跡遺物出土状況



第110図　第５号住居跡出土遺物（1）



第111図　第５号住居跡出土遺物（2）

れる。第113図82、第114図90・91も同一個体の破片である。

10は小型深鉢の口縁で、RRLLの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下には４本櫛で上下移動のコンパス文を時計回りに施す。

11は胴部にくびれをもつ深鉢で、くびれ部には、単節RLの多段ループを８段水平施文する。それ以外の器面にはRRLLの組紐縄文を施し、残存部上端には櫛によるコンパス文が残されるが、形態は不明である。

12は胴部にくびれをもち、その下位に最大径をもつ深鉢である。器面全体にRRLLの組紐縄文を施し、くびれ部の成形痕上には4本櫛で上下移動のコンパス文を描く。

13～16は１類２種Bで、単独平行沈線によって文様帯を描く。地文は、13が原体不明の組紐を、14は組縄の擬異節RL(RL)と思われる、15は組紐LLRR、16は組縄の擬異節RL(RL)をそれぞれ施文する。

17～24は１類２種Cで、重施文平行沈線で文様帯を描く。17・18・22は器面が厚く、同一個体である。17の口縁部には台形状突起がつく。地文は原体不明の組紐縄文を施文する。19は、口縁部左端にわずかな高まりが認められ、突起がついていたことがうかがえる。地文は組紐RRLLである。20は組紐RRLLを、21・24は原体不明の組紐を、23は組縄の擬単節RL(LL)をそれぞれ地文とする。

25～28は１類３種で、特殊文様を描く。25は半截竹管で縦沈線を施す。文様の全体像は不明であるが縦方向の沈線は珍しい配置である。口縁部直下には櫛で真正コンパス文を施す。地文は原体不明組紐である。26は単節LRの多段ループ鋸歯構成中に竹管文を配する。27・28は平行沈線で山形のタガ状文を巡らす。地文は、27が正反の合A種R・Lを羽状に、28は単節RL・LRの多段ループを水平に施文する。28のループ文は上下の施文幅を変えることによりアクセントをつけ、整然とした羽状配置を行う。また胎土にはは雲母を多く含み、内面は丁寧に磨く。

29は４類種で、貝殻押圧文を施文する。背圧痕文施文前に竹管様のもので横位線が引かれているが、文様かどうかは不明である。

30・31は５類１種で、Lの無節斜縄文を施文する。同一個体で、０段２条で異なる繊維束を撚り合わせている。

32～39は５類２種Daで、多段ループ水平構成をとる。36は正反の合A種Rを用い、直前段結束部分を多段ループ的に施文している。54～56と同一個体である。したがって５類５種正反の合に分類すべきであったかもしれない。38は、１段Lを環部のみ単節RLに撚り、以下を強制的に反撚LLにしている。したがって環部以下がほつれた圧痕となる。本来は５類４種に分類すべきであった。他は全て単節RLで水平多段ループ文を表出する。33・39は下半に原体不明の組紐縄文を施文する。37は下端に櫛でコンパス文を施すが、形態は不明である。

40・41は５類２種Dbで、多段ループ文の鋸歯構成である。両方とも単節RLを用いる。41は左上端にわずかに竹管文がみえる。

42・43は５類２種Eで、上下幅等間隔偏広ループ文を施す。42は単節LRでループ文を施文し、43は単節RL・LRでの羽状構成とする。

44～52は５類２種Fで、単節斜縄文を施す。44・45・51・52は単節RL・LRを羽状に施文し、46は単節LR、47は単節RLをそれぞれ施文する。46・47は竹管によるコンパス文をもち、46は真正、47は刺切文を施す。48・49は同一個体で、０段多条の単節RLと０段３条の単節LRを羽状に施文する。50は０段２条の単節RLを施文する。胎土には繊維の混入がわずかである。

53は５類４種で、LLの反の縄文を施す。

54～81は５類５種で、異条斜縄文を施す。全て直前段合撚の一般的な正反の合であるA種となる。54～56は同一個体である。正反の合A種Rを用い、直前段結束部分を多段ループ的に施文している。５類２種Daに分類した36も同一個体である。62の上半

に施文する正反の合Lは、末端他縛処理を行う。65は、反縄の一方が深い圧痕を呈するが、正縄の節を観察すると附加条ではなく正反の合である。78は、直前段に正反の縄を結束し、半折している。本住居跡出土の正反の合は、最終撚りRとLを用いて羽状構成をとるものが多い。しかし、57・62・71・75・76の５点は、正反の合Lと単節RLという種類の異なる原体で羽状を表出する。71の単節RLは０段２条である。単独方向の施文は３点のみで、60・79がR方向、68がL方向である。コンパス文を施すものは58・59・63〜72の12点である。その形態は、58が竹管による上下移動、63が竹管の刺切文、64〜66が櫛による真正、59・67〜71が櫛の上下移動、72が櫛の刺切文である。

82〜100は５類６種で、組縄縄文を施す。82・90・91は第111図９と同一個体で、組縄縄文を施文するが、縄節が確認できないため原体は不明である。口縁部直下に竹管で刺切文を施す。83は末端に組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文を施文し、上方は組紐LLRRと単節RLを上下交互に２段施す。84は、原体不明組縄縄文である。89は、上半に組縄、RL(RL)の擬異節斜縄文を、下半にはRRLLの組紐縄文を施文する。口縁部左端にわずかな高まりが観察できることから、突起がついていた可能性がある。確認できた組縄原体は、擬異節RL(RL)と擬単節RL(LL)、LR(RR)の３種類である。擬異節RL(RL)は、85・87・92〜94・96の６点であるが、93は断定できない。擬単節RL(LL)は、86・88・95・97〜99の６点であり、うち97・98は同一個体である。99は単節の可能性もある。擬単節LR(RR)は100であるが単節のようにもみえる。コンパス文を施したものは５点で、82・90・91は竹管の刺切文、84・85は櫛の波状である。

101〜104は５類９種で、附加条縄文を施す。101は、単節RLに無節の縄R2本をS方向に附加したものとLRに12本をZ方向に附加したものを羽状に施文する。附加縄は逆方向附加である。以下、RL(R+R→S)・LR(L+L→Z)と表記する。102は、LR(L+L→Z)で、逆方向附加である。103は、RL(L+L→S)・LR(R+R→Z)で羽状施文し、附加縄は両方とも逆方向附加である。正反の合C種と同様に反縄の節が流れる圧痕が表出する。104は、０段３条RL(L+L→Z)・０段２条LR(r+r→S)で羽状施文する。附加縄は両方とも順方向附加である。さらに輪縄同士は結束されている。

105〜186は５類10種で、組紐縄文を施す。105・106は、波状口縁であるが波頂部形態は不明である。109は、左上端に注口がつく。110は、左端に補修孔をもち、器面中央右には竹管で菱形文を描く。111は、口縁部右端にわずかな高まりが確認できる。突起がつくのであろうか。また器面には原体下端の他縛痕が残る。118・119は、同一個体であり、成形痕以上はRRLLを、以下はLLRRを施文する。125は、組紐RRLLを用いての施文であるが、コンパス文の上下で異なる原体を使用する。141・142は上半に組紐LLRRを、下半には組縄の擬単節RL(LL)を施文する。143は上端に単節RLの多段ループを施文する。179は上半に擬異節RL(RL)を、下半に組紐RRLLを施文する。183は、組紐RRLLとLLRRを上下交互施文する。

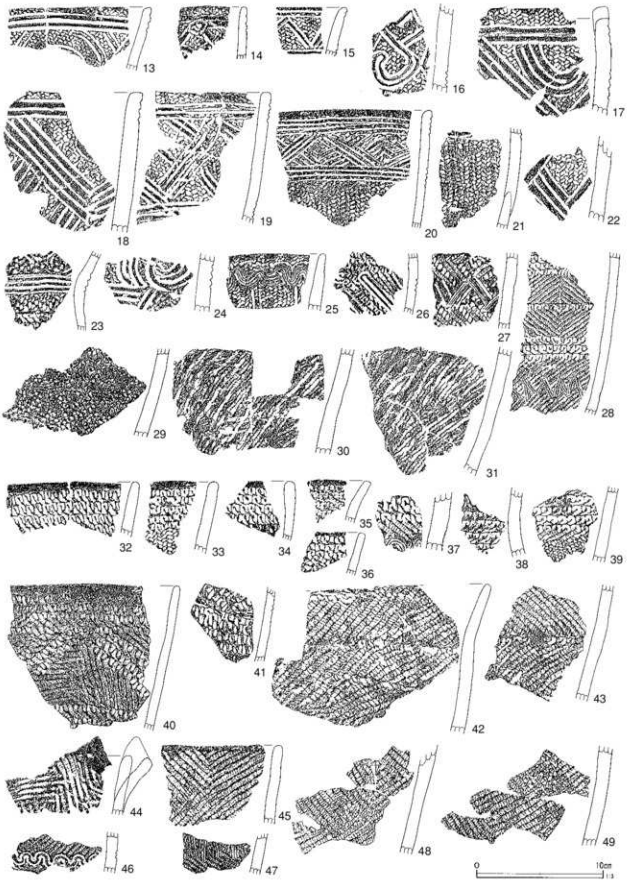
本住居跡では全ての組紐原体が一応確認できた。

RRLLは、106・115・118〜120・125・129・132・133・145・148〜151・153・156・157・161・163・168・169・172・178・179・182〜185である。

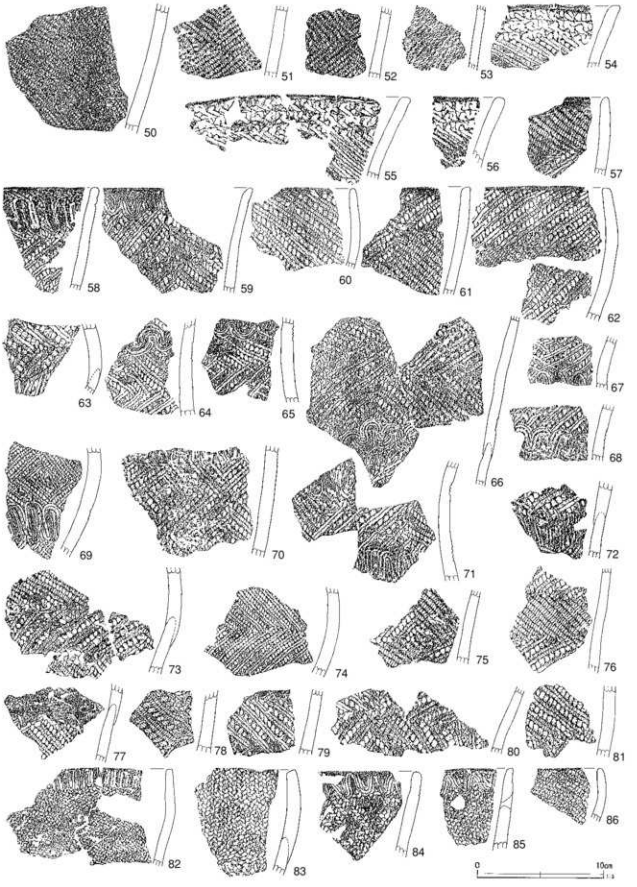
LLRRは、108・110〜112・119・122・124・126・141・142・152・155・158・164・165・167・174・177・183・186である。

RRRRは、144の１点のみで、LLLLは、154・166の２点である。109をRLRLとしたが、組縄のRL(RL)の可能性も残る。他は原体不明や組縄との識別が困難であった。

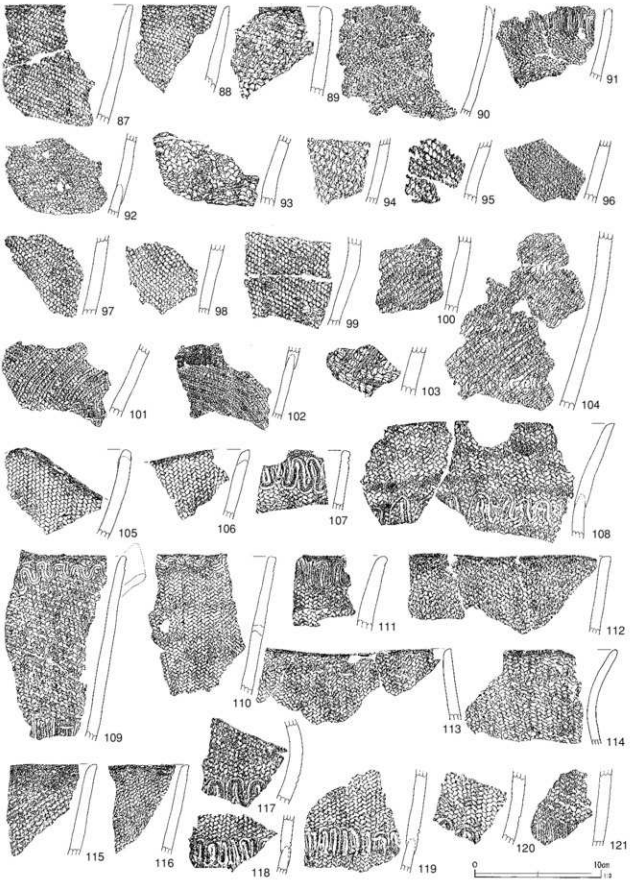
コンパス文が施されたものは、107〜111・117〜140である。その形態は、107・117〜120が竹管による上下移動、108が竹管の波状、121が竹管の刺切文、122〜127が櫛による真正、128〜136が櫛の上下移動、137が櫛の波状、138が櫛の刺切文、



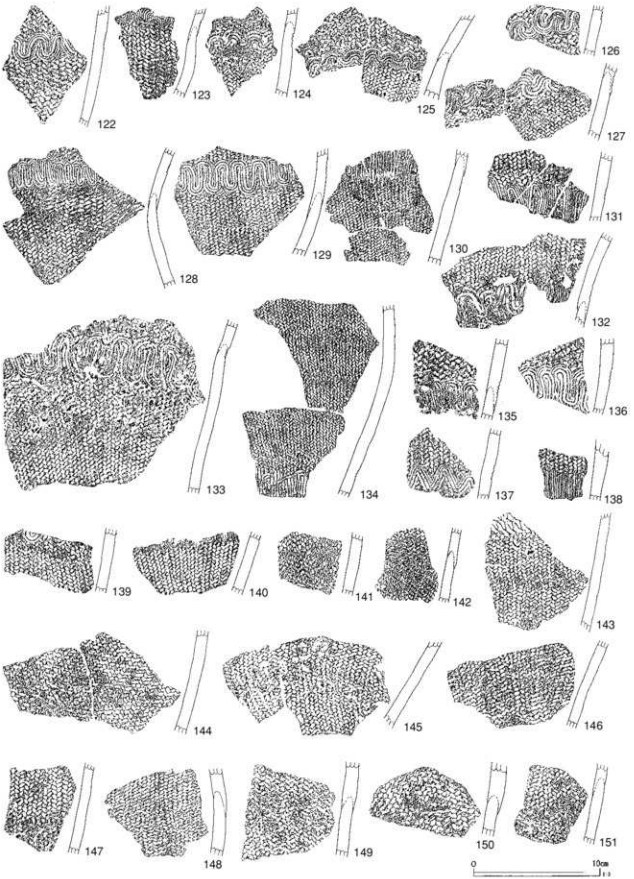
第112図　第５号住居跡出土遺物（3）



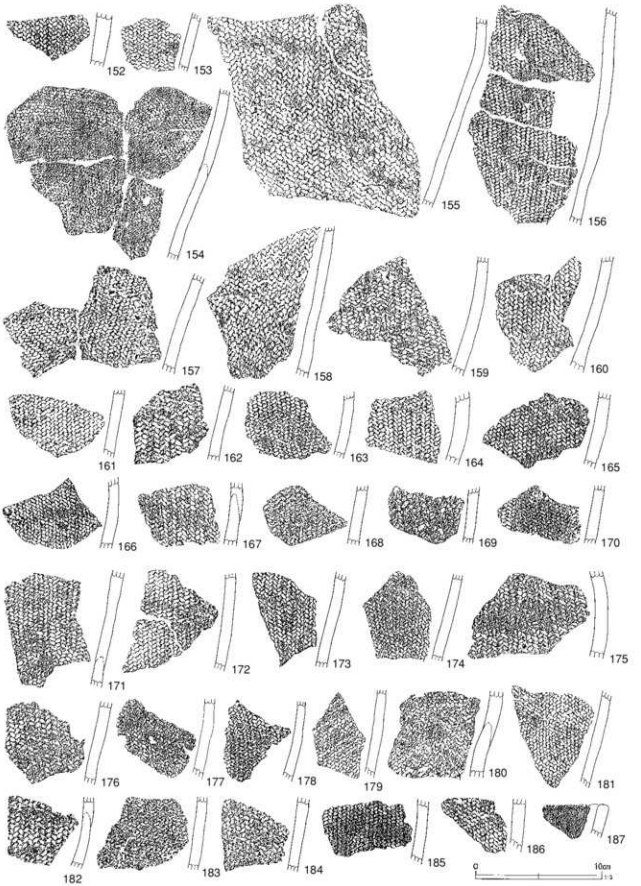
第113図　第５号住居跡出土遺物（4）



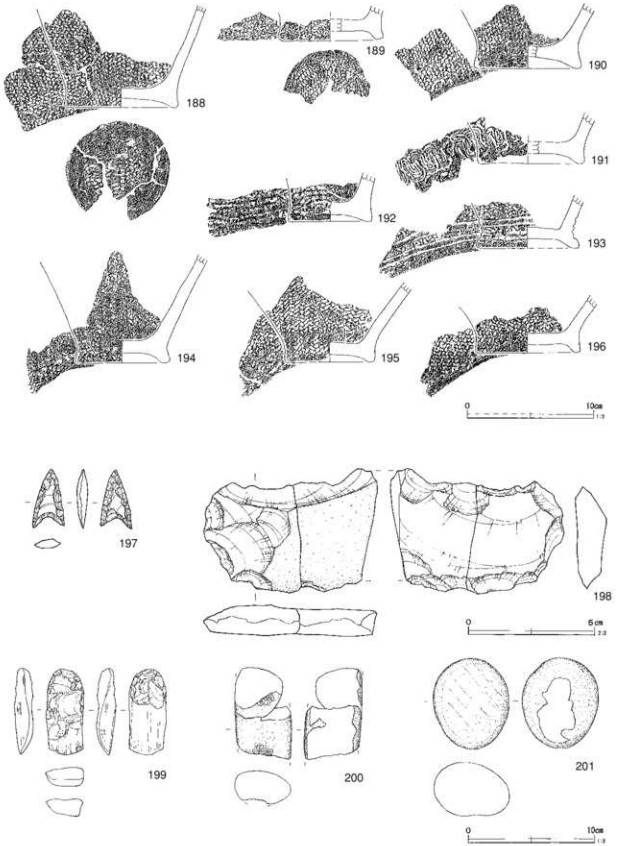
第114図　第５号住居跡出土遺物（5）



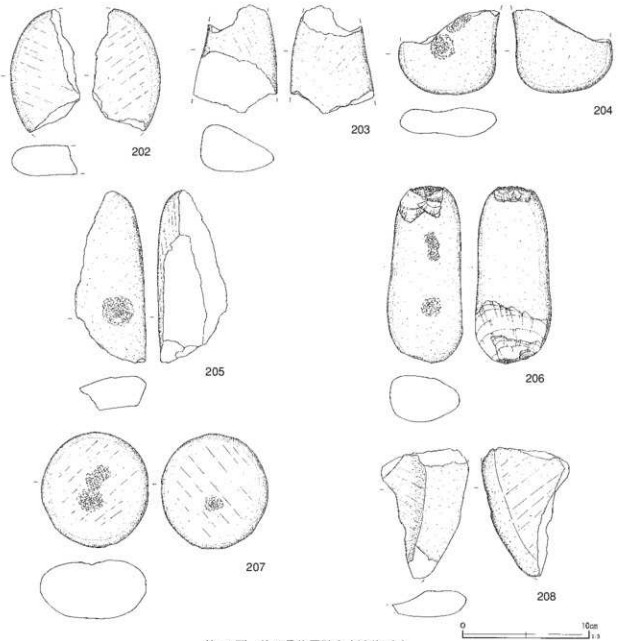
第115図　第５号住居跡出土遺物（6）



第116図　第５号住居跡出土遺物（7）



第117図　第５号住居跡出土遺物（8）



第118図　第５号住居跡出土遺物（9）

第11表　第５号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
197	石鏃	2.21	1.21	0.37	0.8	黒色頁岩	
198	スクレイパー	4.82	(6.82)	1.15	45.2	ホルンフェルス	
199	磨製石斧	6.70	2.88	1.30	38.4	チャート	
200	磨石	(7.24)	4.45	2.46	111.4	ホルンフェルス	
201	磨石	7.10	6.01	4.10	119.6	安山岩	
202	磨石	(9.50)	(5.30)	2.40	171.1	閃緑岩	
203	磨石	(8.74)	6.64	3.30	182.1	安山岩	
204	凹石	(6.60)	(7.80)	(2.20)	141.0	砂岩	
205	凹石	(13.60)	(5.36)	(2.78)	281.3	砂岩	
206	凹石	13.80	5.98	3.35	434.1	砂岩	
207	凹石	8.80	8.34	4.46	458.7	安山岩	
208	石皿	(10.07)	(6.92)	1.95	133.2	緑泥片岩	

139・140は櫛であるが形態不明である。

187は６類種の無文である。口縁部右端にわずかな高まりが確認できたので、突起がついていた可能性もある。無文口縁をもつ浅鉢が想定できよう。

188～196は７類底部である。188・189は底面に文様を有する７類１種で、188は７類１種Aで緩やかな上げ底を呈する。文様は側面・底面ともに原体不明組紐縄文を施文する。189は７類１種Bの脚付底で、文様は側面・底面ともにLLRRの組紐縄文を施文する。側面は組紐を縦位回転させる。

190は７類２種Aで、底面無文の上げ底である。文様は原体不明の組紐縄文を側面に施す。

191～196は７類２種Bで、底面無文の脚付底である。側面の文様は、191が５本櫛の上下移動のコンパス文のみで地文は不明である。192は、０段２条の単節RLを、193・195は原体不明組紐を、194は上半に原体不明組紐、下半に組紐の擬異節RL(RL)を、196は組紐LLRRをそれぞれ施文する。193の底部直上には、平行沈線を二重に巡らす。

197は黒色頁岩を用いた石鏃である。小型で細身の二等辺三角形を呈し、基部の抉りが尖る凹基無茎鏃である。

198はホルンフェルスを用いたスクレイパーである。剥片の縁辺に周辺加工が施されている。縦位に折損するため、全容は不明である。削器、あるいは打製石斧の可能性も考えられる。

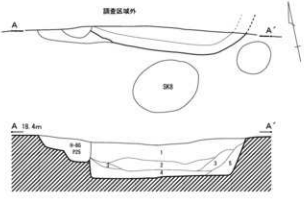
199は、小型の磨製石斧である。分割した剥片を利用し、基部や刃部を整形した上で、主要剥離面側の下半部のみを研磨した局部磨製石斧である。刃部は、緩い曲線の片側凸刃に形成されている。石材にはチャートを用いる。

200～203は磨石である。200は棒状礫の片面に磨痕と凹みが観察できる。一部分のみの残存であるため定かではないが凹石としての機能も有していたと思われる。石材にはホルンフェルスを用いる。201は円形礫の片面にのみ磨痕が認められる。石材は安山岩である。202は扁平礫の両面に磨痕が観察できる。石材は閃緑岩である。203は楕円礫の両面に磨痕が観察できる。石材には安山岩を用いる。202・203はそれぞれ部分的な残存である。

204・205・207は凹石である。204・205は砂岩を用い、それぞれ扁平礫、楕円礫の片面にのみ凹みが認められる。一部分のみの残存である。207は安山岩を用いた凹石で、円形礫の両面に凹みと磨痕が観察できる。そのため磨石の機能も併せ持つと考えられる。

206は敲石である。棒状礫の上下両端に敲打による剥離痕が確認できる。石材には砂岩を用いる。

208は石皿の一部である。石材は緻密片岩を用いており、表面には窪みが認められる。一部分のみの残存であるため、全体の大きさは不明である。



第119図　第６号住居跡

第６号住居跡（第119図）

工業高校調査区、中央部北辺のＨ・Ｉ－８グリッドに位置する。住居跡の南辺のみが検出された。西端部をＨ－８グリッドＰ8に壊される。住居跡の主体は調査区域外にあたるため平面形態、規模は不明である。確認面からの深さは0.55～0.59mであり、深い掘込みをもつ。主軸方向はＮ－17°－Ｅを指す。

覆土は自然堆積の様相を示すが、焼土粒子を多量

に含む層が堆積過程中で確認されている。壁溝、柱穴、炉は確認できなかった。

検出された遺物はごく わずかであったが、第120図1が示す前期奥山Ⅱ式後半が本住居跡の時期であろう。

第6号住居跡出土遺物（第120図）

本住居跡から出土した土器はわずか10点のみで、石器は検出されなかった。

1は器形がわかる唯一の土器でくびれをもたない深鉢である。5類10種で、RRLLの組紐縄文を時計回りに施文する。上下方向の施文順序は上段から下段であるが、胴部2ヶ所の成形痕部分では、成形→施文→粘土紐積上げ→整形、施文という土器製作手法上、文様の施文順序が逆転する。下の成形痕上には文様の施されていない無文帯がみられる。

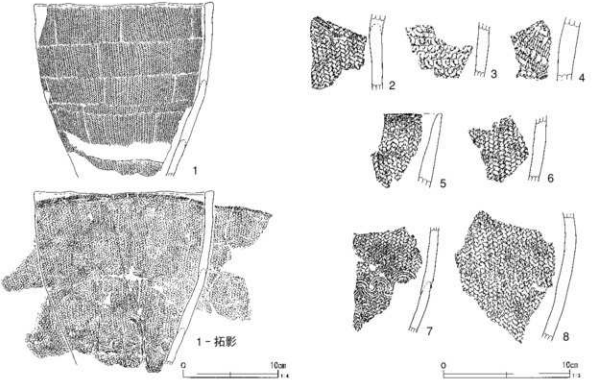
2は上部に平行沈線が施されているので1類3種としたが、成形痕上にあるためコンパス文のようなタガ状施文の可能性もある。地文はLLRRの組紐縄文を施文する。3は5類2種Dbで、単節RL・LRのループ文を上下交互に多段施文する。4は5類5種で、正反の合A種R・Lを羽状施文する。櫛によるコンパス文が施されているが形態などは不明である。5～8は、5類10種で、5・8はLLRR、6はRRLL、7はLLLLの組紐縄文を施文する。7は6本櫛の真正コンパス文を配する。

第7号住居跡（第121・122図）

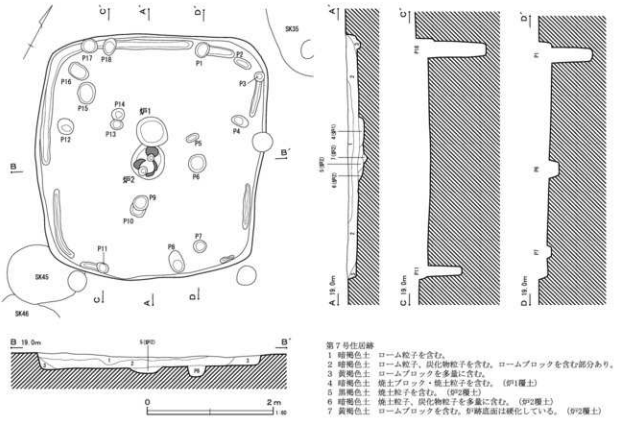
進修館高校調査区西部のD－7・8グリッドに位置する。他の住居跡とはやや離れた位置で検出された。住居跡南隅を第45号土壙に、北東辺中央部をD－7グリッドP13に壊されているが、全容をほぼ確認できた。

平面形態は正方形に近い長方形である。規模は長軸3.83m、短軸3.53mで、確認面からの深さは0.12～0.24mを測る。今回検出された住居跡は深い掘込みをもつものが多い中でこの第7号住居跡は比較的浅い。主軸方向はN－28°－Wを指す。

覆土は自然堆積の様相を呈する。床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁際には床面から



第120図　第6号住居跡出土遺物



第121図　第７号住居跡

第12表　第７号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	0.25	0.21	0.62	P－10	0.23	(0.10)	－
P－2	0.29	0.13	0.26	P－11	0.20	0.16	0.52
P－3	0.16	0.16	0.17	P－12	0.25	0.24	0.12
P－4	0.27	0.17	0.20	P－13	0.19	0.16	0.18
P－5	0.21	0.11	0.16	P－14	0.20	0.20	0.18
P－6	0.29	0.27	0.15	P－15	0.35	0.28	0.10
P－7	0.20	0.20	0.08	P－16	0.34	0.22	0.10
P－8	0.36	0.21	0.49	P－17	0.26	0.23	0.07
P－9	0.25	0.23	0.71	P－18	0.27	0.19	0.88

0.05mの深さで巡る壁溝が確認できたが、南東辺と北東辺中央では確認できなっかた。

柱穴は18本確認された。その位置と規模からP1、8、11、18が主柱穴と考えられ、壁柱穴は検出できなかった。個別の柱穴の規模は第12表に示した。

炉跡は中央部で２基検出された。炉２は底面が硬化しており繰返し使用されたことがうかがえる。

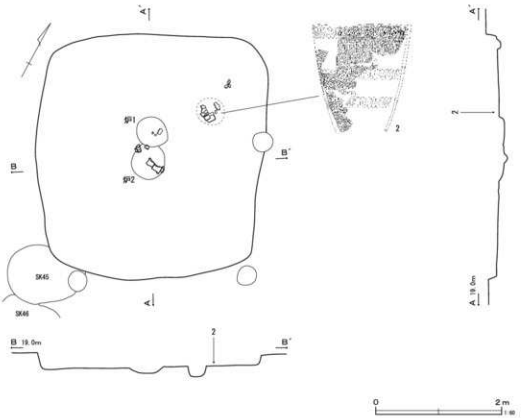
本住居跡から検出された土器は少なかったが、そのほとんどが関山Ⅱ式後半期のものであり、本住居跡の廃絶時期も同時期と考えてよいだろう。

第７号住居跡出土遺物（第123・124図）

本住居跡から検出された遺物は少なく、図示できた土器は器形復元可能なものを含め27点、石器１点の28点でのみである。

１は、炉２南東部から出土した土器でくびれずに開く深鉢である。焼成は良好で文様の残存状態も良い。文様はLRの単節斜縄文を時計回りに施文する。部分的に原体端部の圧痕がループ状に現れているが、意図的にループ文を施文したのではないため５類２種Fと分類した。

２は、炉１の北東部床面からやや浮いた状態でま



第122図　第７号住居跡遺物出土状況

とまって出土した土器である。文様は５類10種で、LLRRの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下と２段の成形痕上には４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。

３～７は１類口縁部文様帯をもつものである。３は１類１種Fで文様帯部分に地文を施さない。下端には正反の合A種Rを施文する。４～６は１類２種Bで単独平行沈線により文様帯を描く。地文は４が組紐LLRR、５が組縄の擬異節RL(RL)、６は原体不明組紐である。４は口縁部上端に刻みを施す。７は１類２種Cで重施文平行沈線により文様帯を描く。地文は正反の合A種R・Lを羽状施文する。

８は５類２種Daで、単節RL・LRのループ文を上下交互に水平施文する。口縁部に突起をもつ。

９・10は５類２種Dbで、単節RL・LRの多段ループ文を鋸歯状に配する。９は巨鋸状突起をもつ単頭波状口縁である。

11・12は５類２種Eで、単節RL・LRの上下幅等間隔編込ループ文を羽状に施文する。

13～15は５類２種Fである。13・15は単節LRのみを施文する。14は単節RL・LRを羽状施文し、竹管による真正コンパス文をその境目に施す。

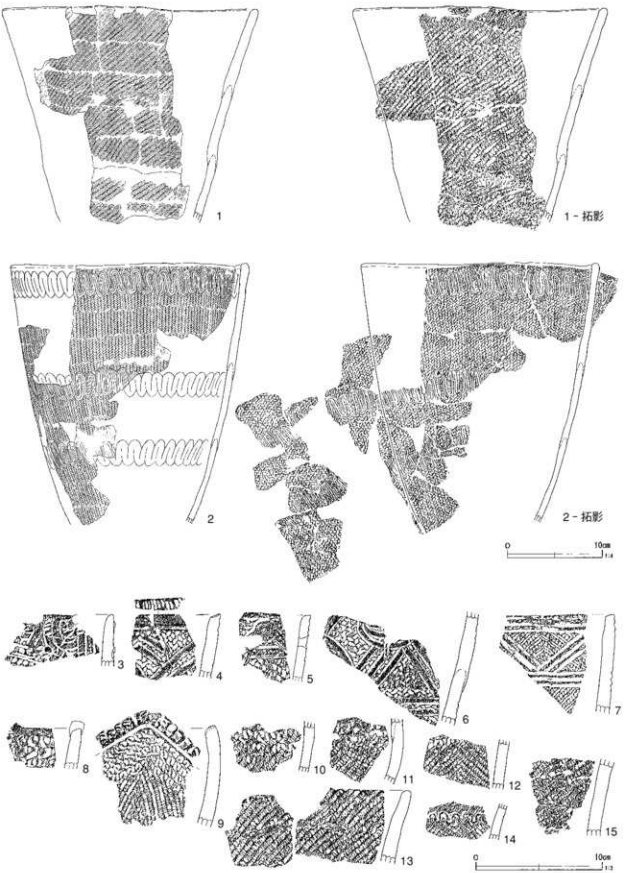
16・17は、５類５種で、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。16は櫛の真正コンパス文をもつ。

18は５類９種の附加条である。軸縄は不明だが無節の縄L2本をZ方向に附加したものを施文する。

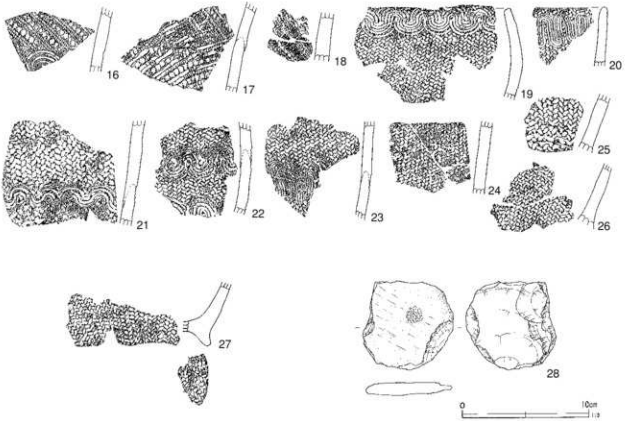
19～26は５類10種の組紐である。19・21～23はLLRR、24はRRLLの組紐縄文を施文する。20・26は原体不明組紐縄文である。また、19～23には櫛によるコンパス文が施されており、19・21・22は真正、20・23は上下移動である。

27は底部に分類した。７類１種Bの有文上げ底で、底面には側面と同じLLRRの組紐縄文を施文する。

28は緑泥片岩を用いた凹石である。片面にのみ凹みと磨痕が認められ、磨石としての機能も有していたと考えられる。



第123図　第７号住居跡出土遺物（1）



第124図　第７号住居跡出土遺物（2）

第13表　第７号住居跡出土石器観察表

番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
28	凹石	7.00	7.08	0.90	70.1	緑泥片岩	

第８号住居跡（第125図）

進修館高校調査区、東部南辺のＥ・Ｆ－８グリッドで住居跡の北半が検出された。住居跡南半は調査区域外へと続き、住居跡北東隅で第39号土壙と重複関係にあるが、新旧関係は判断しえなかった。そのため平面形態は不明であるが、長方形あるいは台形を呈すると思われる。規模は短軸3.47ｍ、残存する長軸2.30ｍである。確認面からの深さは0.31～0.42ｍを測り、主軸方向はＮ－32°－Ｅを指す。

覆土は自然堆積で、床面には多少の凹凸がみられる。北西壁に沿って壁溝が確認できたが床面から0.05ｍと浅い。柱穴は９本検出された。全て住居跡床面北西部に偏っており規模も小さく、主柱穴は確認できなかった。個別の柱穴規模は第14表に提示した。炉跡は検出されなかった。

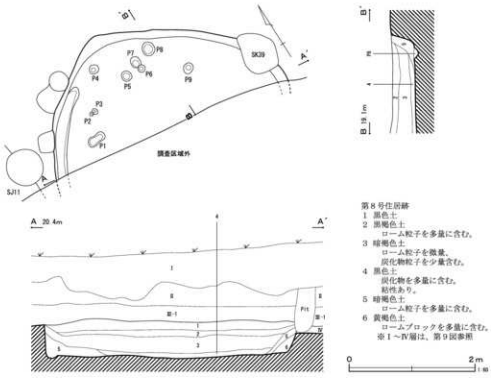
本住居跡から検出した土器は、接合後200点あまりと少なかったが、その全てが前期末山Ⅱ式後半期のものである。本住居跡の構築時期と考えてよいだろう。

第８号住居跡出土遺物（第126・127図）

本住居跡から出土した遺物は、土器が216点、石器が２点である。そのうち土器のみ46点図示した。石器は剥片類が１点、礫が１点である。

１は器形復元できた土器であり、胴部にくびれを有する深鉢である。５類10種で、器面にはRRL1の組紐縄文を全面に施文する。くびれ部の成形痕上には３本櫛で上下移動のコンパス文を描く。成形痕を隠すために施したものである。

２～５は二重平行沈線で口縁部文様帯を描いた１



第125図　第８号住居跡

第14表　第８号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	0.30	0.16	0.07	P－6	0.12	0.11	0.13
P－2	0.06	0.06	—	P－7	0.18	0.15	0.08
P－3	0.10	0.07	0.17	P－8	0.22	0.20	0.08
P－4	0.15	0.14	0.24	P－9	0.18	0.15	0.10
P－5	0.17	0.16	0.26				

類２種Cである。地文は２が組紐LLRR、３が単節RL、４が横区画線の上を組紐LLLL、下を組縄の擬異節RL(RL)、５が原体不明組紐をそれぞれ施文する。また、２は口縁部右端にふくらみを確認できたので突起がついていた可能性が考えられる。

６・７は、５類２種Daで多段ループ文の水平構成である。６は単節RLのループ文を５段施しその下にはLLLLの組紐縄文を施文する。７はLRの水平ループ文を２段、その下部は正反の合A種Rを施文する。

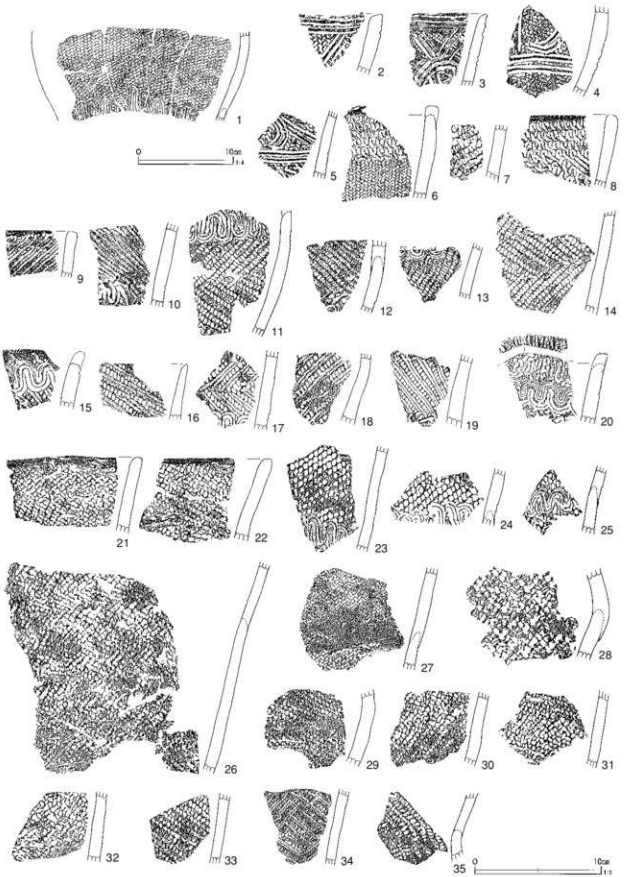
８は５類２種Dbで、単節RLの多段ループ文を鋸歯状に配する。

９は５類２種E'で、１段２条の単節LRの上下幅等間隔編ループ文を施文する。

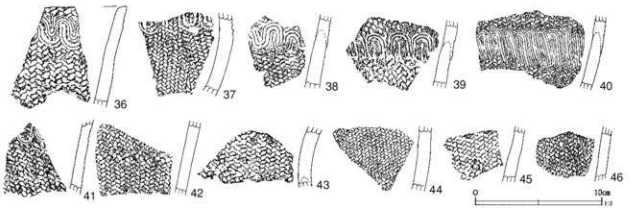
10～14は５類２種F'である。10は単節RLを13は単節LRを、11・12・14は単節RL・LRを羽状施文する。11・14は同一個体であり、原体は０段２条と考えられる。10～13はコンパス文を有する。

15～19は５類５種である。全て正反の合A種で15・16・19はR、18はL、17はR・Lを羽状に施文する。15・17は櫛で上下移動のコンパス文を描く。15は口縁部に台形状突起をもつ。

20～33は５類６種の組縄である。20は単頭波状口縁と思われる破片で、口縁部直下と上端に櫛で縦方向の刺突文を施す。施文は神ノ木式の影響と考えられる。地文は組縄のRL(RL)擬異節斜状文で刺突文下に櫛で真正のコンパス文を描く。21・22・27・29・31・33は、組縄の擬異節RL(RL)を、23・24・32は組縄の擬異節LR(RL)を施文する。23・24は同一個体であり、下端に４本櫛で上下移動のコンパス文を施す。



第126図　第８号住居跡出土遺物（1）



第127図　第８号住居跡出土遺物（2）

25は組縄の擬単節RL(LL)に櫛の上下移動コンパス文を施す。26は組縄の擬異節RL(RL)、LR(RL)を併用して施文する。28は成形痕上部を組紐RRLLで下部を組縄の擬異節LR(RL)で施文する。

34・35は５類９種、附加条である。34はRL(R+R→S)・LR(L+L→Z)を羽状に、35はLR(L→Z)に施文する。

36～46は５類10種の組紐である。37・44が原体不明の組紐縄文、40がRRLL、それ以外はLLRRの組紐縄文を施文する。また、36～40には櫛で上下移動のコンパス文を描く。

第９号住居跡（第128・129図）

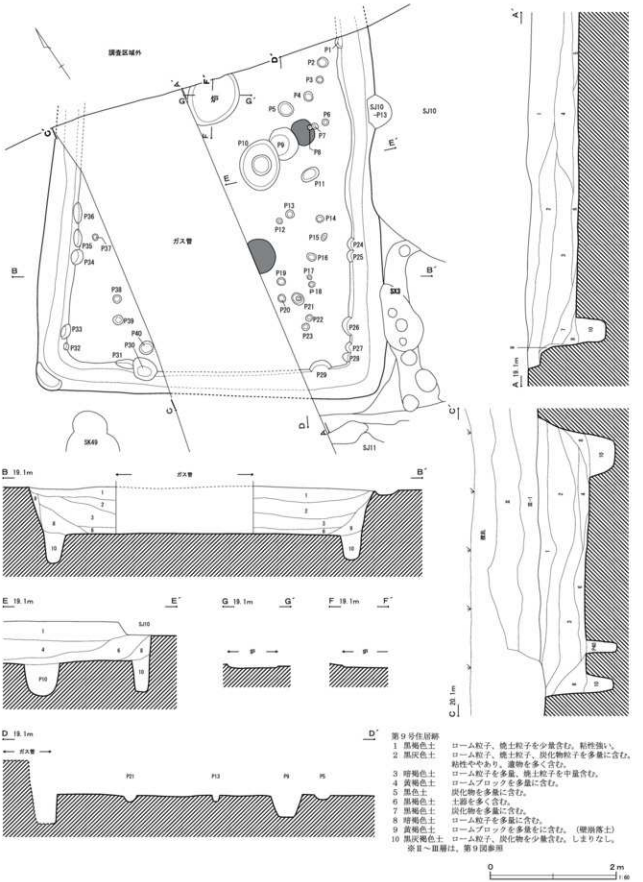
進修館高校調査区の中央部、E－８グリッドで検出された。南北に埋設されたガス管によって住居跡西半を壊され、住居跡北部は調査区域外へ続くため調査できたのは全体の半分程度である。第10号住居跡に北東部を壊されているが、本住居跡の掘込みが深かったため撹乱は下位にまでは及んでいない。

平面形態は台形を呈すると思われる。規模は、短軸の短辺5.05m、長辺5.55m、残存する長軸5.9mである。確認面からの深さは0.64～0.77mと第１号住居跡に次いで深い。主軸方向はN－33°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁際には壁溝が全周する。幅0.3～0.5mで、床面からの深さは平均0.4mである。深い部分では0.5m以上あり住居跡同様に非常に深

第15表　第９号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	(0.18)	(0.11)	0.50	P－21	0.20	0.17	0.14
P－2	0.17	0.16	0.15	P－22	0.10	0.10	0.05
P－3	0.12	0.11	0.22	P－23	0.12	0.11	0.05
P－4	0.16	0.15	0.08	P－24	(0.19)	－	0.45
P－5	0.24	0.22	0.06	P－25	(0.19)	－	0.43
P－6	0.11	0.11	0.03	P－26	(0.30)	－	0.43
P－7	0.10	0.09	0.06	P－27	(0.16)	－	0.45
P－8	0.08	0.06	0.08	P－28	(0.14)	－	0.47
P－9	0.46	0.37	0.26	P－29	(0.35)	－	0.47
P－10	0.80	0.63	0.87	P－30	0.41	0.33	0.43
P－11	0.30	0.19	0.09	P－31	(0.28)	(0.15)	－
P－12	0.10	0.09	0.06	P－32	(0.11)	(0.08)	－
P－13	0.13	0.13	0.12	P－33	(0.24)	(0.15)	－
P－14	0.12	0.12	0.10	P－34	(0.24)	(0.19)	－
P－15	0.13	0.08	0.07	P－35	(0.28)	(0.13)	－
P－16	0.16	0.13	0.08	P－36	(0.33)	(0.13)	－
P－17	0.08	0.07	0.05	P－37	0.11	0.09	0.27
P－18	0.10	0.09	0.09	P－38	0.13	0.13	0.52
P－19	0.14	0.12	0.03	P－39	0.15	0.15	0.48
P－20	0.13	0.12	0.08	P－40	0.22	0.20	0.51



第9号住居跡

1 黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含む。粘性強い。
2 黒灰色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む。粘性ややあり。遺物を多く含む。
3 暗褐色土　ローム粒子を多量、焼土粒子を中量含む。
4 黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。
5 黒色土　炭化物を多量に含む。
6 黒褐色土　土器を多く含む。
7 黒褐色土　炭化物を多量に含む。
8 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
9 黄褐色土　ロームブロックを多量をに含む。（壁崩落土）
10 黒灰褐色土　ローム粒子、炭化物を少量含む。しまりなし。
※Ⅱ～Ⅲ層は、第9図参照

0　2m
1:60

第128図　第9号住居跡

第129図　第９号住居跡遺物出土状況

い掘込みを有する。住居跡の壁は床面付近では垂直に立ち上がり、確認面に移行するに従い徐々に開く。

柱穴は40本検出された。主柱穴は確認できなかったが、位置と深さからP10、30が想定できよう。壁溝上には柱穴が不規則に配される。傾斜の柱穴規模は第15表に提示した。

調査区際で炉跡が１基検出された。一部は調査区域外へでてしまうが、径0.8mほどの円形地床炉である。掘込みは浅く、焼けた痕跡はほとんど認められない。また住居跡床面から焼土の範囲が２ヶ所検出されたが、掘込みは確認できなかった。

遺物は大型の土器破片が住居跡中央部、覆土中層からまとまって出土している。黒灰色で炭化物・焼土を多量に混入する層中からの遺物出土という状況は、第１・３・４・５号住居跡と共通する。

縄文時代中期の第10号住居跡との重複のため、中期の遺物混入がみられるが、出土土器の大半は前期関山Ⅱ式後半期のものである。したがって本住居跡も同期に比定できよう。

第９号住居跡出土遺物（第130～137図）

本住居跡から出土した土器は接合後、900点あまりで、そのうち154点を図示した。石器の出土は他住居跡同様貧弱で30点のみで、うち７点を示した。

器形復元できた土器の分類は、１が５類２種Daで多段ループ水平構成、２・３・９・10が５類10種で組紐、４が１類３種で特殊文様帯を有する。５・６は５類５種の正反の合、７は５類２種Fで単節、８は５類６種の組縄である。

１はくびれずに開く深鉢である。内面を縦方向になでている。文様は、上半に単節RLの水平多段ループ文を反時計回りに施文する。施文時の上下幅を変えアクセントをつけている。下半には組紐RRLLとLLRRで上下交互施文を行う。施文方向は時計回りである。下端左は器面の風化がみられる。

２は小型の片口注口土器であるが、注口部は欠損する。文様は器面全体にLLRRの組紐縄文を施文する。口縁部と胴部下半に半截竹管による二重平行沈線を巡らす。コンパス文と同様の意義をもつのであろう。

３は大型の片口注口土器で、口縁部下でくびれ、胴部に最大径をもつ深鉢である。文様は口縁部に単節RLで多段ループ文を水平に、以下胴部と注口部にはLLRRの組紐縄文を施す。胴部の組紐施文は複数の原体を用い、部位に応じて変える。上部のコンパス文と刺切文の間は組縄縄文の可能性もある。施文は注口部を正面としそこから反時計回りに行う。３ヶ所の成形痕上にはコンパス文が施される。上下は４本櫛による上下移動のコンパス文で、中央は半截竹管による刺切文である。

４は大型深鉢の胴部である。残存部下位に、半截竹管で刺切文を施す。刺切文より上部は単節RLによる多段ループの鎖状構成をとり、その間に平行沈線で文様を描出する特殊文様帯となる。刺切文より下部には組紐縄文が施されるが、組紐原体は不明である。

５はくびれをもつ深鉢の胴部で、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。残存部中位には成形時の継ぎ目を隠すため半截竹管で刺切文を施す。

６は胴部でくの字状に屈曲する深鉢で、正反の合A種R・Lを羽状に施文する。

７はくびれずに口縁部に向けて開く深鉢である。文様はRL単節斜縄文を全面に配する。節が大きいので組縄のRL(RL)、擬異節斜縄文の可能性もある。胴部中位には成形時の粘土帯が処理されずに残る。

８は小型深鉢である。上位は組縄のRL(RL)擬異節斜縄文を、下位はLRとRLの単節斜縄文を羽状に施文する。

９はくびれを有する深鉢であり、器面全体に原体不明の組紐縄文を施す。

10は深鉢底部である。大きく開くので胴部にくびれを持つタイプの可能性が考えられる。原体不明の組紐縄文を全面に施すが、成形須部分では幅広の無文帯を有する。底径は8.1cmで、無文の脚付底部で

ある。

11・12は1類2種Aで、平行沈線内に刻みを有する。地文は、11が単節RLによる鋸歯ループ、12は組縄の擬異節RL(RL)と思われる。

13・14は1類2種Bで、単独平行沈線で文様を描く。地文は13が組紐LLRRと思われ、14は単節RL・LRを羽状に施す。

15～27は1類2種Cで、重施文平行沈線で文様帯を描く。15・16は同一個体で、双頭波状口縁と思われる。15は波底部ちかくに角状突起をもつ。地文は組紐LLRRである。18～20は単頭波状口縁である。18の器面は繰返しの被熱のためか脆い。20の波頂部は丸みを帯びている。21・22は同一個体で、口縁部直下に刻みを有する。23は口縁部に角状突起をもつ。26は平行沈線脇にC字状の刻みを配する。

28～30は1類2種Dで、櫛によって文様帯を描く。30は同じ櫛で波状コンパス文を施す。

31～34は1類3種で、全てループ文鋸歯構成中に平行沈線で文様を描く特殊文様である。31は波状口縁だが、波頂部所態は不明である。32・33は同一個体で、成形痕上には半截竹管で刺切文を施す。刺切文以下はLLRRの組紐縄文を施文する。33の上部には注口に移行するふくらみが確認できる。

35は5類1種で、Rの無節斜縄文を施文する。

36～43は5類2種Daで、多段ループ水平構成をとる。36は口縁部直下に外面から補修孔が穿かれていたが未貫通である。37は下端にわずかに平行沈線がみられることから、1類3種の可能性もあるが、今回は5類2種Daと分類した。41は半截竹管で波状コンパス文を2段、隙間を開けずに施す。このようなコンパス文施文は稀で、今回の出土土器中この1点のみである。42は上下移動のコンパス文を半截竹管で施す。使用原体は、38が単節LRを用いた以外は全てRLである。

44～47は5類2種Dbで、多段ループ文の鋸歯構成である。全て単節RLを用いる。

48～50は5類2種Eで、上下幅等間隔幅広ループ文を施す。48は単節LRでループ文を施文し、49は単節RL・LRでのループ羽状構成とする。50の成形痕以上はRLループ文、下部は組縄RL(RL)の擬異節斜縄文を施文する。

51～56は5類2種Fで、単節斜縄文を施す。51・52はLRを、53・55・56はRLを施文する。54はRL・LRを用いて羽状とする。53は下端にコンパス文を施すが、残りがわずかなため形態は不明である。

57・58は5類4種で反の縄文を施す。57は反撚LLを縦横位施文し羽状表現するのに対して、58は反撚RR・LLを用いて羽状施文する。

59～81は5類5種で、異条斜縄文を施す。70以外は全て直前段合撚の正反の合A種である。60・65はL方向のみの施文で、それ以外は全てR方向とL方向の羽状施文である。60は原体末端でループを作出し、鋸歯状に施す。70は反縄の節が流れる正反の合C種で羽状表現をとるが、反縄の圧痕が深いことを考えると附加条技法をとるかもしれない。その場合は、単節の軸縄RLに無節の縄L2本をS方向に絡げたものと、LRにR2本をZ方向に絡げたものを原体とする。62のL方向と、75のR方向の圧痕下端には他縛痕が確認できる。81は底部破片であり、底面は欠損する。脚付底であろう。下端に半截竹管で横位沈線を巡らす。また、63～70はコンパス文を施す。その形態は63～67が竹管による刺切文、68・70が櫛による上下移動、69が櫛の刺切文である。

82～87は5類6種で、組縄縄文を施す。82は擬単節RL(LL)を施文し、櫛で上下移動のコンパス文を施す。83は中位に擬複節RL(RR)を施文するが、それ以外の部分は不明である。84は上半に擬異節RL(RL)を施文し、下半は擬複節RL(RR)と思われるが確定できない。上端に半截竹管による横位区画線がみられる。85は中段に擬複節RL(RR)を、下段には擬異節RL(RL)を施文する。86は擬異節RL(RL)と思われる。87は擬異節RL(RL)を施文する。節は粗大で、原体の繊維痕が圧痕にはっきりと残る。器壁が分厚く土器のつくりには黒浜的要素がみられる。

88〜92は５類９種で、附加条縄文を施す。88は、軸縄の単節LRに無節の縄R2本をS方向に附加したものを施文する。以下、LR(R+R→S)と表記する。附加縄は順方向附加である。89はLR(L+L→Z)で、附加縄は逆方向附加である。90はLR(R→S)で、順方向附加である。91はRL(０段の細い繊維束→Z)で、順方向附加である。92はRL(L+L→S)とLR(R+R→Z)で羽状縄文をつくる。両原体とも逆方向附加である。

93〜146は５類10種で、組紐縄文を施す。

93は波状口縁の破片で波頂部形態は単頭と思われる。94は口縁部に大きな角状突起を４つもつ。95は丸みを帯びた台形状突起であり、96はわずかな高まりを有する台形状突起である。100の左上部分にはわずかであるが、注口部へ移行するふくらみが確認できた。131の上端には、櫛による縦方向の刺突、あるいは貝殻背圧痕文と思われる痕跡が見受けられる。

確認できた組紐原体はRRLL、LLRR、LLLL、RLRLの４種類で、RRRRは確認できなかった。RRLLは93・104・107・113〜115・128・129の８点である。LLRRが最も多く、94〜96・99・100・105・106・108・110・116〜127の21点である。LLLLは130・131の２点のみである。102をRLRLとしたが組縄の可能性もあり、断定はできない。他の、97・98・101・103・109・111・112・132〜146の22点は組紐原体不明である。

コンパス文が施されたものは、93・97・98・102〜115の17点である。竹管によるものは上下移動が102・103、波状が97、刺切文が104の４点のみである。櫛によるものは全部で13点である。真正が98・105の２点、上下移動が93・106〜108・113・114の６点、波状が109〜111の３点、刺切文が112であり、115は形態不明である。

147〜154は７類底部である。147は底面に文様を有した脚付底で７類１種Bである。側面、底面ともに正反の合A種R・Lを施文する。148は有文・平底の７類１種Cである。正反の合A種Lを側面、底面ともに施文する。

149〜154は７類２種Bで、底面無文の脚付底である。側面文様は、149が単節RLの水平多段ループ文、150は単節RL・LRの単段ループ文を、151は正反の合A種R・Lを、152〜154は組紐縄文を施文する。152は組紐RRLLで153・154は原体不明組紐である。また、150は脚が高じて台付になっている。

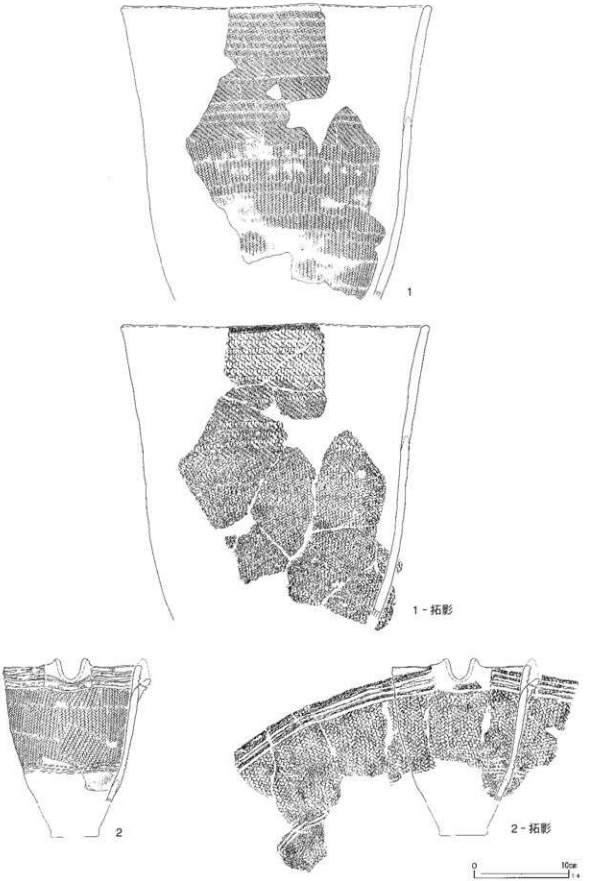
155は石鏃である。押圧剥離が剥片の中央部まで及んでいないため、分厚く、したがって未製品と考えられる。石材はチャートである。

156はスクレイパーである。両側縁に押圧剥離による刃部加工が認められることから、削器の可能性も考えられる。上下が欠損する。石材は赤色のチャートを用いる。

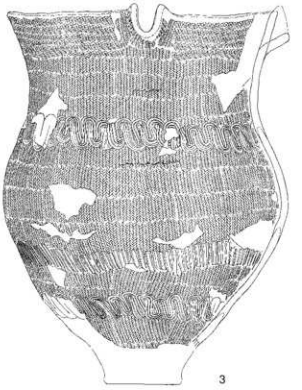
157・158は打製石斧である。扁平礫の周辺に加工を施し、打製石斧とする。側縁中央部には敲打による抉りが認められ、分銅形を呈する。平面形態は左右非対称である。加工は粗雑で両面に礫面を大きく残す。157の刃部は、上下両端の異なる面にそれぞれ加工が施され、丸みのある片刃に形成される。石材は砂岩を用いる。158の刃部は、上下両端に両刃で形成される。上下で刃部の形態が異なる。石材はホルンフェルスを用いる。

159・160は磨石である。双方とも楕円礫の両面に磨痕が観察される。160は側面に敲打痕による面取りも施される。159は安山岩、160は閃緑岩を石材として利用する。

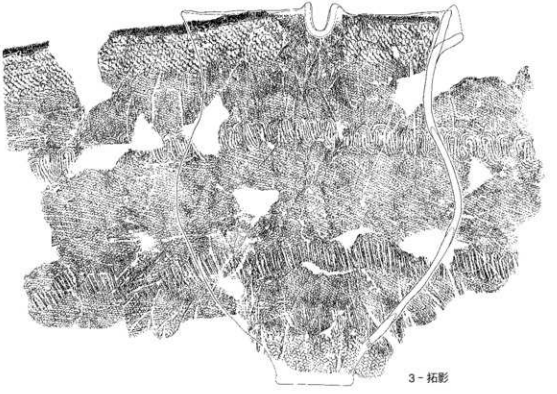
161は石皿の破片である。石材には安山岩を用い、両面に磨痕が認められる。一部分のみの残存であるため、全体の大きさは不明である。



第130図　第９号住居跡出土遺物（1）



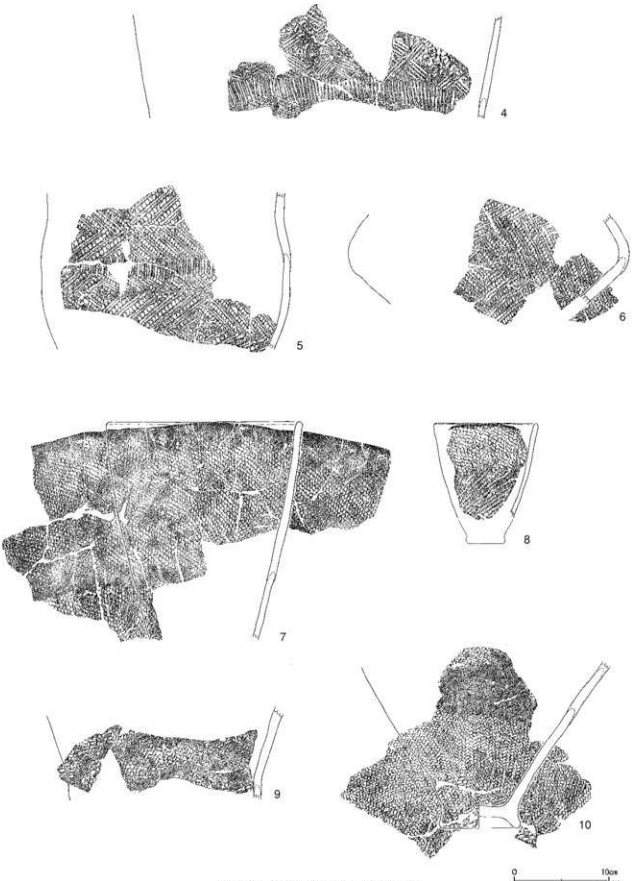
3



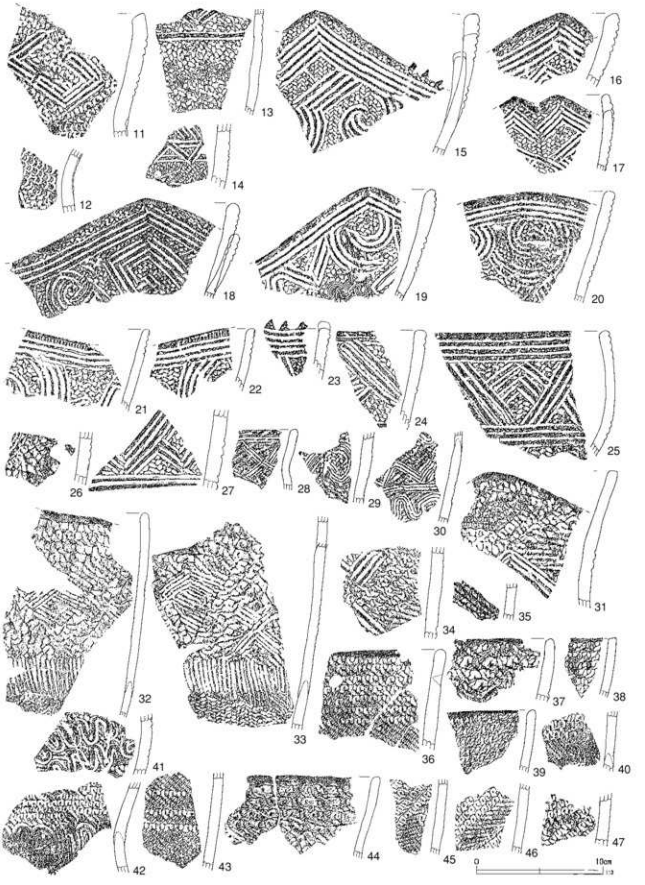
3－拓影

0　10cm

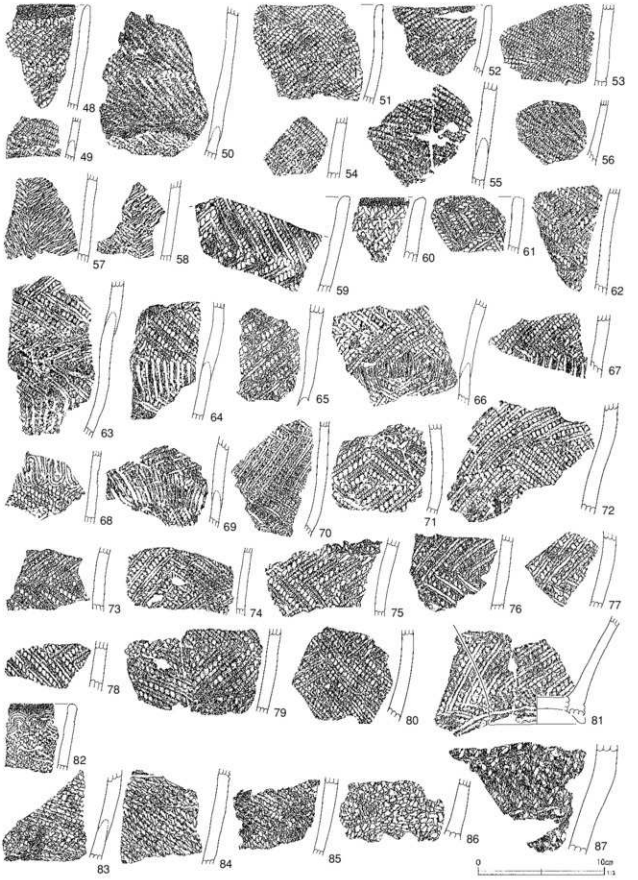
第131図　第９号住居跡出土遺物（2）



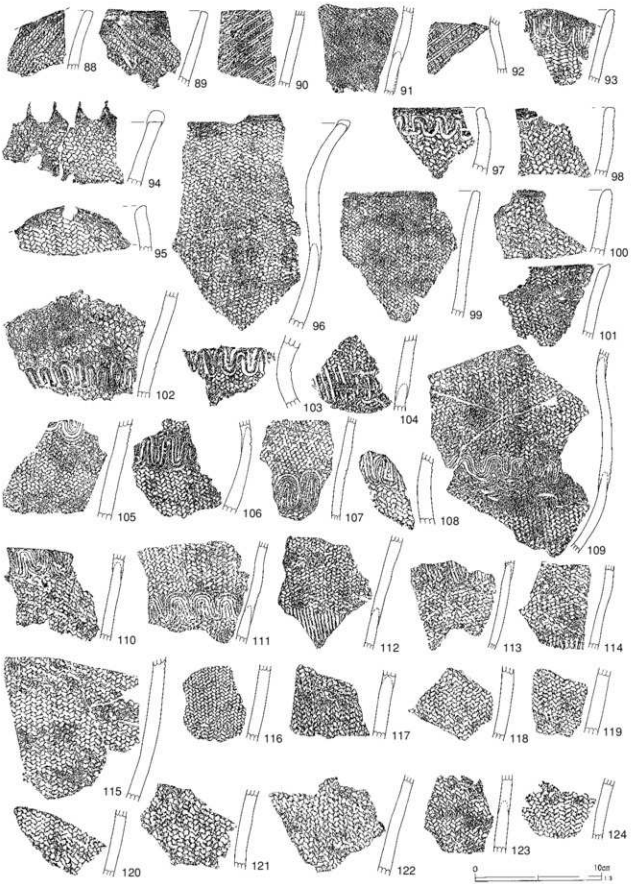
第132図　第９号住居跡出土遺物（3）



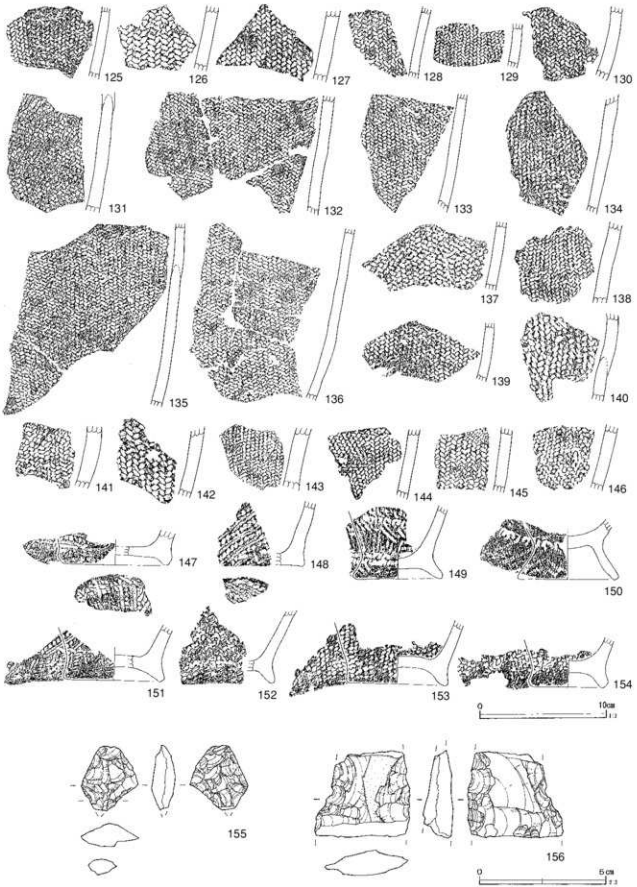
第133図　第９号住居跡出土遺物（4）



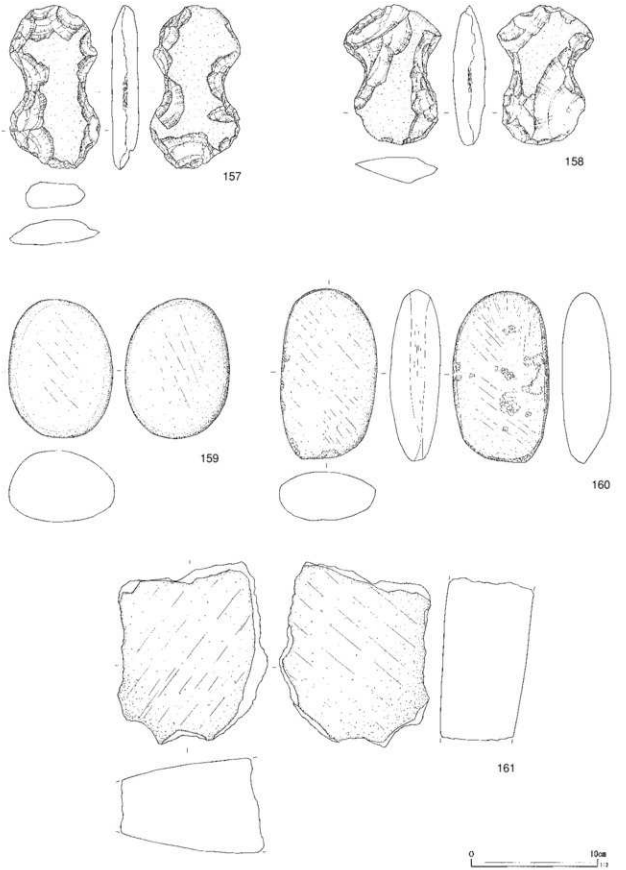
第134図　第９号住居跡出土遺物（5）



第135図　第９号住居跡出土遺物（6）



第136図　第９号住居跡出土遺物（7）



第137図　第９号住居跡出土遺物（8）

第16表　第９号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　　考
155	石鏃	(2.52)	2.22	0.88	4.1	チャート	
156	スクレイパー	(3.44)	3.76	0.97	13.8	チャート	
157	打製石斧	12.82	7.02	2.05	247.0	砂岩	
158	打製石斧	10.79	7.66	2.52	208.9	ホルンフェルス	
159	磨石	10.80	8.24	5.44	753.4	安山岩	
160	磨石	13.24	7.58	4.02	555.1	閃緑岩	
161	石皿	(13.48)	(10.68)	7.36	2051.8	安山岩	

第10号住居跡（第138図）

進修館高校調査区の東端北寄りのＥ・Ｆ－８グリッドで検出された。住居跡北隅が調査区域外へかかり、北西部分は第９号住居跡を一部壊して構築される。東隅では縄文時代中期以降所産の第38号土壙との重複関係が認められ、その掘込みは床面下にまで及ぶ。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸4.46m、短軸4.07m、確認面からの深さは0.15～0.22mを測る。主軸方向はＮ－19°－Ｗを指す。

床面は中央部にむかって緩やかな擂鉢状を呈する。柱穴は18本検出された。主柱穴はその位置と規模からP1、3、9、11、13の５本である。個別の柱穴の規模は第17表に提示した。

中央部北西寄りから炉跡が１基検出された。長軸0.87m、短軸0.57mの楕円形を呈し、中央に小型深鉢を埋設した埋甕炉である。炉周縁部には土器破片や石器で縁取りを施している。炉底面は焼き締まり、硬化がみられる。繰返し使用したことがうかがえる。炉跡北側の４つの柱穴は炉にともなうものと考えられるが機能は不明である。

第139図１の炉体土器が本住居跡の時期を示しており、加曽利ＥⅠ式新段階～ＥⅡ式古段階と考えられる。

第10号住居跡出土遺物（第139・140図）

１は炉から検出された炉体土器である。ほぼ完形の小型キャリパー土器であるが、器面の風化が著しく、脆い。口縁部には隆帯で渦巻文と楕円区画文を交互に巡らせた文様帯を持つ。楕円区画内には細い棒状工具で沈線を施す。渦巻文の部分は突起状に突出し、５単位配される。文様帯の下端は隆帯によって、頸部と画され、頸部は無文帯となる。胴部とは３本の横位沈線で画され、３本一組の沈線と波状の懸垂文が垂下する。地文は単節LRを縦位施文する。

２～11は前期鋸山Ⅱ式後半期の土器である。鋸山期の第９号住居跡と重複していることから混入と考えられる。

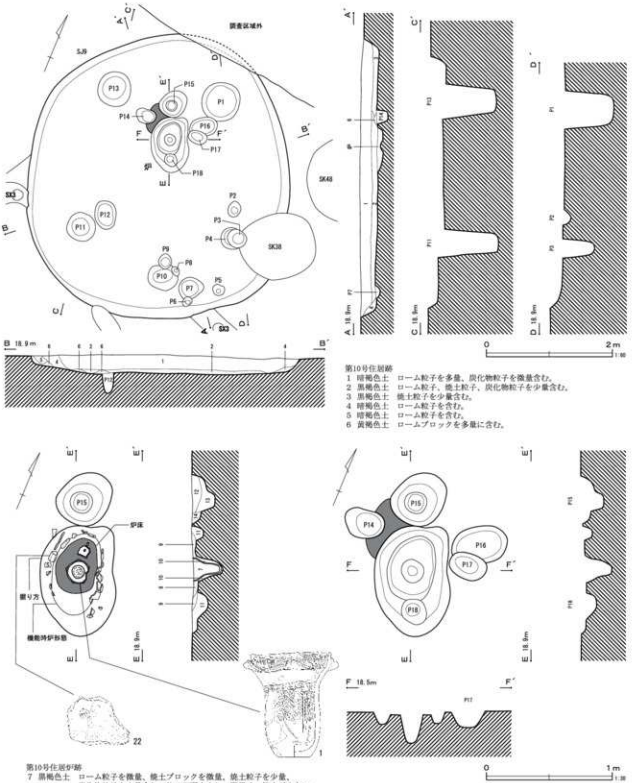
２は独立平行沈線で口縁部文様帯を描く１類２種Bである。地文は組紐RRLLと組縄の握異節RL(RL)を施文する。

３～５は、重平行沈線で口縁部文様帯を描く１類２種Cである。３・４は地文に原体不明組紐組縄文を、５はLLLLの組紐縄文を施す。３は口縁部に角状突起をもつ。

６は半截竹管で山形文を施していると考えられる

第17表　第10号住居跡　柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
P－1	0.61	0.60	0.77	P－10	0.46	0.40	0.18
P－2	0.25	0.19	0.12	P－11	0.44	0.43	0.93
P－3	0.31	0.27	0.63	P－12	0.45	0.33	0.72
P－4	(0.36)	0.34	0.29	P－13	0.54	0.47	0.82
P－5	0.19	0.16	0.08	P－14	0.30	0.23	0.21
P－6	0.16	0.13	0.09	P－15	0.44	0.39	0.26
P－7	0.37	0.34	0.11	P－16	0.46	0.29	0.10
P－8	0.16	0.11	0.18	P－17	0.30	0.20	0.16
P－9	0.24	0.21	0.40	P－18	0.21	0.19	0.07

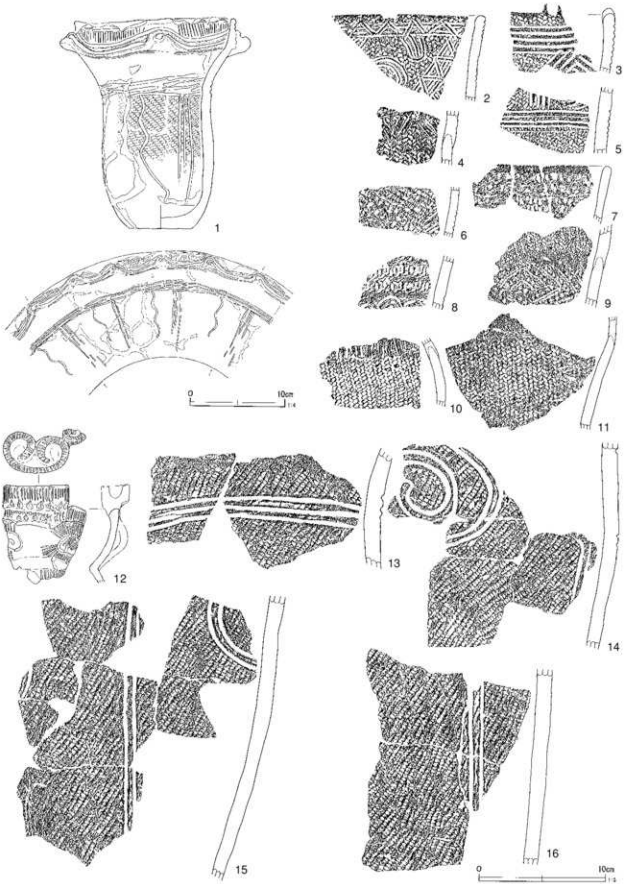


第10号住居炉跡
7 黒褐色土　ローム粒子を微量、焼土ブロックを微量、焼土粒子を少量、
炭化物粒子を少量含む。他の炉層土より一際黒く、焼土が少ない。
（埋設土器覆土）
8 暗褐色土　ローム粒子を含む。焼土ブロックを含み、焼土粒子、
炭化物粒子を特に多量に含む。下位は焼けしまっている。
（掘込部の燃焼部分覆土）
9 暗褐色土　ローム粒子を含む。焼土ブロックを微量、焼土粒子を含む、
炭化物粒子を含む。下位はしまりなし。（掘込部の非燃焼部分覆土）
10 黒褐色土　ローム粒子を多量、焼土ブロックを多量、焼土粒子を多量、
炭化物粒子を多量に含む。（埋設土器掘り方）

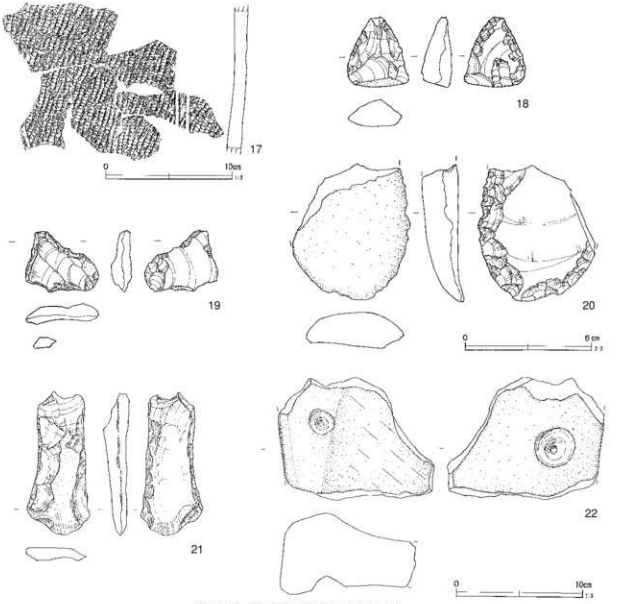
第10号住居跡
1 暗褐色土　ローム粒子を多量、炭化物粒子を微量含む。
2 黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
3 黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
4 暗褐色土　ローム粒子を含む。
5 暗褐色土　ローム粒子を含む。
6 黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。

11 暗褐色土　ローム粒子を多量、焼土ブロックを多量、焼土粒子を多量、
炭化物粒子を少量含む。（炉縁取り土器掘り方）
12 暗褐色土　ローム粒子を多量、焼土ブロックを少量、焼土粒子を含む、
炭化物粒子、ロームブロックを含む。（P15覆土）
13 暗褐色土　ロームブロック少量、ローム粒子を含む、焼土ブロックを微量、
焼土粒子を少量、炭化物粒子を少量含む。（P15覆土）
14 暗褐色土　ロームブロックを微量、ローム粒子を含む、焼土ブロック含む、
焼土粒子を多量、炭化物粒子を多量に含む。（P15覆土）

第138図　第10号住居跡・遺物出土状況



第139図　第10号住居跡出土遺物（1）



第140図　第10号住居跡出土遺物（2）

第18表　第10号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
18	石鏃	2.74	2.40	1.10	5.8	黒曜石	石鏃未製品
19	石匙	2.36	2.90	0.41	3.1	黒曜石	
20	スクレイパー	(5.55)	4.36	1.40	39.7	ホルンフェルス	
21	打製石斧	11.20	4.88	1.76	87.0	頁岩	
22	石皿	(9.50)	(11.53)	6.42	838.1	安山岩	

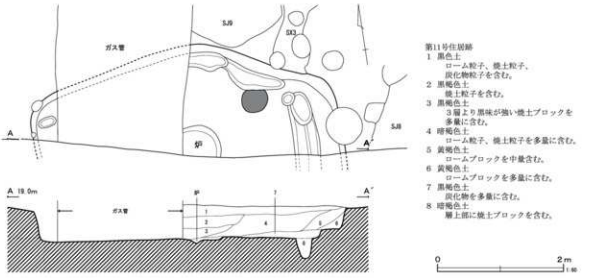
ことから1類3種とした。地文はRLの単節斜縄文を施文する。

7は5類2種Daで、単節RLのループ文水平構成である。

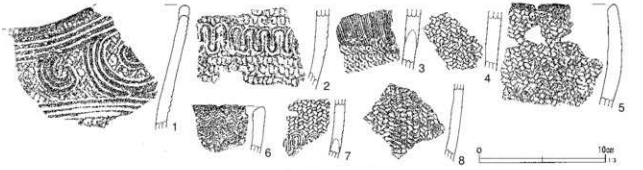
8は5類4種で、原体上端に強制環付した反縄LLを多段に施文する。下端に櫛によるコンパス文を施すが、形態は不明である。

9は5類9種の附加条で、軸縄の単節RLに無節の縄2本をS方向に絡げたものと単節LRに無節の縄R2本をZ方向に絡げたものを羽状施文する。上半にはLLRRの組紐縄文を施す。

10・11は5類10種で、原体不明の組紐縄文を施文



第141図　第11号住居跡



第142図　第11号住居跡出土遺物

する。10は上部に半截竹管で刺切文を施す。

12は縄文中期五領ヶ台式の細線文系土器群の口縁部突起である。立体的に作られた突起は上からみると両端が渦巻状に内側へ入り、その上端には刻みが施される。突起側面や器面の沈線区画の周囲には細い棒状工具により短沈線が施される。突起下部には三角印刻文が3段にわたり施文される。その下には橋状把手がついていたと思われるが欠損する。

13～17は、縄文中期、加曽利EⅠ～Ⅱ式の土器である。13は地文施文後に3本沈線で横位区画を施す。頸部と胴部を画するものであろう。14・15は2本一組の懸垂文と大型渦巻文が描かれる。16・17は直状の懸垂文が2本一組で施されている。いずれも地文はRLの縦位施文である。

18は石鏃である。石材は黒曜石である。剥片の縁辺にのみ加工が施され、側面が非常に厚く、製作初期段階における未製品と考えられる。

19は石匙である。黒曜石製の横形石匙で、摘み部は明確に持たず、刃部加工も顕著ではない。

20はスクレイパーである。石材はホルンフェルスを用い、剥片の主要剥離面側に加工が施されている。上部が欠損する。

21は打製石斧である。頁岩を用い、短冊形を呈するが、下半部はあまり外反しない。全体的に磨耗が激しく、特に刃部付近が顕著である。

22は石皿であり、炉の縁取り石として転用されていた。石材は安山岩で、表面に窪みが、両面に凹部が1ヶ所ずつ認められる。

第11号住居跡（第141図）

進修館高校調査区、中央部南端のE－8グリッドで住居跡の北側が検出されたが、その西半をガス管

に壊されているとともに、主体は調査区域外へ続くため平面形態は不明である。規模は短軸4.88m、残存する長軸1.77mである。住居跡北辺は北側へ、くの字状に張り出している。その部分で第３号性格不明遺構との重複がみられるが、正確な新旧関係は判断しえなかった。

確認面からの深さは0.31～0.58mとやや深い。主軸方向はN－2°－Eを指す。住居跡東壁から北壁にかけて壁溝が巡っていたが、西壁では確認できなかった。掘込みも床面から0.3mとかなり深い。また東壁では壁溝と壁の立ち上がりがずれており、住居の拡張が行われた可能性も指摘できよう。

中央部で炉跡が１基と北壁壁溝と接する部分で焼土が１ヶ所検出された。柱穴は確認できなかった。

出土遺物は極めて少なかったが、前期関山Ⅱ式後半期に帰属すると考えてよいだろう。

第11号住居跡出土遺物（第142図）

本住居跡から検出された遺物は、わずかに土器33点、石器１点のみである。そのうち土器のみ８点図示した。石器は剥片類である。

１は波状口縁の破片であるが波状形態は不明である。１類２種Cで、地文は正反の合A種R・Lを羽状に施文する。

２・３は５類２種Daで、単節RLのループ文を多段水平構成とする。２は竹管、３は櫛によって上下移動のコンパス文をそれぞれ施文する。

４は５類６種で組紐の擬異節RL(RL)を施文する。

５～８は５類10種の組紐である。６・８はRRLL、５・７は原体不明の組紐縄文を施文する。７は櫛による上下移動のコンパス文を施す。

（２） 土壙

第１号土壙（第145図）

Ｊ－10グリッドに位置する。北側は撹乱を受けている。平面形態は長方形で、浅い皿状である。規模は残存する長軸0.89m、短軸0.80m、深さ0.18mである。縄文時代前期（関山式）の土器片が出土したため、時期は縄文時代前期と考えられる。

第４号土壙（第145図）

Ｈ－９グリッドに位置する。北側は水道管にかかり、未調査である。平面形態は楕円形で、平坦な底面を持つ。規模は長軸0.98m、残存する短軸0.55m、深さ0.20mである。縄文時代前期（関山式）の土器片が出土したため、時期は縄文時代前期であろう。

第９号土壙（第145図）

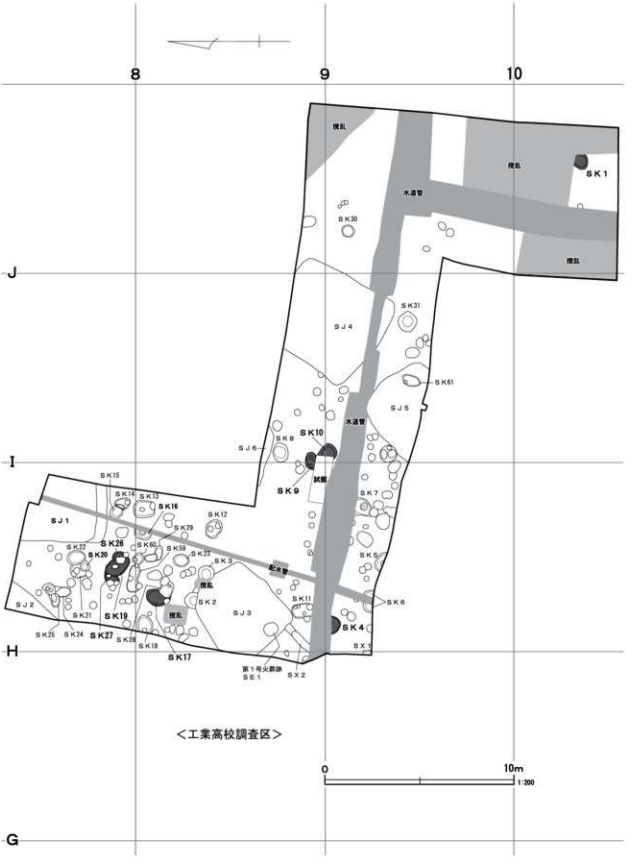
Ｈ・Ｉ－８グリッドに位置する。第10号土壙と重複関係にあると考えられるが、重複部分は試掘トレンチにかかり、土層からの新旧の判断は出来なかった。平面形態は楕円形であり、北側が一部深くなっている。規模は長軸0.97m、残存する短軸0.59m、深さ0.43mである。縄文時代中期（加曽利Ｅ式）のものと思われる土器片が出土したため、時期は縄文時代中期と思われる。

第10号土壙（第145図）

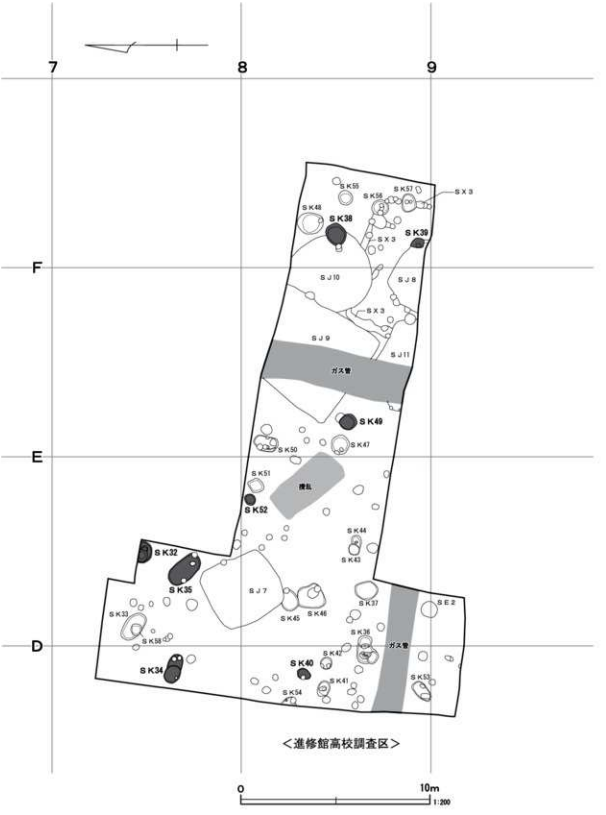
Ｉ－８・９グリッドに位置する。第９号土壙と重複関係にあると考えられる。西側は試掘トレンチに、南側の一部は水道管にかかっている。平面形態は楕円形であり、底面はほぼ平坦である。規模は残存する長軸1.12m、残存する短軸0.79m、深さ0.24mである。縄文時代前期関山Ⅱ式の深鉢が出土しており、縄文時代前期関山期の所産と考えられる。

第10号土壙出土遺物（第147図１）

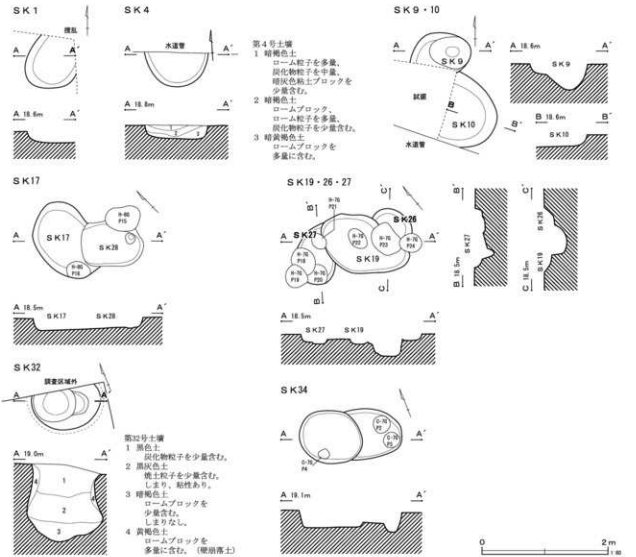
片口注口を有すると思われる深鉢である。注口部は欠損するが、注口部に移行するふくらみをもつ。注口脇には台形状突起をもつ。文様はRRLLの組紐縄文を全面に施文する。口縁部直下と成形痕上には半截竹管による上下移動のコンパス文を施す。



第143図　縄文時代の土壙位置図（1）



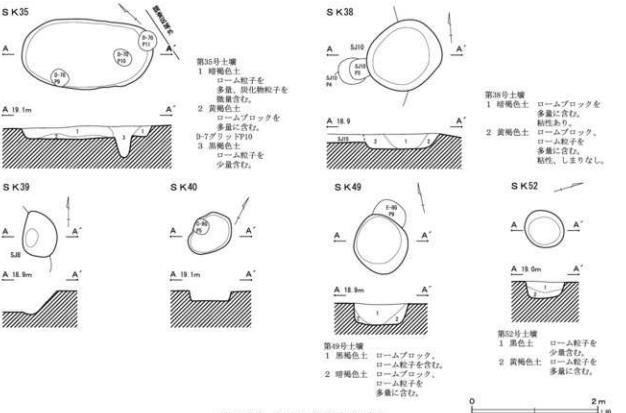
第144図　縄文時代の土壙位置図（2）



第145図　縄文時代の土壙（1）

第19表　縄文時代の土壙計測表

番号	グリッド	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位
1	J−10	長方形	(0.89)	0.80	0.18	N−31°−E
4	H−9	楕円形	0.98	(0.55)	0.20	N−83°−W
9	H・I−8	楕円形	0.97	(0.59)	0.43	N−77°−E
10	I−8・9	楕円形	(1.12)	(0.79)	0.24	N−73°−W
17	H−8	長方形	1.24	0.88	0.26	N−4°−E
19	H−7	不整形	1.43	0.92	0.16	N−23°−W
26	H−7	楕円形	(0.66)	(0.26)	0.23	N−30°−W
27	H−7	楕円形	(1.00)	(0.30)	0.31	N−47°−E
32	D−7	楕円形	1.08	(0.64)	1.22	N−66°−W
34	C−7	長楕円形	1.60	0.83	0.40	N−68°−W
35	D−7	長楕円形	2.02	1.11	0.53	N−43°−W
38	F−8	長方形	1.18	1.03	0.28	N−47°−E
39	F−8	不整形	0.76	0.56	0.39	N−17°−W
40	C−8	楕円形	0.76	0.58	0.38	N−21°−E
49	E−8	方形	1.09	0.84	0.35	N−42°−E
52	D−8	円形	0.62	0.58	0.26	N−75°−E



第146図　縄文時代の土壙（2）

第17号土壙（第145図）

H－8グリッドに位置する。帰属時期不明の第28号土壙と重複する。平面形態は長方形である。深さは第28号土壙とほとんど同じで、両者の境界は明確でない。規模は長軸1.24m、短軸0.88m、深さ0.26mである。敲石が出土したため、時期は縄文時代と考えられる。

第17号土壙出土遺物（第147図2）

第17号土壙からは敲石が1点出土した。安山岩の棒状礫の一端に敲打による剥離が認められる。

第19号土壙（第145図）

H－7グリッドに位置する。第26・27号土壙と重複しており、調査時の観察所見によると本遺構が最も新しい。平面形態は不整形である。規模は長軸1.43m、短軸0.92m、深さ0.16mである。縄文時代前期（関山式）と思われる破片が出土したため、時期は縄文時代前期と考えられる。

第26号土壙（第145図）

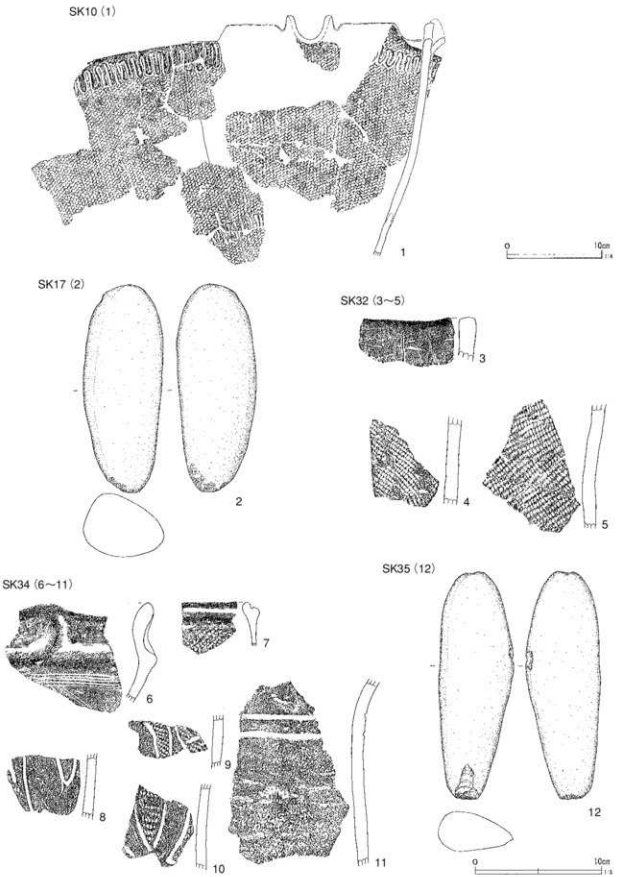
H－7グリッドに位置する。第19・27号土壙と重複する。平面形態は楕円形である。規模は残存する長軸0.66m、残存する短軸0.26m、深さ0.23mである。第19号土壙との重複関係から、時期は縄文時代であろう。

第27号土壙（第145図）

H－7グリッドに位置する。第19・26号土壙と重複する。平面形態は楕円形である。規模は残存する長軸1.00m、残存する短軸0.30m、深さ0.31mである。第19号土壙との重複関係から、時期は縄文時代であろう。

第32号土壙（第145図）

D－7グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。断面形は底部近くでオーバーハングしている、いわゆる「袋状土壙」である。規模は長軸1.08m、残存する短軸0.64m、深さ1.22mである。出土遺物



第147図　縄文時代の土壙出土遺物

は縄文時代前期（関山式）の土器小片と縄文時代後期初頭の土器片が出土した。縄文時代後期と考えられる。

第32号土壙出土遺物（第147図3～5）

縄文時代後期初頭の粗製土器である。3は口縁部直下の無文部分である。4・5は胴部で、4は単節RL、5は単節LRの縦位回転施文である。

第34号土壙（第145図）

C－7グリッドに位置する。平面形態は長楕円形で、西側が一段深くなっている。規模は長軸1.60m、短軸0.83m、深さ0.40mである。縄文時代後期と思われる土器片が多数出土している。そのため縄文時代後期の所産と考えられる。

第34号土壙出土遺物（第147図6～11）

6・7は堀の内Ⅰ式土器の口縁部である。6は口縁部に認められるわずかな突起から隆帯を垂下させ、横位に巡る隆帯に合流する。隆帯下には櫛描文が施される。7は口縁部直下に沈線と隆帯を巡らせ、その下部に単節LRの横位施文を行う。8～10は称名寺式土器の胴部で、爪形縄文によるJ字文が描出される。11は無文地に2本の横位区画線が施される。

第35号土壙（第146図）

D－7グリッドに位置する。平面形態は長楕円形で、底面はほぼ平坦である。規模は長軸2.02m、短軸1.11m、深さ0.53mである。石器と縄文時代前期（関山式）の土器片が出土した。時期は縄文時代前期と考えられる。

第35号土壙出土遺物（第147図12）

敲石が1点出土した。石材は頁岩を用い、棒状礫のやや尖った側の一端と、側面のやや凸になった部分に敲打による剥離が認められる。

第38号土壙（第146図）

F－8グリッドに位置する。第10号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は長方形である。規模は長軸1.18m、短軸1.03m、深さ0.28mである。出土遺物は縄文時代前期（関山式）の土器片と時期不明の縄文土器片が出土した。時期は第10号住居跡との新旧関係より、縄文時代中期以降の縄文時代と考えられるが、確定的ではない。

第39号土壙（第146図）

F－8グリッドに位置する。第8号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は不整形である。規模は長軸0.76m、短軸0.56m、深さ0.39mである。縄文時代前期（関山式）の土器片が出土したため、時期は縄文時代前期と考えられる。

第40号土壙（第146図）

C－8グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、平坦な底面からほぼ垂直に壁が立ち上がる。規模は長軸0.76m、短軸0.58m、深さ0.38mである。縄文土器小片が出土しており、縄文時代と考えられる。

第49号土壙（第146図）

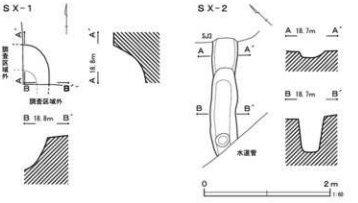
E－8グリッドに位置する。平面形態は方形である。規模は長軸1.09m、短軸0.84m、深さ0.35mである。縄文時代前期（関山式）の土器片が出土したため、時期は縄文時代前期と考えられる。

第52号土壙（第146図）

D－8グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸0.62m、短軸0.58m、深さ0.26mである。縄文時代前期の土器片と詳細不明の縄文土器片が出土した。時期は縄文時代前期と考えられる。

第20表　縄文時代の土壙出土石器観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
2	敲石	16.32	6.15	4.92	704.8	安山岩	SK-17出土
12	敲石	18.00	5.78	3.10	453.1	頁岩	SK-35出土

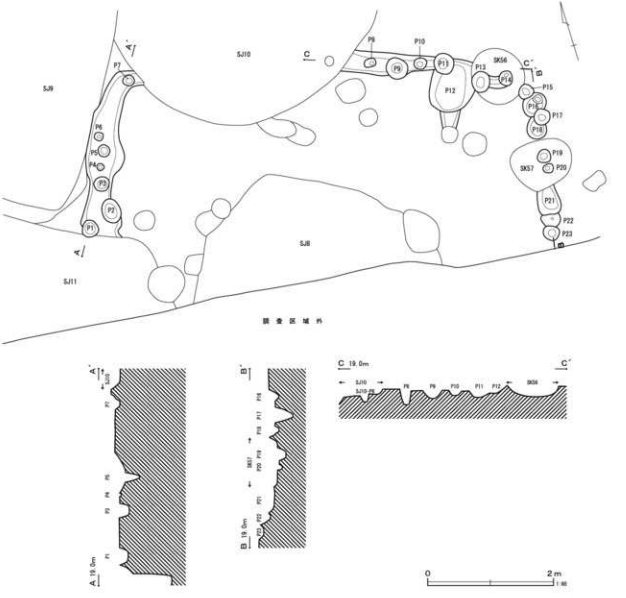


第148図　第１号・第２号性格不明遺構

（３）　性格不明遺構

第１号性格不明遺構（第148図）

Ｇ・Ｈ－９グリッドに位置する。南側と西側が調査区域外にあたり、全体の形態は不明である。住居跡の隅部の可能性もある。調査された部分の規模は長軸0.62m、短軸0.41m、深さ0.52mである。時期は、周囲の状況から考えて縄文時代の可能性があるが詳細は不明である。



第149図　第３号性格不明遺構

第２号不明遺構（第148図）

Ｇ・Ｈ－９グリッドに位置する。南側が水道管にかかり未調査であり、その先は調査区域外へと続いている。北側は縄文時代の第３号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。形状や重複関係などから、北西方向に隣接する住居の壁溝の可能性がある。調査された部分の規模は幅0.39～0.41m、長さ1.78m、深さ0.13～0.58mである。時期は縄文時代前期の可能性がある。

第３号不明遺構（第149図）

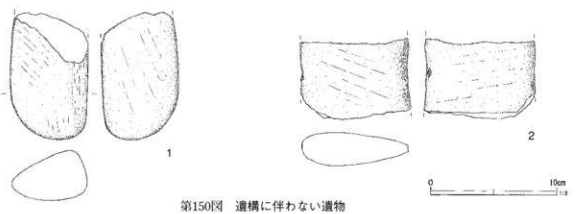
Ｅ・Ｆ－８グリッドに位置する。南側が第11号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。また、本遺構の中央付近に第８号住居跡が存在するが、新旧関係は不明である。溝が方形に巡るとすれば、南側は調査区域外へと続く。溝に囲まれた内側には明確な硬化面などは検出できなかった。形状などから考えて住居の可能性があるが、遺物も出土せず、詳細は不明である。調査された部分の規模は長軸7.38m、短軸は3.47m、深さ0.13～0.58mである。時期は縄文時代前期の可能性がある。

第21表　第３号性格不明遺構柱穴計測表

番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	番　号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）
Ｐ－１	0.26	0.24	0.14	Ｐ－13	0.30	0.27	0.15
Ｐ－２	0.38	0.28	0.16	Ｐ－14	0.23	0.20	0.12
Ｐ－３	0.25	0.22	0.17	Ｐ－15	0.22	0.20	0.10
Ｐ－４	0.13	0.11	0.20	Ｐ－16	0.39	0.34	0.16
Ｐ－５	0.19	0.18	0.22	Ｐ－17	0.26	0.24	0.37
Ｐ－６	0.14	0.13	0.11	Ｐ－18	0.35	0.30	0.14
Ｐ－７	0.18	0.16	0.08	Ｐ－19	0.18	0.18	0.11
Ｐ－８	0.18	0.14	0.23	Ｐ－20	0.17	0.15	0.16
Ｐ－９	0.36	0.32	0.24	Ｐ－21	0.50	0.36	0.08
Ｐ－10	0.20	0.17	0.09	Ｐ－22	0.30	0.20	0.02
Ｐ－11	0.33	0.30	0.23	Ｐ－23	0.34	0.22	0.07
Ｐ－12	0.85	0.68	0.21				

（４）　遺構に伴わない遺物

１・２はともにＨ－８グリッドから検出された磨石の破片である。それぞれ楕円礫、扁平礫の両面に磨痕が観察される。石材は、１が砂岩、２が凝緑岩を用いる。



第150図　遺構に伴わない遺物

第22表　遺構に伴わない遺物観察表

番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
1	磨石	(9.96)	6.04	3.87	326.6	砂岩	Ｈ－８グリッド出土
2	磨石	(6.04)	8.60	2.64	230.5	凝緑岩	Ｈ－８グリッド出土

２．平安時代以降

（１） 土壙

第２号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。第3号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は円形であり、底面は平坦である。規模は長軸0.87ｍ、短軸0.86ｍ、深さ0.51ｍである。常滑産甕の破片が出土しており、時期は中世と考えられる。

第３号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。西側は攪乱を受け第３号住居跡より新しい。平面形態は円形と思われる。規模は長軸0.97ｍ、短軸0.90ｍ、深さ0.63ｍである。大きさ、平面形態、覆土などが隣接する第２号土壙と近似していることから、時期は中世と考えられる。

第５号土壙（第155図）

Ｈ－９グリッドに位置する。南側は調査区域外に続く。平面形態は長方形である。規模は長軸1.08ｍ、残存する短軸0.46ｍ、深さ0.30ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第６号土壙（第155図）

Ｈ－９グリッドに位置する。南側は調査区域外に続き、また遺構中央に配水管がかかり未調査である。平面形態は長方形である。規模は長軸1.22ｍ、残存する短軸0.62ｍ、深さ0.23ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第７号土壙（第155図）

Ｈ－９グリッドに位置する。北側は水道管にかかり未調査である。平面形態は不整形であり、断面形状は中央がやや深くなる。規模は残存する長軸0.88ｍ、短軸0.92ｍ、深さ0.27ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第８号土壙（第155図）

Ｉ－８グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.06ｍ、短軸0.81ｍ、深さ0.35ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第11号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。南端は水道管にかかり、未調査である。平面形態は長方形で浅い皿状である。規模は残存する長軸1.13ｍ、短軸は0.76ｍ、深さ0.30ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第12号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.01ｍ、短軸0.84ｍ、深さ0.28ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第13号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。平面形態は長方形であり、底面は平坦でほぼ垂直に立ち上がる壁を持つ。規模は長軸1.15ｍ、短軸0.93ｍ、深さ0.21ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第14号土壙（第155図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第15号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形態は不整形である。規模は長軸0.83ｍ、短軸0.63ｍ、深さ0.23ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第15号土壙（第155図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第14号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。西側の一部が排水管にかかり未調査である。平面形態は楕円形である。規模は長軸0.70ｍ、短軸0.66ｍ、深さ0.18ｍで

ある。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第16号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。東側に排水管がかかり、未調査である。平面形態は長方形であろう。規模は長軸0.87m、残存する短軸0.47m、深さ0.20mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第18号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。西側が調査区域外へと続く。平面形態は楕円形である。規模は残存する長軸0.94m、短軸0.83m、深さ0.27mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第20号土壙（第155図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第21・22号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形である。規模は長軸0.56m、短軸0.50m、深さ0.26mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第21号土壙（第155図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第20・22号土壙と重複する。規模は残存する長軸0.82m、残存する短軸0.70m、深さ0.18mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第22号土壙（第155図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第20・22号土壙と重複する。規模は残存する長軸0.98m、残存する短軸0.78m、深さ0.12mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第23号土壙（第155図）

Ｈ－８グリッドに位置する。平面形態は楕円形であり、底面はほぼ平坦である。規模は長軸0.85m、短軸0.66m、深さ0.19mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第24号土壙（第156図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第25号土壙と重複する。平面形態は楕円形である。規模は残存する長軸は0.85m、短軸は0.53m、深さは0.39mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第25号土壙（第156図）

Ｈ－７グリッドに位置する。第24号土壙と重複するが新旧関係は不明である。平面形態は不整形である。規模は残存する長軸1.34m、短軸は0.42m、深さは0.14mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第28号土壙（第156図）

Ｈ－８グリッドに位置する。縄文時代の敲石が出土した第17号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形である。規模は残存する長軸は0.97m、短軸0.72m、深さ0.22mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第29号土壙（第156図）

Ｈ－８グリッドに位置する。平面形態は不整形である。規模は長軸0.95m、短軸0.39m、深さ0.19mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第30号土壙（第156図）

Ｊ－９グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸0.67m、短軸0.62m、深さ0.11mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第31号土壙（第156図）

Ｉ－９グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸1.01ｍ、短軸0.99ｍ、深さ0.39ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第33号土壙（第156図）

Ｄ－７グリッドに位置する。第58号土壙と重複しており、土層観察から本遺構の方が古い。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.65ｍ、短軸0.98ｍ、深さ0.24ｍである。出土遺物は縄文時代前期（関山式）と縄文時代後期の土器片および土師器の破片が出土した。時期は古代～中世と考えられる。

第36号土壙（第156図）

Ｃ・Ｄ－８グリッドに位置する。平面形態は不整形である。規模は長軸1.49ｍ、短軸0.12ｍ、深さ0.50ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第37号土壙（第156図）

Ｄ－８グリッドに位置する。平面形態は楕円形であり、底面はほぼ平坦である。規模は長軸1.21ｍ、短軸0.99ｍ、深さ0.18ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第41号土壙（第156図）

Ｃ－８グリッドに位置する。平面形態は不整楕円形であり、中央付近に深い部分が見られる。規模は長軸0.87ｍ、短軸0.64ｍ、深さ0.40ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第42号土壙（第156図）

Ｃ－８グリッドに位置する。平面形態は円形であり、平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる壁を持つ。規模は長軸0.64ｍ、短軸0.61ｍ、深さ0.31ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第43号土壙（第156図）

Ｄ－８グリッドに位置する。第44号土壙と重複し、土層観察から本遺構の方が新しい。平面形態は楕円形である。規模は長軸0.66ｍ、短軸0.57ｍで、深さは0.90ｍ以上だが完掘はしなかった。中世の五輪塔のものと思われる凝灰岩片が出土したため、時期は中世と考えられる。

第44号土壙（第156図）

Ｄ－８グリッドに位置する。第43号土壙と重複し、本遺構の方が古い。平面形態は楕円形である。規模は長軸0.76ｍ、短軸0.51ｍ、深さ0.35ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第45号土壙（第157図）

Ｄ－８グリッドに位置する。第７号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。また第46号土壙と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.16ｍ、短軸0.93ｍ、深さ0.12ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第46号土壙（第157図）

Ｄ－８グリッドに位置する。第45号土壙と重複し、本遺構の方が古い。平面形態は長方形である。規模は長軸1.14ｍ、短軸1.33ｍ、深さ0.52ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第47号土壙（第157図）

Ｅ－８グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸0.99ｍ、短軸0.95ｍ、深さ0.21ｍである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第48号土壙（第157図）

Ｆ－８グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.36ｍ、短軸1.14ｍ、深さ0.32ｍ

である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第50号土壙（第157図）

E－8グリッドに位置する。平面形態は不整長方形である。規模は長軸1.28m、短軸0.81m、深さ0.57mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第51号土壙（第157図）

D－8グリッドに位置する。平面形態は方形である。規模は長軸0.72m、短軸0.70m、深さ0.40mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第53号土壙（第157図）

C－8グリッドに位置する。平面形態は長方形である。規模は長軸1.20m、短軸0.69m、深さ0.56mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第54号土壙（第157図）

C－8グリッドに位置する。西側は調査区域外へと続く。平面形態は不明である。規模は長軸0.82m、残存する短軸は0.46m、深さ0.23mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第55号土壙（第157図）

F－8グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸0.79m、短軸0.74m、深さ0.33mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第56号土壙（第157図）

F－8グリッドに位置する。関山式期の住居の可能性がある第3号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は円形である。規模は長軸0.89m、短軸0.82m、深さ0.17mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第57号土壙（第157図）

F－8グリッドに位置する。関山式期の住居の可能性がある第3号性格不明遺構と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は楕円形である。規模は長軸0.97m、短軸0.76m、深さ0.30mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第58号土壙（第156図）

D－7グリッドに位置する。第33号土壙と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は方形である。規模は長軸0.61m、短軸0.56mで、深さは1.60m以上だが完掘はしなかった。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第59号土壙（第157図）

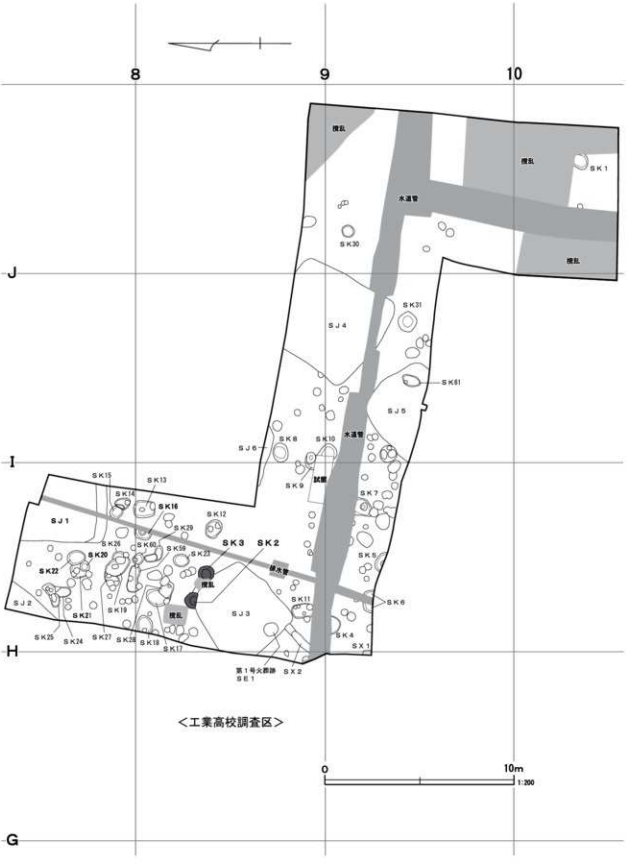
H－7・8グリッドに位置する。第60号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は不整形である。規模は残存する長軸1.56m、短軸0.62m、深さ0.11mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

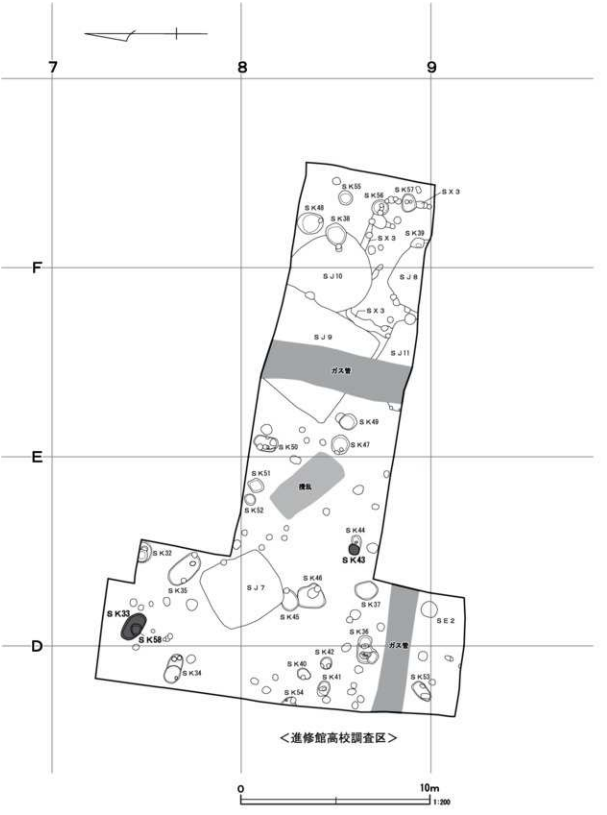
第60号土壙（第157図）

H－7・8グリッドに位置する。第59号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は不整長方形である。規模は長軸0.72m、短軸0.58m、深さ0.08mである。出土遺物がないため時期不明である。

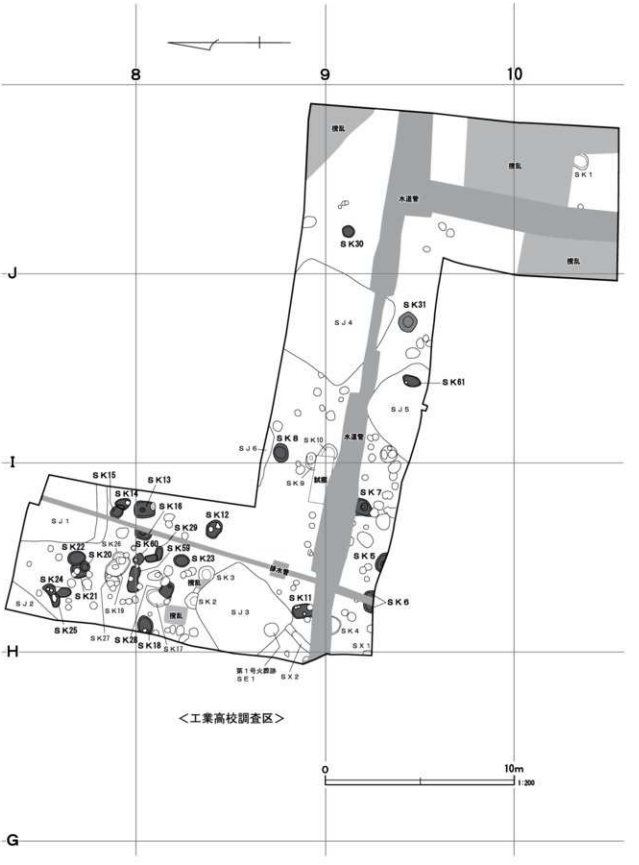
第61号土壙（第157図）

I－9グリッドに位置する。縄文時代前期の第5号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.00m、短軸0.57m、深さ0.20mである。出土遺物がないため、時期は不明である。


8
9
10
J
I
H
G
撹乱
撹乱
撹乱

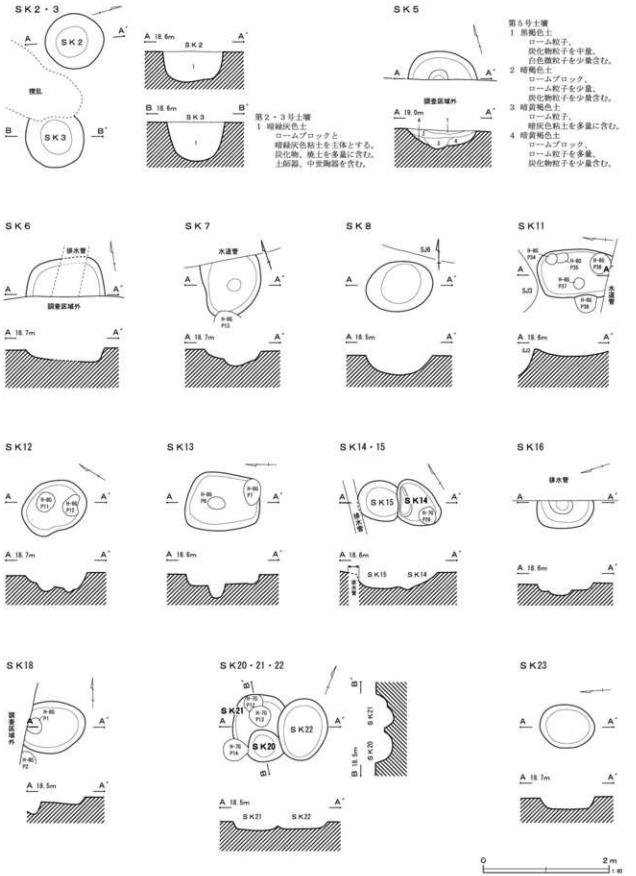


第152図　中世の土壙位置図（2）

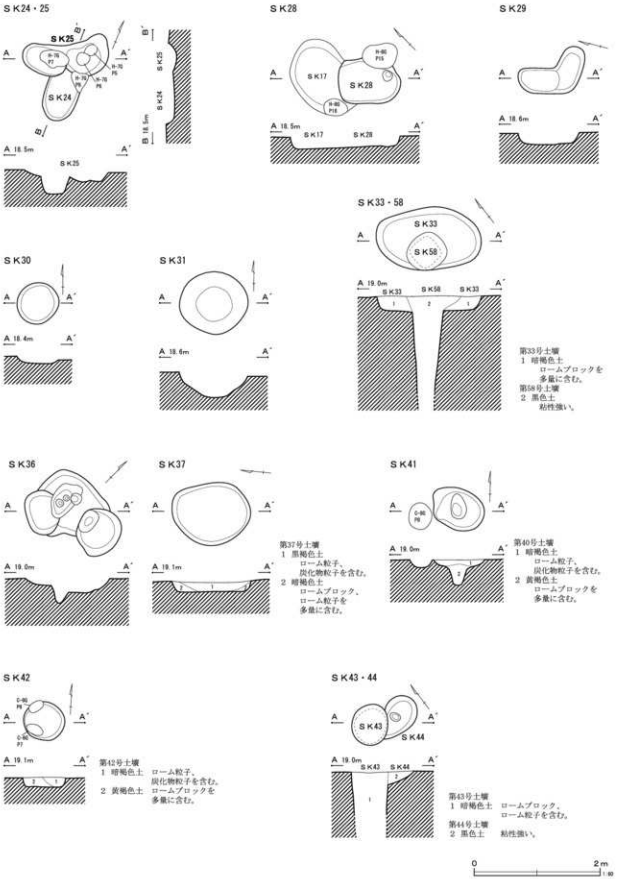


第153図　時期不明の土壙位置図（1）

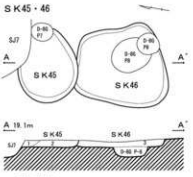
第154図　時期不明の土壙位置図（2）



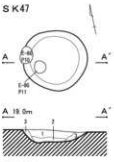
第155図　中世・時期不明の土壙（1）



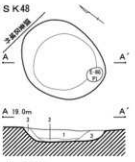
第156図　中世・時期不明の土壙（2）



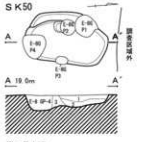
第45号土壙
1 黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
第46号土壙
3 暗褐色土　ローム粒子を含む。



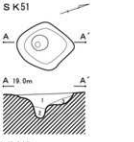
第47号土壙
1 暗褐色土　ローム粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
2 黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。
3 黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。



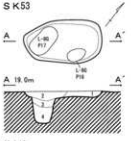
第48号土壙
1 暗褐色土　ローム粒子含む。炭化物粒子を少量含む。
2 黄褐色土　ローム粒子を含む。
3 黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多量に含む。



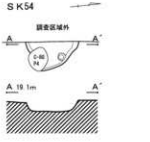
第50号土壙
1 黒褐色土　ロームブロックを含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
3. 黄褐色土　ロームブロックを含む。

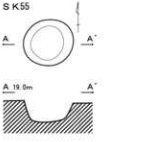


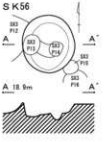
第51号土壙
1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
3 黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。

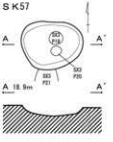


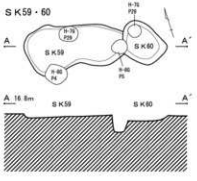
第53号土壙
1 黄褐色土　ロームブロックを含む。C-8グリッドP17
2 黒褐色土　ローム粒子を含む。
3 暗褐色土　ロームブロックを含む。
4 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。

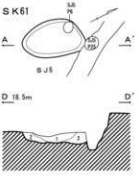










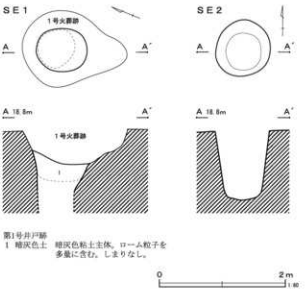


第61号土壙
1 暗褐色土　炭化物粒子を微量含む。
2 暗褐色土　ロームブロックを少量含む。

第157図　中世・時期不明の土壙（3）

第23表　中世・時期不明の土壙計測表

番号	グリッド	平面形態	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	時　期
2	H−8	円形	0.87	0.86	0.51	N−30°−W	中世
3	H−8	円形	0.97	0.90	0.63	N−55°−E	中世
5	H−9	長方形	1.08	(0.46)	0.30	N−75°−W	不明
6	H−9	長方形	1.22	(0.62)	0.23	N−79°−W	不明
7	H−9	不整形	(0.88)	0.92	0.27	N−10°−E	不明
8	I−8	楕円形	1.06	0.81	0.35	N−79°−E	不明
11	H−8	長方形	(1.13)	0.76	0.30	N−3°−W	不明
12	H−8	楕円形	1.01	0.84	0.28	N−65°−W	不明
13	H−8	長方形	1.15	0.93	0.21	N−6°−E	不明
14	H−7	不整形	0.83	0.63	0.23	N−10°−W	不明
15	H−7	楕円形	0.70	0.66	0.18	N−18°−W	不明
16	H−8	長方形	0.87	0.47	0.20	N−71°−W	不明
18	H−8	楕円形	(0.94)	0.83	0.27	N−78°−W	不明
20	H−7	楕円形	0.56	0.50	0.26	N−89°−E	不明
21	H−7	長方形	(0.82)	(0.70)	0.18	N−22°−W	不明
22	H−7	楕円形	(0.98)	(0.78)	0.12	N−16°−W	不明
23	H−8	楕円形	0.85	0.66	0.19	N−5°−E	不明
24	H−7	楕円形	(0.85)	0.53	0.39	N−65°−E	不明
25	H−7	不整形	1.34	0.42	0.14	N−7°−W	不明
28	H−8	楕円形	(0.97)	0.72	0.22	N−42°−W	不明
29	H−8	不整形	0.95	0.39	0.19	N−12°−W	不明
30	J−9	円形	0.67	0.62	0.11	N−50°−E	不明
31	I−9	円形	1.01	0.99	0.39	N−50°−W	不明
33	D−7	楕円形	1.65	0.98	0.24	N−45°−W	古代〜中世
36	C・D−8	不整形	1.49	0.12	0.50	N−88°−E	不明
37	D−8	楕円形	1.21	0.99	0.18	N−6°−W	不明
41	C−8	不整楕円形	0.87	0.64	0.40	N−55°−W	不明
42	C−8	円形	0.64	0.61	0.31	N−56°−W	不明
43	D−8	楕円形	0.66	0.57	0.90〜	N−47°−E	中世
44	D−8	楕円形	0.76	0.51	0.35	N−70°−E	不明
45	D−8	楕円形	1.16	0.93	0.12	N−86°−E	不明
46	D−8	長方形	1.41	1.33	0.52	N−1°−W	不明
47	E−8	円形	0.99	0.95	0.21	N−78°−W	不明
48	F−8	楕円形	1.36	1.14	0.32	N−8°−E	不明
50	E−8	不整長方形	1.28	0.81	0.57	N−15°−E	不明
51	D−8	方形	0.72	0.70	0.40	N−61°−E	不明
53	C−8	長方形	1.20	0.69	0.56	N−45°−E	不明
54	C−8	不明	0.82	(0.46)	0.23	N−6°−E	不明
55	F−8	円形	0.79	0.74	0.33	N−52°−E	不明
56	F−8	円形	0.89	0.82	0.17	N−2°−W	不明
57	F−8	楕円形	0.97	0.76	0.30	N−89°−W	不明
58	D−7	方形	0.61	0.56	1.60〜	N−89°−E	中世
59	H−7・8	不整形	(1.56)	0.62	0.11	N−76°−W	不明
60	H−7・8	不整長方形	0.72	0.58	0.08	N−29°−W	不明
61	I−9	楕円形	1.00	0.57	0.20	N−24°−E	不明



第158図　第１号・第２号井戸跡

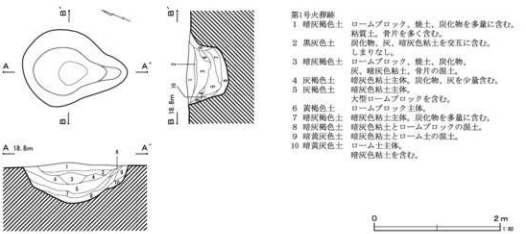
（２）　井戸跡

第１号井戸跡（第158図）

Ｈ－８グリッドに位置する。第１号火葬跡と重複する。平面形態は円形である。規模は長軸0.78m、短軸0.68m、深さは未完掘のため不明である。土師器小片が検出された。本遺構の時期は次項で述べる第１号火葬跡出土の遺物よりも時期が古いと考えられるため、平安時代またはそれ以前のものであろう。

第２号井戸跡（第158図）

Ｄ－８・９グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長軸0.89m、短軸0.84m、深さ1.10mである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

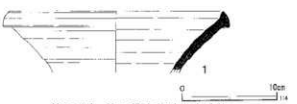


第159図　第１号火葬跡

（３）　火葬跡

第１号火葬跡（第159図）

Ｈ－８グリッドに位置する。第１号井戸跡と重複する。覆土中から骨片とともに灰・焼土が出土したため、調査時点では井戸とは異なる、火葬に使用された土壙と考えた。ただし、明確な火床面などが検出されておらず、井戸の堆積過程の一時期において、遺物・骨片などがまとまって遺棄されたものである可能性も高い。単体の火葬跡とした場合、平面形態は南北に長い楕円形で、規模は長軸1.62m、短軸1.22m、深さ0.60mである。須恵器壺の口縁部１点、須恵器坏の口縁部２点、土師器甕（武蔵型甕）数点



第160図　第１号火葬跡出土遺物

および片岩の破片（10×10～１×２㎝大）７点が出土した。遺物の年代から平安時代の所産と考えられる。

第１号火葬跡出土遺物（第160図１）

須恵器壺の口縁部の破片が出土した。口径は22.7㎝、残存高6.4㎝で、焼成は良好である。南比企産で、時期は９世紀後半と考えられる。

（4） ピット

住居跡などの遺構に伴わないピットが両調査区から205基検出された。総数が多いため、グリッドごとに1から通番号をつけて整理を行った。

ピットの分布は工業高校調査区から進修館高校調査区にかけて、住居跡の分布域と同様の傾向をみせる。工業高校調査区の東端部は緩やかに東傾しており、ピットも第4号住居跡周辺を東限とし、その数を減らす。H－7・8グリッドの第1・3号住居跡に挟まれた範囲と、H－8・9グリッドの第3・5号住居跡に挟まれた範囲には特にピットの集中がみられる。進修館高校調査区は偏りなくほぼ全域から検出され、西側と南側の調査区域外へ展開する様相がうかがえる。

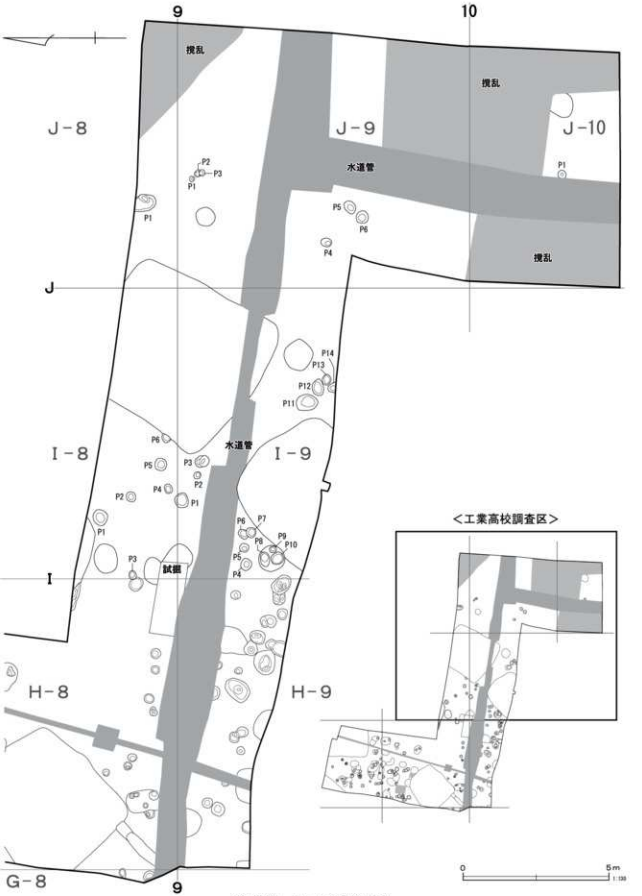
遺物の出土したピットは少なく、時期を特定することはかなわなかった。しかし、出土した全ての遺物が縄文時代の土器であることと、住居跡の分布範囲と重なることから縄文時代のピットが多数含まれていると考えられる。

第24表　ピット計測表（1）

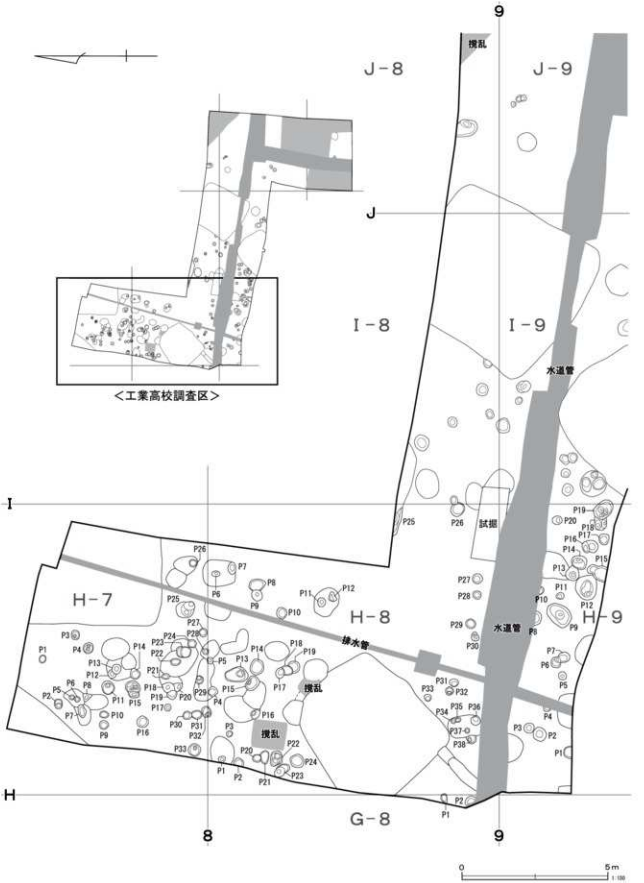
グリッド	番号	最大径(m)	深さ(m)	出土土器	グリッド	番号	最大径(m)	深さ(m)	出土土器
C－7	P－1	0.36	0.13		D－8	P－4	0.30	0.10	
	P－2	0.27	0.22			P－5	0.29	0.07	
	P－3	0.25	0.12			P－6	0.59	0.38	
	P－4	0.17	0.10			P－7	0.32	0.10	
	P－5	0.47	0.16			P－8	(0.44)	0.41	
C－8	P－1	0.42	0.16			P－9	0.33	0.55	
	P－2	0.41	0.21			P－10	0.40	0.14	
	P－3	0.34	0.15			P－11	0.54	0.20	
	P－4	0.37	0.17			P－12	0.36	0.22	
	P－5	0.24	0.38			P－13	0.39	0.14	
	P－6	0.26	0.19			P－14	0.61	0.18	縄文前期関山Ⅱ式
	P－7	0.27	0.31			P－15	0.33	0.28	
	P－8	0.42	0.13			P－16	0.57	0.19	
	P－9	0.52	0.30	縄文前期関山Ⅱ式		P－17	0.42	0.31	縄文前期関山Ⅱ式
	P－10	0.45	0.33	縄文中期か？	E－8	P－1	0.33	0.60	
	P－11	0.32	0.37			P－2	0.25	0.09	
	P－12	0.46	0.15			P－3	0.19	0.22	
	P－13	0.38	0.13			P－4	0.41	0.08	
	P－14	0.42	0.21			P－5	0.58	0.38	
	P－15	0.50	0.28			P－6	0.32	0.13	
	P－16	0.28	0.07			P－7	0.30	0.28	
	P－17	0.51	0.44			P－8	0.34	0.22	
C－9	P－1	0.32	0.12			P－9	0.53	0.26	
	P－2	0.34	0.13			P－10	0.28	0.15	
	P－3	(0.23)	0.18			P－11	0.19	0.06	
	P－4	(0.21)	0.15			P－12	0.20	0.09	
D－7	P－1	0.42	0.13			P－13	0.11	0.30	
	P－2	0.30	0.22			P－14	0.62	0.27	
	P－3	0.27	0.13			P－15	0.33	0.37	
	P－4	0.46	0.29			P－16	(0.36)	0.16	
	P－5	0.21	0.38			P－17	(0.34)	0.17	
	P－6	0.20	0.13			P－18	0.34	0.16	
	P－7	(0.22)	0.11			P－19	(0.58)	0.26	
	P－8	0.31	0.29		F－8	P－1	0.27	0.20	
	P－9	0.27	0.35			P－2	0.41	0.13	
	P－10	0.31	0.37			P－3	0.45	0.26	縄文中期か？
	P－11	0.32	0.32			P－4	0.29	0.24	
	P－12	0.59	0.21			P－5	0.32	0.13	
	P－13	0.31	0.86			P－6	0.27	0.20	
	P－14	0.50	0.27			P－7	0.38	0.15	
D－8	P－1	0.32	0.19			P－8	0.36	0.09	
	P－2	0.32	0.20		G－8	P－1	0.34	0.09	
	P－3	0.32	0.37			P－2	(0.39)	0.12	

第25表　ピット計測表（2）

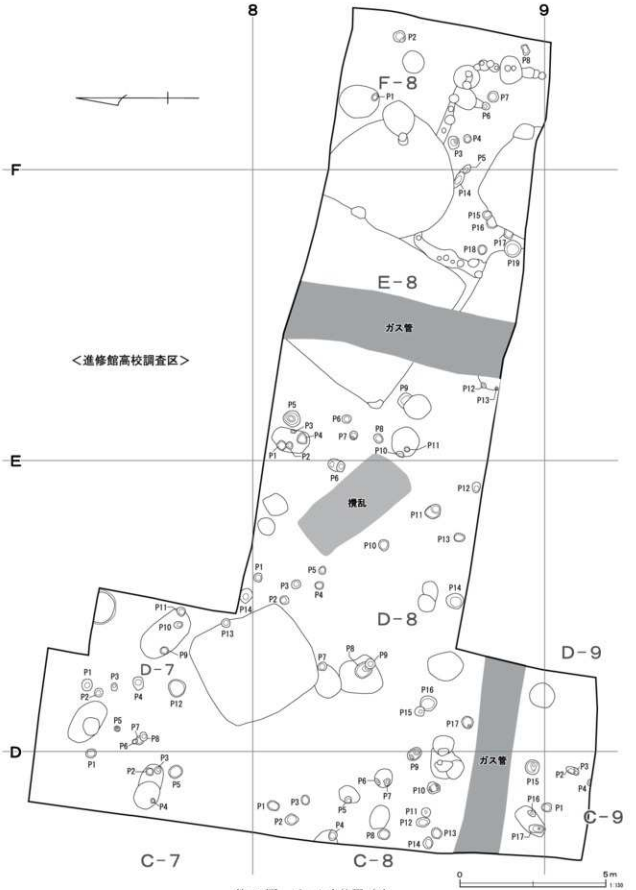
グリッド	番号	最大径(m)	深さ(m)	出土土器
H－7	P－1	0.28	0.17	
	P－2	0.35	0.20	
	P－3	0.33	0.35	
	P－4	0.39	0.36	
	P－5	0.20	0.10	
	P－6	0.20	0.07	
	P－7	0.46	0.34	
	P－8	0.37	0.26	
	P－9	0.31	0.17	
	P－10	0.31	0.10	
	P－11	0.46	0.17	
	P－12	0.29	0.18	
	P－13	0.33	0.16	
	P－14	0.38	0.23	
	P－15	0.63	0.38	
	P－16	0.38	0.14	
	P－17	0.25	0.19	
	P－18	0.38	0.23	
	P－19	0.35	0.13	
	P－20	0.34	0.31	
	P－21	0.28	0.06	
	P－22	0.36	0.07	
	P－23	0.47	0.27	
	P－24	0.33	0.11	
	P－25	0.65	0.38	縄文前期関山Ⅱ式
	P－26	0.28	0.19	
	P－27	0.29	0.16	縄文前期関山Ⅱ式
	P－28	0.24	0.21	
	P－29	0.30	0.27	
	P－30	0.32	0.16	
	P－31	0.36	0.14	
	P－32	0.37	0.23	
	P－33	0.42	0.25	
H－8	P－1	0.26	0.16	
	P－2	0.34	0.27	
	P－3	0.23	0.06	
	P－4	0.33	0.18	
	P－5	0.26	0.20	
	P－6	0.27	0.21	
	P－7	0.43	0.29	
	P－8	0.58	0.15	縄文前期関山Ⅱ式
	P－9	0.42	0.19	縄文前期関山Ⅱ式
	P－10	0.40	0.24	
	P－11	0.31	0.14	
	P－12	0.35	0.07	
	P－13	0.80	0.32	縄文中期か？
	P－14	0.52	0.17	
	P－15	0.53	0.22	
	P－16	0.36	0.25	
	P－17	0.34	0.23	
	P－18	0.34	0.15	
	P－19	0.41	0.12	
	P－20	(0.29)	0.10	
	P－21	0.46	0.14	
	P－22	0.50	0.31	
	P－23	0.59	0.33	
	P－24	0.46	0.11	縄文前期関山Ⅱ式
	P－25	(1.06)	0.38	
	P－26	0.51	0.13	
	P－27	0.35	0.23	
	P－28	0.30	0.14	
	P－29	0.34	0.14	
	P－30	0.32	0.27	
	P－31	0.33	0.21	
	P－32	0.29	0.18	
	P－33	0.24	0.14	
	P－34	0.19	0.13	
	P－35	(0.18)	0.11	
	P－36	0.34	0.19	
	P－37	0.19	0.11	
	P－38	0.35	0.22	
H－9	P－1	0.40	0.20	
	P－2	0.47	0.26	
	P－3	0.35	0.25	
	P－4	(0.29)	0.29	縄文前期関山Ⅱ式
	P－5	0.29	0.21	
	P－6	0.39	0.30	
	P－7	0.37	0.24	縄文前期関山Ⅱ式
	P－8	(0.39)	0.22	
	P－9	0.91	0.40	縄文前期関山Ⅱ式
	P－10	0.29	0.12	
	P－11	0.25	0.18	
	P－12	0.85	0.34	
	P－13	0.46	0.30	
	P－14	0.51	0.25	
	P－15	0.61	0.17	
	P－16	0.56	0.28	
	P－17	0.40	0.18	
	P－18	0.44	0.27	
	P－19	0.75	0.31	
	P－20	0.34	0.24	
I－8	P－1	0.55	0.52	
	P－2	0.36	0.14	
	P－3	0.30	0.19	
	P－4	0.35	0.21	
	P－5	0.42	0.17	
	P－6	(0.32)	0.16	
I－9	P－1	0.46	0.10	
	P－2	0.28	0.17	
	P－3	0.47	0.21	
	P－4	0.38	0.24	
	P－5	0.33	0.12	
	P－6	0.40	0.40	縄文前期関山Ⅱ式
	P－7	0.36	0.38	
	P－8	0.50	0.24	
	P－9	0.25	0.04	
	P－10	0.45	0.23	縄文前期関山Ⅱ式
	P－11	0.74	0.19	
	P－12	0.61	0.14	
	P－13	0.38	0.31	
	P－14	0.35	0.14	
J－8	P－1	0.75	0.16	
J－9	P－1	0.20	0.10	
	P－2	0.23	0.09	
	P－3	0.22	0.13	
	P－4	0.34	0.24	
	P－5	0.46	0.21	
	P－6	0.45	0.14	
J－10	P－1	0.31	－	



第161図　ピット全体図（1）



第162図　ピット全体図（2）



第163図　ピット全体図（3）

Ⅴ まとめ

1．馬場裏遺跡の住居跡と集落について

(1) 住居跡

今回の調査で発見された縄文時代前期の住居跡10軒は全て関山Ⅱ式期に構築されたものである。調査区の都合上、全容を捉えることができない住居跡もあるが、第1・3・4・5・7・9号住居跡についてはほぼその様相を把握できた。

まず注目すべき共通点は、遺物出土層位が覆土中層であり、なおかつ遺物を包含する黒色土層には炭化物・焼土粒子などが大量に含まれている。この出土状況は、住居が廃棄され、ある程度の時間が経過したのちに土器が一括投棄されたことを物語っていると考えられる。そして、その投棄時に炭化物や焼土が混入するような状況であったと推定できるが、具体的な状況を復元することは困難である。

このような出土状況は、第1・3・4・5・9号住居跡では確認できたが、第7号住居跡では認められなかった。完掘したにもかかわらず、出土遺物は極端に少なく、住居跡の掘込みも浅い。また、他の住居跡と異なる主軸方位をもつなど異なる点が多い。若干ではあるが占地においても他住居跡とは距離をおいている。しかし、出土土器の様相は他の住居跡と同時期であり、それらの差異を時間差とみなすことはできない。ではどのような説明をもってこの差異を捉えることができるのであろうか。

縄文時代前期の住居跡の分類については笹森氏の研究が知られており（笹森1981・1982）、この研究を参考に馬場裏遺跡の住居跡の分類を試みることとする。

笹森氏の研究によると、関山式期の住居跡は、2系統8種類に分類できる。平面長方形あるいは長梯形で6本柱の「関山タイプ」系統（①関山→②打越→③殿山第1種→④殿山第2種）と、平面楕円形や不整形で住居跡中央部に炉跡を有する「一ノ作タイプ」系統（⑤一ノ作第1種→⑥一ノ作第2種→⑦井沼方第1種→⑧井沼方第2種）の2系統である。

そのうち③、④、⑦、⑧が関山Ⅱ式にあたるとしている。③の殿山第1種は、周溝が全周し、6本主柱穴のうち壁際の4本が周溝内に位置するもので、④の殿山第2種は周溝を持たず、床面中央に2本の主柱穴を配するものである。⑦、⑧の井沼方第1・2種は炉跡を住居跡中央部に配し柱穴配置が不規則で、⑦の井沼方第1種は長円形を、⑧の井沼方第2種は小円形を呈するという特徴をもつということである。

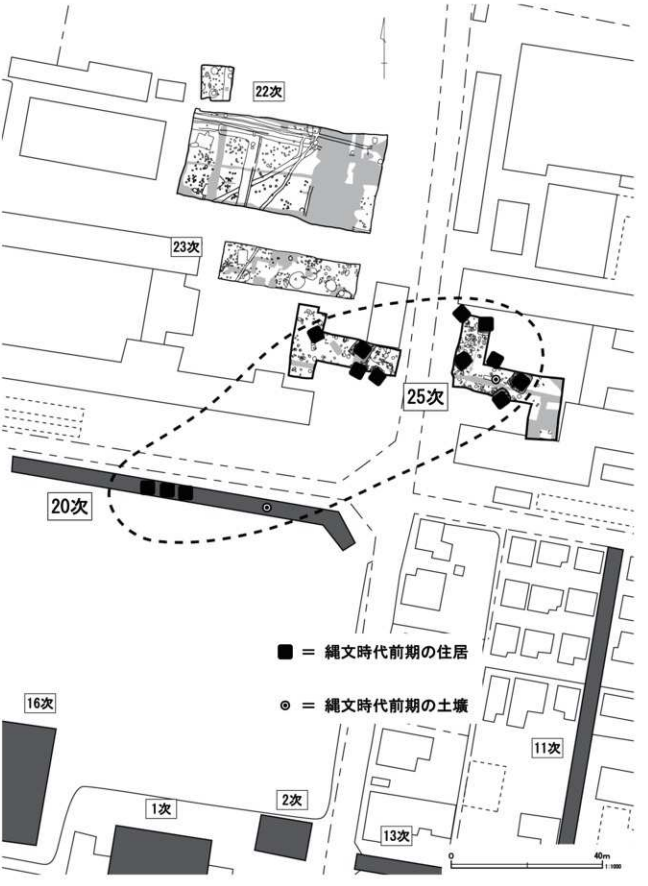
これを基本とし、馬場裏遺跡の住居跡を分析すると、第1・3・4・5・9号住居跡は平面形態が長方形あるいは台形で、6本の主柱穴を有し、壁溝が全周する「関山タイプ」系統の③殿山第1種に分類することができる。他の住居跡と異なる点が多い第7号住居跡は、平面形が長方形と少し異なるが、壁溝が途切れ、炉跡が住居中央部に位置することなどから「一ノ作タイプ」系統の⑦井沼方第1種と考えられる。

集落全体が調査されていないので断定的なことは言えないが、第7号住居跡のそれらの差異は住居跡の系統差として理解できよう。したがって馬場裏集落においては両系統の住居跡が併存していたと考えられる。

(2) 集落

埼玉県における関山式期の遺跡は、さいたま市域の大宮台地南東部に所在する深作東部遺跡群（山形1984）・宮ヶ谷塔遺跡群（田代・黒坂1985）・井沼方遺跡（小倉1980他）や、富士見市域の武蔵野台地北東部に所在する打越遺跡（荒井1978・佐々木1983）などの県南部に集中している。

馬場裏遺跡の所在する県北部では、深谷市域の本庄・櫛挽台地に位置する宮西遺跡（佐藤1983・黒



第164図　縄文時代前期の遺構位置図

坂2005)・四十坂遺跡（鳥羽・今村2003）のみで、行田市周辺では全く発見されていない。

馬場裏遺跡では、行田市教育委員会による第20次調査で、関山Ⅰ式期～黒浜式期にかけての住居跡が３軒、関山Ⅱ式期の土壙が１基検出された。しかし、排水路建設にともなう幅１ｍという限られた範囲の調査であり、可能な限りでの拡張調査を行ったが住居跡についてその全容を把握することは困難であった（中島1995)。

今回の第25次調査区は、第20次調査区から北東へ50～70ｍの位置に所在し、関山Ⅱ式期の住居跡が10軒、土壙が１基、まとまりをもって発見された。関山期と思われる土壙は他にも７基検出されているが、土器小片のみの出土であり、時期を断定できなかった。

第20・25次調査で発見された住居跡は、その眺望から本来、同一の集落であったと考えられる。第164図における第20次調査の住居跡は、概ねの位置を模式的に図示しており（註)、うち１軒は関山Ⅰ式期の住居跡であることは確実である。そのことから馬場裏関山集落は関山Ⅰ段階まで遡ると考えられる。

第25次調査区に目を向けると、第４号住居跡から東側では遺構の検出が極めて少なく、住居跡は発見されていない。地形の変換点にあたりこれより東は傾斜し谷地形となる。集落の東端と考えられる。北側では住居跡が調査区域外へ続いているため集落が北延する可能性が秘められているが、北西部に隣接する第23次調査区からは関山期の住居跡が発見されていないので極端に北側へ膨らむことはないであろう。西側においても同様に大きく西へ拡大することはないと推定される。南側に関しては第20次調査区以南がどこまで伸延するかは推測の域をでないが、第25次調査区の密集度を考えるとやはり大きく南へ延びることは少ないと考えられ、破線のような集落の範囲を想定した。

第20・25次両調査区とも狭い範囲での調査であり、その間には未調査部分が広がっているため断定的なことは言えないが、第20次調査区では関山Ⅰ式期の住居跡が１軒検出されており、第25次調査区においてはその全てが関山Ⅱ式期のものとなっている。

したがって第20次調査区から第25次調査区へという、南西から北東への集落の移動が、関山Ⅰ式からⅡ式という時間の中で行われたと推定できるだろう。

今回発見された10軒の住居跡は、その全てが関山Ⅱ式、最終段階である井沼方段階のものであるが、出土土器にはわずかな時間差が認められた。

様相のわかる第１・３・４・５・８・９号住居跡では、わずかに古い様相が第３・１・９号住居跡の３軒に認められた。出土土器にみられるわずかな時間差で住居の存在時期を決定できるわけではないが、この時期は少なくとも一時期に３軒以上、時期細分不可能であった住居跡を含めると、恐らく５、６軒の規模で集落が展開していたものと推測できる。

関山Ⅰ式からⅡ式の中で、井沼方段階において集落が急激な膨張を遂げたことは理解できる。また次段階の住居跡が検出されていないことから、集落はこの期をもって終焉を迎えたと考えられる。

このような短期間における集落の急激な膨張とその直後に訪れるあっけないほどの終焉という展開は馬場裏遺跡のみならず、宮西遺跡や打越遺跡などの長期型集落、太田市間之原遺跡（宮田1981）や井沼方遺跡などの短期型集落でも数多くみられ、関山集落の普遍化したあり方として捉えられる。このような関山末期における集落変化をもたらした要因を捉えることが今後の課題である。

（註）　第20次調査は行田市教育委員会で報告書刊行中であるが、中島洋一氏のご厚意により遺構検出位置などについてご教示をいただいた。

2．関山式土器について

(1) 関山式土器の分類

今回報告する関山Ⅱ式期の住居跡からは、膨大な量の土器が出土した。その出土量は、大宮台地北部はもとより、関東の同時期遺跡の調査例としては、さいたま市井沼方遺跡（岩井・小倉1980など）・松戸市幸田貝塚（大塚1979など）をもしのぎ、他に比肩し得るものがないほどである。さらに、第4号住居跡に至っては、縄文期の竪穴住居跡出土土器の復元個体数としても有数の例となるだろう。

土器の記載にあたっての分類項の設定は、大宮台地南部との地域相差、そして関山期における先後差の識別を容易にするため、さいたま市深作東部遺跡群（黒坂1984）の分類を基調とした上で、地域色を加味して、多段ループによる鋸歯状構成を分類項に加えるとともに、コンパス文をタガ状施文の一部として位置づけるなど、若干の改変を行っている。

この分類は、出土土器点数の加算を兼ねた主分類と、算定に関わらない副分類で構成されており、いずれも接合後の破片数で算出される。このうち、単節斜縄文（5類2種）の構成法と底部（7類）形態については、主分類の数値に加え、他類の相当文様・形態も加算するため、後掲する統計表（第32・34表）においては、主分類と同数か、それ以上が算定される。

また深作東部遺跡群の分類は、広義関山期全般を見据えた分類項を想定しているため、関山終末期に偏る本遺跡例では算出されない、5類7種第二種結束縄文や5類8種結節縄文などの分類項も存在する。

なお、刺切によるタガ状施文など、新たな分類については一部で再調査を実施し、遺跡間対比表（第43～51表）における整合に努めたが、大宮台地南部のさいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）・宮ヶ谷塔遺跡群については、報告書掲載資料による算定にとどまった部分がある。

[主分類]

1類　口縁部文様帯、特殊文様帯を擁するもの
　1種　口縁部文様帯内に地文がないもの
　　A　撚糸側面圧痕文を主幹文様とするもの
　　B　刻みのある細い隆帯を主幹文様とするもの
　　C　棒引きの平行沈線を主幹文様とするもの
　　D　管内痕が残らない竹管施文平行沈線を主幹文様とするもの
　　E　管内痕が残る竹管施文有刻平行沈線を主幹文様とするもの
　　F　管内痕が残る竹管施文集合刻み平行沈線を主幹文様とするもの
　　G　管内痕が残る竹管施文無刻平行沈線を主幹文様とするもの
　　H　その他の施文法を主幹文様とするもの
（1類につき）
　　a　円形竹管文を加えるもの
　　b　円形竹管文と貼付文を加えるもの
　　c　貼付文を加えるもの
　　d　点状文様を加えないもの
　2種　口縁部文様帯内に地文をもつもの
　　A　刻みのある竹管平行沈線を主幹文様とするもの
　　B　刻みのない独立施文竹管平行沈線を主幹文様とするもの
　　C　刻みのない重施文竹管平行沈線を主幹文様とするもの
　　D　その他の施文法を主幹文様とするもの
　3種　口縁部以外の特殊文様帯を擁するもの
2類　刺切・刺突文を施文するもの
3類　沈線・条線を施文するもの
4類　貝殻押圧文を施文するもの
5類　縄文を施文するもの
　1種　無節斜縄文を施文するもの

2種　単節斜縄文を施文するもの

A　末端に変化がなく幅狭等間隔の横帯区画を成すもの

B　末端を第一種結束処理し幅狭等間隔の横帯区画を成すもの

C　末端をループ処理し幅狭等間隔の横帯区画を成すもの

D　末端をループ処理し多段化させた上で幅広異間隔の横帯区画を成すもの

a　多段ループ文が水平施文されるもの

b　多段ループ文で鋸歯文を構成するもの

E　末端をループ処理し幅広等間隔の横帯区画を成すもの

F　末端に変化がなく幅広等間隔の横帯区画を成すもの

G　末端ループ文が観察できるが区画構成が不明のもの

3種　複節斜縄文を施文するもの

4種　反の縄文を施文するもの

5種　異条斜縄文（正反の合）を施文するもの

6種　異節斜縄文・組縄縄文を施文するもの

7種　第二種結束縄文を施文するもの

8種　結節縄文を施文するもの

9種　附加条縄文を施文するもの

10種　組紐縄文を施文するもの

11種　縄文の種別特定できないもの

6類　無文のもの

7類　底部

1種　底裏面に文様を施文するもの

A　ゆるやかな上げ底となるもの

B　上げ底が高じて外周が脚化しているもの

C　平底のもの

2種　底裏面が無文のもの

A　ゆるやかな上げ底となるもの

B　上げ底が高じて外周が脚化しているもの

C　平底のもの

3種　底部円盤が欠落し判定できないもの

[副分類]

①口縁部の形態

・双頭の波状口縁となるもの

・単頭の波状口縁となるもの

・波状口縁だが波頂の形態が不明のもの

・平口縁のもの

②突起の形態

・集合角状突起を加えるもの

・臼歯状突起を加えるもの

・台形（帯）状突起を加えるもの

・半円状（注口脚）突起を加えるもの

③タガ状文（コンパス文類）の施文法

・半截竹管で真正のコンパス文を描くもの

・半截竹管で支点を上下させ縦長のコンパス文を描くもの

・半截竹管で波状文を描くもの

・半截竹管で刺刻列を描くもの

・半截竹管でタガ状文を描くが形が不明のもの

・櫛状工具で真正のコンパス文を描くもの

・櫛状工具で支点を上下させ縦長のコンパス文を描くもの

・櫛状工具で波状文を描くもの

・櫛状工具で刺刻列を描くもの

・櫛状工具でタガ状文を描くが形が不明のもの

④片口注口土器の数量

・片口注口土器個体数

（2）縄文施文原体の表記

今回調査の出土土器では、30種を超える縄文施文原体を確認した。文中でこれらを逐一表記していては膨大な紙数を要するため、本書では、一部について、以下のような表現を用いている。

本来ならば冒頭の凡例で示すべきであるが、簡単な用例表記だけでは齟齬が生ずる恐れがあるため、関山式土器の分類基準とともにここで紹介する。

なお、今回の調査では、上記分類のうち5類3種・7種・8種に相当する資料は出土していない。

◎0段の条数

出土縄Ⅰ式土器の大半は、0段で3条以上の繊維束を撚り合わせており、その記載は省略し、逆に、2条であることが特定できたものについて触れるのみにとどめている。

◎撚縄一般（前記分類5類1～4種）

無節・単節などについては、慣例的に用いられている略号をそのままに用いた。

表記例：R＝無節、RL＝単節

RLR＝複節、RR＝直前段反撚

◎直前段合撚（前記分類5類5種）

いわゆる正反の合は、山内(1979)で4種の原体が指摘されており、馬場裏遺跡では、その全種が認められる。ここではこれらをAからD種とし、その種別と最終撚りのみを表記している。

表記例：A種R…普遍的な正反の合で直前段のみ合撚りにするもの、最終撚りR

B種R…直前段に加え、前々段も合撚りにするもの、最終撚りR

C種R…反縄が前々段反撚りのもの

D種R…正縄が前々段反撚りのもの

◎組縄＝組み違え（前記分類5類6種）

組紐と似た要領で1段縄2本を絡げていくと、撚縄換算で3段の縄が完成する。用意した縄と絡げる方向によって4種の圧痕が得られる。これらは、撚縄による複節・異節・前々段反撚単節・異段に似るが、組紐縄文と消長をともにすることから、「組紐の組み違え」と理解されている（黒坂1981）。

本書では、その原体を組縄、現れた圧痕を組縄縄文（高橋1992、峰村2000）と呼称した。表記は、絡げる方向によって撚縄でいう最終段と前々段が決定してしまうため、左方にその方向を表現し、右方に括弧付きで用意した1段の縄を表記した。

表記例：RL（RR）…1段縄R2本を右方向に絡げ合わせたもの（擬複節）

RL（LL）…1段縄L2本を右方向に絡げ合わせたもの（擬単節）

RL（RL）…1段縄RとLを十字に配し右方向に絡げ合わせたもの（擬異節）

RL（R∨L）…1段縄RとLをカギ状に配し右方向に絡げ合わせたもの（擬異段）

RL（不明）…細節が観察できず、原体が特定できないもの

◎附加条（前記分類5類9種）

軸縄に加え、附加縄の種類と本数、さらに軸縄に絡げる方向によって様々な取り合わせが想定できる。ここでは、軸縄を左方に表現し、附加縄とその本数、絡げた方向を右方に括弧付きで表記した。

表記例：RL（R＋R→S）…2段縄RLに1段縄R2本をS方向に絡げたもの（擬正反の合A種）

RL（L＋L→S）…2段縄RLに1段縄L2本をS方向に絡げたもの（擬正反の合C種）

◎組紐（前記分類5類10種）

組紐原体については（庄野・下村1978）が詳しく、本書ではこれにならって表記した。

表記例：RRLL…1段縄RとLを十字に配し、Rを右方向、Lを左方向に通しつつ組んだもの

LLRR…1段縄RとLを十字に配し、Rを左方向、Lを右方向に通しつつ組んだもの

RRRR…1段縄R2本を組んだもの

RLRL…1段縄RとLをカギ状に配し、組んだもの

不明…細節が観察できず、原体が特定できないもの

◎その他の原体

ごく少数だが、異段や同原体内で撚り方をかえるものもあるが、それらはその都度説明している。

第26表　前期住居跡出土土器類別破片数（接合済）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
1類（口縁・特殊文様帯）	91	71	64	85	208	10	9	1	12	2
2類（刺突・刺突文）										
3類（沈線・条線文）										
4類（貝殻押圧文）	1	1			1					
5類（縄文）	1,208	1,395	738	1,168	2,722	167	24	9	82	24
6類（無文）		1		1	1					
7類（底部）	37	58	25	33	106				1	
分類可能破片数	1,337	1,526	827	1,287	3,038	177	33	10	95	26
分類不能破片	68	75	80	71	216	39			6	
関山式土器計	1,405	1,601	907	1,358	3,254	216	33	10	101	26
東海・信州系土器					1					
他時期土器	7	2	34	3	8		1		10	7
総出土破片数	1,412	1,603	941	1,361	3,263	216	34	10	111	33

第27表　前期住居跡出土土器類別比（%）

3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
6.8	4.7	7.7	6.6	6.8	5.6	27.3	10.0	12.6	7.7
0.1	0.1			0.0					
90.4	91.4	89.2	90.8	89.6	94.4	72.7	90.0	86.3	92.3
	0.1		0.1	0.0					
2.8	3.8	3.0	2.6	3.5				1.1	

（3）馬場裏遺跡出土の関山式土器

今回の調査では関山期の10軒の住居跡から、8,985点もの大量の土器片が出土した。そのうち8,911点が関山式土器であり、住居跡出土土器の実に99.2%を占める。特に第1・3・4・5・8号住居跡は99.5%以上を占めており、これは非常に恵まれた一括資料と言える。また、各住居跡の出土土器における接合率の高さが特徴であり、第1号住居跡では49点、第4号住居跡においては97点もの器形復元土器を得ることができた。

第26表に、馬場裏遺跡から検出された関山Ⅱ式の住居跡10軒の類別破片数と総出土破片数を示した。住居跡は、後述する土器の分析結果をもとに古い順から提示した。しかし、出土数が極端に少ない第2・6・7・11号住居跡は、様相が捉え難く、表末に住居番号順で掲載した。総出土破片数では第4号住居跡が群を抜いており、全出土数の4割近くを占めている。第1・3・5・9号住居跡もそれぞれ1,000点前後出土しており、これら4軒の住居跡で約6割を占める。

第27表には、関山式土器の類別比を提示した。「5類」に集中する傾向がみられ、第3～8号住居跡ではほぼ90%以上が該当する。「1類」も4～7%とわずかながら一定比率を占める。このように1類と5類に集中する傾向は、各住居跡ともに共通する。また、「4類」の出土が、第3・1・4号住居跡からわずかに各1点ずつであるということは、内陸部に位置する馬場裏遺跡の特性と考えられる。

次に、第28表には口縁部文様帯・特殊文様帯細種別破片数を、第29表にはその比率を示した。各住居跡とも各表の右下部分に数値が集中する。これは口縁部文様帯内に地文を有する「2種」と特殊文様帯の「3種」で、なおかつ点状文様を持たないものが多いということである。特に、各住居跡とも「2種C」が高い出現率を示しており、第8号住居跡では80%が該当する。また「3種」も、第3・1・9・5・4号住居跡では20%前後を占める。その中には第92図180～184のような、全面に不規則な沈線を施す土器があり、次の黒浜期へつながる様相がみられる。

第30表には、「5類」縄文における細種別破片数を、第31表にはその比率を提示した。ここで注目すべきは、「2種」「5種」「6種」「10種」の動向である。「2種」は第3号住居跡で最高率を示したが、第1号住居跡以降減少傾向に転じる。代わって「10種」が増加し、各住居跡とも最高率を示す。特に第4号住居跡では57.6%を占める。「5種」も2種と同様の傾向を示す。第3・1・9・5号住居跡では20%前後であったものが、その後は10%近くまで落ち込む。また「6種」は10種と併行して増加する。それは、6種の原体が10種組紐の組み違えによってつくられたためと考えられる。6種の増加幅は、10種に比べるとわずかである。さらに、6・10種の合計比率は、新しくなるにつれて順調に増加している。「1・9種」は第8号住居跡以外の各住居跡でわずかながら確認できるが、「3・7・8種」は馬場裏

第28表　口縁部・特殊文様帯細種別破片数（接合済）

	3号住居跡 93点				1号住居跡 71点			
	円竹	円+貼	貼付	なし	円竹	円+貼	貼付	なし
1種D（地文無節内痕無）				1				
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				2				
2種B（地文有無刻独立施文）				3				9
2種C（地文有無刻重施文）				67				52
2種D（地文有その他）				1				
3種（特殊文様帯）				19				10

	9号住居跡 66点				5号住居跡 86点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				1				
2種B（地文有無刻独立施文）				2				14
2種C（地文有無刻重施文）				44				58
2種D（地文有その他）				3				2
3種（特殊文様帯）				16				12

	4号住居跡 209点				8号住居跡 10点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）				6				
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				2				
2種B（地文有無刻独立施文）				17				2
2種C（地文有無刻重施文）				130				8
2種D（地文有その他）				12				
3種（特殊文様帯）				42				

	2号住居跡 9点				6号住居跡 1点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）								
2種B（地文有無刻独立施文）								
2種C（地文有無刻重施文）				6				
2種D（地文有その他）				1				
3種（特殊文様帯）				2				1

	7号住居跡 12点				11号住居跡 2点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）			1					
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）								
2種B（地文有無刻独立施文）				3				
2種C（地文有無刻重施文）				7				1
2種D（地文有その他）								
3種（特殊文様帯）				1				1

第29表　口縁部・特殊文様帯細種別比（%）

	3号住居跡 93点				1号住居跡 71点			
	円竹	円+貼	貼付	なし	円竹	円+貼	貼付	なし
1種D（地文無節内痕無）				1.1				
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				2.2				0.0
2種B（地文有無刻独立施文）				3.2				12.7
2種C（地文有無刻重施文）				72.0				73.2
2種D（地文有その他）				1.1				
3種（特殊文様帯）				20.4				14.1

	9号住居跡 66点				5号住居跡 86点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				1.5				
2種B（地文有無刻独立施文）				3.0				16.3
2種C（地文有無刻重施文）				66.7				67.4
2種D（地文有その他）				4.5				2.3
3種（特殊文様帯）				24.2				14.0

	4号住居跡 209点				8号住居跡 10点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）				2.9				
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）				1.0				
2種B（地文有無刻独立施文）				8.1				20.0
2種C（地文有無刻重施文）				62.2				80.0
2種D（地文有その他）				5.7				
3種（特殊文様帯）				20.1				

	2号住居跡 9点				6号住居跡 1点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）								
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）								
2種B（地文有無刻独立施文）								
2種C（地文有無刻重施文）				66.7				
2種D（地文有その他）				11.1				
3種（特殊文様帯）				22.2				100.0

	7号住居跡 12点				11号住居跡 2点			
	a	b	c	d	a	b	c	d
1種D（地文無節内痕無）								
1種E（地文無節内痕有有刻）								
1種F（地文無節内痕有集合刻み）			8.3					
1種G（地文無節内痕有無刻）								
1種H（地文無その他）								
2種A（地文有有刻）								
2種B（地文有無刻独立施文）				25.0				
2種C（地文有無刻重施文）				58.3				50.0
2種D（地文有その他）								
3種（特殊文様帯）				8.3				50.0

第30表　5類種別破片数（接合済）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
5類1種（無部斜縄文）	6	3	1	3	4					
5類2種（単部斜縄文）	314	224	116	122	261	26	6	1	27	5
5類3種（複部斜縄文）										
5類4種（反の縄文）	2				4					
5類5種（異条斜縄文）	197	254	119	178	260	14	5	1	10	3
5類6種（異節・結縄文）	162	156	60	144	382	27	4			2
5類7種（結束縄文）										
5類8種（結節縄文）										
5類9種（附加条縄文）	7	10	7	7	12				1	
5類10種（組紐縄文）	303	476	297	478	1,255	72	6	7	28	10
5類分類可能破片数	991	1,123	600	932	2,178	139	21	9	66	20
5類11種（原体不明）	217	272	138	236	544	28	3		16	4
5類破片数	1,208	1,395	738	1,168	2,722	167	24	9	82	24
6種+10種	465	632	357	622	1,637	99	10	7	28	12

第31表　5類種別比（%）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
5類1種（無部斜縄文）	0.6	0.3	0.2	0.3	0.2					
5類2種（単部斜縄文）	31.7	19.9	19.3	13.1	12.0	18.7	28.6	11.1	40.9	25.0
5類3種（複部斜縄文）										
5類4種（反の縄文）	0.2				0.2					
5類5種（異条斜縄文）	19.9	22.6	19.8	19.1	11.9	10.1	23.8	11.1	15.2	15.0
5類6種（異節・結縄文）	16.3	13.9	10.0	15.5	17.5	19.4	19.0			10.0
5類7種（結束縄文）										
5類8種（結節縄文）										
5類9種（附加条縄文）	0.7	0.9	1.2	0.8	0.6				1.5	
5類10種（組紐縄文）	30.6	42.4	49.5	51.3	57.6	51.8	28.6	77.8	42.4	50.0
5類分類可能破片数										
5類11種（原体不明）										
5類破片数	46.9	56.3	59.5	66.7	75.2	71.2	47.6	77.8	42.4	60.0
6種+10種										

第32表　5類2種縄種別破片数（接合済ー他類種帰属を含む）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
2種A（撚等間未端なし）										
2種B（撚等間未端結束）										
2種C（撚等間未端ループ）										
2種D（広無間多段ループ）	121	82	60	43	102	4	5	1	4	3
a 水平構成	83	64	35	33	66	3	3		2	3
b 鋸歯構成	38	18	25	10	36	1	2	1	2	
2種E（広等間単段ループ）	38	16	7	9	15	1	1		6	
2種F（広等間未端なし）	158	129	66	81	159	21	2		17	2
2種G（ループ構成不明）		6	6							
5類2種相当破片数	317	233	139	133	276	26	8	1	27	5

第33表　5類2種縄種別比（%）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
2種A（撚等間未端なし）										
2種B（撚等間未端結束）										
2種C（撚等間未端ループ）										
2種D（広無間多段ループ）	38.2	35.2	43.2	32.3	37.0	15.4	62.5	100.0	14.8	60.0
a 水平構成	68.6	78.0	58.3	76.7	64.7	75.0	60.0		50.0	100.0
b 鋸歯構成	31.4	22.0	41.7	23.3	35.3	25.0	40.0	100.0	50.0	
2種E（広等間単段ループ）	12.0	6.9	5.0	6.8	5.4	3.8	12.5		22.2	
2種F（広等間未端なし）	49.8	55.4	47.5	60.9	57.6	80.8	25.0		63.0	40.0
2種G（ループ構成不明）		2.6	4.3							
5類2種相当破片数										

第34表　7類縄種別破片数（接合済ー他類種帰属を含む）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
1種A（底面有文上付底）	2	5		5	6					
1種B（底面有文開付底）	1	4	3	2	9				1	
1種C（底面有文平底）			1							
2種A（底面無文上付底）	20	31	3	5	31	3	1		1	
2種B（底面無文開付底）	17	30	21	23	69	1				
2種C（底面無文平底）					1					
3種（底面欠落不明）	1		7		45					
7類相当破片数	41	70	35	35	161	4	1		2	

第35表　7類縄種別比（%）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
1種A（底面有文上付底）	4.9	7.1		14.3	3.7					
1種B（底面有文開付底）	2.4	5.7	8.6	5.7	5.6				50.0	
1種C（底面有文平底）			2.9							
2種A（底面無文上付底）	48.8	44.3	8.6	14.3	19.3	75.0	100.0		50.0	
2種B（底面無文開付底）	41.5	42.9	60.0	65.7	42.9	25.0				
2種C（底面無文平底）					0.6					
3種（底面欠落不明）	2.4		20.0		28.0					
7類相当破片数										

第36表　口縁部形態別破片数（接合済）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
尖頭波状口縁	2	6	1	4	9					
単頭波状口縁	7	9	6	7	8				1	
波状口縁形態不明	8	5	4	1	4	2				1
平口縁	140	165	79	137	362	15	8	2	10	2
口縁部破片数	156	185	90	149	383	17	8	2	11	3
波状率（/口縁数）										

第37表　口縁部形態別比（%）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
尖頭波状口縁	0.6	3.2	1.1	2.7	2.3					
単頭波状口縁	4.5	4.9	6.7	4.7	2.1				9.1	
波状口縁形態不明	5.1	2.7	4.4	0.7	1.0	11.8				33.3
平口縁	89.7	89.2	87.8	91.9	94.5	88.2	100.0	100.0	90.9	66.7
口縁部破片数										
波状率（/口縁数）	10.3	10.8	12.2	8.1	5.5	11.8	0.0	0.0	9.1	33.3

第38表　突起形態別破片数（接合済）・片口注口土器個体数

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
集合角状突起	2		4	1	3				1	
臼歯状突起			2						1	
台形状突起	3	2	2	2	9					
半円状突起	1	1			4					
突起加飾破片数	6	3	8	3	16	0	0	0	2	0
突起加飾率（/口縁数）										
片口注口土器個体数	18	13	9	9	32	1				
注口土器率（/口縁数）										

第39表　突起形態別比・片口注口土器比（%）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
集合角状突起	33.3		50.0	33.3	18.8				50.0	
臼歯状突起			25.0						50.0	
台形状突起	50.0	66.7	25.0	66.7	56.3					
半円状突起	16.7	33.3			25.0					
突起加飾破片数										
突起加飾率（/口縁数）	3.8	1.6	8.9	2.0	4.2	0.0	0.0	0.0	18.2	0.0
片口注口土器個体数										
注口土器率（/口縁数）	11.5	7.0	10.0	6.0	8.4	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0

第40表　タガ状文（コンパス文等）分類別破片数（接合済）

	3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
半截竹管真正	2	2		4	5	1			2	
半截竹管上下移動	15	14	5	13	47	1			1	2
半截竹管波状		7	5	2	2					
半截竹管刺切	41	49	27	17	10		1			
半截竹管形状不明		7	1		4					
櫛状工具真正	11	9	5	22	54	1		1	6	
櫛状工具上下移動	26	72	47	89	221	22	2		7	1
櫛状工具波状	2	4	7	16	18					
櫛状工具刺切	17	30	6	9	5					1
櫛状工具形状不明	1	16	10	13	49	8	1		1	
タガ状文施文破片数	115	210	113	185	415	33	4	1	17	4
施文率(/分類破片)										
半截竹管施文率										
櫛状工具施文率										
真正施文率										
上下移動施文率										
刺切施文率										

第41表　タガ状文（コンパス文等）分類別比（%）

3住	1住	9住	5住	4住	8住	2住	6住	7住	11住
1.7	1.0		2.2	1.2	3.0				11.8
13.0	6.7	4.4	7.0	11.3	3.0				5.9	50.0
	3.3	4.4	1.1	0.5					
35.7	23.3	23.9	9.2	2.4		25.0			
	3.3	0.9		1.0					
9.6	4.3	4.4	11.9	13.0	3.0		100.0	35.3	
22.6	34.3	41.6	48.1	53.3	66.7	50.0		41.2	25.0
1.7	1.9	6.2	8.6	4.3					
14.8	14.3	5.3	4.9	1.2					25.0
0.9	7.6	8.8	7.0	11.8	24.2	25.0		5.9	
8.6	13.8	13.7	14.4	13.7	18.6	12.1	10.0	17.9	15.4
50.4	37.6	33.6	19.5	16.4	6.1	25.0	0.0	17.6	50.0
49.6	62.4	66.4	80.5	83.6	93.9	75.0	100.0	82.4	50.0
11.3	5.2	4.4	14.1	14.2	6.1	0.0	100.0	47.1	0.0
35.7	41.0	46.0	55.1	64.6	69.7	50.0	0.0	47.1	75.0
50.4	37.6	29.2	14.1	3.6	0.0	25.0	0.0	0.0	25.0

遺跡では出土していない。

第32表には、第30表で示した「5類2種」単節斜縄文の細種別破片数を、第33表にはその比率をそれぞれ提示した。まず、全ての住居跡において「2A」「2B」「2C」は全く検出されず、「2D」「2F」に集中する傾向が認められる。ここでは後者の二種の動向に注意したい。「2D」は第3・1・9・5・4号住居跡で30～40%を占めるが、第8号住居跡では15%と激減する。「2F」は各住居跡とも最高率を示し、その占有率は新しくなるにつれて増加する。2Dとは対称的で、第8号住居跡では80.8%も占める。「2E」は第3号住居跡で12%を占めていたが、第8号住居跡ではわずか3.8%にまで落ち込み、急激に衰退する。また、「2D」の構成要素は、各住居跡ともaの水平構成が優位を保ち、b鋸歯構成との比率は3：1から3：2である。

第34表には、「7類」底部における細種別破片数を、第35表にはその比率を提示した。まず、底面文様の有無について、「2種」の無文が高率を示す。底部形態を併せた分類では、第3・1号住居跡において上げ底の「2A」がやや優位を保っていたが、第9・5・4号住居跡になると脚付底を呈する「2B」がそれに代わり圧倒的多数を占める。2種の影で底面有文の「1種」もわずかながら一定率を保つが、その比率は7～20%と少数である。「1種」では底部形態の変化が不明であるが、「2種」では緩やかな上げ底から脚部のついたものへという流れが指摘できる。また、底部形態において「C」の平底はほとんどみられず、第9・8号住居跡から各1点ずつ検出されたのみである。

第36表には、口縁部形態の分類別破片数を、第37表にはその比率を提示した。各住居跡とも「平口縁」が圧倒的多数を占める。その中で「波状口縁」を呈するものが、第4号住居跡を除き、10%前後みられる。波頂部形態は「単頭形」を呈するものが多く、「双頭形」は最も高率の第1号住居跡でさえ、わずか3.2%と少数である。口縁部形態は共通性が高く、集約された様相がうかがえる。

第38表には、口縁部に付けられた突起形態の分類別破片数と片口注口土器の個体数を、第39表にはそれぞれの比率を示した。第8号住居跡では、突起は検出されていない。他の第3・1・5・4・9号住居跡では検出されたが、最も多かった第4号住居跡でさえわずか16点であった。突起加飾率も、1～8%にすぎず、突起で土器を飾るという意識が衰退する時期と考えられる。突起形態では、「台形状突起」が、第9号住居跡以外の第3・1・5・4号住居跡において、半数以上の高率を示す。突起はその製作過程における簡略化の流れから、「集合角状突起」→「匕鍬状突起」→「台形状突起」へと変化することがすでに知られており、それらの住居跡は、突起加飾率も低いことから関山Ⅱ式でも最終段階の

第42表　主な分類項における出土率の順位　（網は上位半数）

分類項	出土率	3住	1住	9住	5住	4住	8住
単節縄文施文率	高→低	1	2	3	5	6	4
異条系縄文施文率	高→低	3	1	2	4	5	6
組紐系縄文施文率	低→高	1	2	3	4	6	5
多段ループ文施文率	高→低	2	3	1	5	4	6
単段ループ文施文率	高→低	1	3	5	2	4	6
末端なし単節縄文施文率	低→高	2	3	1	4	5	6
底裏面施文率	高→低	5	2	3	1	4	6
脚付底部率	低→高	2	3	5	6	4	1
波状口縁率	高→低	4	3	1	5	6	2
台形状突起率	高→低	4	1	5	1	3	6
突起加飾率	高→低	3	5	1	4	2	6
注口土器製作率	高→低	1	4	2	3	5	6
タガ状文施文率	低→高	1	3	2	5	3	6
櫛状工具利用率	低→高	1	2	3	4	5	6
上下移動コンパス文施文率	低→高	1	2	3	4	5	6
タガ状刺切文施文率	高→低	1	2	3	4	5	6
順位累計		33	41	43	61	72	84
累計値などを加味した段階別		井沿方古			井沿方中-新		

井沿方期と考えられる。「半円状突起」は第３・１・４号住居跡で検出されている。この突起は、「集合角状突起」「臼状突起」「台形状突起」の三者と性格を異にするもので、片口注口土器の注口部両脇に付けられる。半円状突起が検出された住居跡からは、片口注口土器も検出されている。しかし、第９・５・８号住居跡のように片口注口土器が検出されていながら半円状突起がみあたらない住居跡もあり、半円状突起自体の減少もみられる。また、第43図４のように注口部脇に半円状突起ではなく台形状突起が付けられているものも存在することから、台形状突起の中には半円状突起と同様の機能をもつものもあると考えられる。第９・５号住居跡においては台形状突起が検出されていることから、その可能性も指摘できよう。片口注口土器は第２・６・７・11号住居跡の遺物の少ない住居跡を除く６軒で検出されている。各住居跡の個体数は土器の総出土量に比例する。また、注口土器率も10%前後とかなり高い出現率を示す。

第40表には、コンパス文などのタガ状文の分類別破片数を、第41表にはその比率をそれぞれ提示した。出土遺物の多い第３・１・９・５・４号住居跡では、ほぼ全種類のタガ状文が確認された。全破片数に対するタガ状文の施文率は、各住居跡とも平均14%と高い割合を示す。施文時の使用工具は、第３号住居跡のみが半截竹管と櫛状工具をほぼ半々とするが、それ外は櫛状工具が多数を占め、第５・４・８号住居跡では80～90%を超える。第41表によるとその主体は半截竹管から櫛状工具へ移ることが明らかである。文様の種類では、第３号住居跡で刺切文が高率を示すが、それ以外の第１・９・５・４・８号住居跡では上下移動のコンパス文に主体が移動し、時期が新しくなるにつれその割合が高くなる。使用工具と同様の傾向が認められる。真正コンパス文は各住居跡とも一定の割合を占めるが、４～14%と少数である。使用工具と文様を組み併せたタガ状文の分類では、半截竹管による刺切文と櫛状工具の上下移動コンパス文に集中がみられる。第３号住居跡では半截竹管刺切文が35.7%と第一位である。しかし、第１号住居跡になると櫛状工具上下移動に代わられ第二位となり、第５・４号住居跡では激減し、第８号住居跡では皆無となる。第１号住居跡で第一位となった櫛状工具上下移動はその占める割合を徐々に増やし、第４・８号住居跡では50～60%にも達する。

第42表には、これまでの主要分類項目における出土率の順位を示した。順位を決定する際、出土率の高低方向は、各分類の出現時期などを考慮し設定したため一律ではない。また各住居跡ごとの順位累計値も示した。累計値は数値が小さいほど古い様相を反映しており、詳細な時期決定の示標のひとつとなる。その結果、ばらつきのみられる項目も存在するが、ほぼきれいな傾向が得られた。結論から述べると第３・１・９号住居跡に順位の第一位から第三位が集中し、累計値も上記の順でより小さい数値を示した。特に第３号住居跡は出土率第一位が多く、累計値も３軒中圧倒的に小さいことが指摘できる。組紐縄文・タガ状文施文率の極端な少なさや、タガ状文関係における他住居跡と異なる主体のあり方には古い様相がみられる。今回出土した縄文時代前期の土器は、関山Ⅱ式の最終段階である井沿方段階のものである。詳細な分類を行った結果、住居跡には若干の時期差が認められ、第３・１・９号住居跡は井

第43表　馬場裏遺跡他　類別破片数（接合済）

（網は顕著な傾向）

※馬場…行田市馬場裏遺跡、西…深谷市宮西遺跡、貝…さいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）、塔…さいたま市宮ヶ谷塔遺跡群

段階	貝崎1		貝崎2	貝崎3			貝崎4				貝崎5			貝崎6			井沼方				
	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
1類（口縁・特殊文様帯）	54	293	55	73	131	141	44	160	208	48	75	34	7	19	69	91	71	64	85	208
2類（刺突・刺突文）	58	4	1	1	5	2		1	2	14	1	10		2						
3類（沈線・条線文）										1		1								
4類（貝殻押圧文）	649	124	5	9	30	6	19	11	10	32	11	16	24		1	1	1			1
5類（縄文）	753	1,647	188	221	411	705	389	1,110	1,666	667	582	506	260	220	591	1,208	1,395	738	1,168	2,722
6類（無文）	16	6		2		14	8	12	58	10	10	13					1		1	1
7類（底部）	75	126	18	27	37	68	48	87	88	60	32	26	20	13	22	37	58	25	33	106
分類可能破片数	1,605	2,200	267	333	614	936	508	1,381	2,032	832	711	606	311	254	683	1,337	1,526	827	1,287	3,038
分類不能破片	1,403	1,764	232	185	471	906	490	1,124	1,834	1,117	864	323	155	218	1,378	68	75	80	71	216
関山式土器計	3,008	3,964	499	518	1,085	1,842	998	2,505	3,866	1,949	1,575	929	466	472	2,061	1,405	1,601	907	1,358	3,254
東海・信州系土器	1	12	2			3		8							10					1
他時期土器	41	726	119	116	214	138	50	102	184	79	81	303	38	8	29	7	2	34	3	8
総出土破片数	3,050	4,702	620	634	1,299	1,983	1,048	2,615	4,050	2,028	1,656	1,232	504	480	2,100	1,412	1,603	941	1,361	3,263

第44表　馬場裏遺跡他　類別比（%）

（網は顕著な傾向）

	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
1類（口縁・特殊文様帯）	3.4	**13.3**	**20.6**	**21.9**	**21.3**	**15.1**	8.7	**11.6**	**10.2**	5.8	**10.5**	5.6	2.3	7.5	**10.1**	6.8	4.7	7.7	6.6	6.8
2類（刺突・刺突文）	3.6	0.2	0.4	0.3	0.8	0.2		0.1	0.1	1.7	0.1	1.7		0.8						
3類（沈線・条線文）										0.1		0.2								
4類（貝殻押圧文）	**40.4**	5.6	1.9	2.7	4.9	0.6	3.7	0.8	0.5	3.8	1.5	2.6	7.7		**0.1**	**0.1**	**0.1**			**0.0**
5類（縄文）	**46.9**	74.9	70.4	66.4	66.9	75.3	76.6	80.4	82.0	80.2	81.9	83.5	83.6	86.6	86.5	**90.4**	**91.4**	89.2	**90.8**	89.6
6類（無文）	1.0	0.3		0.6		1.5	1.6	0.9	2.9	1.2	1.4	2.1					0.1		0.1	0.0
7類（底部）	4.7	5.7	6.7	8.1	6.0	7.3	9.4	6.3	4.3	7.2	4.5	4.3	6.4	5.1	3.2	2.8	3.8	3.0	2.6	3.5
分類可能破片数	1,605	2,200	267	333	614	936	508	1,381	2,032	832	711	606	311	254	683	1,337	1,526	827	1,287	3,038

沼方段階の古期に、第５・４・８号住居跡は同段階中から新期にあたると考えられる。

（4）他遺跡出土の関山式土器との比較

次に馬場裏遺跡と同時期である関山式期の住居跡が検出された遺跡をとりあげ、住居跡出土土器の比較検討を行っていきたい。この時期の遺跡は、前節でも述べたように奥東京湾沿岸域であった大宮台地南東部に集中しており、必然的にそれらの遺跡との比較となる。今回は、さいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）・同市宮ヶ谷塔遺跡群（黒坂2006より転載）、そして県北部の内陸部でわずかに発見された深谷市宮西遺跡の三遺跡との比較・検討を行うこととする。

ここでは遺跡間の対比を行うため、土器分類と同様、深作東部遺跡群の段階設定を用いて各遺跡の各住居跡を位置づけることとした。貝崎１・２段階は狭義関山式に先行する二ツ木式、貝崎３・４段階は関山Ⅰ式、貝崎５・６・井沼方段階は関山Ⅱ式にあたるとしている。

まず第43表には、それらの遺跡の各住居跡から検出された土器の分類別破片数を、第44表にはその比率をそれぞれ提示した。第44表によると各住居跡とも「５類」の縄文に主体がおかれており、その動向は時間経過とともに増加の傾向を示す。貝崎１段階の貝崎D5号住居跡では47%ほどの占有率であったものが次段階の貝崎B23号住居跡では急激に増加し75%を占める。その後は漸次増加し、井沼方段階の馬場裏遺跡に至っては90%の高出現率をみせる。組紐の隆盛がもたらした結果と考えられよう。「１類」は貝崎２段階から４段階にかけて優勢であり、特に貝崎B21号住居跡では21.9%を保有していることから貝崎３段階において最高潮を迎えると理解できる。その後は減少に転じるが、一定率は保つ。貝崎６段階においても宮西遺跡では７～10%を保つが、同期の貝崎貝塚における減少はあまりにも急激で2.3%にまで落ち込む。次段階の馬場裏遺跡でも５～７%を維持していることから、大宮台地と県北部という地域差が考えられ、奥東京湾沿岸域で衰退したものがその周縁地域ではまだ残存しているという状況で

第45表　馬場裏遺跡他　口縁部・特殊文様帯細種別比（%）

	貝D5住(貝崎1) 54				貝B23住(貝崎2) 293				貝B20住(貝崎3) 55				貝B21住(貝崎3) 73				塔11住(貝崎3) 131			
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
1種A	7.4	7.4	3.7	7.4								1.8				1.4				
1種B	5.6	11.1	9.3	9.3			2.4	1.0												
1種C	13.0		3.7	16.7	5.5	13.3	23.5	12.3			5.4	5.4			4.1	4.1	0.8		13.7	1.5
1種D				3.7		7.2	9.9	5.5		1.8	28.6	21.4			17.8	9.6	2.3		9.2	5.3
1種E						1.4	5.1	3.1			14.3	7.1			42.5	6.8		1.5	39.7	9.2
1種F																				
1種G							3.4	1.0			1.8	12.5			8.2	5.5			11.5	3.8
1種H							0.3													
2種A																				0.8
2種B																				
2種C																				
2種D																				
3種				1.9			1.7	3.4												0.8

	貝B3住(貝崎4) 141				貝A5住(貝崎4) 44				塔15住(貝崎4) 160				塔14住(貝崎4) 208				貝A8住(貝崎5) 48			
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
1種A																				
1種B																				
1種C	0.7			0.7					0.6						0.5					
1種D		1.4	5.0	0.7						0.6	1.9				1.0					
1種E		0.7	23.4	4.3			27.3				22.5	3.8		0.5	23.1	5.8			6.3	
1種F			2.1				4.5	2.3			2.5				1.4	1.4			14.6	
1種G			44.0	14.9			34.1	20.5			26.3	2.5			34.6	8.2			8.3	4.2
1種H																			2.1	
2種A																				
2種B												2.5				1.0				2.1
2種C								4.5				1.3								
2種D																				2.1
3種			2.1					6.8			31.3	4.4			21.6	1.0			29.2	31.3

	塔13住(貝崎5) 75				貝A7住(貝崎5) 34				貝A9住(貝崎6) 7				西298住(貝崎6) 19				西33住(貝崎6) 69			
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
1種A																	1.4			
1種B																				
1種C			5.3											5.3				1.4		4.3
1種D																				
1種E			17.3	5.3				5.9				14.3			15.8					1.4
1種F																			1.4	1.4
1種G			32.0	10.7				2.9				28.6			21.1	15.8			11.6	8.7
1種H							5.9	2.9												
2種A								14.7												
2種B				13.3				20.6				14.3				10.5				18.8
2種C								2.9								15.8				31.9
2種D				1.3			2.9	5.9				14.3							2.9	2.9
3種			10.7	4.0			8.8	26.5			14.3	14.3			5.3	10.5			1.4	10.1

	馬場3住(井沿方) 93				馬場1住(井沿方) 71				馬場9住(井沿方) 66				馬場5住(井沿方) 86				馬場4住(井沿方) 209			
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
1種A																				
1種B																				
1種C																				
1種D				1.1																
1種E																				
1種F																				
1種G																				2.9
1種H																				
2種A				2.2				0.0				1.5								1.0
2種B				3.2				12.7				3.0				16.3				8.1
2種C				72.0				73.2				66.7				67.4				62.2
2種D				1.1								4.5				2.3				5.7
3種				20.4				14.1				24.2				14.0				20.1

※括弧内は編年段階、右上段の数字は出土破片数、網は顕著な傾向

※馬場…行田市馬場裏遺跡、西…深谷市宮西遺跡、貝…さいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）、塔…さいたま市宮ヶ谷塔遺跡群

第46表　馬場裏遺跡他　５類種別比（%）

（網は顕著な傾向）

※馬場…行田市馬場裏遺跡、西…深谷市宮西遺跡、貝…さいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）、塔…さいたま市宮ヶ谷塔遺跡群

段階	貝崎1	貝崎2	貝崎3			貝崎4				貝崎5			貝崎6			井沼方				
	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
5類1種（無節斜縄文）	3.7	0.1					0.5		0.1					6.3	1.0	0.6	0.3	0.2	0.3	0.2
5類2種（単節斜縄文）	81.1	88.0	95.1	89.1	96.6	85.0	95.9	85.8	88.5	78.8	73.0	75.1	39.6	66.2	67.9	31.7	19.9	19.3	13.1	12.0
5類3種（複節斜縄文）	0.4	0.4			0.2							0.2								
5類4種（反の縄文）	0.1					0.1					0.2		0.4			0.2				0.2
5類5種（異条斜縄文）		0.1	2.2	5.5	1.0	13.5	2.1	9.5	8.9	6.9	8.8	13.4	10.8	5.6	10.1	19.9	22.6	19.8	19.1	11.9
5類6種（異節・結縄縄文）		0.1			0.2		0.3	2.4	0.8	2.3	10.8	1.2	5.4	9.2	8.4	16.3	13.9	10.0	15.5	17.5
5類7種（結束縄文）	1.5	0.7			0.2	0.1		0.1							0.2					
5類8種（結節縄文）	13.1	8.8	1.1	2.7	0.5			0.1	0.1					2.1	0.3					
5類9種（附加条縄文）		1.7	1.6	2.7	0.7	1.1		0.3	0.4	1.1	1.4	1.6	16.9	0.7	0.5	0.7	0.9	1.2	0.8	0.6
5類10種（組紐縄文）					0.5		1.3	1.9	1.3	11.0	5.9	8.5	26.9	9.9	11.6	30.6	42.4	49.5	51.3	57.6
5類分類可能破片数	732	1,616	183	220	411	702	389	1,110	1,663	665	581	506	260	142	585	1,208	1,395	738	1,168	2,722
5種+7種+8種+9種	14.6	11.4	4.9	10.9	2.4	14.8	2.1	9.9	9.4	8.0	10.2	15.0	27.7	8.5	11.1	20.6	23.5	21.0	19.8	12.5
6種+10種	0.0	0.1	0.0	0.0	0.7	0.0	1.5	4.3	2.1	13.2	16.7	9.7	32.3	19.0	20.0	46.9	56.3	59.5	66.7	75.2

第47表　馬場裏遺跡他　５類２種細種別比（%）

（網は顕著な傾向）

	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
2種A（撚等間未端なし）	11.7	0.6	3.1		0.6															
2種B（撚等間未端結束）	27.0	0.9	1.0		0.6			0.1						1.4	1.0					
2種C（撚等間未端ループ）	60.3	92.1	64.1	20.6	34.9	13.3		2.5	0.3		0.4			1.4	1.8					
2種D（広間隔条件ループ）		1.0	8.2	18.0	27.8	48.2	52.1	68.1	60.6	48.1	60.0	37.9	32.8	50.0	32.2	38.2	35.2	43.2	32.3	37.0
2種E（広等間隔ループ）	0.5	3.6	23.1	56.2	34.9	37.4	40.6	28.4	37.5	42.5	33.6	33.4	43.7	9.4	6.3	12.0	6.9	5.0	6.8	5.4
2種F（広等間未端なし）	0.5	1.8	0.5	5.2	1.1	1.1	7.3	0.9	1.6	9.4	5.9	28.6	23.5	37.7	58.7	49.8	55.4	47.5	60.9	57.6
2種G（ループ構成不明）																	2.6	4.3		
5類2種相当破片数	607	1,562	195	233	352	631	411	1,058	1,596	563	458	398	119	138	397	317	233	139	133	276

第48表　馬場裏遺跡他　７類細種別比（%）

（網は顕著な傾向）

	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
1種A（低面有文上げ底）	81.3	76.4	15.8	17.2	21.1	13.0	12.5	4.5	2.0	22.2	3.0	17.2	31.3		4.5	4.9	7.1		14.3	3.7
1種B（低面有文脚付底）		1.2	5.3					3.4		3.7	3.0	3.4			9.1	2.4	5.7	8.6	5.7	5.6
1種C（低面有文平底）	4.0						1.8											2.9		
2種A（低面無文上げ底）	12.0	20.0	78.9	75.9	76.3	84.1	83.9	60.7	87.0	57.4	87.9	62.1	50.0	46.2	40.9	48.8	44.3	8.6	14.3	19.3
2種B（低面無文脚付底）		1.8		6.9	2.6	2.9	1.8	30.3	9.0	16.7	6.1	17.2	18.8	53.8	45.5	41.5	42.9	60.0	65.7	42.9
2種C（低面無文平底）	2.7	0.6						1.1	2.0											0.6
3種（低面欠落不明）																2.4		20.0		28.0
7類相当破片数	75	165	19	29	38	69	56	89	100	54	33	29	16	13	22	41	70	35	35	161

第49表　馬場裏遺跡他　口縁部形態別比（%）

（網は顕著な傾向）

	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
双頭波状口縁		7.3	9.7	4.4	2.5	1.1	1.4		1.3		2.8	1.0			3.2	0.6	3.2	1.1	2.7	2.3
単頭波状口縁	7.4	3.1	6.5	2.2		5.4	4.2	3.3	1.0	1.2		1.0		17.9	3.2	4.5	4.9	6.7	4.7	2.1
波状口縁形態不明	6.3	11.0	25.8	6.7	7.4	6.5	5.6	0.8	2.6	0.6	5.6	1.0	1.9		6.5	5.1	2.7	4.4	0.7	1.0
平口縁	86.2	78.7	58.1	86.7	90.1	87.0	88.7	95.9	95.1	98.2	91.7	96.9	98.1	82.1	87.1	89.7	89.2	87.8	91.9	94.5
口縁部破片数	189	356	31	45	81	92	71	245	305	167	108	97	52	28	62	156	185	90	149	383
波状率（/口縁数）	13.8	21.3	41.9	13.3	9.9	13.0	11.3	4.1	4.9	1.8	8.3	3.1	1.9	17.9	12.9	10.3	10.8	12.2	8.1	5.5

第50表　馬場裏遺跡他　突起形態別比（%）・片口注口土器個体数

（網は顕著な傾向）

	貝D5	貝B23	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場3	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
集合角状突起		100.0	85.7	73.3	100.0	87.5	88.9	62.3	65.4	55.6	48.1	67.7	12.5	71.4	25.0	33.3		50.0	33.3	18.8
臼歯状突起			14.3	26.7		12.5	11.1	37.7	29.6	31.5	40.7	25.8	81.3	28.6				25.0		
台形状突起																50.0	66.7	25.0	66.7	56.3
半円状突起									4.9	13.0	11.1	6.5	6.3		75.0	16.7	33.3			25.0
突起加飾破片数		6	14	15	12	24	27	53	81	54	27	31	16	7	4	6	3	8	3	16
突起加飾率（/口縁数）	0.0	1.7	45.2	33.3	14.8	26.1	38.0	21.6	26.6	32.3	25.0	32.0	30.8	25.0	6.5	3.8	1.6	8.9	2.0	4.2
片口注口土器個体数								2	6	10	5	3	5	4	7	18	13	9	9	32
注口土器率（/口縁数）								0.8	2.0	6.0	4.6	3.1	9.6	14.3	11.3	11.5	7.0	10.0	6.0	8.4

第51表　馬場裏遺跡他　タガ状文（コンパス文等）分類別比（%）

（網は顕著な傾向）

※馬場…行田市馬場裏遺跡、西…深谷市宮西遺跡、貝…さいたま市深作東部遺跡群（貝崎貝塚）、塔…さいたま市宮ヶ谷塔遺跡群

段階	貝崎1	貝崎2		貝崎3		貝崎4				貝崎5			貝崎6			井沼方				
	貝D5	貝B22	貝B20	貝B21	塔11	貝B3	貝A5	塔15	塔14	貝A8	塔13	貝A7	貝A9	西298	西33	馬場5	馬場1	馬場9	馬場5	馬場4
半截竹管真正		77.8	100.0	80.6	81.3	95.1	81.6	48.7	66.1	4.3	21.7	6.3	6.0	21.1	17.1	1.7	1.0		2.2	1.2
半截竹管上下移動				9.7			6.1	1.7	2.5	1.1		1.6		5.3	12.2	13.0	6.7	4.4	7.0	11.3
半截竹管波状	100.0	22.2		9.7	12.5	4.9	2.0		1.7	1.1	0.9	1.6		5.3			3.3	4.4	1.1	0.5
半截竹管刺切														31.6	39.0	35.7	23.3	23.9	9.2	2.4
半截竹管形状不明																	3.3	0.9		1.0
櫛状工具真正					6.3		8.2	46.2	24.6	77.2	67.8	75.0	61.2	26.3	14.6	9.6	4.3	4.4	11.9	13.0
櫛状工具上下移動								3.4	3.4	7.6	4.3	4.7	26.9	5.3	12.2	22.6	34.3	41.6	48.1	53.3
櫛状工具波状							2.0		1.7	8.7	5.2	10.9	6.0			1.7	1.9	6.2	8.6	4.3
櫛状工具刺切														5.3	4.9	14.8	14.3	5.3	4.9	1.2
櫛状工具形状不明																0.9	7.6	8.8	7.0	11.8
タガ状文施文破片数	3	18	2	31	32	41	49	117	118	92	115	64	67	19	41	115	210	113	185	415
施文率（/分類破片）	0.2	0.8	0.7	9.3	5.2	4.4	9.6	8.5	5.8	11.1	16.2	10.6	21.5	7.5	6.0	8.6	13.8	13.7	14.4	13.7
半截竹管施文率	100.0	100.0	100.0	100.0	93.8	100.0	89.8	50.4	70.3	6.5	22.6	9.4	6.0	63.2	68.3	50.4	37.6	33.6	19.5	16.4
櫛状工具施文率	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	10.2	49.6	29.7	93.5	77.4	90.6	94.0	36.8	31.7	49.6	62.4	66.4	80.5	83.6
真正施文率	0.0	77.8	100.0	80.6	87.5	95.1	89.8	94.9	90.7	81.5	89.6	81.3	67.2	47.4	31.7	11.3	5.2	4.4	14.1	14.2
上下移動施文率	0.0	0.0	0.0	9.7	0.0	0.0	6.1	5.1	5.9	8.7	4.3	6.3	26.9	10.5	24.4	35.7	41.0	46.0	55.1	64.6
刺切施文率	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	36.8	43.9	50.4	37.6	29.2	14.1	3.6

あろう。さらに注目すべき点として「4類」があげられる。貝崎1段階では40%を占め、5類と比肩するほどであったが、次段階からは激減し7%未満となる。さらに宮西遺跡や馬場裏遺跡では、わずか4点のみの検出で、比率はそれぞれ0.1%以下である。大宮台地内における急激な減少も際立つが、県北部2遺跡での極端な少なさは、内陸部のため素材となる貝殻を入手することが困難であったためと推測される。

次に第45表には、各遺跡における口縁部文様帯・特殊文様帯の細種別比率を提示した。貝崎1段階では「1種A～C」に主体がおかれ、点状文様も「a～d」の全てがほぼ満遍なく検出されている。貝崎2段階になると「1種A」はみられなくなり、1段階に加え「1種D、E、G、H」が出現する。特に「1種C」に主体がおかれ、点状文様も「b～d」にやや偏在する傾向がみられる。貝崎3段階になると出現領域は「1種C～G」にやや集約され、特に「1種D、E、G」が主体となる。点状文様も「a、b」はほとんどなくなり「c、d」に集約される。貝崎4段階になると出現領域は前段階と同様であるが、それぞれの占有比に大幅な違いが現れる。「1種D」は激減するとともに、「1種E、G」に主体が移動し、特に「1種G」が高率を示す。点状文様も前段階を引き継ぐが「c」に集中する傾向がうかがえる。またこの段階で新しい要素として「2種」の出現と「3種」の急増が指摘できる。宮ヶ谷塔遺跡群では「3種」が20～30%もの高率を示している。貝崎5段階ではややばらつきがみられるものの1種は、「E、F、G」に主体がみられる。加えて前段階で出現をみた「2種」が増加傾向を示す。また「3種」も引き続き高率を維持する。点状文様はcからdへ移行する過渡期であることが理解される。貝崎6段階では前段階の傾向を継続し、「1種」の占有比はさらに低下する。わずかに「1種G」の占有が目にとまるのみである。今期は「2種」が主体を占め、「2種B」から「2種C」への移行が確認できる。「3種」も安定的に数値を保持する。点状文様もdのみに集約される。井沼方段階になると「1種」はほぼ消滅し、「2種」に圧倒的集中がみられる。特に、「2種C」は60～70%もの高率を保率し、一極集中の観を呈する。「3種」は前段階の状況を踏襲し20%前後を保つ。点状文様も「d」のみである。第45表を概観すると、時間の経過とともに表の左上から右下への数値移動がみられる。これは口縁部文様帯と点状文様の各分類における組み合わせによって時期が明握できることを意味する。

次に第46表には、各遺跡の「5類」における分類

別比率を提示した。まず、「５類１種」の無節縄文は貝崎１段階では3.7%を保率するが、その後は潜在化する。しかし貝崎６段階の宮西遺跡298号住居跡で6.3%の高率を示し、次段階の馬場裏遺跡の各住居跡においてもわずかであるが存在する。大宮台地と県北部という地域差によるものであろうか。

「５類２種」の単節斜縄文は、貝崎１段階で80%あまりを占有し、その後漸次増加し貝崎３段階の宮ヶ谷塔11号住居跡では96.6%にまで達し、最高率を極める。その後は減少に転じ、貝崎６段階の貝崎A9号住居跡や井沼方段階の馬場裏３号住居跡では30%台となり、その後も減少傾向は止まらず、馬場裏４号住居跡に至っては12%にまで落ち込む。この５類２種の減少は、後述するが、「５類10種」組紐縄文の増加と密接に関連するものであり、組紐の出現、隆盛により圧迫された結果であろう。

「５類５種」の異条斜縄文は、貝崎２段階で出現し徐々に増加する傾向をみせる。貝崎４段階の貝崎B3号住居跡や、貝崎５段階の貝崎A7号住居跡、貝崎６段階の貝崎A9号、宮西33号住居跡では10%を超え、井沼方段階の馬場裏１号住居跡においては22.6%にまで達する。その後は若干の減少傾向がみられる。

「５類６種」の異節・組縄縄文は、５種同様に貝崎２段階にその出現が認められる。貝崎３・４段階では検出されない住居跡もみられるが、その後は微増傾向が続き、貝崎５段階の宮ヶ谷塔13号住居跡では10%を超える。井沼方段階になるとその増加傾向は大きくなり、馬場裏４号住居跡では17.5%を占有するまでとなる。この５類６種の増加傾向は、「５類10種」の組紐縄文と同じ動向を示し、両者は密接な関係にある。その背景には、組紐原体の製作過程中における組み方の違いで、結果的に異節の原体（組縄原体）がもたらされたことがある。

「５類８種」の結節縄文は、貝崎１段階で13.1%、貝崎２段階で8.8%と一定の割合を占有していたが、貝崎３段階以降は激減し、潜在化する。「５類９種」の附加条縄文は、５種、６種などと同様に貝崎２段階において初出し、その占有率はわずかであるが間断なく最終段階の井沼方段階まで継続する。その間、貝崎６段階の貝崎A9号住居跡では16.9%という高率が突如出現するが、その背景は不明である。

「５類10種」の組紐縄文は貝崎３段階の宮ヶ谷塔11号住居跡で初出する。次段階の貝崎４段階では微増にとどまるが、貝崎５段階の貝崎A8号住居跡では11%、貝崎６段階の貝崎A9号住居跡では26%と着実に増加する。貝崎貝塚でみられた組紐の急増現象は、大宮台地最北端部に位置する井沼方段階の馬場裏遺跡へも波及し、その占有比を５類２種から逆転し、最高率を占めるようになる。馬場裏４号住居跡においては57.6%の高率を示すまでになる。しかし、貝崎６段階の宮西遺跡では、両住居跡とも10%前後であり、貝崎貝塚や馬場裏遺跡が示すような高率とはならない。これは奥東京湾沿岸域である大宮台地南部で花開いた組紐の隆盛現象が県北部の宮西遺跡まではわずかにとどかず温度差が生じた結果と考えられる。

最後に「５種・７種・８種・９種」の異条斜縄文系と、「６種・10種」の組紐縄文系のそれぞれの合計数値を提示した。異条斜縄文系は、貝崎１段階から増減はあるものの一定率を確保しており、貝崎６段階の貝崎A9号住居跡や井沼方段階古期の住居跡（馬場裏３・１・９号住居跡）において最盛期が認められる。井沼方段階中期以降は減少傾向にある。一方組紐縄文系は、途中段階からの出現である。貝崎４段階でわずかに検出されたとたん次段階の貝崎５段階では10%を超え、その急増現象はとどまるところを知らない。井沼方段階の馬場裏４号住居跡では75.2%を占めるまでに膨張する。これは奥東京湾沿岸地域における組紐の隆盛を裏付けており、内陸部である馬場裏遺跡もその分布圏に取り込まれたことが理解できよう。しかし、５類10種の項でも前述したが、宮西遺跡は数値の面からも、奥東京湾域との地域差が確認できる。

次に第47表には、各遺跡における「５類２種」単節縄縄文の細種別比率を提示した。貝崎１段階では「２種A～C」がみられ、特に「２種C」に主体がおかれる。貝崎２段階では、２種A～Fまでの全てが出現するが、前段階の状況が極端化し「２種C」に90%以上の集中がみられ、その優位性が際立つ。貝崎３段階になると「２種C」の優位性は継続されるものの、占有率を減じ、前段階でわずかであった「２種D、E」が急増する。その三者で90%以上を占め、前段階の２種Cへの一極集中がこの段階において、三者に分解されたことが確認できる。貝崎４段階では２種Cが激減し、その主体は「２種D、E」へ移動し、この二者で90%以上を占める。特に「２種D」への集中が顕著である。２種A、Bはほとんど検出されず、「２種F」は微増が認められる。貝崎５段階では、前段階同様「２種D、E」への集中傾向が確認できるが、「２種F」が増加し始め前記二者を圧迫する。貝崎A7号住居跡では、２種Fが28.6%を占め、「２種D～F」でほぼ三分する状態となる。貝崎６段階になると、地域相が表出し、貝崎貝塚では前段階の貝崎A7号住居跡の状況をほぼ引き継ぎ、その中でも「２種E」が43.7%と最高率を示す。しかし、宮西遺跡では主体が「２種D、F」に二分され、両者で90%近くを占める。２種Eは激減し10%以下となってしまう。次段階の井沼方段階の馬場裏遺跡では宮西遺跡の状況を受け継ぎ、同様に「２種D、F」に集中がみられる。特に宮西33号住居跡以降、「２種F」に主体がおかれ、それを馬場裏遺跡も踏襲するかのように同じ状況が確認できる。馬場裏５号住居跡では「２種F」の割合が60.9%も占め最高率となる。宮西遺跡の両住居跡の状況は同段階の貝崎貝塚における様相とは全く異なっており、そこには地域差が関係するものと思われる。次段階の馬場裏遺跡も宮西遺跡例と同じ傾向を示し、５類２種単節縄縄文では馬場裏遺跡は県北部の影響下にあることが指摘できよう。

第48表には、各遺跡における「７類」底部の細種別比率を提示する。貝崎１・２段階では、「１種A」の有文上げ底が圧倒的多数を占めるが、貝崎３段階になると一転無文化の方向へ転じ、その方向性は井沼方段階まで受け継がれる。貝崎３～５段階にかけては、「２種A」の無文上げ底が主流をなす。貝崎６段階の宮西遺跡から井沼方段階では、「２種B」の無文脚付底が主体を示すようになる。各種「C」の平底は貝崎１段階でわずかにみられるのみで、以後はほとんど姿を消してしまう。底部は、有文から無文化の方向へ、形態は緩やかな上げ底から脚付底へという変化が確認できる。

第49表には、各遺跡の口縁部所態の比率を提示する。口縁部所態は各段階の各遺跡とも「平口縁」が圧倒的優位性を保つ。「波状口縁」は、貝崎３段階の貝崎B20号住居跡で41.9%を占め、画期が認められる。また貝崎６段階の宮西遺跡と井沼方段階古期においても10%を超える出現率が認められ、貝崎３段階ほどの高率ではないがもうひとつの画期である。

第50表には、各遺跡の突起形態別比率と片口注口土器個体数を提示した。突起は貝崎２段階で初出し、時間の経過とともに「集合角状突起」→「巨瘤状突起」→「台形状突起」へと変化することが表からわかる。この変化は製作時の簡略化によるものである。突起加飾率は、貝崎３段階の貝崎B20号住居跡で45.2%の最高率を示した後、貝崎６段階まで20%の高率が続くが、その後急激に減少する。片口注口土器は貝崎４段階で初出し、貝崎６・井沼方段階では10%前後の高い出現率を誇る。その注口部両脇につく「半円状突起」も同様の動向をみせる。

第51表には、各遺跡におけるコンパス文などのタガ状文分類別比率を提示した。タガ状文施文率は、貝崎１・２段階では１%未満とわずかであったが、貝崎３段階から漸次増加し、貝崎５段階では10%を超える。貝崎６段階の貝崎A9号住居跡では、21.5%の高率を占める。しかし同段階の宮西遺跡では６～７%であり、次段階の馬場裏遺跡では13～14%を示す。この宮西遺跡でのタガ状文施文率の低迷は地域

差と考えられよう。

使用工具別にみると、半截竹管から櫛状工具を用いるという流れが認められ、その転機は貝崎４段階にみられる。しかし、貝崎6段階の宮西遺跡では半截竹管による施文率が櫛状工具のそれを大きく上回り、前々段階の大宮台地と同じ様相を示す。房総地域における伝播要素が残存したものと考えられここでも地域差が認められよう。

使用工具と文様を併せた分類では、半截竹管真正から櫛状工具真正、同工具上下移動という流れが時間経過とともに確認でき、その過渡期は貝崎４・６段階にみられる。しかし、貝崎６段階の宮西遺跡と井沼方段階古期（馬場裏３・１・９号住居跡）では、半截竹管刺切文が多数を占めている。また馬場裏３・１号住居跡では、櫛状工具の刺切文も15%ほどみられることから半截竹管の再流行と刺切文の採用が限られた地域と時間の中で行われたと考えられる。

このように、馬場裏遺跡では大宮台地南東部で隆盛した組紐を受け入れると同時に、県北部で特徴的な半截竹管刺切文も取り込んでいる。また刺切文を櫛状工具で施すなどの両地域の要素を融合させた独自の様相もみせている。両地域のほぼ中間地点に位置するという馬場裏遺跡の地理的環境が、このような様相の土器を生み出したと考えられる。

今回は井沼方段階における地域差の一端を明らかにできたと思う。この成果は今後、北関東などのさらに周辺地域における地域相や相互の影響関係を考えていく際の基礎資料となるであろう。

３．馬場裏遺跡から出土した石器の様相について

馬場裏遺跡から出土した石器は、281点である。ほとんどは、縄文時代前期前半関山Ⅱ式期の住居跡覆土からの一括資料である。また、縄文時代中期加曽利E式期の住居跡からも出土している。

（1）関山Ⅱ式期の石器の様相

石器は、当該期の住居跡のなかで、第１～５・７号住居跡から出土した。器種は、石鏃・石匙・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・凹石・石皿である。同一の住居跡から石斧と石匙や敲石・磨石が共伴する例が多い。

石鏃（第117図197）は、無茎凹基鏃である。特に、小形で細身の二等辺三角形を呈する。

石匙には、「縦形」と「横形」がある。縦形石匙（第35図図321）は、縦長剥片を素材とし、摘み部をもたない。刃部は鋭い縁辺を利用し、二次加工が施されない。横形石匙（第35図図322など）は、摘み部の先端を尖らせる傾向がある。刃部は押圧剥離によって片面のみが二次加工され、平面形態は左右非対称である。石材には、縦形・横形ともにチャート・黒色頁岩など硬質なものが用いられる。６㎝以上の大型の石匙（第35図図323）は、摘み部が幅広である。刃部が鋭い縁辺を利用するため、あまり二次加工が施されない。石材には、やや軟質なホルンフェルスが使われる。このような特徴は、前期前半の群馬県地域にみられる（大工原2003）。

磨製石斧は、扁平な礫を素材として全体を研磨するもの（第39図図24）と、小型で刃部を含めた下半部のみを研磨するもの（第117図199）がある。石材には、硬質な砂岩やチャートなどが使用される。

打製石斧には、第35図図326のように大型剥片を用いて片側のみ刃部加工が施されるものがある。これは「水平回転対称法」が用いられ（大工原2002）、「カメノコ石斧」などと呼ばれている。早期後半（条痕文期）から前期前半にかけての特徴的な石器である（高橋1985、中島2003）。また、第54図図299のような礫の一端に刃部を作り出した「礫斧」も認められ、早期後半に特徴的な石器である。打製石斧の石材には、軟質な砂岩・ホルンフェルスのほか、頁岩のような硬質なものが用いられる例もある。

敲石は、第105図619のように棒状礫を利用し、礫の端部と側面の一部に敲打の痕跡が残される例が

多い。これには石器製作の工具というよりも、植物の加工・調理具としての用途が考えられる。

このように、関山Ⅱ式期の石器群の特徴として、同一の住居跡から石斧と石匙や磨石・敲石・凹石などが共伴することがあげられる。石材は、石鏃・石匙などの剥片石器にはチャート・黒色頁岩といった硬質なもの、磨石・敲石・凹石には砂岩・安山岩が用いられる。一方では、磨製・打製石斧には硬質なものが使用される傾向もみられる。

石鏃・石匙や「カメノコ石斧」には前期前半の特徴がみられ、磨製石斧や「礫斧」は早期後半の特徴をもつ。また、両時期の特徴をもつ石器が伴出する住居跡もある。このことから、古い様相を残す石器群として捉えることができる。

埼玉県内における縄文時代前期前半期の石器の出土例は少ない。今後の資料の増加をまって、再検討を行う必要がある。

（2）加曽利Ｅ式期の石器の様相

第10号住居跡のみが、中期加曽利ＥⅠ末～ＥⅡ式期に帰属する。また、第10号住居跡と重複する第９号住居跡出土の打製石斧が中期の様相を示し、これも含める。器種は、石鏃・石匙・打製石斧・磨石・石皿である。

石鏃は、未製品である。石匙は摘み部を明確にもたず、刃部加工がほとんど施されない。石材には、石鏃・石匙ともに黒曜石が用いられる。

打製石斧には、いわゆる「分銅形」と「短冊形」が認められる。「分銅形」は、扁平礫を素材とし、刃部が粗く加工される（第137図157）。この形態は、栃木県御城田遺跡や埼玉県内から数例の報告例があるものの、基本的には中期末葉に栃木県で顕在化するようである（芹沢2002）。石材には、砂岩が使用される。一方、「短冊形」（第140図21）は、全体が摩滅しているため素材・製作工程は不明である。形態に中期後半の特徴がみられる。

当該期の石器の石材は、剥片石器に黒曜石、打製石斧に砂岩、敲石・磨石・凹石に安山岩が使用される。しかし、当該期の１軒のみの住居跡から出土した石器の数は少なく、加曽利Ｅ式期の石器群の様相把握は今後の課題である。

（3）黒曜石の産地推定分析について

今回出土した石器のうち、35点が黒曜石である。これら全てを対象に、蛍光Ｘ線を用いた産地推定分析を行った。その結果は、第52・53表に示したとお

第52表　黒曜石一覧（挿図掲載）

挿図番号	図内番号	器種	出土位置	分析結果	時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分析番号	挿図番号	図内番号	器種	出土位置	分析結果	時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分析番号
140	18	石鏃	SJ10	恩馬島群	加曽利E	2.74	2.40	1.10	5.8	202	140	19	石匙	SJ10	男女倉群	加曽利E	2.36	2.90	0.41	3.1	201

第53表　黒曜石一覧（挿図非掲載）

番号	器種	出土位置	分析結果	時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分析番号	番号	器種	出土位置	分析結果	時期	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	分析番号
1	剥片	SJ 3	男女倉群	関山Ⅱ	1.38	1.43	0.15	0.3	68	18	剥片	SJ 9	不明	関山Ⅱ	1.48	1.58	1.53	2.3	182
2	剥片	SJ 3	甘湯沢群	関山Ⅱ	2.30	1.73	0.63	2.6	63	19	剥片	SJ 9	不明	関山Ⅱ	1.72	0.86	0.56	0.6	183
3	剥片	SJ 3	甘湯沢群	関山Ⅱ	1.15	1.01	0.40	0.3	67	20	剥片	SJ 9	甘湯沢群	関山Ⅱ	1.17	1.94	0.58	1.2	184
4	剥片	SJ 3	恩馬島群	関山Ⅱ	2.66	1.42	0.86	2.4	64	21	剥片	SJ 9	不明	関山Ⅱ	(1.70)	1.40	0.27	0.4	186
5	剥片	SJ 3	恩馬島群	関山Ⅱ	2.61	1.39	0.64	1.8	65	22	剥片	SJ 9	不明	関山Ⅱ	1.96	0.87	0.18	0.1	189
6	剥片	SJ 4	男女倉群	関山Ⅱ	2.11	2.13	0.64	2.2	125	23	剥片	SJ 9	甘湯沢群	関山Ⅱ	0.80	0.98	0.16	0.0	193
7	剥片	SJ 4	和田峠群	関山Ⅱ	1.84	1.24	1.25	2.4	128	24	剥片	SJ10	男女倉群	加曽利E	1.38	1.07	0.88	3.5	198
8	剥片	SJ 5	和田峠群	関山Ⅱ	1.05	1.55	0.23	0.5	243	25	剥片	SJ10	男女倉群	加曽利E	1.25	1.00	0.43	0.7	204
9	剥片	SJ 5	恩馬島群	関山Ⅱ	1.82	1.04	0.86	1.0	242	26	剥片	SJ10	鳥尾倉群・星ヶ台群	加曽利E	2.01	1.68	0.53	1.6	203
10	剥片	SJ 8	和田峠群	関山Ⅱ	1.65	2.20	0.24	0.9	166	27	剥片	SJ10	和田峠群	加曽利E	2.42	2.04	0.94	2.0	197
11	剥片	SJ 9	和田峠群	関山Ⅱ	2.02	2.73	0.74	3.9	180	28	剥片	SJ10	不明	加曽利E	1.38	0.97	0.20	0.2	199
12	剥片	SJ 9	和田峠群	関山Ⅱ	1.23	1.70	0.53	1.0	191	29	剥片	SJ10	不明	加曽利E	1.38	0.93	0.27	0.2	205
13	剥片	SJ 9	男女倉群	関山Ⅱ	1.86	1.00	0.26	0.6	256	30	剥片	SK52	男女倉群	縄文前期	1.18	1.32	0.14	0.2	250
14	剥片	SJ 9	鳥尾倉群・星ヶ台群	関山Ⅱ	(1.32)	2.02	0.44	1.4	178	31	剥片	SK54	不明	不明	2.57	1.58	0.28	1.0	217
15	剥片	SJ 9	恩馬島群	関山Ⅱ	1.52	2.50	0.46	2.2	177	32	剥片	B-G	恩馬島群	不明	(3.46)	1.91	0.74	4.9	221
16	剥片	SJ 9	恩馬島群	関山Ⅱ	(2.30)	2.20	0.67	4.8	179	33	剥片	表採	星ヶ台群	不明	2.20	1.51	0.42	1.0	278
17	剥片	SJ 9	恩馬島群	関山Ⅱ	2.50	(1.30)	0.65	2.5	181										

りである。前期には、信州（和田峠・男女倉・星ヶ台群）、栃木県高原山（甘湯沢群）、箱根・伊豆半島（柏峠群）、神津島（恩馳島群）と様々な産地がみられる。一方、中期は信州系のみが認められている。

なお、今回の詳細な分析データは、研究紀要に掲載する予定である。

引用・参考文献

浅見貴子　2006 「行田市小針遺跡（第４・５次）の調査」「第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨」埼玉考古学会他

荒井幹夫他　1978 「打越遺跡」富士見市文化財報告　第14集　富士見市教育委員会

岩井重雄・小倉　均　1980 「井沼方遺跡」「大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第13集

大谷　徹　1999 「馬場裏遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第230集

小倉　均　1981 「井沼方遺跡」「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第15集

小倉　均他　1997 「井沼方遺跡・井沼方南遺跡」浦和市内遺跡発掘調査報告書　第25集

笠井崇吉他　1997 「飛鳥山遺跡Ⅱ」北区教育委員会

木戸春夫　1985 「白鳥田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第54集

行田市教育委員会　1994 「行田市文化財年報　平成４年度」

行田市教育委員会　1995 「行田市文化財年報　平成５年度」

行田市教育委員会　1996 「行田市文化財年報　平成６年度」

栗原文蔵　1963 「古代の行田」行田市郷土文化会

栗原文蔵　1978 「原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告　第34集

栗原文蔵・駒宮史朗　1990 「行田市陣場遺跡の調査」「調査研究報告」第３号　埼玉県立さきたま資料館

黒坂禎二　1984 「深作東部遺跡群」大宮市遺跡調査会報告　第10集

黒坂禎二　1985 「宮ケ谷塔遺跡群発掘調査報告」大宮市文化財調査報告　第18集　大宮市教育委員会

黒坂禎二　2001 「馬場裏遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第270集

黒坂禎二　2005 「宮西遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第310集

黒坂禎二　2006 「二ツ木・関山式土器の変容と細分史」「第19回縄文セミナー　前期前葉の再検討」縄文セミナーの会

鯛持和夫・栗岡　潤　1998 「築道下遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第199集

斉藤国夫　1980 「長野中学校校内遺跡発掘調査報告書」行田市文化財調査報告書　第９集　行田市教育委員会

斉藤国夫　1980 「小針遺跡発掘調査報告書－Ｂ地区－」行田市文化財調査報告書　第10集　行田市教育委員会

斉藤国夫　1981 「池守遺跡」行田市文化財調査報告書　第12集　行田市教育委員会

斉藤国夫　1979 「野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書」行田市文化財調査報告書　第５集　行田市教育委員会

佐々木保俊他　1983 「打越遺跡」富士見市文化財報告　第28集　富士見市教育委員会

笹森健一　1981 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅰ）」「土曜考古」第3号

笹森健一　1981 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅱ）」「土曜考古」第4号

笹森健一　1982 「縄文時代前期の住居と集落（Ⅲ）」「土曜考古」第5号

佐藤忠雄　1983 「西浦北・宮西」岡部町教育委員会

庄野靖寿　1974 「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告　第３集　埼玉県教育委員会

庄野靖寿・下村克彦　1978 「貝崎貝塚第三次発掘調査報告」大宮市文化財調査報告　第12集　大宮市教育委員会

芹沢清八　2002　「縄文時代中期末から後期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜』岩宿フォーラム実行委員会
大工原豊　2002　「打製斧形石器の系譜」『石斧の系譜』岩宿フォーラム実行委員会
高橋亜貴子　1992　「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
高橋亜貴子　1993　「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『考古学ジャーナル』№357　ニュー・サイエンス社
高橋　敦　1985　「包含層出土の石器」『貝塚山遺跡発掘調査報告書ー第２地点ー』富士見市教育委員
高橋俊男　1982　『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書　吹上町教育委員会
瀧瀬芳之　1985　『愛宕通遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第51集
鳥羽政之・今村直樹　2003　『四十坂遺跡』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書　第11集
中島　宏　1984　「行田市長野中学校校内遺跡採集の縄文土器」『資料館報』№15　埼玉県立さきたま資料館
中島　誠　2002　「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜』岩宿フォーラム実行委員会
中島洋一　1988　『瓦塚古墳　下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書　第19集　行田市教育委員会
中島洋一　1990　『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書　第23集　行田市教育委員会
中島洋一　1991　『行田市市内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書　第24集　行田市教育委員会
中島洋一　1993　『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』行田市文化財調査報告書　第28集　行田市教育委員会
中島洋一　1994　『馬場裏遺跡（18次）発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書　第29集　行田市教育委員会
西井幸雄　1989　『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第76集
西井幸雄　1996　『新屋敷遺跡Ｃ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第175集
西井幸雄　2004　「大宮台地北端の縄文前期集落ー行田市馬場裏遺跡の調査ー」『理文さいたま』№44　埼玉県立埋蔵文化財センター
細田勝・渡辺清志　1998　『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第197集
細田　勝　2006　「関山Ⅱ式土器について」『第19回縄文セミナー　前期前葉の再検討』縄文セミナーの会
宮井英一　1989　『古井戸ー縄文時代ー』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第75集
宮田　毅　1981　『大塚・間之原遺跡確認調査の概要ー第２次調査（白金・梶戸・大塚・高原地区）』太田市教育委員会
村田章人　1997　『原／谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第179集
山本　靖　1998　『八ッ島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第219集
山本　靖　2000　『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第246集
吉田　稔　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第95集
吉田　稔　1997　『築道下遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第188集
吉田　稔　2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第286集